仙台市文化財調査報告書第257集

仙台市太白区西多賀

原　遺　跡

－第４次発掘調査報告書－

２００２年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第257集

仙台市太白区西多賀

原　遺　跡

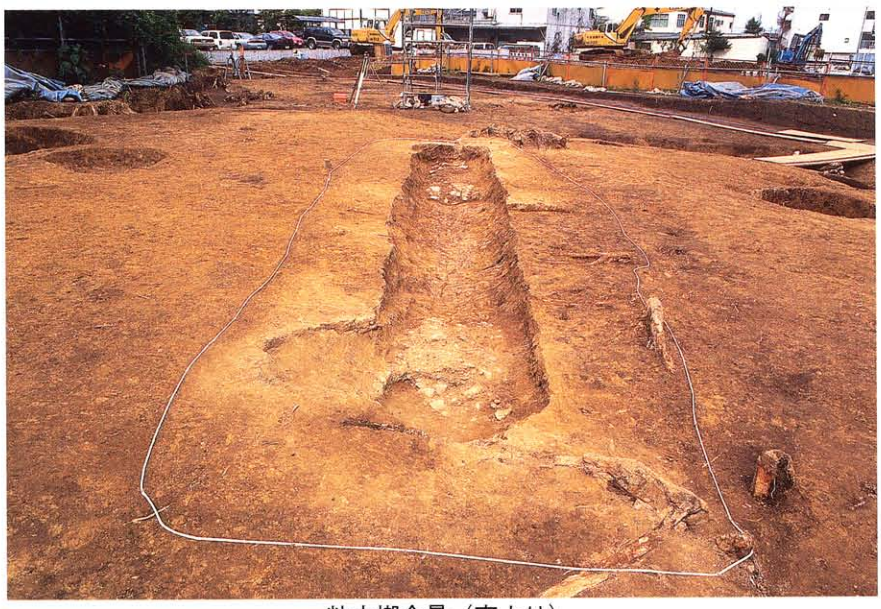
－第４次発掘調査報告書－

２００２年３月

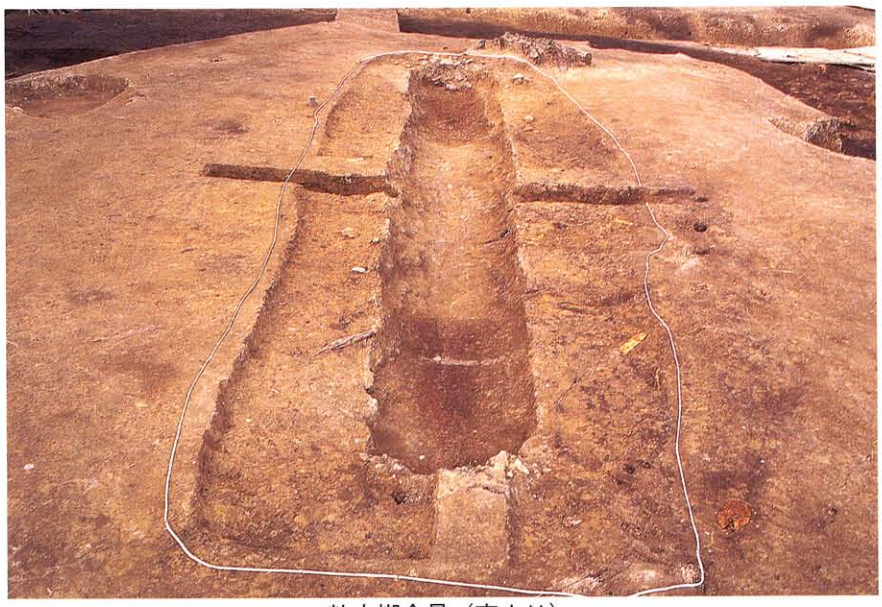
仙台市教育委員会

12号墳全景（東より）

12号墳主体部（粘土槨）全景（北より）



粘土槨全景（南より）



粘土槨全景（南より）

粘土槨内赤色顔料検出状況

13号墳全景（完掘状況）

人物・動物埴輪の出土状況

周溝B－B′ 土層断面

13号墳出土の埴輪

人物埴輪（正面）

人物埴輪（背面）

序　　文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日頃から多大なるご指導とご協力を賜り、心より感謝を申し上げます。

今年は21世紀の幕開けであるとともに、青葉山に仙台城が築かれてから開府400年の記念すべき年にあたります。現在、仙台市は急速な発展を遂げ、ますます都市化が進んできています。

一方、仙台市内には約800ヶ所の遺跡が発見されています。これらの遺跡では、発掘調査が行われる度にこれまで先人の築いた悠久の歴史を現代に伝えてくれます。しかし、これらの遺跡は一度破壊されれば二度と元に戻すことはできず、先人の残した文化遺産を次の世代に伝えていくことは、私たちに課せられた大きな責務であると考えております。

原遺跡では、これまで３次にわたり発掘調査が実施され、弥生時代の集落跡や古墳時代の古墳群などが発見されていました。今回の発掘調査は、西多賀保育所等の公共用地造成に伴って実施され、新たに古墳時代前期末の方墳の発見や、古墳時代中期後半の円墳から県内でも類例の少ない人物埴輪や動物埴輪が出土し、貴重な発見となりました。

仙台市教育委員会では、今後とも、各方面のご理解とご協力を頂きながら、遺跡をはじめとする貴重な文化財の保護と活用に取り組んでいく所存であります。

今回の発掘調査及び報告書の刊行にあたり、ご指導とご協力を賜りました多くの方々に感謝申し上げますとともに、本書が研究者のみならず市民の皆様に活用して頂けますことを期待いたします。

平成14年３月

仙台市教育委員会
教育長　阿　部　芳　吉

例　　言

1．本書は、仙台市の保育所等公共用地造成に先立って実施した原遺跡第４次発掘調査の報告書である。

2．報告書作成のための図面及び遺物の整理は、篠原信彦、根本光一が担当し、本書の編集は篠原が行った。なお､本文の執筆分担は以下のとおりである。

　第１章、第２章の遺構・・・根本

　第２章の遺物、第４章・・・篠原が担当した。

3．本調査の調査成果については、現地説明会及び報道発表資料、概要報告についての刊行物があるが、本書の記載内容がそれらに優先するものである。

4．本調査における出土遺物、実測図、写真等の資料は仙台市教育委員会で一括保管しているので、活用いただきたい。

5．発掘調査および報告書作成にあたって次の方々からご指導、ご助言を賜った。(敬称略)

　辻　秀人（東北学院大学教授)、藤沢　敦（東北大学埋蔵研究文化財センター)、大谷　基（古川市教育委員会)

6．発掘調査で検出された12・13号墳周溝出土の火山灰と12号墳主体部内検出の赤色物質の分析は㈱古環境研究所に依頼し、分析結果を第３章に収録している。また出土遺物の写真撮影は㈱アート・プロフィールに委託して撮影した。

凡　　例

1．本書中の土色及び遺物の色調については「新版標準土色帖」(小山、竹原1995) を使用した。

2．本書掲載の地形図は、国土地理院発行の２万５千分の１「仙台西南部」・「仙台東南部」(平成10年)、１万分の１「西多賀」(平成10年) を複製して使用した。

3．本書における本文中及び図中の方位は真北で統一している。

4．本書中の遺構の略号は以下のとおりに表しており、それぞれ第１次調査からの通し番号をつけている。ただし古墳の番号については略号ではなく１・２・３号墳などで表している。

　ＳＩ：竪穴住居跡・竪穴遺構　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土坑

　ＳＸ：性格不明遺構　　Ｐ：ピット

5．本書中の遺物の略号は以下のとおりに表している。

　Ｂ：弥生土器　　Ｃ：ロクロ不使用の土師器　　Ｄ：ロクロ使用の土師器

　Ｐ：土製品　　Ｓ：埴輪

6．遺構平面図のスクリーントーンは焼土の範囲を表している。

7．古墳・竪穴住居跡の調査は、十字ベルトを設定して実施しており、基本的に北東部を基準として時計まわりにａ～ｄ区を設定している。遺物の取り上げについても設定した出土地区毎に層位的に取り上げている。ただし13号墳については模式図のとおりａ～ｄ区に設定しており、遺物の取り上げについてもその地区毎に層位的に取り上げている。

8．埴輪の製作技法の表現は、基本的に「円筒埴輪総論」(川西宏幸：1978．9) に、円筒埴輪、朝顔形埴輪の各部位の呼称は、「大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳　発掘調査報告書」(結城・藤沢1987：仙文報第108集) によっており、模式図のとおりである。また埴輪の実測図におけるヨコナデ・縦方向のナデ調整は、その範囲のみを示している。

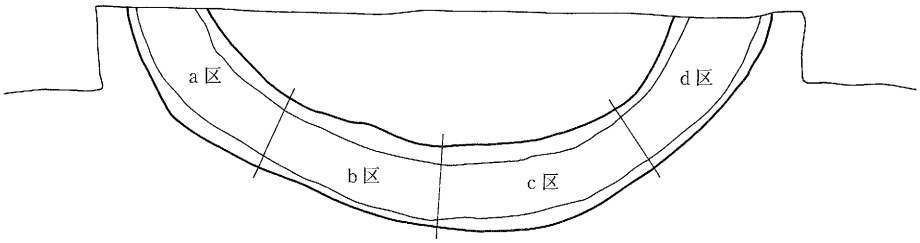
9．出土遺物の観察表における段幅・凸帯の○数字は、次のとおりである。

段幅　①：第１段　　②：第２段　　③：第３段　　④：第４段

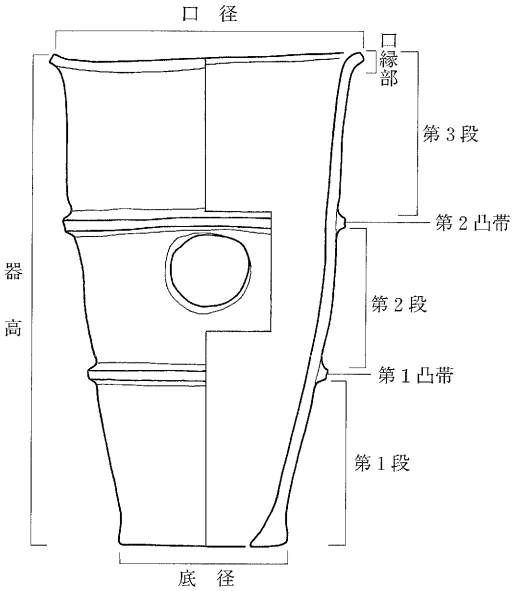
凸帯　①：第１凸帯　　②：第２凸帯　　③：第３凸帯

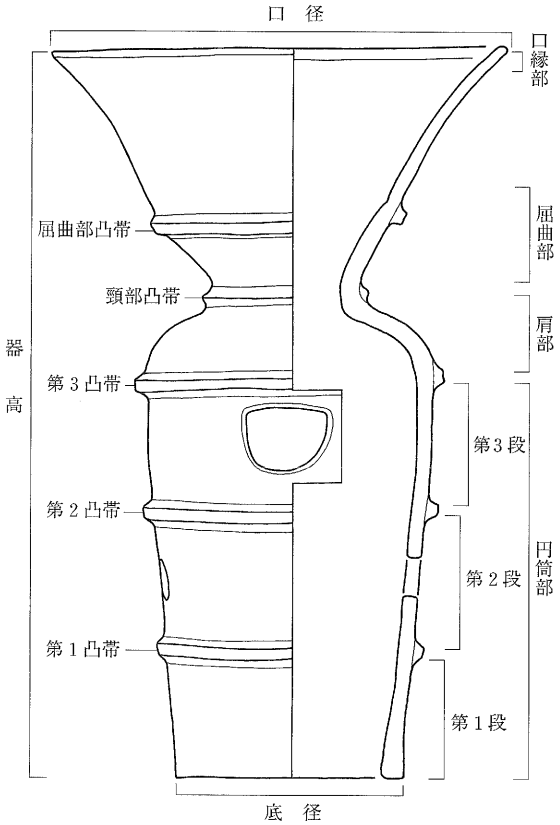
10. 出土遺物の観察表における法量の（　）は復元値・残存値で表している。

11. 引用・参考文献は巻末にまとめた。



13号墳模式図





円筒埴輪・朝顔形埴輪模式図

目　　次

巻頭カラー
序　　文
例　　言
凡　　例

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査要項 …… 2
　第３節　遺跡の概要とこれまでの調査成果 …… 2
　第４節　第１～３次調査の古墳 …… 6
　第５節　調査方法 …… 9
　第６節　基本層序 …… 9
　第７節　普及活動 …… 13
第２章　検出された遺構と遺物 …… 13
　第１節　古　　墳 …… 13
　　８号墳 …… 13
　　９号墳 …… 17
　　12号墳 …… 18
　　13号墳 …… 26
　第２節　竪穴住居跡 …… 55
　　11号住居跡 …… 55
　　12号住居跡 …… 58
　第３節　土　　坑 …… 59
　　１．土壙墓 …… 60
　　２．その他の土坑 …… 60
第３章　原遺跡第４次発掘調査における自然科学分析 …… 65
　第１節　原遺跡第４次発掘調査のテフラ …… 65
　第２節　原遺跡第４次発掘調査における蛍光Ｘ線分析 …… 67
第４章　調査成果とまとめ …… 73
　第１節　古　　墳 …… 73
　　１　方墳 …… 73
　　２　円墳 …… 74
　第２節　竪穴住居跡 …… 91
　第３節　ま　と　め …… 92

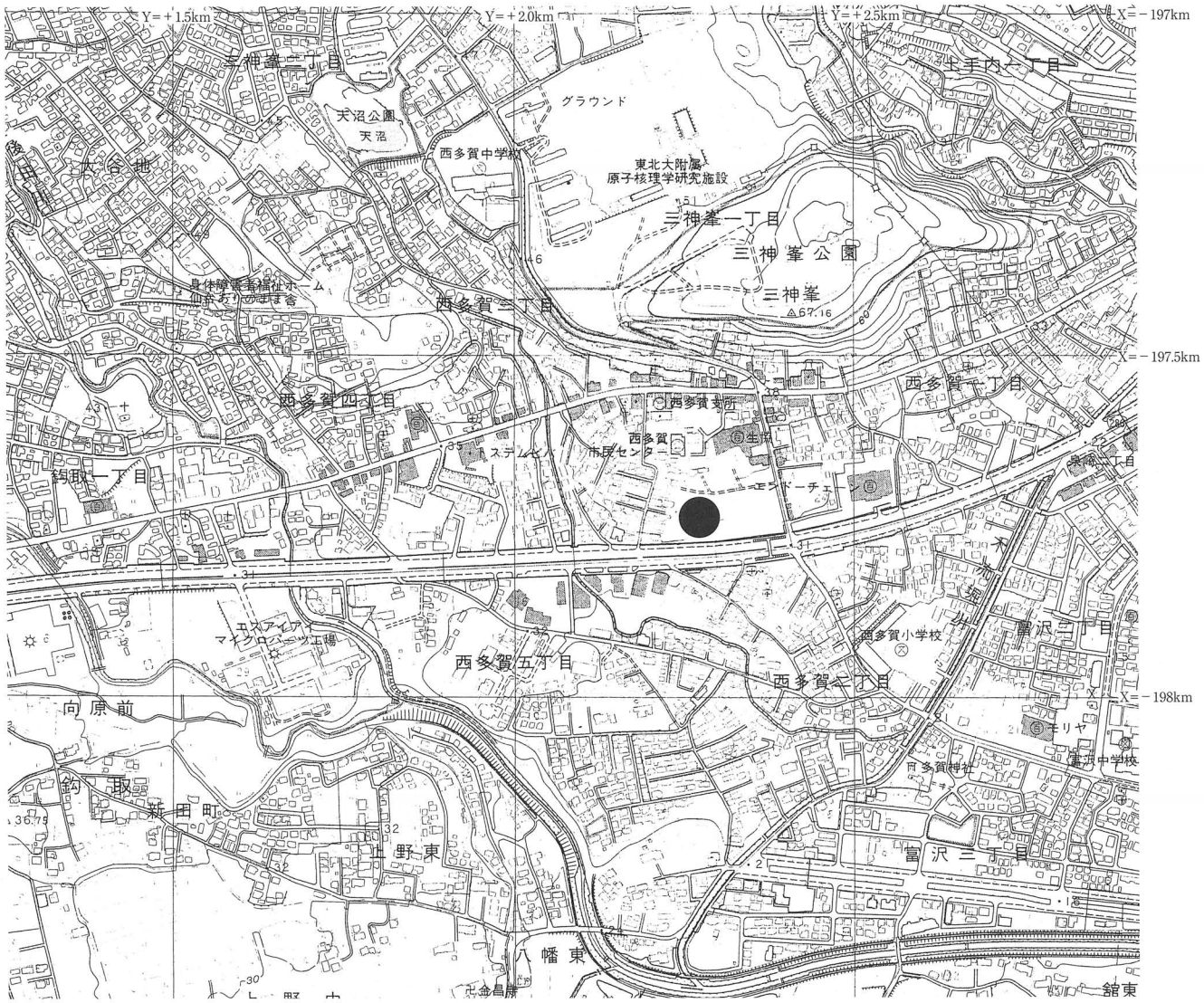
第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

原遺跡は、これまで平成９年～10年にかけて３次にわたり、民間の宅地造成に伴って発掘調査が実施されている。第１・２次調査は、宅地造成で削平される第一工区の道路・共益用地及び共同住宅・店舗用地などを対象として、第３次調査は第二工区の店舗建設用地を対象としてそれぞれ実施した。

第１～３次の調査により、円墳10基、竪穴住居跡９軒、竪穴遺構１軒、埴輪棺墓１基、土壙墓６基、土坑30基、溝跡５条などの遺構が発見され、円筒埴輪・朝顔形埴輪、弥生土器、土師器、須恵器などが出土し、弥生時代から奈良時代にかけての集落跡と古墳時代中期後半と平安時代の墓域として営まれてきたことが判明している。

今回の開発は、老朽化した仙台市西多賀保育所の移転新築に伴い、敷地のほぼ全域が削平又は盛土による造成工事が実施されることとなった。仙台市教育委員会としては、これまでの調査結果から古墳や竪穴住居跡等の存在が予想されることから、開発者である仙台土地開発公社と再三にわたる協議を行い、事前の発掘調査を実施することとした。平成12年３月17日付けで発掘通知の提出を受け、４月18日より重機による樹木の抜根・表土除去を行い、５月23日より本格的な発掘調査を開始した。



第１図　調査区位置図（1/10,000）

第２節　調査要項

遺　　跡　　名：原遺跡（宮城県遺跡登録番号01083、仙台市文化財登録番号Ｃ－154）
調　　査　　名：原遺跡第４次発掘調査
所　　在　　地：仙台市太白区西多賀三丁目１地内
調　査　原　因：保育所等公共用地造成
調　査　主　体：仙台市教育委員会
調　査　担　当：仙台市教育委員会文化財課調査第一係
　　担当職員　篠原　信彦、根本　光一、渡部　紀
調　査　期　間：平成12年５月23日～10月19日（野外調査）
　　平成12年11月１日～平成13年３月31日（室内整理）
調査対象面積：約5,300㎡
調　査　面　積：　4,500㎡
発掘調査参加者
　　青山　諒子　阿部あき子　阿部　敬子　石井千代子　板橋　栄子　板橋　静江　植野　幸子
　　遠藤いな子　小川　良子　小野紀美子　加藤けい子　金澤沙知子　神崎　是夢　菊地　恵子
　　菊地　富子　熊沢　とも　佐藤　清治　佐藤とき子　佐野たみえ　島崎なつ子　菅原　弘
　　鈴木きぬ子　鈴木みよ子　高橋たづよ　早川　裕子　松野　順子　三浦たか子　三浦つよの
　　宮城　富子　森　ミヨノ　渡辺　節子　渡辺　芳裕
室内整理作業参加者
　　青山　諒子　阿部あき子　泉　美恵子　伊藤　幸子　伊藤　房江　植野　幸子　大沼奈緒子
　　加藤けい子　佐藤とき子　佐藤　久栄　菅井　民子　鈴木　峰子　鈴木みよ子　関谷　栄子
　　高橋たづよ　千田タイ子　松野　順子　米沢　俊子　渡辺　節子
調　査　協　力　仙台土地開発公社　仙台市立西多賀小学校　相楽工業株式会社

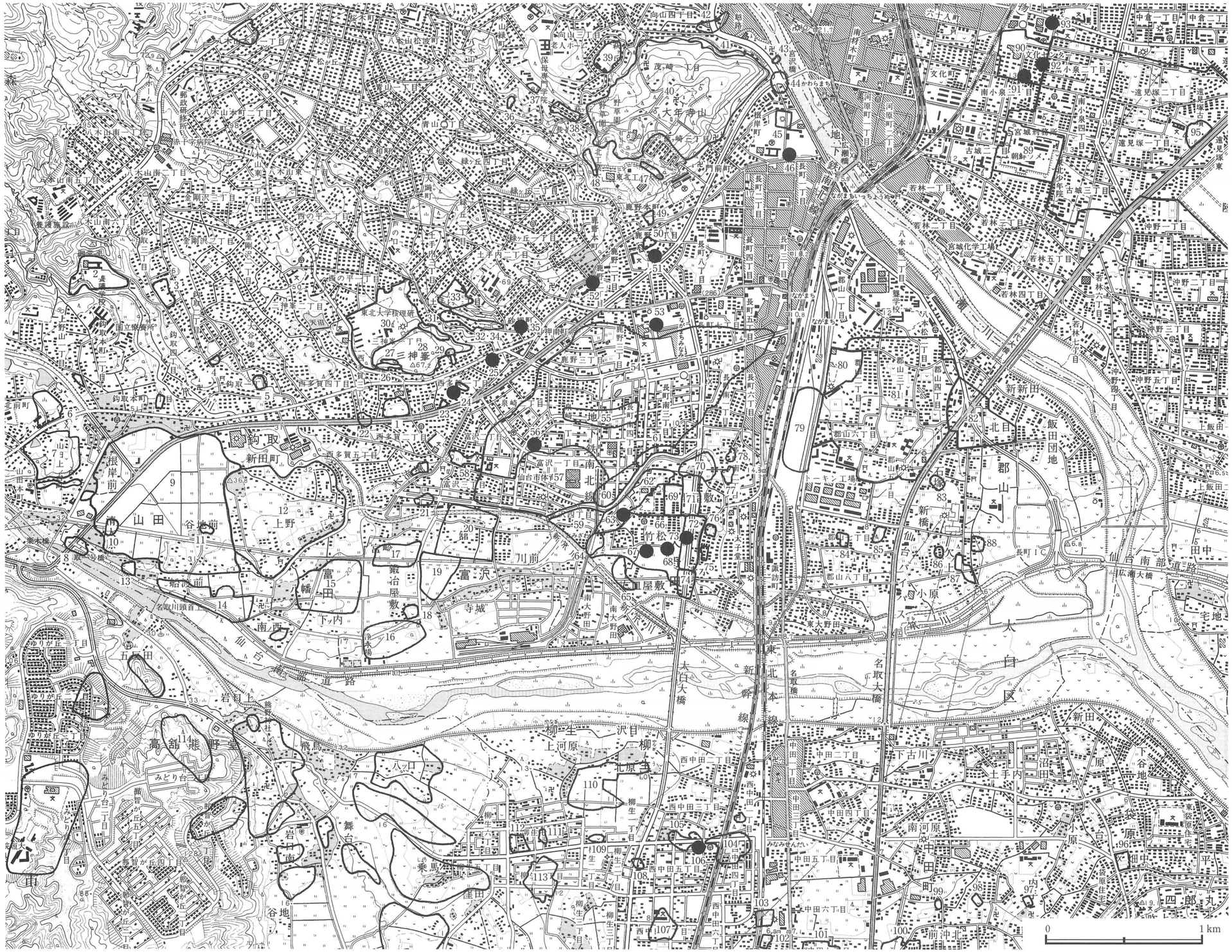
第３節　遺跡の概要とこれまでの調査成果

原遺跡はJR長町駅の西方約2.5kmに位置し、東側に名取川と広瀬川に挟まれた後背湿地（郡山低地）を望む青葉山丘陵の南斜面から裾部にかけて、緩やかな傾斜を持つ標高約32～39mの段丘面上に立地している。

本遺跡を含む青葉山丘陵南側から名取川にかけての地域は、仙台市内でも遺跡が密集する地域として知られており、旧石器時代から現代に至るまで連綿と続く人類の足跡をたどることができる。

この地域は、これまでにも多くの発掘調査が実施され、発掘調査報告書も多く刊行されている。地理的環境や歴史的環境については、既刊の報告書に詳細に述べられているので、ここでは原遺跡第１～３次調査の調査成果とこれに関連する周辺遺跡について述べることとする。

原遺跡で最も古い時代の遺構としては、弥生時代後期に位置づけられる天王山式期の竪穴住居跡２軒が検出されている。仙台市内では、これまで弥生時代の集落の様相については、発見例が少なく不明な点が多い。本遺跡周辺におけるこの時代の遺跡としては、丘陵部で竪穴住居跡が発見された土手内遺跡と八木山緑町遺跡の２遺跡があり、いずれも弥生時代後期の竪穴住居跡が発見されている。土手内遺跡では楕円形を呈する住居跡１軒、八木山緑町遺跡では楕円形を呈する住居跡が２軒調査されており、いずれも床面で地床炉が検出されている。また低地では、



第２図　原遺跡と周辺の遺跡（1/25,000）

第１表　遺跡地名表

No.	遺　跡　名	種　　別	立　地	時　　代
1	原遺跡	古墳・集落跡	段丘	弥生～平安
2	御堂平遺跡	集落跡	谷底平野	縄文（中期）・平安・中世
3	紙漉山遺跡	包含地	段丘	縄文
4	後田遺跡	包含地	段丘	奈良・平安
5	八幡遺跡	包含地	段丘	古墳・平安
6	北前遺跡	集落跡・包含地	段丘	旧石器・縄文・平安・近世
7	山田上ノ台遺跡	集落跡・包含地	段丘	旧石器・縄文・平安・近世
8	清太原西遺跡	包含地	段丘	縄文・平安
9	山田条里遺跡	条里遺構・屋敷跡	沖積地	縄文・奈良・平安・近世
10	竹ノ内前遺跡	包含地	段丘	奈良・平安
11	谷地前遺跡	包含地	沖積地	平安
12	上野遺跡	集落跡	段丘	縄文・奈良・平安
13	清太原東遺跡	包含地	段丘	縄文・平安
14	船渡前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・奈良・平安
15	南ノ東遺跡	包含地	自然堤防	弥生・平安
16	六本松遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
17	鍛冶屋敷Ａ遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・奈良・平安
18	鍛冶屋敷Ｂ遺跡	包含地	自然堤防	縄文・奈良・平安
19	鍛冶屋敷前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・奈良・平安
20	富沢館跡	城館跡	自然堤防	中世
21	堀ノ内遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
22	西台窯跡	窯跡	丘陵先端	奈良・平安？
23	原東遺跡	包含地	段丘	古墳～平安
24	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳（中期）
25	金洗沢古墳	円墳	段丘	古墳
26	富沢窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳～平安
27	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳（後期）
28	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	縄文（前・中期）・平安
29	金山窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳（中期）
30	芦ノ口遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・平安
31	土手内横穴墓群Ａ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳（末期）
32	土手内横穴墓群Ｂ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳（末期）
33	土手内窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳（後期）・奈良
34	土手内遺跡	集落跡	丘陵	縄文～平安
35	砂押古墳	円墳	段丘	古墳
36	二ツ沢遺跡	包含地	丘陵斜面	縄文
37	八木山緑町遺跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・奈良・平安
38	萩ヶ丘Ｂ遺跡	包含地	丘陵斜面	縄文
39	萩ヶ丘遺跡	包含地	丘陵	縄文・奈良・平安
40	茂ヶ崎城跡	城館跡	丘陵	中世
41	大年寺山横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳（後期）
42	愛宕山横穴墓群Ｂ・Ｃ地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳（末期）・奈良
43	宗禅寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳（後期）
44	根岸遺跡	集落跡	段丘	縄文（中期）
45	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（中期）
46	小兜塚古墳	古墳	自然堤防	古墳
47	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳（末期）・奈良
48	二ツ沢横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
49	鹿野屋敷遺跡	包含地	丘陵斜面	古墳～平安
50	鹿野一丁目遺跡	包含地	丘陵麓	縄文・弥生・奈良・平安
51	一塚古墳	円墳	丘陵麓	古墳（中期）
52	二塚古墳	前方後円墳	丘陵麓	古墳（中期）
53	金岡八幡古墳	円墳	沖積地	古墳（後期）
54	富沢遺跡	森林跡・水田跡	後背湿地	旧石器～近世
55	泉崎浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文～古墳・平安・近世
56	教塚古墳	円墳	沖積地	古墳（後期）
57	山口遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防・後背湿地	縄文～中世
58	富沢清水遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
59	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～中世
60	下ノ内浦遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	縄文～中世
61	袋東遺跡	包含地	自然堤防	古墳・平安
62	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～平安・近世
63	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳
64	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・古墳～平安
65	伊古田Ｂ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
66	大野田古墳群	円墳・集落跡	自然堤防	縄文・古墳～中世
67	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳（中期）
68	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（中期～後期）
69	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・奈良・平安
70	元袋遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	弥生・奈良～近世
71	大野田遺跡	祭祀・集落跡	自然堤防	縄文～平安
72	王ノ壇遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文～中世
73	王ノ壇古墳	円墳	自然堤防	古墳
74	皿屋敷遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	奈良～中世
75	長町清水遺跡	包含地	自然堤防	古墳
76	北屋敷遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
77	新田遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
78	長町南遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
79	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～奈良
80	西台畑遺跡	集落跡・包含地	自然堤防	縄文～古墳
81	郡山遺跡	官衙跡・寺院跡	自然堤防	縄文～奈良
82	北目城跡	城館跡・集落跡	自然堤防	縄文～近世
83	矢来遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
84	的場遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
85	籠ノ瀬遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
86	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳～中世
87	欠ノ上Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
88	欠ノ上Ⅲ遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
89	若林城跡	城館跡・集落跡	自然堤防	古墳・平安～近世
90	養種園遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文・古墳・中世・近世
91	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
92	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
93	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）
94	南小泉遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	弥生～近世
95	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）
96	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安
97	内手遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
98	前沖北遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
99	前沖中遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
100	後河原遺跡	集落跡・水田跡	自然堤防	弥生・奈良～近世
101	北遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
102	壇腰遺跡	包含地	自然堤防	奈良・平安
103	前田館跡	城館跡	自然堤防	中世
104	安久東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～近世
105	安久遺跡	集落跡	自然堤防	縄文～中世
106	安久諏訪古墳	円墳	自然堤防	古墳（後期）
107	栗遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～平安
108	谷地田遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
109	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安
110	柳生台畑遺跡	集落跡・墓地跡	自然堤防	奈良～近世
111	雷遺跡	包含地	自然堤防	平安
112	松木遺跡	集落跡	自然堤防	平安～近世
113	関場遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安
114	熊野堂横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳・奈良

下ノ内浦遺跡で後期の天王山式期の竪穴遺構と土壙墓が発見されており、東４kmに位置する西台畑遺跡では、弥生時代中期の桝形囲式期の土壙墓や甕棺墓が発見され、完形の弥生土器が多く出土している。弥生時代の生産遺跡としては、郡山低地に展開する富沢遺跡で弥生時代中期から後期の水田跡が発見されている。

古墳時代になると遺跡の密集度は一層高くなってくる。原遺跡では、前期の竪穴住居跡５軒が検出されているほか、方墳又は方形周溝墓の可能性のある溝跡２条、中期後半から後期にかけての円墳10基、埴輪棺墓１基が発見されている。

この時代の集落跡としては、北東約１kmに位置する土手内遺跡で前期から中期にかけての竪穴住居跡が11軒発見されている。低地では名取川の自然堤防上に立地する下ノ内遺跡、伊古田遺跡、六反田遺跡などで前期から後期

にかけて竪穴住居跡が発見されており、集落跡に隣接した富沢遺跡では水田跡が発見され、生活の基盤が大部分低地へ移行していることが伺えられる。

原遺跡が立地する青葉山丘陵の南斜面から裾部にかけての地域では、古墳時代中期後半から終末期にかけて墓域として利用されている。中期後半から後期にかけての古墳は、西多賀から大年寺山麓にかけて直線上に高塚古墳が点在して造られており、本遺跡の東に前方後円墳である裏町古墳を始め、砂押古墳、一塚古墳、二塚古墳、兜塚古墳などがある。また、低地においても大野田古墳群、五反田古墳、金岡八幡古墳、教塚古墳などが造られている。さらに北300mの所に富沢埴輪窯跡が位置しており、本遺跡を始めとして裏町古墳や大野田古墳群などに埴輪を供給したと考えられている。終末期から奈良時代にかけては丘陵斜面に横穴墓群が盛んに造られ、土手内・二ツ沢・茂ヶ崎・宗禅寺・大年寺山・愛宕山横穴墓群などがある。

飛鳥時代から平安時代にかけても、生活の基盤は低地を中心に展開しており、郡山遺跡では７世紀後半の役所跡であるⅠ期官衙と７世紀末から８世紀初頭の官衙であるⅡ期官衙と付属寺院が造られ、Ⅱ期官衙は陸奥国府多賀城以前の国府と考えられている。また奈良・平安時代の集落跡が増加してきており、下ノ内遺跡をはじめ伊古田・六反田・山口・下ノ内・元袋遺跡などで竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが多く発見され、富沢・山口遺跡では、水田跡が発見され、生産の場として営まれている。原遺跡においては、この時代になると遺構は非常に少なくなる。奈良時代初期の住居跡（竪穴状遺構含む）が２軒発見されているが、平安時代になると竪穴住居跡は発見されておらず、土壙墓を含む土坑が多く発見され、再び墓域としての利用されるようになる。これまでに５基の土壙墓が発見され、このうちの２基については木棺墓の可能性が指摘され、同時期の墓制を考える上で貴重な発見となっている。

中世以降も生活基盤は低地を中心として展開しているが、本遺跡では明確にこの時期に属すると考えられる遺構や遺物は発見されていない。

第４節　第１～３次調査の古墳

本遺跡では、これまで３次の発掘調査により円墳10基が発見されている。ここでは第１～３次調査で検出された古墳の概要について示すこととする。ただし、第４次調査でも第２次調査で実施した９号墳の未調査部分を調査しているので、９号墳については第２章で扱うことにする。

１号墳

調査区の南端、古墳群の中で最も低い場所に位置する。墳丘はすでに失われていたが、墓壙の基底部が残存している。古墳の平面形は南西部で周溝を欠くため明確ではないがほぼ円形で、規模は墳丘部で径11.8～12m、周溝を含む外径は15.3～15.5mである。周溝の幅は1.3～2.3m、平均幅は約2.0mで、北部で約1.5m外側に突き出ているほか、南側で徐々に細くなり南西部で途切れている。周溝の深さは14～40cmと一定しておらず、底面は起伏がある。これは、各古墳に共通することであるが、周溝の掘り込みが礫層上面までであることから、礫層の高低によって周溝の深さが変化している理由である。

墓壙は、古墳の中心からやや北西によった地点に位置し、主軸長約3.0m、幅約1.3mの長方形を呈し、主軸方向はN－71°－Eである。墳丘基部の地山層（Ⅳ層）を掘り込んで造られており、5～20cmの大きさの礫が敷き詰められていた。礫は中央部には小さなものが敷きつめられ、周辺部に比較的大きなものが並べられており、小規模な竪穴式石室の棺床施設か礫床と考えられている。

出土遺物は、周溝内より円筒埴輪片、土師器片、縄文土器片、弥生土器片などが出土している。円筒埴輪は4a類のみで、富沢窯跡系列・裏町古墳Ｂ群３類に相当することから、１号墳の築造年代は裏町古墳段階に位置づけられている。

２号墳

調査区の南部、１号・３号・４号・６号・７号墳に囲まれて位置している。墳丘及び主体部はすでに失われており、周溝のみが確認されている。古墳の平面形は墳丘部がほぼ円形であるが、３号墳に接する西側では周溝がやや直線的であることから３号墳の影響が考えられ、３号墳よりも新しいと推定されている。規模は墳丘部で径10.2～10.8m、周溝を含む外径は12.5～14.1mである。周溝の幅は1.0～1.9m、平均幅は約1.5mで、東側と西側がやや狭くなる。周溝の深さは17～48cmと一定しておらず、底面には起伏がある。

出土遺物は、周溝内から円筒埴輪片、土師器片、縄文土器片などが出土している。円筒埴輪は５類のみで、富沢窯跡系列・大野田１号墳のタイプに相当することから、２号墳の築造年代は大野田１号墳段階に位置づけられている。

３号墳

調査区の南部、２号・４号・５号墳に囲まれて位置している。墳丘及び主体部はすでに失われており、周溝のみが確認されている。古墳の平面形は墳丘部がほぼ円形であるが、周溝の北側がやや突出した感じとなる。規模は墳丘部で径10.4m、周溝を含む外径は13.5～14.5mである。周溝の幅は1.1～2.6m、平均幅は約1.8mで北側がやや突出し、幅も広くなる。周溝の深さは20～45cmと一定しておらず、底面には起伏があり東側で明瞭な段差がある。

出土遺物は、周溝内から円筒埴輪片、土師器片、弥生土器片、縄文土器片などが出土しているが、確実に古墳に伴うものは確定できない。また、埴輪片も摩滅が激しく分類できたものはない。３号墳の築造年代は大野田１号墳段階に位置づけられている２号墳より古い時期と推定される。

４号墳

調査区の中央部、２号・３号墳の北側に隣接している。墳丘及び主体部はすでに失われており、周溝のみが確認されている。古墳の平面形は墳丘部がほぼ円形であるが、周溝の北東から東側にかけては外側に張り出した形となっており、南東部で一部途切れている。規模は墳丘部で径13.7～14m、周溝を含む外径は18.0～20.0mである。周溝の幅は2.2～4.2m、平均幅は2.5mであるが、北東から東側では外側に張り出し、約4.2mになる。周溝の深さは15～60cmと一定しておらず、底面は起伏があり南側で明瞭な段差がある。

出土遺物は、周溝内から埴輪片、弥生土器片、土師器片などが出土している。埴輪は、円筒埴輪及び朝顔形埴輪が出土している。円筒埴輪は５類のみが確認されており、朝顔形埴輪は肩部がタテハケで、凸帯は円筒埴輪同様にやや低いものである。円筒埴輪５類は富沢窯跡系列・大野田１号墳のタイプに相当し、朝顔形埴輪も大野田１号墳に類似することから、４号墳の築造年代は大野田１号墳段階に位置づけられている。

５号墳

調査区の西部、３号・４号墳の西側に隣接している。墳丘はすでに失われていたが、墓壙の基底部が残存しており、周囲には周溝が確認されている。古墳の平面形は墳丘部・周溝ともほぼ円形であるが、南北方向に比べて東西方向がわずかに長い。規模は墳丘部で径11.7～12.4m、周溝を含む外径は15.5～16.8mである。周溝の幅は1.6～3.0m、平均幅は約2.0mである。周溝の深さは約23～52cmと一定しておらず、底面には起伏が見られる。

墓壙は古墳のほぼ中心に位置し、平面形は片側短辺がやや丸みを帯びる長方形で、主軸長2.8m、幅約1.1～1.4m、主軸方向はN－14°－Eである。堆積土を掘り下げたところ、５～20cm程度の大きさの礫と抜き取り痕と推定されるピットが多数検出された。さらに堆積土をすべて除去したところ中央部に長さ約1.8m、幅約0.4mの長方形の掘り残した部分があり、その周辺に径10～45cm程度のピットが多数確認された。この長方形の部分は、棺を安置する基台部でその周辺のピットは棺を支える礫を埋め込んだ掘り方と推定されるため、遺存状況は良くないが小規模な竪穴式石室の棺床施設と考えられている。

出土遺物は、周溝内から円筒埴輪片、縄文土器片、土師器片などが出土している。埴輪は円筒埴輪のみでスカシ孔が半円形の３類や、調整技法から２類か３類と考えられるものがある。半円形スカシ孔の円筒埴輪３類は五反田

古墳系列と推定されるが、その以外は確定できない。編年的位置づけは難しいが、凸帯が高いものが多い点から、裏町古墳と同時期かこれよりやや新しいものと推定されることから、５号墳の築造年代は裏町古墳段階かそれより新しい大野田２号墳段階に位置づけられている。

６号墳

調査区の南側、１号墳の北東・２号墳の南東に隣接しており、これまでの調査区の中で１号墳とともに最も低い場所に位置している。墳丘及び主体部はすでに失われており、周溝のみが確認されている。古墳の平面形は周溝が北東側で一部途切れているが円形で、規模は墳丘部が径約15.3m、周溝を含む外径が約19～20.8mである。１～３次調査で検出した古墳の中では11号墳に次いで２番目の規模をもつ古墳である。周溝の幅は1.7～３mで北東部が狭くなり一部北東部で途切れている。深さは最も残存している南側では約36cmで、底面には起伏が見られる。

出土遺物は、周溝内から埴輪片などが出土している。朝顔形埴輪は円筒部が３段のもので、３段目に半円形のスカシ孔、２段目の90度ずれた位置に小孔が穿たれたものである。円筒埴輪は3c類、4b類、4c類、５類のものがあり、裏町古墳や原遺跡11号墳出土の埴輪と同様に、五反田古墳系列と富沢窯跡系列との両系統のタイプの埴輪が伴っている。これらの埴輪は３次調査で大野田２号墳段階に近い段階に位置づけられていることから、６号墳の築造年代も同様の時期と考えられる。

７号墳

６号墳の北側、２号墳の北東側に隣接している。墳丘及び主体部はすでに失われており、周溝のみが確認されている。古墳の平面形は、南側で周溝が途切れるものの円形を呈するものと考えられ、規模は残存部より推定して墳丘部で径約9.2m、周溝を含む外径は約12.4mと推定される。周溝の幅は1.28～1.8mで東側がやや狭くなっている。深さは31～51cmと一定しておらず、底面には起伏が見られる。南側が途切れるため検出した平面形は馬蹄形を呈しているが、これは上部の削平によるもので、本来は円形を呈するものと考えられる。

出土遺物は、周溝内より埴輪片、土師器片などが出土している。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土しており、朝顔形埴輪は肩部から口縁部にかけての破片のみである。円筒埴輪は５類と６類のものがあり、富沢窯跡系列・大野田１号墳段階に位置づけられ、７号墳の築造時期も同様の時期と考えられる。

10号墳

調査区の北部、９号墳の東側に隣接しており、耕作に伴う攪乱が激しく遺存状態は極めて悪い。古墳の西半部は検出されず、墳丘及び主体部はすでに失われており、周溝東側約半分が確認されたのみである。古墳の平面形は周溝の西側半分近くが検出されないが、ほぼ円形を呈するものと推定される。規模は墳丘部で径10.9m、周溝を含む外径は14.0mである。周溝の幅は0.8～1.7m、平均幅は1.2m程度であり、深さは９～41cmと一定しておらず、底面には起伏があり北側が最も深い。

出土遺物は、周溝内から埴輪片、縄文土器片、陶器片などが出土している。埴輪は円筒埴輪のみで、明確に分類できたのは６類のみで、そのほかに製作技法から２類か３類と考えられるもの、５類か６類と考えられるものがある。６類は富沢窯跡系列と考えられるもので、最上段の幅が広く、スカシ孔も粗雑であるなど新しい要素も見られるものの、ほぼ大野田２号墳段階のものと考えられることから、10号墳の築造年代も同様の時期と考えられる。

11号墳

東側に離れた調査区、他の古墳とはやや離れた場所に位置しており、最も近い10号墳とも25m程の距離がある。本遺跡の古墳群の中では、最も規模が大きく、墳丘盛土の一部が残存していた唯一の古墳であるが、残念ながら墳丘中央部に盗掘孔とみられる大きな攪乱を受けていたため埋葬施設は検出されなかった。古墳の平面形は墳丘部でほぼ円形であるが、南東部で約１m張り出している。周溝も円形であるが南東部の外側が検出されなかった。規模は墳丘部で径17.7～18.2m、周溝を含む外径は25.5～26.5mである。

墳丘は積土の大部分が攪乱を受けていたため、本来の高さは不明であるが周溝内側上端から墳丘中心の現表土上面で比高差0.65～１ｍである。積土は黒褐色シルトを主体とするもので、墳丘下旧表土と同様のものである。また、墳丘部積土下より外径9.6～11.2m、幅0.8～1.2mのドーナツ状となる円形周溝状のプランが検出されており、古墳築造以前に行われた祭祀関連遺構の可能性が考えられる。

周溝の幅は3.0～4.7ｍで、底面には緩やかな起伏がある。深さは北側で最も深く約40cmあるが、南西側に向かって徐々に浅くなっており、南東部のプランが不明瞭となって途切れる。

出土遺物は、周溝内から多量の埴輪片が出土したほか、周溝、墳丘積土などから土師器片、須恵器片などが少量出土している。埴輪は円筒埴輪及び朝顔形埴輪が出土しているが、その破片の総重量は100kgを超え、本遺跡では最大の出土量である。朝顔形埴輪は口縁部が１次調整のタテハケのみで、肩部は斜め方向にハケメ調整され、肩部に３本の斜め方向のヘラ状工具による沈線が施されているものもある。円筒埴輪は最も多く、器形・調整技法・スカシ孔・凸帯の形態などに多様性が認められ、1a・1b・2・3a・3b・4b･4c類のものがある。このうち1a類は三角形とやや角張った円形のスカシ孔の組み合わせによる独特のものである。調整技法は裏町古墳Ａ群１類と共通するものであるが、口縁部内面に段が付かない点は裏町古墳Ａ群１類と異なっている。11号墳出土の円筒埴輪はこの他にも多様であるが、大別すると①製作技法は裏町古墳Ａ群１類（川西編年Ⅳ期に対応）や２類に共通し、なおかつ三角形のスカシ孔など古い要素をもつタイプ（1a・1b・2類）のもの、②裏町古墳Ａ群２類とほぼ同じタイプ（3a類）のもの、③新旧の要素や別系統の要素を併せ持つタイプ（3b・4b・4c）のものがある。三角形のスカシ孔を持つ1a・1b・２類と裏町古墳と同じタイプである3a類の両者の存在を考慮し、裏町古墳と近接するが裏町古墳よりもやや先行する原11号墳段階に位置づけられており、古墳の築造時期も同様の時期と考えられる。

第５節　調査方法

１　調査区の設定（第３図）

第４次の調査区は、前回調査した第１・２次調査区の西側に隣接して設置し、遺跡範囲全体においても西端に位置する。造成予定地全体を調査対象としているが、すでに第１・２次調査の開発は完了しているため、隣地境界線から１～２ｍほど内側に調査区を設定した。遺構測量のための基準線は、国家座標を基準として、10m×10mのグリッドを設定した。原点の平面直角座標系Ｘにおける座標はＸ＝－197,710m、Ｙ＝－2,240mである。

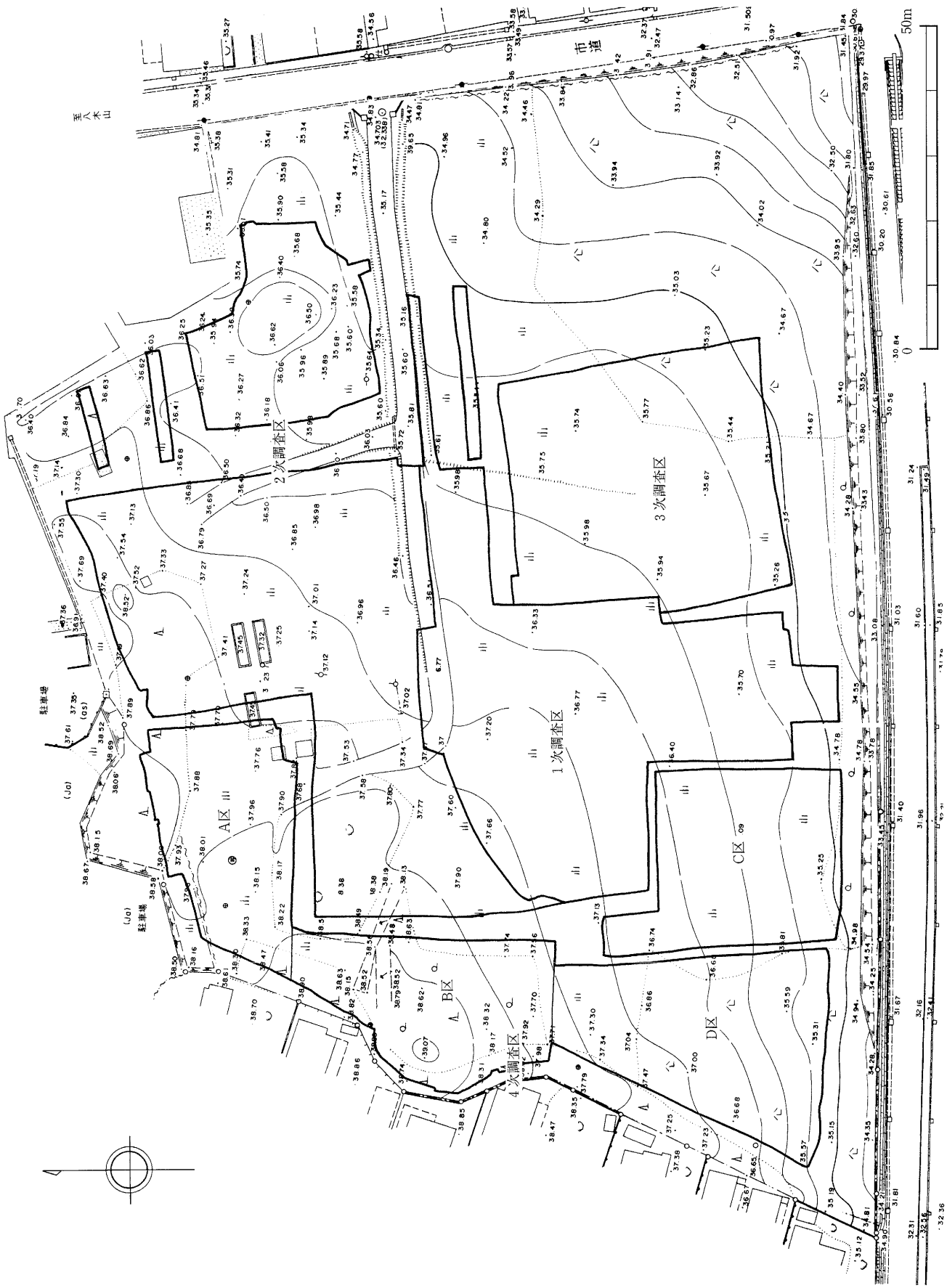
２　調査の方法（第４図）

重機によりⅠ～Ⅲ層を除去した後、Ⅳ層（ローム層）上面で人力により精査を行った。Ⅴ層以下については、２次調査時の下層調査で遺構・遺物が発見されなかったこと、すでに切土造成されていた２次調査区と本調査区との境界断面での観察の結果、本調査区においてもⅢ層以下は３ｍ以上の砂礫層であることが判明したため、それ以上の掘り下げは行わなかった。

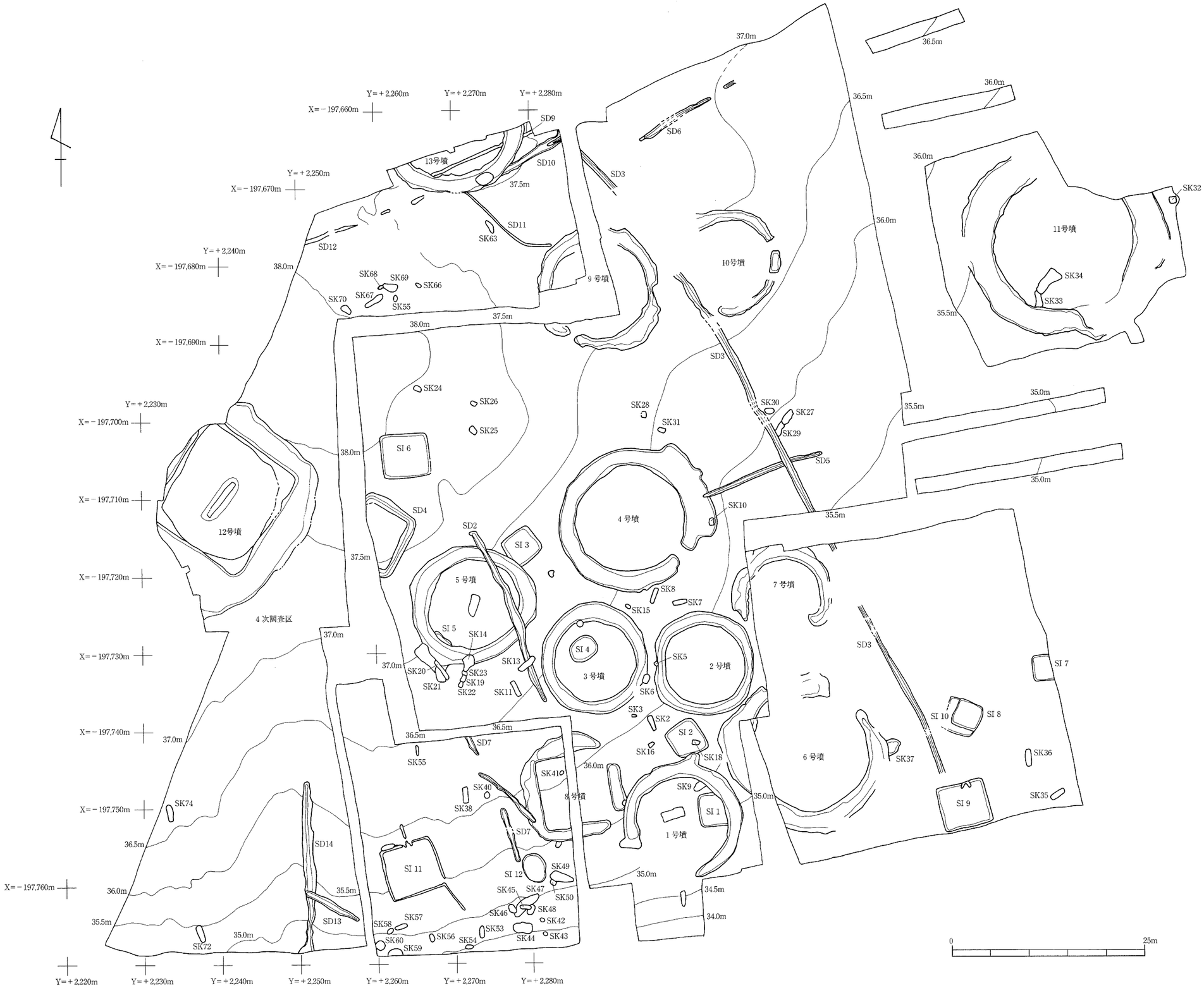
調査区の北部をＡ区とし、Ａ区南側の中央部をＢ区、南部東半をＣ区、南部西半をＤ区として地区設定を行った。遺物の取り上げは地区毎に行い、遺構内の遺物に関しては必要に応じて遺構内に小ブロックを設定して取り上げた。遺構の測量は、平板及び座標を基準とした簡易遣り方により行っている。

第６節　基本層序

今回の調査では、Ａ区東壁及びＣ区東壁の土層を基準として、表土から礫層までの間に大別で４層を確認した。このうちⅠ・Ⅱ層は、第１・２次調査においてⅠ層中で細分されていたものである。Ⅰ層はⅠａ層にあたり、Ⅱ層



第3図　調査区設定図


Y=+2,220m
Y=+2,230m
Y=+2,240m
Y=+2,250m
Y=+2,260m
Y=+2,270m
Y=+2,280m
X=−197,660m
X=−197,670m
X=−197,680m
X=−197,690m
X=−197,700m
X=−197,710m
X=−197,720m
X=−197,730m
X=−197,740m
X=−197,750m
X=−197,760m
13号墳
12号墳
11号墳
10号墳
9号墳
8号墳
7号墳
6号墳
5号墳
4号墳
3号墳
2号墳
1号墳
4次調査区
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SI 1
SI 2
SI 3
SI 4
SI 5
SI 6
SI 7
SI 8
SI 9
SI 10
SI 11
SI 12
SK2
SK3
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK13
SK14
SK15
SK16
SK18
SK19
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27
SK28
SK29
SK30
SK31
SK32
SK33
SK34
SK35
SK36
SK37
SK38
SK40
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SK46
SK47
SK48
SK49
SK50
SK53
SK54
SK55
SK56
SK57
SK58
SK59
SK60
SK63
SK66
SK67
SK68
SK69
SK70
SK72
SK74
37.0m
36.5m
36.0m
35.5m
35.0m
34.5m
34.0m
38.0m
37.5m
0
25m

第４図　遺構全体図

はＩｂ～ｆ層に細分されていたものを大別したものである。また、Ⅲ層は１・２次調査のⅡ層に、Ⅳ層はⅢ層に、Ⅴ層はⅣ層にそれぞれ該当するものである。

Ⅳ層及びⅤ層は、地点によって若干の起伏は見られるもののおおむね南東方向に傾斜しており、第１・２次調査と同様の状況である。以下に各層の特徴を示すこととする。

Ｉａ層：10YR3/3暗褐色シルト
Ｉｂ層：10YR3/3暗褐色シルト　　中に黒褐色シルトが混じる
Ｉｃ層：10YR4/4褐色シルト　　明黄褐色砂質シルトと混じり合う
Ⅱａ層：10YR2/3黒褐色シルト　　中に明黄褐色シルトが粒状に混じる
Ⅱｂ層：10YR2/1黒色シルト　　しまりよく硬い。
Ⅲａ層：10YR4/6褐色シルト　　しまりよく硬い。明黄褐色砂質シルトがブロック状に混じる。（漸移層）
Ⅲｂ層：10YR4/6褐色粘土質シルト　　暗褐色シルトが混じる（漸移層）
Ⅳ　層：10YR6/8明黄褐色砂質シルト・・・遺構検出面
Ⅴ　層：砂礫層

第７節　普及活動

調査期間中、現地説明会及び報道発表、現場見学会を以下のとおり実施した。

１．報道発表（１回目）　平成12年９月13日（火）
１．現地説明会　平成12年９月15日（金）
２．現場見学会　平成12年９月20日（火）　仙台市立西多賀小学校６年生対象
３．報道発表（２回目）　平成12年９月22日（木）

第２章　検出された遺構と遺物

今回の調査では、古墳４基（８号・９号・12号・13号墳）、竪穴住居跡２軒（SI－11・12）、土坑34基（SK－38～74：４基欠番）、溝跡４条（SD－8～14）を検出した。古墳のうち８・９号墳は第１・２次調査で古墳の半分又は４分の３がすでに調査されており、今回はその残っている部分の調査を行っている。

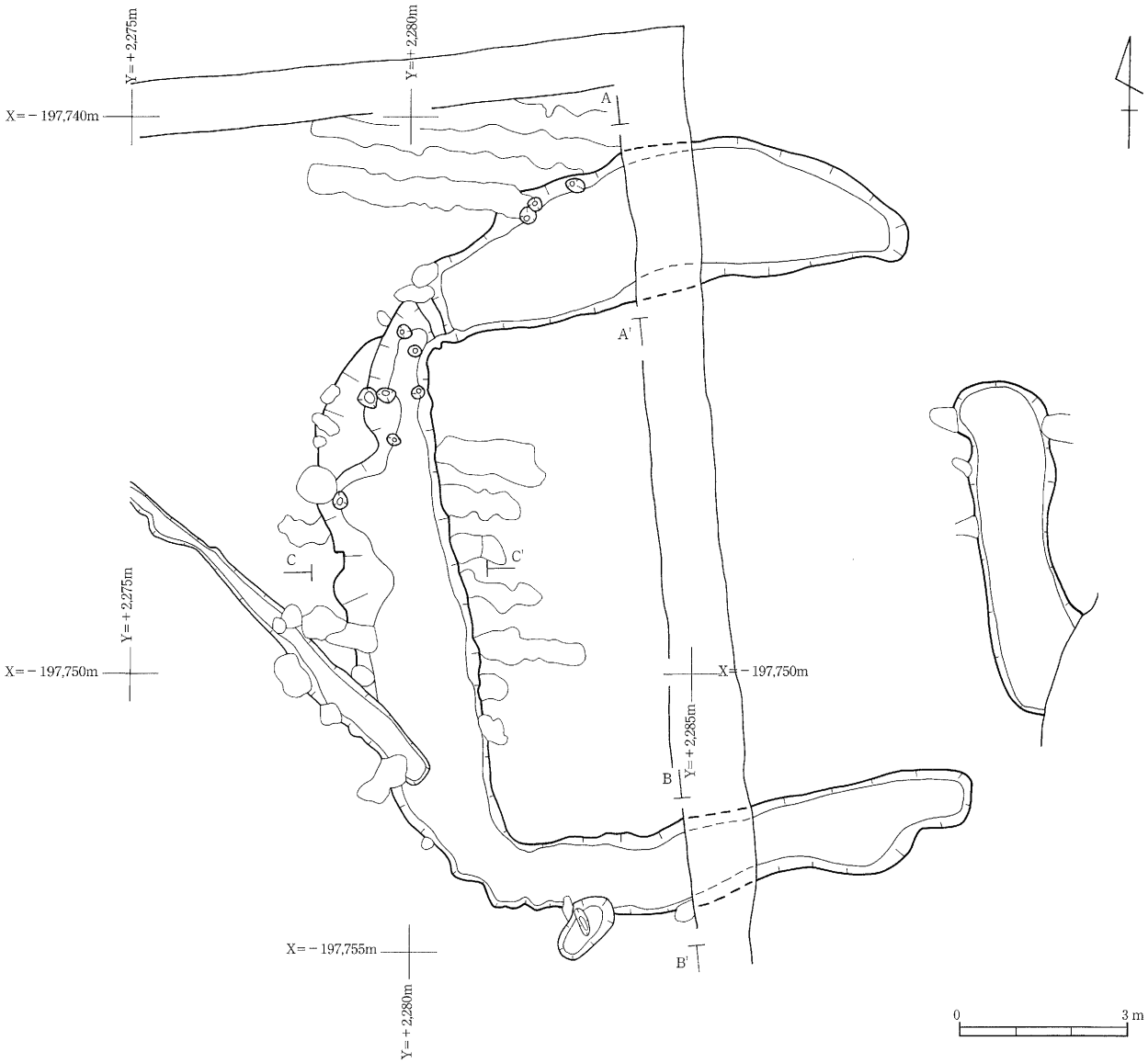
第１節　古　　墳

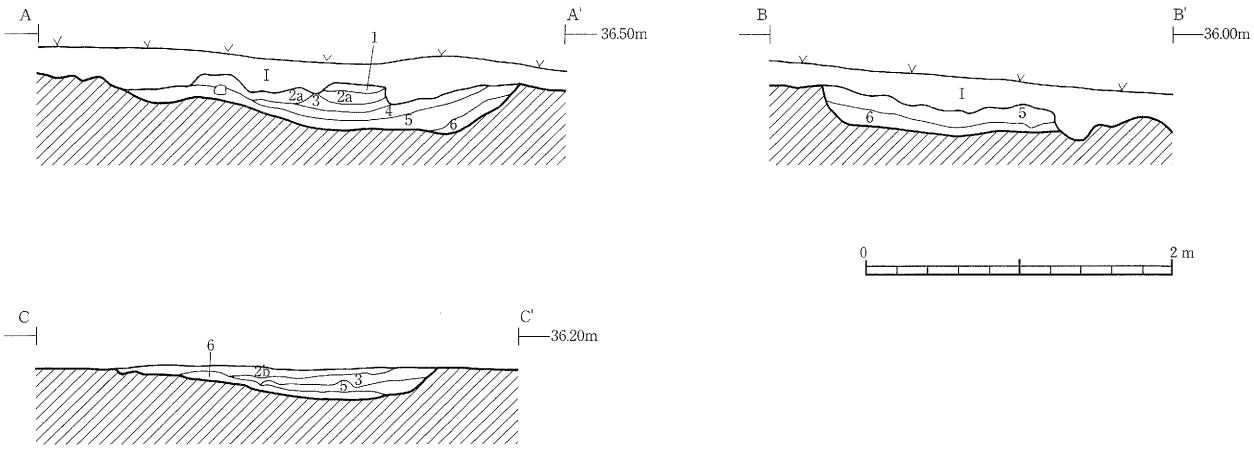
８号墳（第５図、写真４～８）

(1) 概　要

C区の東端に位置し、約半分は第１・２次調査で検出している。第１・２次調査では１号墳に切られている。１号墳よりも古く、溝の平面形から方形周溝墓の可能性が考えられ、第１号溝跡（SD－１）として報告されていたが、今回の調査によって全体の形が明らかとなり、方墳であると考えられたことから調査時点で使用していた８号墳として報告することとした。検出面であるⅣ層上面は南側に傾斜しており、古墳周溝外側の比高差は約85cmである。墳丘及び埋葬施設はすでに削平されて失われており周溝のみの検出である。

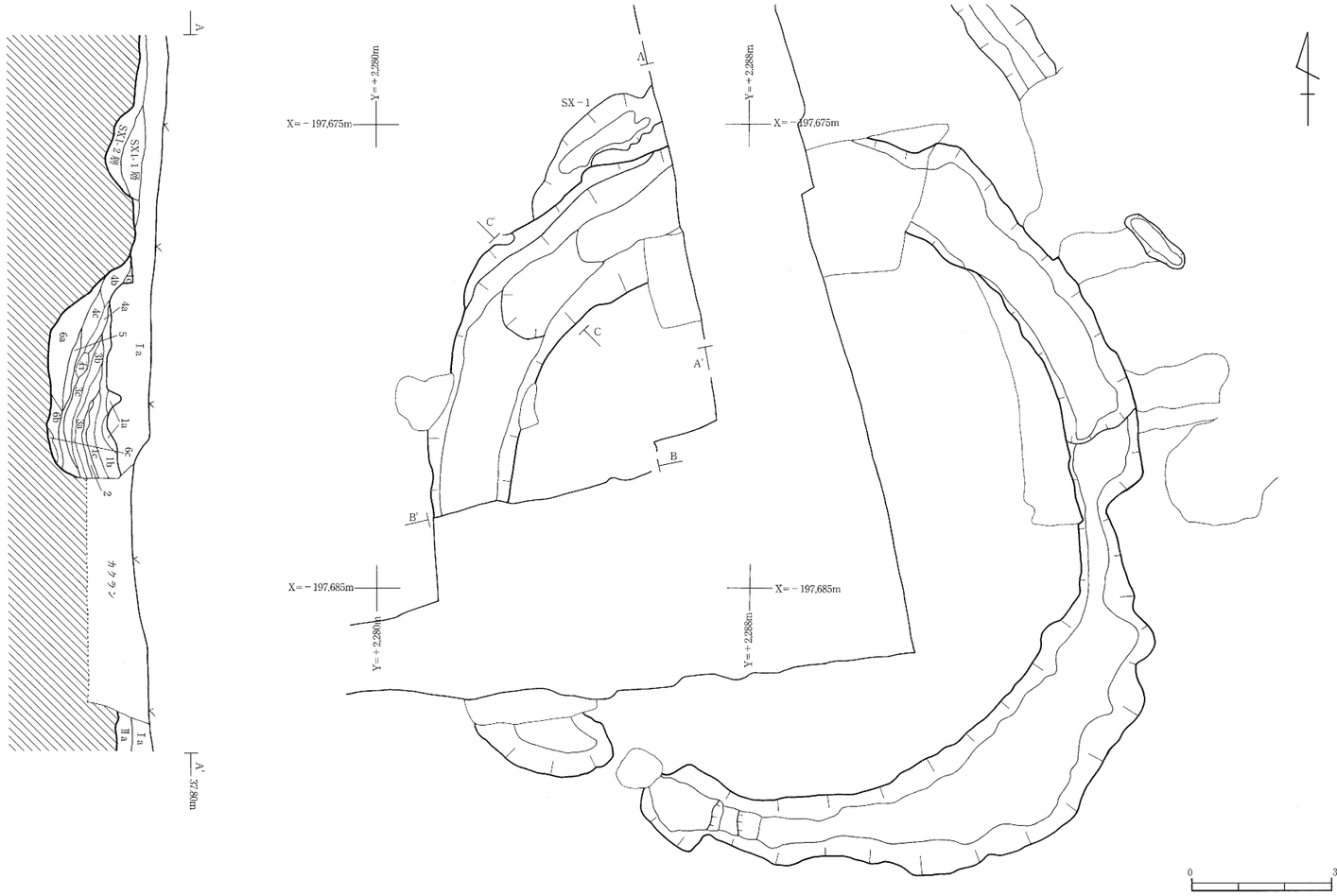
古墳の平面形は、墳丘部が方形であり、墳丘基底部の主軸方向はＮ－10°－Ｗである。規模は墳丘基底部で南北約9.3m、東西約9.2mで、周溝を含む外径は東西約13.6m、南北約12.8mである。

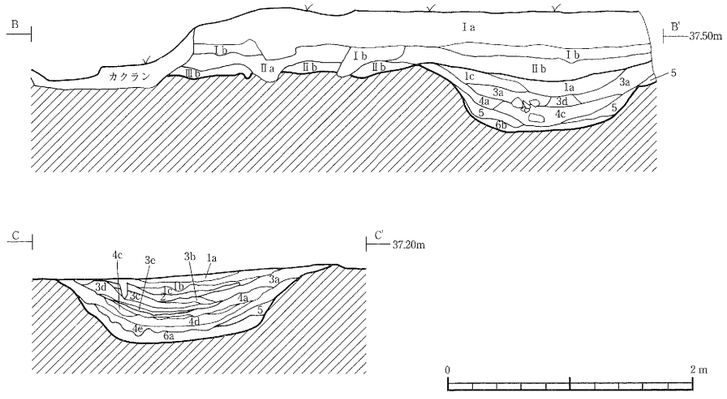




	層位	土　色	土　質	そ　の　他
8号墳	1	10YR2/1　黒色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトを少量含む。
	2a	10YR3/2　黒褐色	シルト	炭化物を多く含む。
	2b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	しまり大。白色小粒子少量含む。炭化物混入。
	3	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR2/1黒色シルトと10YR3/3暗褐色シルトが混じる。炭化物を多く含む。
	4	10YR4/4　褐色	シルト	炭化物少量含む。
	5	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	10YR6/6明黄褐色細砂粒を含む。
	6	10YR5/6　黄褐色	細砂	10YR3/3暗褐色シルト含む。
基本層	I	10YR3/3　暗褐色	シルト	

第5図　8号墳実測図





層位	土　色	土　質	そ　の　他
1a	10YR2/1　黒色	シルト	しまりなくやわらかい。1層中で1b層に次いで黒色が強い。
1b	10YR1.7/1　黒色	シルト	しまりなくやわらかい。1層中で最も黒色が強い。
1c	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR1.7/1黒色シルト、2.5Y8/3淡黄色火山灰粒が下部に混じる。
2	2.5Y8/3　淡黄色	シルト	火山灰堆積層中に2.5Y8/4淡黄色シルトと黒色シルトがシマシマ状に堆積（2次堆積）
3a	10YR1.7/1　黒色	粘土質シルト	中に10YR2/2黒褐色シルト混じる。
3b	10YR2/2　黒褐色	粘土質シルト	中に10YR4/4褐色シルト、10YR6/8明黄褐色粘土が混じる。炭化物含む。一部に礫含む。
3c	10YR1.7/1　黒色	粘土質シルト	中に10YR2/2黒褐色シルト混じる
3d	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	埴輪片、炭化物含む。
3e	10YR1.7/1　黒色	粘土質シルト	埴輪片、炭化物含む。
4a	10YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	10YR1.7/1黒色粘土質シルトの小粒が混じる。
4b	10YR6/8　明黄褐色	砂質シルト	非常にやわらかい。崩壊土。
4c	10YR2/3　黒褐色	粘土質シルト	中に10YR7/6明黄褐色砂質シルトが混じる。礫も混じる。
4d	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	中に炭化粒、10YR5/6粒が混じる。酸化鉄含む。
4e	10YR4/2　灰黄褐色	粘土	中に10YR3/2黒褐色粘土が少し。混じる。10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック状に含む。
5	10YR4/2　灰黄褐色	砂質シルト	中に10YR7/6明黄褐色砂質シルトブロック状に混じる。
6a	10YR7/6　明黄褐色	砂質シルト	10YR4/2灰黄色砂質シルトが混じりあう。
6b	10YR4/2　灰黄褐色	粘土質シルト	中に10YR6/6明黄褐色粘土がショウブロック状に混じる。
6c	10YR6/6　明黄褐色	砂質シルト	

第６図　９号墳実測図

(2) 周　溝

周溝は、幅約2.2m～2.6mで巡っているが、北西及び南西コーナー付近は幅約１mと狭くなり、第１・２次調査では北東部と南東部で周溝は途切れている。深さは20～30cmで、北西及び南西のコーナー部分は浅くなっている。周溝の平面形は、墳丘部側が直線上に延び方形となるが、周溝の外周は曲線的に曲がっており、その平面形は円形に近い形状である。

周溝の断面形は、船底形で墳丘側はほぼ垂直に立ち上がり、外側は緩やかに立ち上がる。底面は礫層上面まで掘り込まれており、起伏がみられる。堆積土は自然堆積で３層確認した。

(3) 出土遺物

堆積土中から土師器片が数点出土しているが、図示できるものはなかった。

９号墳（第６・７図、写真10～15）

(1) 概　要

Ａ区南東部隅で検出され、古墳の約３／４は第１・２次調査で調査されている。９号墳は第１・２次調査の４号墳の北側約13m離れ、10号墳の西側に隣接する円墳である。墳丘及び埋葬施設はすでに削平されて失われており、周溝のみの検出である。検出面であるⅣ層上面は緩やかに傾斜しており、古墳の北側と第１・２次調査の南側における比高差は50cm程である。周溝及び墳丘部の一部に攪乱を受けており、周溝北側ではSX－１性格不明遺跡と重複しこれを切っている。

今回の調査と第１・２次調査を総合すると、古墳の平面形はほぼ円形であり、周溝は南西部が一部途切れている。規模は墳丘基底部で12.2～12.5m、周溝を含む外径は16.0～17.5mとなる。

(2) 周　溝

周溝は幅2.5mで、調査区南壁付近でやや細くなっている。深さは50～60cmで、緩やかに凹凸が見られる。また、周溝北側で東に落ちる段差が見られる。

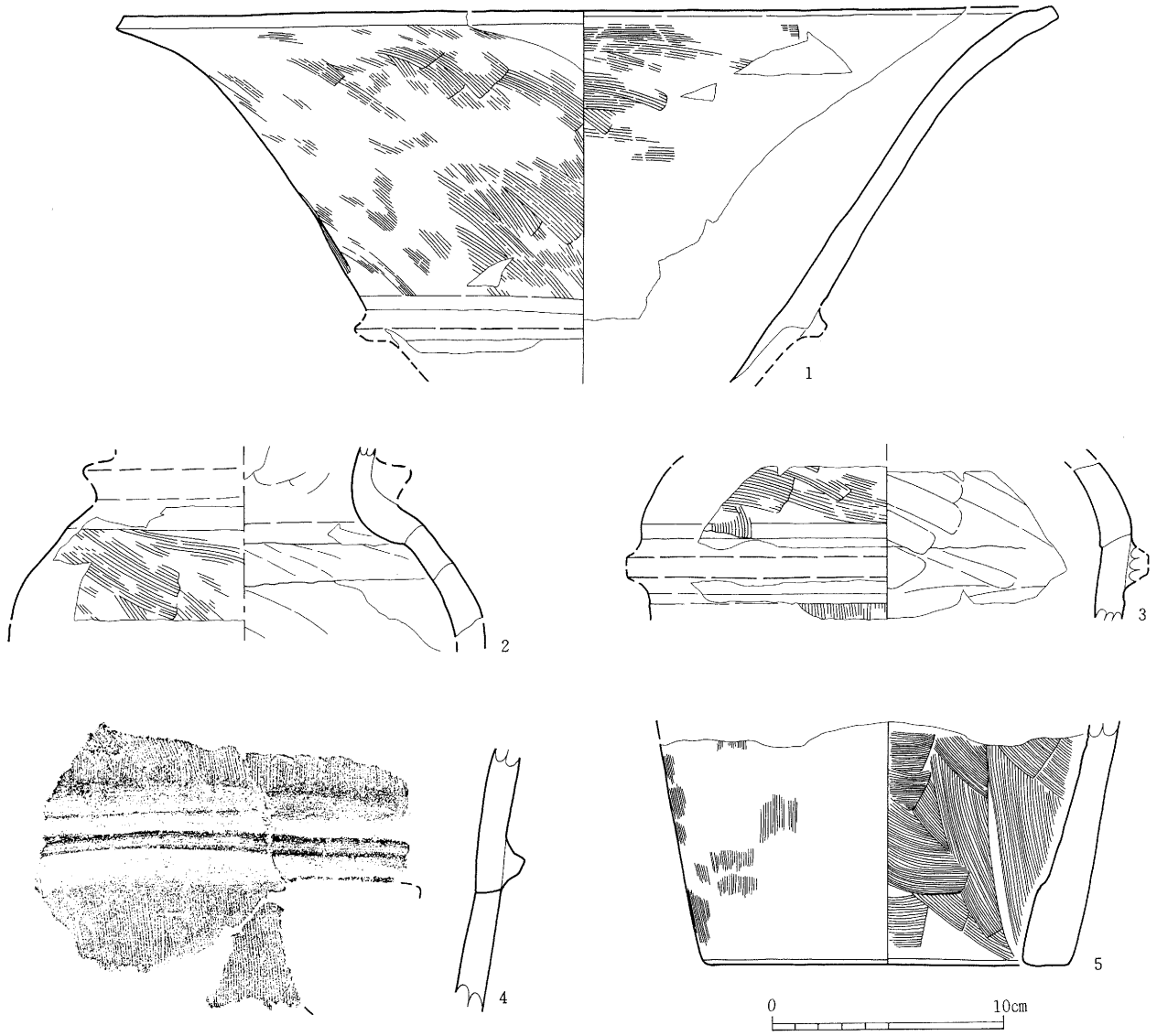
周溝の断面形は船底形で礫層上面まで掘り込まれている。墳丘側はほぼ垂直に立ち上がり、外側はやや開き気味に立ち上がる。堆積土は自然堆積で６層確認した。第２層は二次堆積と考えられる灰白色火山灰の堆積が認められている。

(3) 出土遺物（第７図）

概要　周溝内から埴輪片が378点（約7.9kg）出土している。埴輪は、大部分が小破片となって散在していた。その多くは、主に３層中から出土しており、墳丘からある時期に転落したものである。出土した埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪の小破片のため図示できないため、第１・２次調査で出土したものを掲載した。

埴輪　第７図１は朝顔形埴輪で口縁部から屈曲部にかけて全周して復元できたもので、口縁部内面に軽い段が認められる。外面調整は、１次調整タテハケのみで、内面調整は横方向又は斜方向のハケメである。２と３は朝顔形埴輪の頸部から肩部にかけてのもので、２は外面調整が横や斜方向のハケメ、内面調整はナデである。３も２と同様であるが、外面の調整は１次調整タテハケ後に、肩部は横・斜方向のハケメが施されている。凸帯は３点とも剥落していて不明である。

円筒埴輪は２点が図示され、４は体部の第２段から第３段にかけての破片で、外面調整は１次調整タテハケのみである。内面調整は斜方向のハケメ、凸帯部分の内面は横方向のナデである。凸帯の断面形は台形をしており、凸帯下には半円形と推定されるスカシ孔が認められており、円筒埴輪３類に相当する。５は第１段のもので、外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整はナデ調整後に斜方向のハケメである。



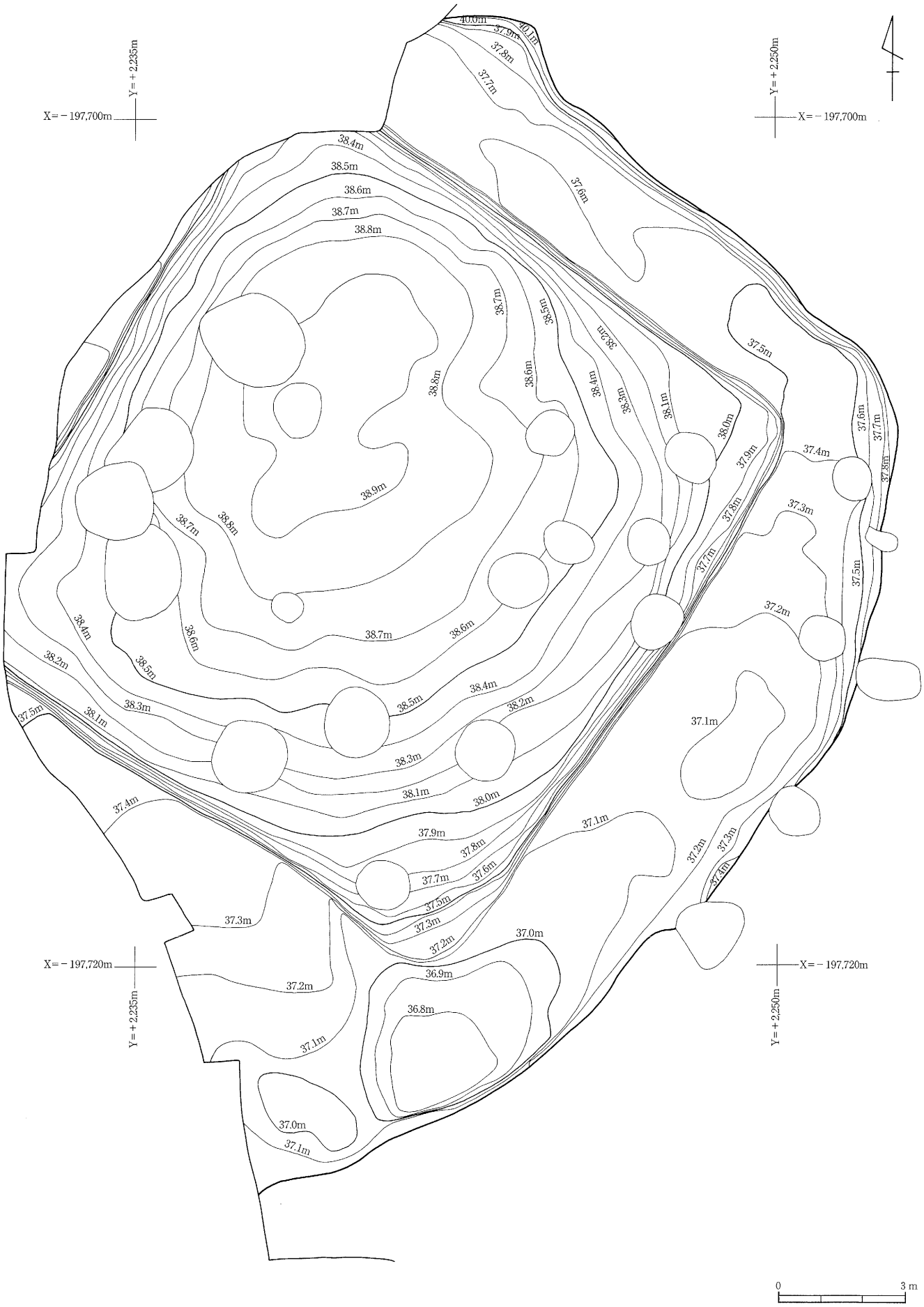
No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	－	朝顔形埴輪	9号墳周溝	40.4	－	－	－	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	やや軟質	外：斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ 内：横・斜め方向ハケメ、口縁部ヨコナデ	－
2	－	朝顔形埴輪	9号墳周溝	－	－	－	－	－	－	－	－	橙色 橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	外：肩部横・斜め方向ハケメ 内：ナデ	－
3	－	朝顔形埴輪	9号墳周溝	－	－	－	－	－	－	－	－	橙色 橙色	良好 白針微量	良好	外：肩部タテハケ→ヨコハケ、体部タテハケ 内：ナデ	－
4	－	円筒埴輪	9号墳周溝	－	－	－	－	② 0.8	② 2.3	② 0.9	半円形	橙色 にぶい黄橙色	良好 白針微量	良好	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜め方向ハケメ、凸帯部分は横方向ナデ	－
5	－	円筒埴輪	9号墳周溝	－	15.6	－	－	－	－	－	－	にぶい橙色 にぶい橙色	やや不良 白針微量	やや軟質	外：タテハケ 内：斜め方向ハケメ	－

第7図　9号墳出土遺物

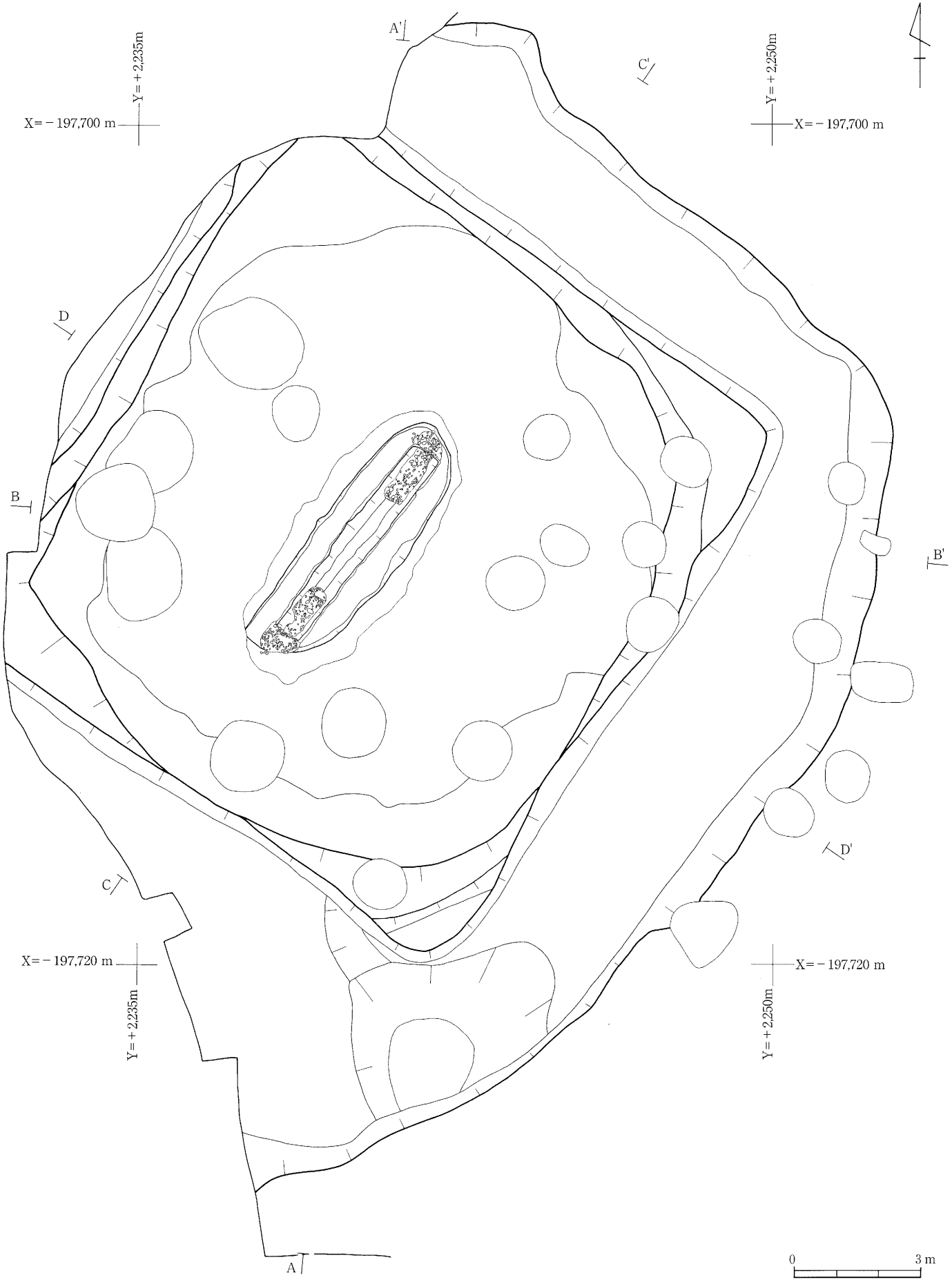
12号墳（第8～12図、写真16～43、101－1～3、102－7～12）

(1) 概　要

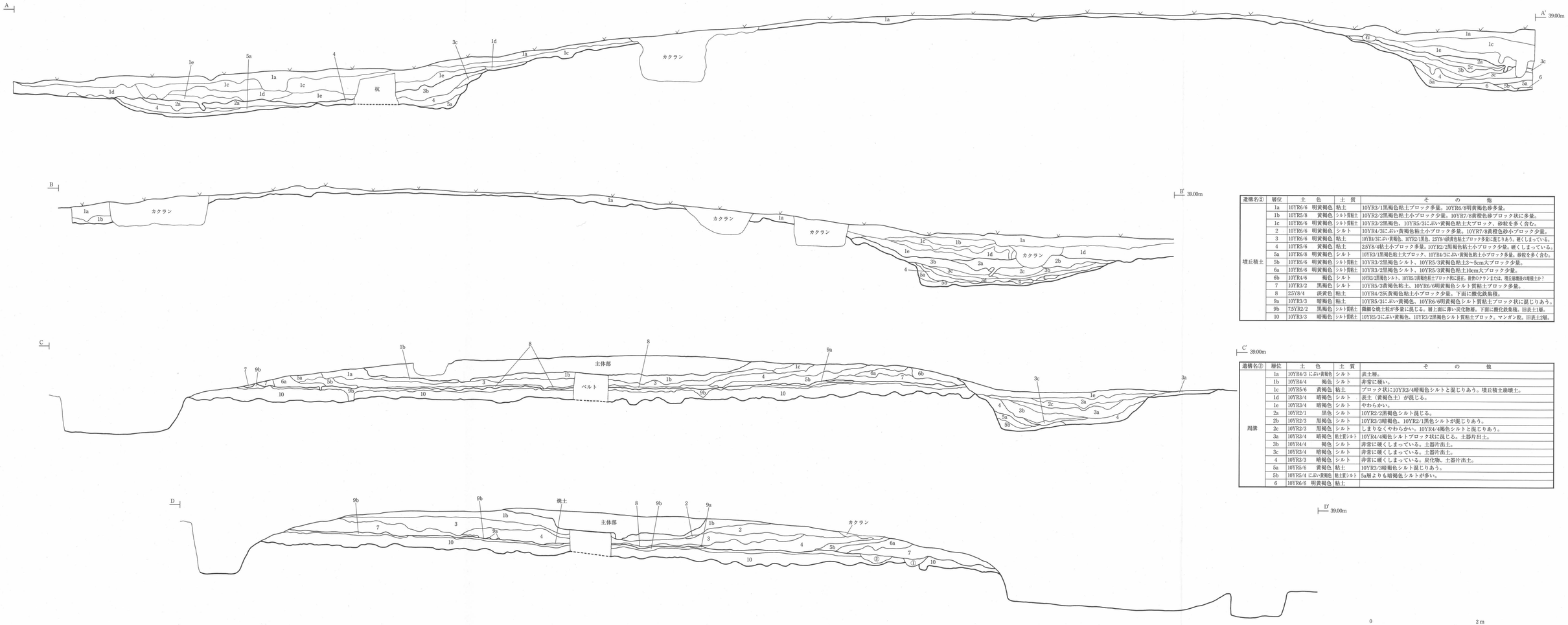
調査区のほぼ中央部B区で検出され、墳丘の北隅・西隅部および周溝は西側半分が調査区外へと延びる。第1・2次調査の5号墳の北西約15m離れたところに位置している。この古墳は、11号墳と同様に墳丘積土の一部が残存し、その中央部で主体部（埋葬施設）である粘土槨が検出された方墳である。周溝はⅣ層上面での検出となるが、墳丘積土直下には旧表土が残存している。



第８図　12号墳測量図（墳丘・周溝）


A'
C'
Y=+2,235m
Y=+2,250m
X=−197,700 m
X=−197,700 m
D
B
B'
D'
C
X=−197,720 m
X=−197,720 m
Y=+2,235m
Y=+2,250m
A
0
3 m

第9図　12号墳実測図



遺構名②	層位	土　色	土　質	そ　の　他
墳丘積土	1a	10YR6/6　明黄褐色	粘土	10YR3/1黒褐色粘土ブロック多量。10YR6/8明黄褐色砂多量。
	1b	10YR5/8　黄褐色	シルト質粘土	10YR2/2黒褐色粘土小ブロック少量。10YR7/8黄橙色砂ブロック状に多量。
	1c	10YR6/6　明黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2黒褐色、10YR5/3にぶい黄褐色粘土大ブロック、砂粒を多く含む。
	2	10YR6/6　明黄褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色粘土小ブロック多量。10YR7/8黄橙色砂小ブロック少量。
	3	10YR6/6　明黄褐色	粘土	10YR4/3にぶい黄褐色、10YR2/1黒色、5YR4/6黄色粘土ブロック多量に混じりあう。硬くしまっている。
	4	10YR5/6　黄褐色	粘土	2.5Y8/4粘土小ブロック多量。10YR2/2黒褐色粘土小ブロック少量。硬くしまっている。
	5a	10YR6/8　明黄褐色	シルト	10YR3/1黒褐色粘土大ブロック、10YR4/3にぶい黄褐色粘土小ブロック多量。砂粒を多く含む。
	5b	10YR6/6　明黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2黒褐色シルト、10YR5/3黄褐色粘土3～5cm大ブロック少量。
	6a	10YR6/6　明黄褐色	シルト質粘土	10YR3/2黒褐色シルト、10YR5/3黄褐色粘土10cm大ブロック少量。
	6b	10YR4/6　褐色	シルト	10YR2/2黒褐色シルト、10YR5/3黄褐色粘土ブロック状に混在。後世のクラランまたは、墳丘崩壊後の堆積土か?
	7	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR5/3黄褐色粘土、10YR6/6明黄褐色シルト質粘土ブロック多量。
	8	2.5Y8/4　淡黄色	粘土	10YR4/2茶黄褐色粘土小ブロック少量。下面に酸化鉄集積。
	9a	10YR3/3　暗褐色	粘土	10YR5/3にぶい黄褐色、10YR6/6明黄褐色シルト質粘土ブロック状に混じりあう。
	9b	7.5YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	微細な焼土粒が多量に混じる。層上面に薄い炭化物層。下面に酸化鉄集積。旧表土1層。
	10	10YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色、10YR3/2黒褐色シルト質粘土ブロック。マンガン粒。旧表土2層。

遺構名②	層位	土　色	土　質	そ　の　他
周溝	1a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	表土層。
	1b	10YR4/4　褐色	シルト	非常に硬い。
	1c	10YR5/6　黄褐色	粘土	ブロック状に10YR3/4暗褐色シルトと混じりあう。墳丘積土崩壊土。
	1d	10YR3/4　暗褐色	シルト	表土（黄褐色土）が混じる。
	1e	10YR3/4　暗褐色	シルト	やわらかい。
	2a	10YR2/1　黒色	シルト	10YR2/2黒褐色シルト混じる。
	2b	10YR2/3　黒褐色	シルト	10YR3/3暗褐色、10YR2/1黒色シルトが混じりあう。
	2c	10YR2/3　黒褐色	シルト	しまりなくやわらかい。10YR4/4褐色シルトと混じりあう。
	3a	10YR3/4　暗褐色	粘土質シルト	10YR4/4褐色シルトブロック状に混じる。土器片出土。
	3b	10YR4/4　褐色	シルト	非常に硬くしまっている。土器片出土。
	3c	10YR3/4　暗褐色	シルト	非常に硬くしまっている。土器片出土。
	4	10YR3/3　暗褐色	シルト	非常に硬くしまっている。炭化物、土器片出土。
	5a	10YR5/6　黄褐色	粘土	10YR3/3暗褐色シルト混じりあう。
	5b	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	5a層よりも暗褐色シルトが多い。
	6	10YR6/6　明黄褐色	粘土	

第10図　12号墳　墳丘・周溝断面図

古墳の平面形は方形を呈し、規模は南北約15m、東西約14.2mで、周溝を含む外径は南北約24m以上、東西約14.5m以上である。検出面であるⅣ層上面は南に傾斜しており、古墳周溝外側の比高差は約１mである。墳丘及び周溝の一部に抜根跡と見られる円形の攪乱が20ヵ所認められている。

(2) 墳　丘

墳丘の平面形は方形で、南北約15m、東西約14.2mの規模をもち、方向は南北辺でN－45°－Eである。墳丘の北西隅と南西隅は調査区外に延びるため検出できなかったが、四方の辺はほぼ検出されている。北東隅と南東隅の角部は墳丘積土及び旧表土が崩落し、そのため検出段階では円墳のような平面形を呈していた。墳丘は、地山削り出しによる基底部と積土によって構成されている。残存する積土の高さは、最大で旧表土上面から約70cmである。

積土は、黄褐色粘土のⅣ層と黒褐色粘土質シルトの旧表土が混じり合ったもので、墳丘の外周に近い部分には黒褐色粘土質シルトの混じりが多く、中心部及び上部に行くにしたがって黄褐色粘土の割合が高くなる。これは、周溝を掘りながら墳丘の外側から土を積んでいったために、始めは旧表土の混じりの割合が高く、周溝を掘り進めるにしたがってⅣ層の黄褐色土が主体となったためと考えられる。

また、墳丘積土直下の旧表土上面では、炭化物が薄く全面に、また部分的に焼けた痕跡が確認されており、古墳築造段階で何らかの儀式を行ったための祭祀関連に行われたものと推定される。

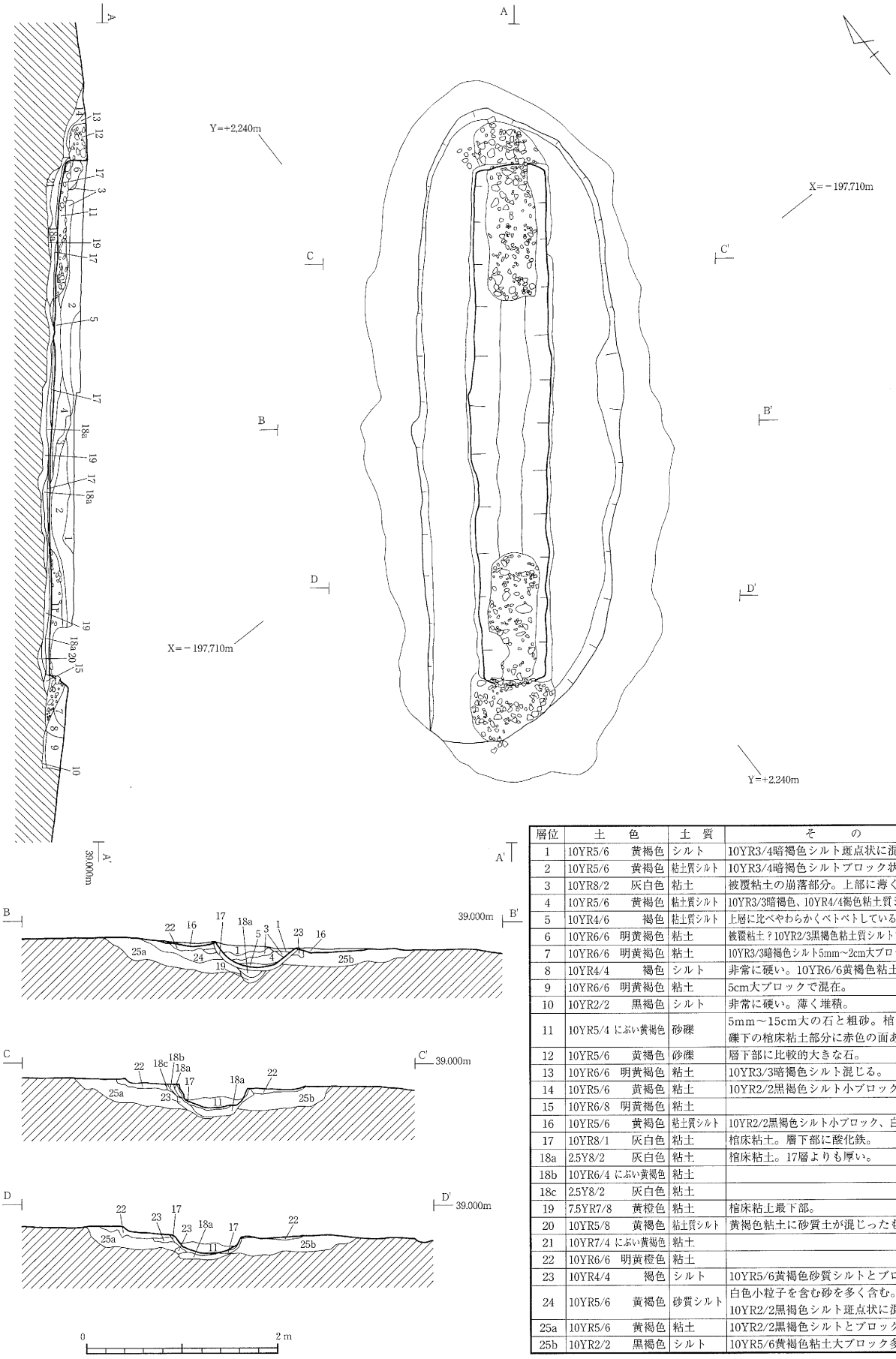
墳丘積土除去後、旧表土上面およびⅣ層上面で精査した結果、旧表土上面で土坑１基と墳丘のベルトで２基のピットを検出したにすぎない。いずれもその性格については不明である。旧表土下のⅣ層上面での遺構の発見はなかった。旧表土上面及び旧表土中より塩釜式と考えられる土師器片数点と天王山式と考えられる弥生土器片数点が出土している。

(3) 主体部（埋葬施設）

古墳の主体部は墳丘中央部で検出された割竹形木棺を白色粘土で覆った粘土槨である。粘土槨は古墳の表土を除去した墳丘上面において、墓壙中央部に灰白色粘土が幅２～３cmの幅で長方形状に検出されたものである。主体部の主軸方向はN－45°－Eである。粘土槨の南側で一部攪乱が見られるものの大きな盗掘孔はなかった。

墓壙の平面形は南北方向に長い楕円形で、その規模は長軸約7.5m、短軸3.2mを測る。粘土槨は墓壙中央部に長さ5.45m、幅は約80cmの長方形に検出されており、その検出状況は幅２～３cm幅の灰白色粘土が帯状となって発見されている。粘土槨内の堆積土は５層あり、天井部が崩落しているため粘土槨を覆っていた暗褐色シルトと黄褐色粘土質シルトが混ざり合った崩落土と、その下に天井部を覆っている被覆粘土からなる。被覆粘土と棺床粘土の間にはベタベタとした炭化物が多く含まれる褐色の粘土質シルトが薄く堆積しているが、木棺の木質部分については検出できなかった。粘土槨は長さ5.45m、幅は約80cmの木棺を粘土で覆ったもので、深さ約20cmを測る。横断面形はU字形を呈し、粘土槨両端は底面よりほぼ垂直に立ち上がっていることなどから割竹形木棺を安置し、灰白色粘土で覆った粘土槨であることが判明した。

木棺自体はすでに腐食して残存していないが、木棺内部の構造は、中央部の区画に被葬者を埋葬し、その両側には２～15cmの砂礫が詰められ、３つの区画に区別されている。その規模は、中央部で長さ2.65m、砂礫が詰められた南側区画部で長さ1.35m、北側区画部で長さ1.4mを測る。砂礫部分は床面から10cmの高さまで詰められており、その上には崩落したと考えられる灰白色の被覆粘土が覆っていた。床面はほぼ平坦であるが緩やかに南に傾斜を持って造られている。また、棺の南北両端外側にも同様に砂礫が置かれており、棺を固定する役割か排水などの役割のために造られたものと推定される。木棺内部の両側にある砂礫を取り除いた床面は、灰白色粘土の棺床粘土があり、木棺の木質部分は検出されなかったが、赤色顔料の付着が明瞭に認められている。この赤色の物質は、理化学分析によるとベンガラであるという結果が得られている。木棺内部及び墓壙からの副葬品は発見されておらず、わずかに木棺内堆積土から土師器甕の口縁部小破片が２点出土したにすぎない。



層位	土　色	土　質	そ　の　他
1	10YR5/6　黄褐色	シルト	10YR3/4暗褐色シルト斑点状に混じる。
2	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	10YR3/4暗褐色シルトブロック状に混じる。
3	10YR8/2　灰白色	粘土	被覆粘土の崩落部分。上部に薄く酸化鉄が集積。
4	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	10YR3/3暗褐色、10YR4/4褐色粘土質シルトが混じりあう。
5	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	上層に比べやわらかくベトベトしている。炭化物を多く含む。
6	10YR6/6　明黄褐色	粘土	被覆粘土？10YR2/3黒褐色粘土質シルトブロック状に混じる。
7	10YR6/6　明黄褐色	粘土	10YR3/3暗褐色シルト5mm～2cm大ブロック斑点状に混じる。
8	10YR4/4　褐色	シルト	非常に硬い。10YR6/6黄褐色粘土混じる。
9	10YR6/6　明黄褐色	粘土	5cm大ブロックで混在。
10	10YR2/2　黒褐色	シルト	非常に硬い。薄く堆積。
11	10YR5/4 にぶい黄褐色	砂礫	5mm～15cm大の石と粗砂。棺内においた砂礫。礫下の棺床粘土部分に赤色の面あり。
12	10YR5/6　黄褐色	砂礫	層下部に比較的大きな石。
13	10YR6/6　明黄褐色	粘土	10YR3/3暗褐色シルト混じる。
14	10YR5/6　黄褐色	粘土	10YR2/2黒褐色シルト小ブロック混じる。
15	10YR6/8　明黄褐色	粘土	
16	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	10YR2/2黒褐色シルト小ブロック、白色砂小粒子混じる。
17	10YR8/1　灰白色	粘土	棺床粘土。層下部に酸化鉄。
18a	2.5Y8/2　灰白色	粘土	棺床粘土。17層よりも厚い。
18b	10YR6/4 にぶい黄褐色	粘土	
18c	2.5Y8/2　灰白色	粘土	
19	7.5YR7/8　黄橙色	粘土	棺床粘土最下部。
20	10YR5/8　黄褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土に砂質土が混じったもの。
21	10YR7/4 にぶい黄褐色	粘土	
22	10YR6/6　明黄橙色	粘土	
23	10YR4/4　褐色	シルト	10YR5/6黄褐色砂質シルトとブロック状に混じる。
24	10YR5/6　黄褐色	砂質シルト	白色小粒子を含む砂を多く含む。10YR5/6黄褐色、10YR2/2黒褐色シルト斑点状に混じる。
25a	10YR5/6　黄褐色	粘土	10YR2/2黒褐色シルトとブロック状に混じりあう。
25b	10YR2/2　黒褐色	シルト	10YR5/6黄褐色粘土大ブロック多量に混じる。

第11図　12号墳主体部実測図

粘土槨は、墳丘中央部に南北に長い楕円形のプランに、竪穴状に掘り込んだ墓壙掘り方の中央部に構築されている。掘り方は検出面より約30～40cm掘り込んで底面とし、黄褐色粘土と黒褐色シルト・明黄褐色粘土で一度埋め戻している。その後、U字形の溝を掘り、灰白色粘土を入れて棺床とし割竹形木棺を収めている。遺体を棺に埋葬した後、木棺を被覆粘土で覆い、黄褐色粘土質シルトや暗褐色シルトの混合土で埋めている。

(4) 周　溝

Ⅳ層上面での検出である。西辺は、調査区外に延びる。規模は、南北約24m以上、東西14.5m以上で緩やかな曲線を持ちながら墳丘を取り囲む。幅は、3.2m～4.2mで、コーナー部分ではやや狭くなり約３m程度となる。しかし、南隅部から南西辺にかけては周溝が外側に開いており、幅も７m以上となる。

深さは南西辺を除き約70cmで、底面は礫層まで掘り込まれている。南西辺ではⅣ層が薄く、すぐ礫層に達するため一段と浅くなり、約20～30cm程である。このため、必要な土量を確保するために周溝が外に広がっているものと推定される。堆積土は自然堆積で６層に分けられる。堆積土１層は表土直下の層であり、墳丘積土と同様の層となり、墳丘崩落土又は墳丘に攪乱を受けた際に排出されたものと考えられる。また、周溝の堆積土２層には、浅黄色の火山灰層と考えられる層が一定の幅で堆積しており、分析の結果、試料に含まれるテフラ粒子のうち、火山ガラスや角閃石については形態や屈折率などから、約5,000年前に噴出した沼沢１テフラと６世紀中葉に噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラに由来する可能性が考えられるが、試料の量が少なく詳細の検討は困難であるとの分析である。しかし、このテフラは、周溝堆積土の上位層に検出され、古墳の周溝が埋まっていく過程に堆積しているものであり、約5,000年前に噴出した沼沢１テフラとは考えられず、６世紀中葉に噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラの可能性が考えられる。

(5) 出土遺物

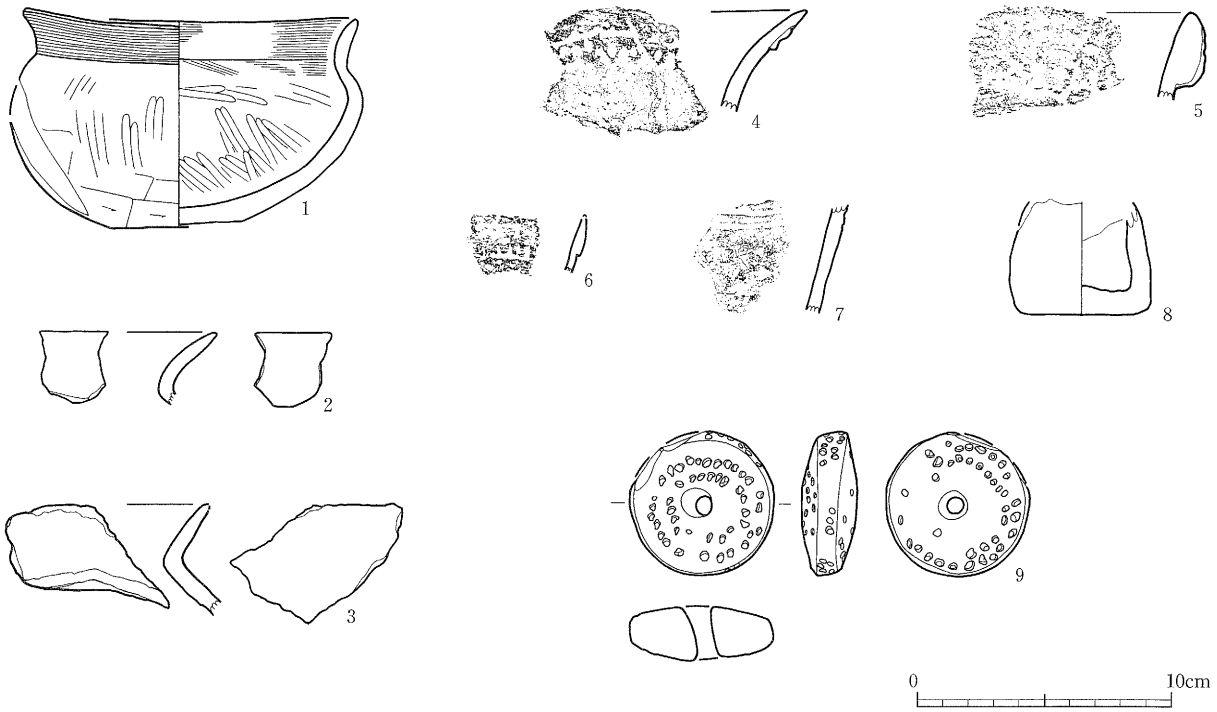
概要　周溝堆積土、墳丘積土、旧表土上面から土師器・弥生土器・土製品などが出土している。このうち図示できた資料は９点がある。遺物の出土量は極めて少なく、周溝堆積土などから出土しているものが多いが、周溝底面及び底面に近い層からは土師器鉢・甕片が出土している。

土師器　３点が図示されているが、第12図１以外は甕の口縁部小破片である。Ｃ－１は周溝４層から出土した鉢で、体部上部に最大径をもつ口径13.0cm、器高8.8cmの大きさで、底径5.0cmと小さい平底の底部のものである。器形は体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が直立気味に外傾する。調整は口縁部内外面がヨコナデされ、体部外面は上半がヘラミガキ、体部下端から底部にかけてヘラケズリ後ヘラミガキされ、内面は体部上部から底部にかけて丁寧なヘラミガキが施されている。口縁部から体部にかけての外面は赤色の彩色が行われている。この鉢は土師器編年の塩釜式のⅡB段階に相当するものと考えられる。また、２・３は甕口縁部の小破片である。２は埋葬施設である粘土槨の木棺内の出土であり、木棺内からは他になにも出土しなかった。３は周溝ｂ区４層出土のもので、２点の破片は口縁部がくの字状に強く外反しており、塩釜式の甕の特徴をもつものである。

その他図示できなかったが、墳丘南隅部付近の周溝底面からは、塩釜式の甕の体部破片がまとまって出土している。この甕は体部外面の調整はヘラケズリ後に丁寧な縦方向のヘラミガキされているもので、内面調整はヘラナデ、ナデである。

弥生土器　５点が図示されている。いずれも墳丘積土及び墳丘下の旧表土などから出土しているもので、Ｂ－７・８・10は壺あるいは甕の口縁部と考えられる破片で、Ｂ－７は口縁部外面に交互刺突文が施されており、これらは弥生時代後期の天王山式に相当するものである。Ｂ－８は口縁部が厚く、縦方向に棒状の貼付文が施され、その上に圧押圧痕が施されているものである。Ｂ－10は肥厚する口縁部の下端に連続する刻みが施されるものである。

土製品　Ｐ－２は土製の紡錘車で、径5.8cm、厚さ2.2cmを測る。紡錘車の表裏面・側面に細かい半裁竹管文の刺突が二重に施されているもので、中央に円形の孔が開いている。



No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）			外面色調	胎　土	焼　成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	内面色調				
1	C－1	土師器・鉢	12号墳周溝 a区、1層	13.0	5.0	8.8	2.5YR5/6　明赤褐色 2.5YR5/6　明赤褐色	緻密	良好	外面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラミガキ	101-1
2	C－6	土師器・甕	粘土郭内 堆積土	－	－	－	7.5YR5/6　明褐色 7.5YR6/6　橙色	砂粒多量	不良	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	101-2
3	C－7	土師器・甕	12号墳周溝 d区、4層	－	－	－	7.5YR5/4　にぶい褐色 10YR5/4　にぶい黄褐色	緻密	良	外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ	101-3
4	B－7	弥生土器・甕or広口壺	12号墳墳丘 d区カクラン	－	－	－	10YR3/1　黒褐色 10YR7/3　にぶい黄橙色	砂粒多量	不良	外面：口縁部RL？縄文、交互刺突文	102-7
5	B－8	弥生土器・壺	12号墳墳丘 d区カクラン	－	－	－	7.5YR5/4　にぶい褐色 7.5YR5/3　にぶい褐色	砂粒少量	良	外面：折り返し口縁、棒状貼付文、押圧圧痕	102-8
6	B－10	弥生土器・甕or広口壺	12号墳墳丘 a区1層	－	－	－	10YR7/4　にぶい黄橙色 10YR7/3　にぶい黄橙色	砂粒少量	良	外面：折り返し口縁、刻み目	102-9
7	B－9	弥生土器 広口壺？	12号墳周溝 c区埋土	－	－	－	10YR5/3　にぶい黄褐色 10YR5/3　にぶい黄褐色	砂粒少量	良	外面：二条の沈線文（連弧文？）	102-10
8	B－14	弥生土器 ミニチュア土器	12号墳墳丘下 d区旧表土	－	－	－	5YR6/6　橙色 5YR6/6　橙色	砂粒多量	良	外面：底部木葉痕	102-11
9	P－2	土製紡錘車	12号墳墳丘 d区カクラン	－	－	－	7.5YR6/6　橙色	砂粒多量	不良	細い半裁竹管状施文具による刺突文	102-12

第12図　12号墳・墳丘下出土遺物

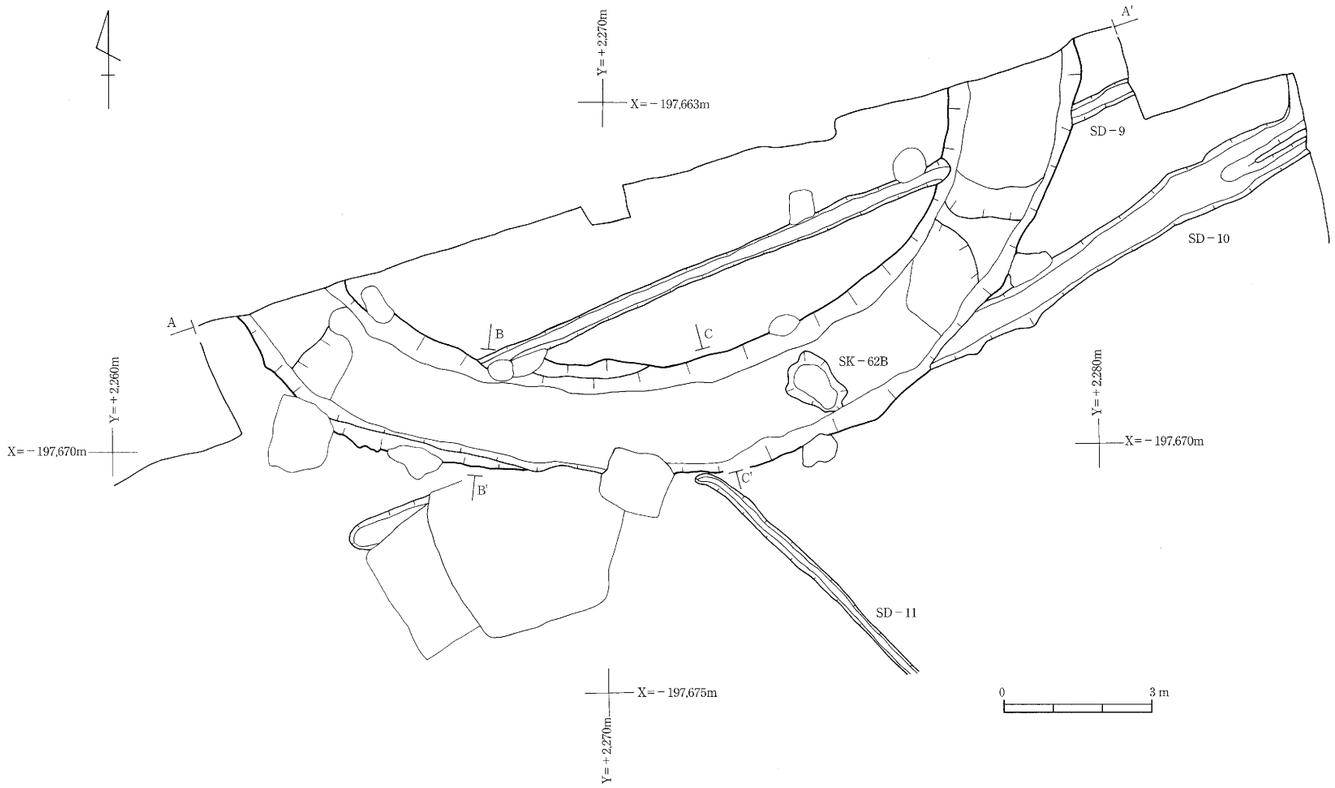
13号墳（第13～30図、写真44～54、85～100）

(1) 概　要

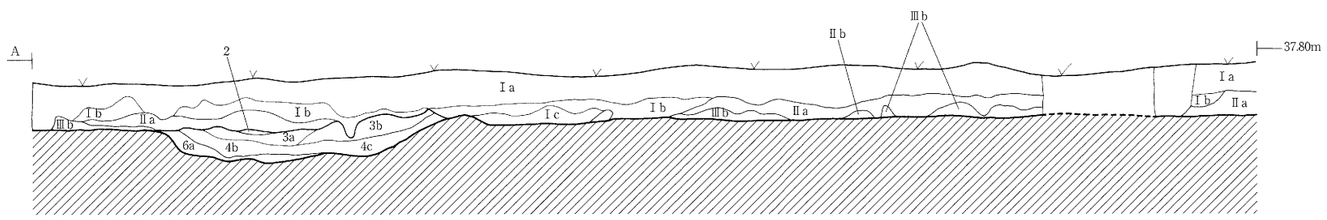
A区の北端で検出された円墳で、古墳の北側約半分は調査区外に延びている。墳丘はすでに削平されており、周溝のみの検出である。主体部については、検出された範囲内では発見されなかった。SD－9・10溝跡と重複し、これらに切られており、また周溝及び墳丘部の一部は攪乱を受けている。平面形は円形で、検出された部分での規模は墳丘部で東西約12.9m、南北約3.6mである。周溝を含む外径は東西約18mであり、推定される全体の規模は墳丘部直径約15m、周溝を含む外径は約20mとなり、6号墳とほぼ同規模の古墳と考えられる。

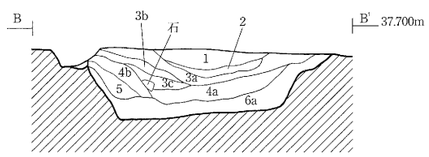
(2) 周　溝

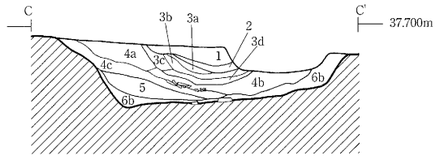
周溝は、幅約2.5m、深さ約30～60cmを測り、底面は一定ではなく凹凸が見られる。また、南側が深い傾向が見られる。周溝の断面形はU字形あるいは逆台形で礫層上面まで掘り込まれており、墳丘側はほぼ垂直に近い立ち上がりで、外側がやや開き気味に立ち上がる。堆積土は自然堆積層で6層が確認されている。上位の3a層には二次堆積と考えられる灰白色火山灰が厚さ約5～8cmでレンズ状に堆積している。

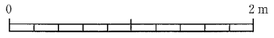


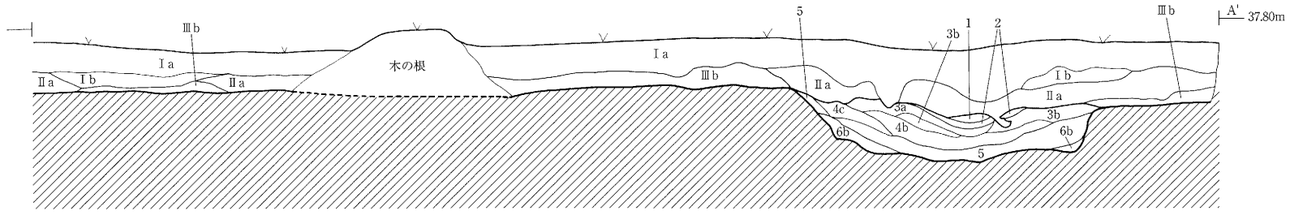
埴輪出土状況平面図











第13図　13号墳実測図

層位	土　色		土　質	その　他
1	10YR2/1	黒色	シルト	10YR2/2黒褐色シルト混じる。
2	2.5Y8/4	淡黄色	シルト	火山灰
3a	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	火山灰粒子を含む。
3b	10YR2/1	黒色	粘土質シルト	10YR2/2黒褐色粘土質シルト、10YR3/3暗褐色シルト混じる。炭化物混じる。
3c	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	10YR3/3暗褐色粘土質シルト混じる。
3d	10YR3/4	黒褐色	粘土質シルト	10YR2/1黒色粘土質シルト混じる。
4a	10YR3/3	暗褐色	シルト	10YR5/6黄褐色シルト粒混じる。
4b	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	粘性強い。酸化鉄含む。10YR4/2灰黄褐色粘土含む。埴輪出土
4c	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄含む。10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト混じる。
5	10YR4/4	褐色	粘土	10YR3/3暗褐色、10YR4/4褐色粘土質シルトを含む。酸化鉄含む。
6a	10YR6/6	明黄褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色粘土質シルトブロック状に含む。
6b	10YR5/6	黄褐色	粘土	10YR4/4粘土が混じる。酸化鉄含む。

(3) 出土遺物（第14～30図　写真85～100）

概要　13号墳から出土した遺物は埴輪のみであり、墳丘裾部と考えられる面で円筒埴輪の基底部１点が直立に据えられた状態で出土した以外、その他の埴輪はすべて周溝内からの出土であり、埴輪片総数4,375点（約97.4kg）がある。大部分は小破片となって散在しており、周溝堆積土の３～４層を中心に出土している。これらの埴輪は墳丘あるいは裾部からある時期にまとまって転落したものと推定される。周溝南側では、形象埴輪である人物埴輪と動物埴輪の破片がまとまって出土しており、人物埴輪１体、動物埴輪１体の破片と考えられる。その他の大部分は朝顔形埴輪及び円筒埴輪である。

埴輪　図示できた埴輪は60点で、そのうち人物埴輪１点、動物埴輪の破片５点と朝顔形埴輪18点、円筒埴輪36点がある。

人物埴輪（第14・15図、16図1・2・5～7）

人物埴輪は13号墳周溝の南側b・c区の境付近、堆積土３層から出土したS－20の１点がある。頭部を欠損しているが、ほぼ全体の形の判るもので、その出土状況は全体像がそのまま周溝内に倒れ込んだものではなく、他の円筒埴輪や動物埴輪の脚部などと共に散乱した状態で出土しており、腕の出土により辛うじて人物埴輪と判別できる状況であった。

S－20（第14・15図）は頭部から首部にかけて欠損しているため不明であるが、肩部から円筒部まで残存しており、ほぼ全体の形が明らかな人物埴輪である。人物埴輪は、両肘を曲げながら両腕を前方に突き出した形をしており、手のひらを下にし、手首をやや斜め前方に上げ指はまっすぐ伸ばすポーズである。埴輪の大きさは、残存する高さが43.8cmを測り、肘を曲げて両腕を前方に伸ばした時の両腕間の幅36.0cmである。肩部から指先までの長さは、右腕で約15.0cm、左腕で約18.0cm、腰部の凸帯での推定幅17.0cm、スカート状部分の推定幅22.8cm、円筒部凸帯での幅16.1cmを測る。

この埴輪は半身像のもので、腰部にはベルト状の幅４～4.5cm、高さ８～９mmのやや幅広の凸帯が一重巡っている。凸帯は貼り付けられていたものが欠落している部分が多く、欠落した部分には１次調整のタテハケが残っている。S－82～84（第16図５～７）は欠落した幅広の凸帯である。また、幅1.8～2.6cm、高さ約８mmの凸帯が正面の両肩から脇を通り、さらに背中で×状になるような襷掛けをしており、女性像の人物埴輪・巫女である。この襷部分の凸帯も殆ど欠落しており、貼り付ける前の１次調整タテハケが見られ、凸帯の両側を調整した横方向のナデの範囲が二重に観察される。腰部分の凸帯より下方にはハの字状に開くスカート状のものが付くが、すべて欠落している。この破片かどうか断定できないが同様のものと考えられるものがS－62・63（第16図１・２）である。

スカート状に開く部分の下にある凸帯を境に円筒部と人物部に分かれるものと考えられ、円筒部は１段でやや外傾している。凸帯幅は約２cm、高さ６mmで、凸帯の断面形は凸帯上部が突き出たM字形をしている。スカシ孔は両腕のすぐ下側に楕円形の孔が１対、スカート状部分と円筒部凸帯の間の側面に楕円形のスカシ孔１対が穿孔されている。脇下部のスカシ孔は、左側で2.4×3.0cm、右側で2.5×3.2cmを測り、円筒部側面のスカシ孔は、左側で2.9×4.7cm、右側で2.8×4.8cmを測る。

両腕の製作は、肘から肩の部分は中空となっており、肘から手にかけては四角い棒状のものに粘土を巻きつけて製作されており、手首から指にかけては中実のものとなる。指については先端が欠けているため不明となっている。

埴輪は正面の胸から腹、両脇の部分にかけては欠損しているため不明なところが多いが、背中の部分はほぼ残存している。

人物埴輪の調整については、両腕とそれが接続されている肩部までの外面調整はヘラケズリされ、それ以外は縦方向のハケメが施されている。背面調整は首の付け根から背中上部にかけては横方向又は斜方向のハケメであり、それより下部の調整は斜方向又は縦方向のハケメが施され、全体的に細かなハケメ調整であり丁寧な仕上がりと

なっている。内面調整は斜方向のハケメ及びナデが右下から左上の方向に施され、腕との接続部分は幅の広いナデである。

動物埴輪（第16図3・4・8・9、第17図）

周溝南側b・c区の境付近から人物埴輪と共に、動物の脚部の破片と考えられるもの４点が出土している。これらの埴輪は主に周溝の狭い範囲から出土しており、いずれも破片での出土のため全体の形態は不明である。4点が図示され、動物埴輪の馬形埴輪１点の破片と考えられる。

S－21（第17図１）は比較的大きな脚部の破片で、残存長22.5cm、残存する最大幅10cm、厚さ1.1～1.8cmを測る。脚部の製作過程は半円形の筒状に造り、２つに合わせて製作したもので、接合面より剥がれている。外面調整は縦方向のナデ後細かい縦方向のハケメ、内面調整も細かい斜方向のハケメ、縦方向のナデが施されている。脚部は筒状を呈しているが、一方の幅が大きく外側にやや広がっていることから腹部あるいは胸部の付け根部分に近いものと考えられる。

S－64（第17図２）も同様のものであるが、さらに下腹部・胸部の一部と考えられる胴部と脚部の破片である。全体に遺存状態は悪く、調整は不明な部分も見られるが、外面及び内面の調整はＳ－21と同様である。胴部には楕円形のスカシ孔が穿孔されており、推定の大きさ約４cmと小さなものである。Ｓ－65・66（第16図３・４）も同様の小破片である。

S－85（第16図８）は周溝ｄ区２層からの出土した馬形埴輪の鐙部分が剥離した破片である。また動物埴輪か人物埴輪の装飾部分のものか不明であるが、棒状のもの1点（Ｓ－87）も出土している。

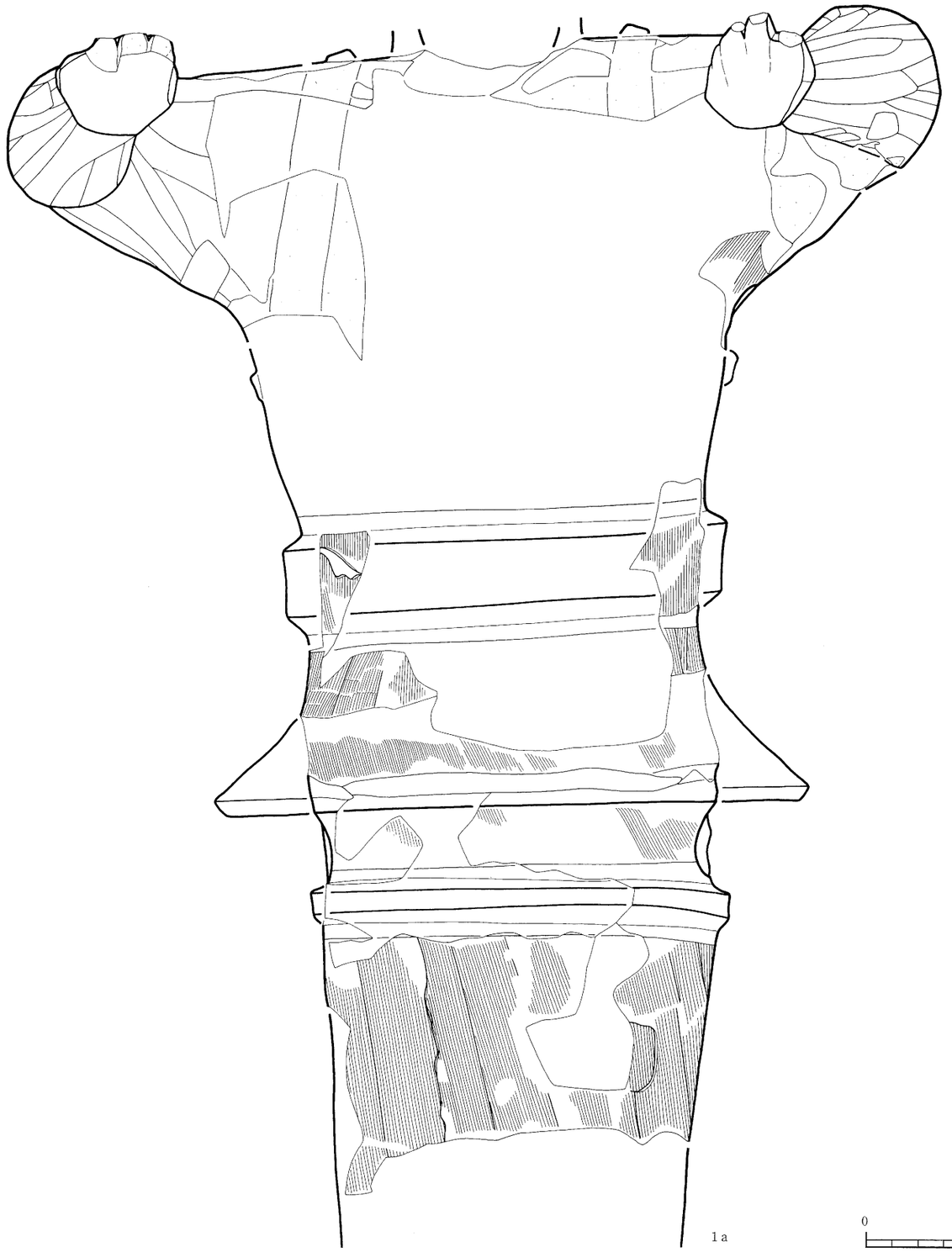
朝顔形埴輪（第18～21図）

円筒埴輪に比べ出土量は少なく、18点が図示されているが、朝顔形埴輪の円筒部と円筒埴輪は基本的に区別することは困難であることから実際には朝顔形埴輪の破片を円筒埴輪に分類しているものもあるかもしれない。

朝顔形埴輪は主に周溝のa区西端・b区・c区とd区の境界の３地点から出土しており、全体の形は不明であるが、ある程度その特徴が明らかなものを第18図と第19図に示した。S－５（第18図１）とS－68（第19図１）、S－28（第18図２）とS－16（第19図２）は出土地点・色調・焼成・胎土により、両者はそれぞれ同一個体の可能性が考えられる。

S－５とS－68は周溝a区西端で出土した同一個体と考えられる朝顔形埴輪で、口縁部から肩部にかけてのものである。口径44cm、屈曲部径23.7cm、頸部径12.7cmを測る。口縁部は大きく開く朝顔形で、頸部凸帯は断面形が鋭い三角形を呈している。外面調整は口縁部から頸部にかけて１次調整タテハケされ、内面調整は口縁部から屈曲部にかけて横・斜方向のハケメがほぼ全面に施され、屈曲部から頸部にかけて横・斜方向のハケメ後ナデ調整される。口縁部は内外面とも強くヨコナデされることによって生じた段が内外面に形成されている。肩部は外面調整が２次調整の横・斜方向のハケメ、内面調整が斜方向のナデである。円筒部は不明であるが、S－70・71・72などが考えられる。

S－28・16はｃ区とｄ区の境界付近より出土したもので、S－５・68と同様の特徴をもつ埴輪である。口縁部は大きく開く朝顔形で、口縁部のものと頸部から円筒部にかけてのものである。口径50.0cm、頸部径13.4cmを測る。口縁部は外面調整が１次調整タテハケのみで、内面調整は横方向のハケメ後に横方向のナデが施され、ナデ調整が主体を占める。S－５と同様に口縁端部内面はヨコナデされ，内面に強くヨコナデされることによって生じた段が形成される。S－16は頸部から円筒部にかけてのもので、頸部は１次調整タテハケ、頸部凸帯はS－68と同様断面形が三角形を呈している。肩部は２次調整の横・斜方向のハケメで、ヘラ状工具による「八」状の沈線が施されている。円筒部と肩部の境にある第３凸帯は、断面形が台形あるいは台形に近いM字形を呈しており、その直下に半円形のスカシ孔が穿孔されている。円筒部の外面調整は２次調整Ｂ種ヨコハケである。内面調整は頸部が横方向の



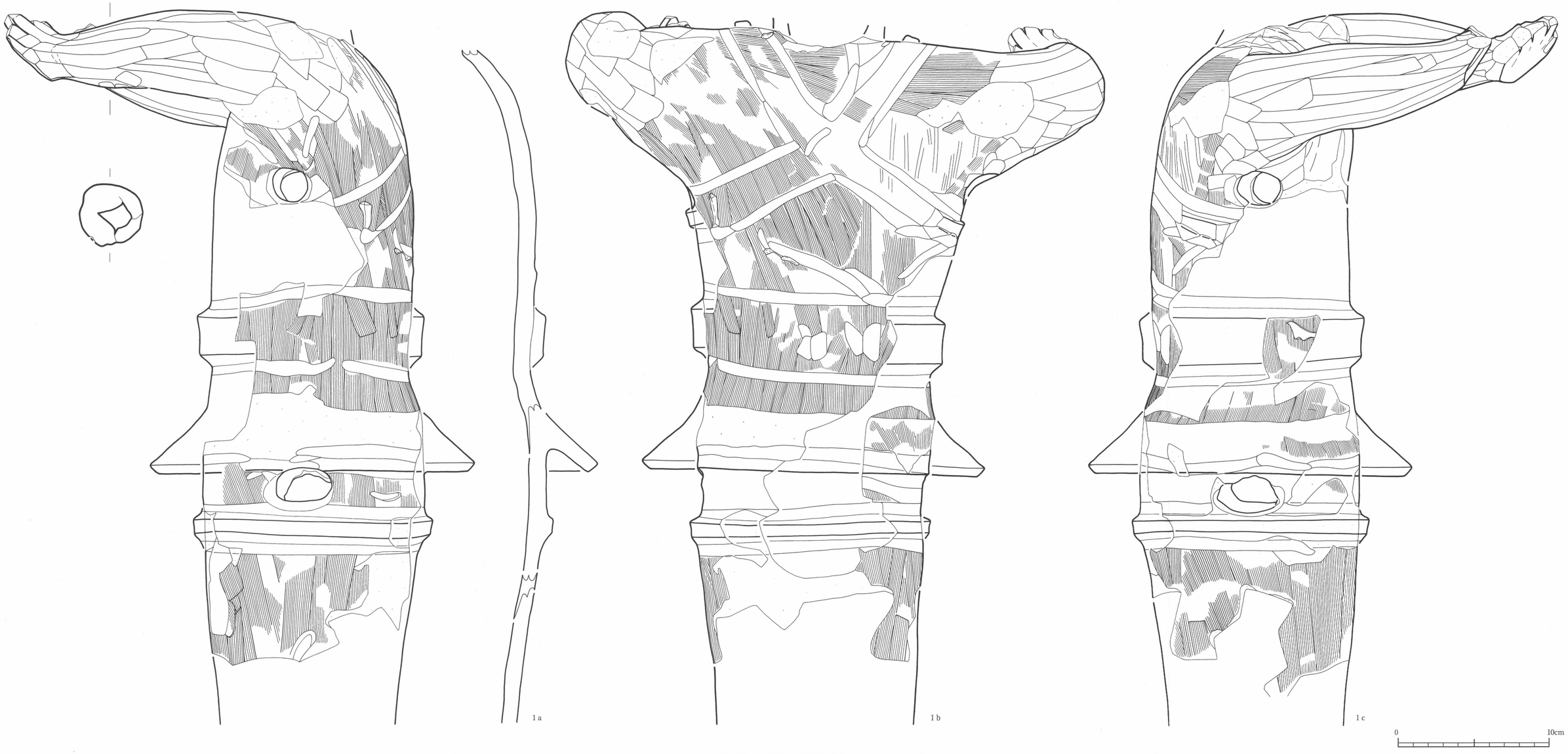
1 a

1 b

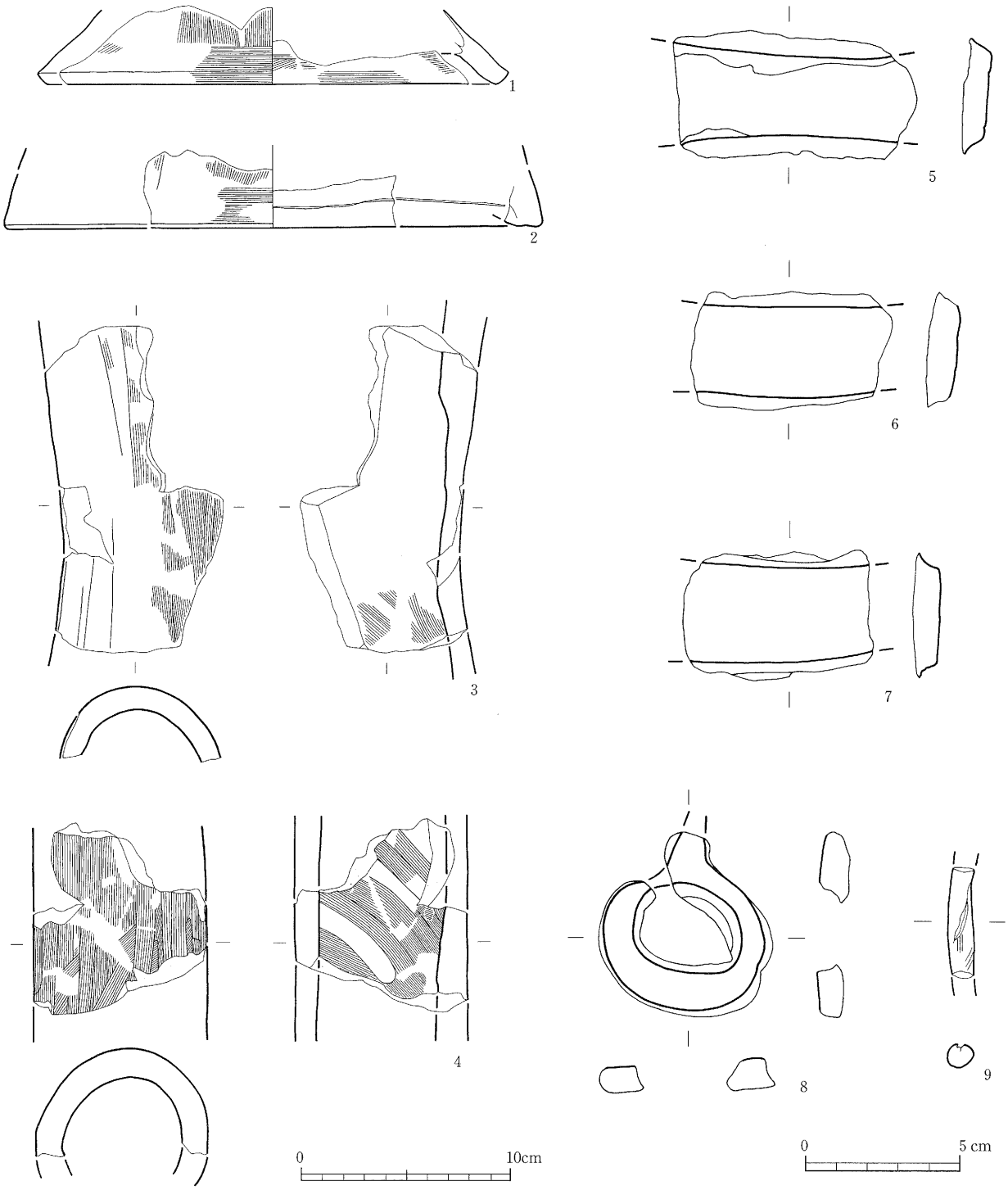
0　10cm

No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）			背面の凸帯（cm）			胴部凸帯（cm）			円筒部の凸帯（cm）			胴部スカシ孔（タテ×ヨコcm）		円筒部スカシ孔（タテ×ヨコcm）		外面色調	胎　土	焼成	調　　整	写真図版No.
				最大幅	底　径	器　高	上　幅	下　幅	高　さ	上　幅	下　幅	高　さ	上　幅	下　幅	高　さ	左脇下部	右脇下部	左　側	右　側	内面色調				
1	S－20	人物埴輪 巫女	13号墳周溝 c区3層、No.19	36.8	－	(45.8)	0.9	2.1	0.6	(2.5)	(4.0～4.8)	0.9	0.9	1.9	0.6	楕円形 (2.4)×3.0	楕円形 (2.5)×3.2	楕円形 2.9×4.7	楕円形 2.8×4.8	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：上半部縦方向ハケメ、腕～肩部ヘラケズリ、背中に 襷状凸帯、円筒部タテハケ 内：上半部斜方向ハケメ・ナデ、円筒部斜方向ハケメ	86～89

第14図　13号墳出土遺物（1）

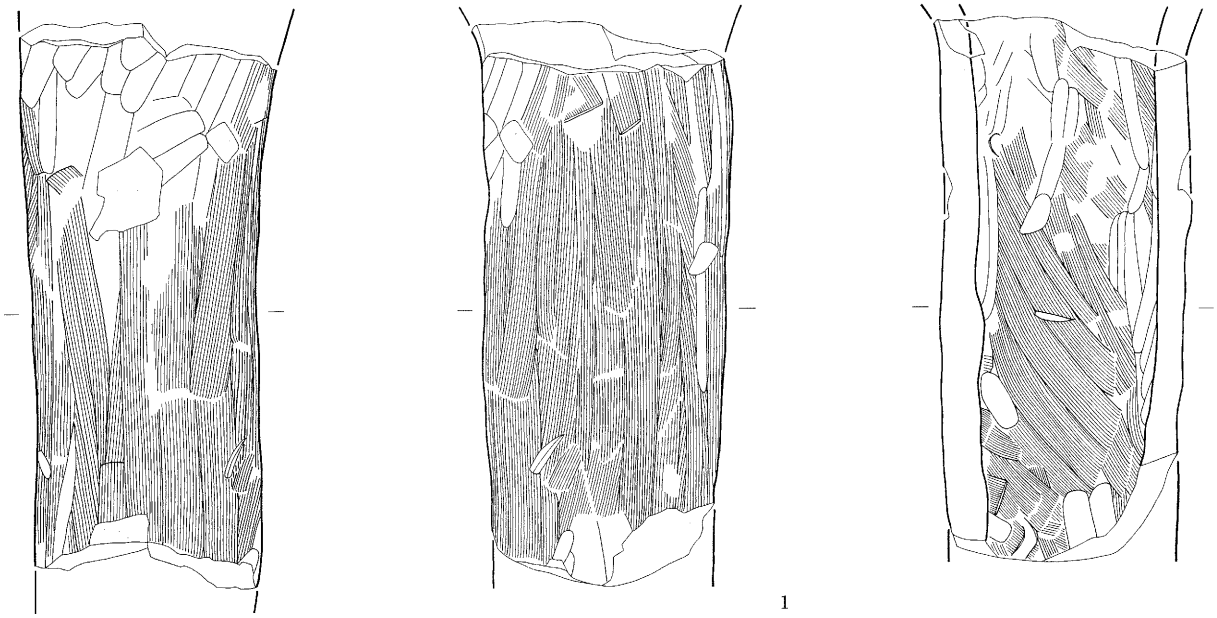


第15図　13号墳出土遺物（2）

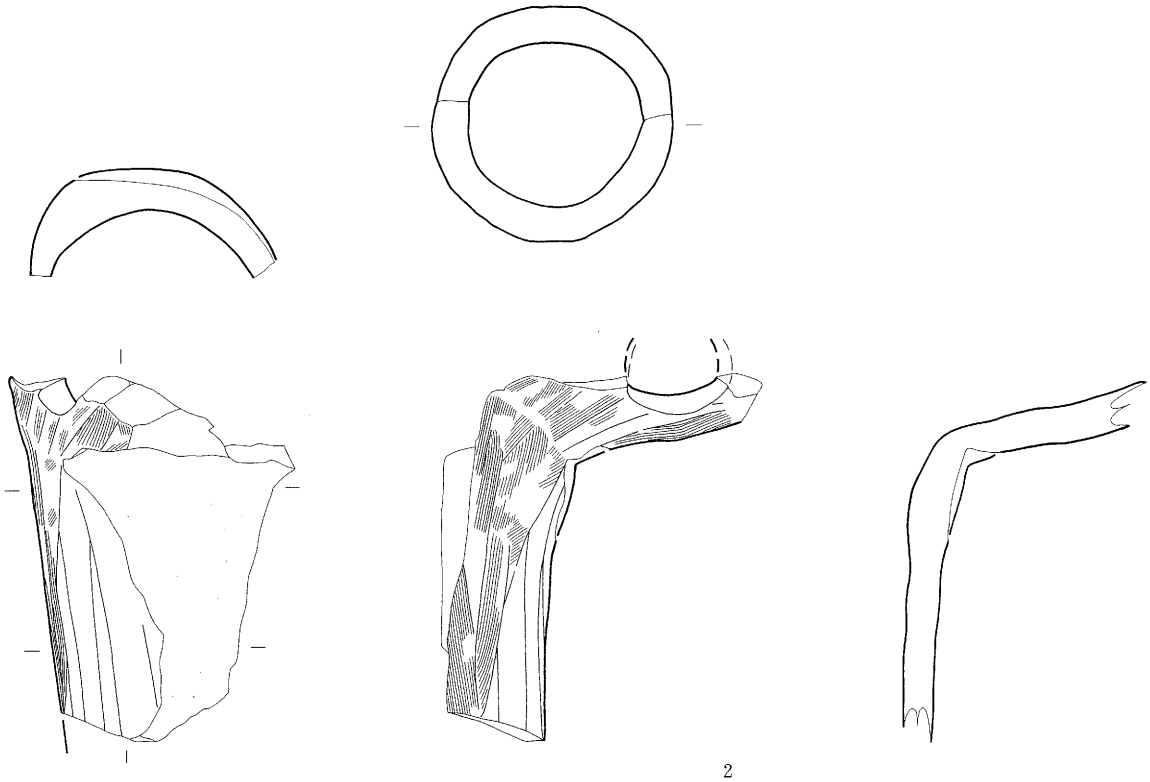


No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）		外面色調	胎　土	焼成	調　　整	写真
				最大長（器高）	最大幅（口径）	内面色調				図版No.
1	S－63	人物埴輪	13号墳周溝 c・d区1層	(4.0)	(26.0)	5YR7/6　橙 5YR6/8　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ、ヨコハケ 内：横方向ハケメ	90-1
2	S－62	人物埴輪	13号墳周溝	(3.5)	(22.6)	10YR7/4　にぶい黄橙 10YR7/4　にぶい黄橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ、ヨコハケ 内：横方向ナデ	90-2
3	S－65	動物埴輪	13号墳周溝 b区3層、No.16・17 c区2層	(15.8)	(8.0)	7.5YR8/6　浅黄橙 7.5YR7/6　橙	砂粒多量 白針あり	やや軟質	外：縦方向ハケメ・ナデ 内：縦方向ハケメ	90-7
4	S－66	動物埴輪	13号墳周溝 b区3層、No.17	(9.0)	8.4	5YR5/8　明赤褐 5YR5/8　明赤褐			外：縦・斜方向ハケメ 内：斜方向ハケメ・ナデ	90-9
5	S－82	人物埴輪 凸帯	13号墳周溝 c区2層、No.4	(4.0)	(7.6)	5YR6/6　橙	砂粒少量 白針あり	良	外：凸帯ヨコナデ	90-4
6	S－83	人物埴輪 凸帯	13号墳周溝 c区2層、No.4	(3.6)	(6.3)	7.5YR7/6　橙	砂粒少量 白針あり	やや軟質	外：凸帯ヨコナデ	90-5
7	S－84	人物埴輪 凸帯	13号墳周溝 c区2層、No.4	(4.0)	(6.0)	5YR6/6　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：凸帯ヨコナデ	90-3
8	S－85	動物埴輪	13号墳周溝 d区2層	(6.0)	(6.0)	7.5YR8/6浅黄橙	砂粒少量 白針あり	やや軟質		90-10
9	S－87	動物埴輪？	13号墳周溝 c区2層、No.23	(3.5)	0.8	7.5YR6/6橙	砂粒少量	良		90-11

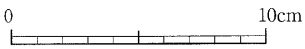
第16図　13号墳出土遺物（3）



1

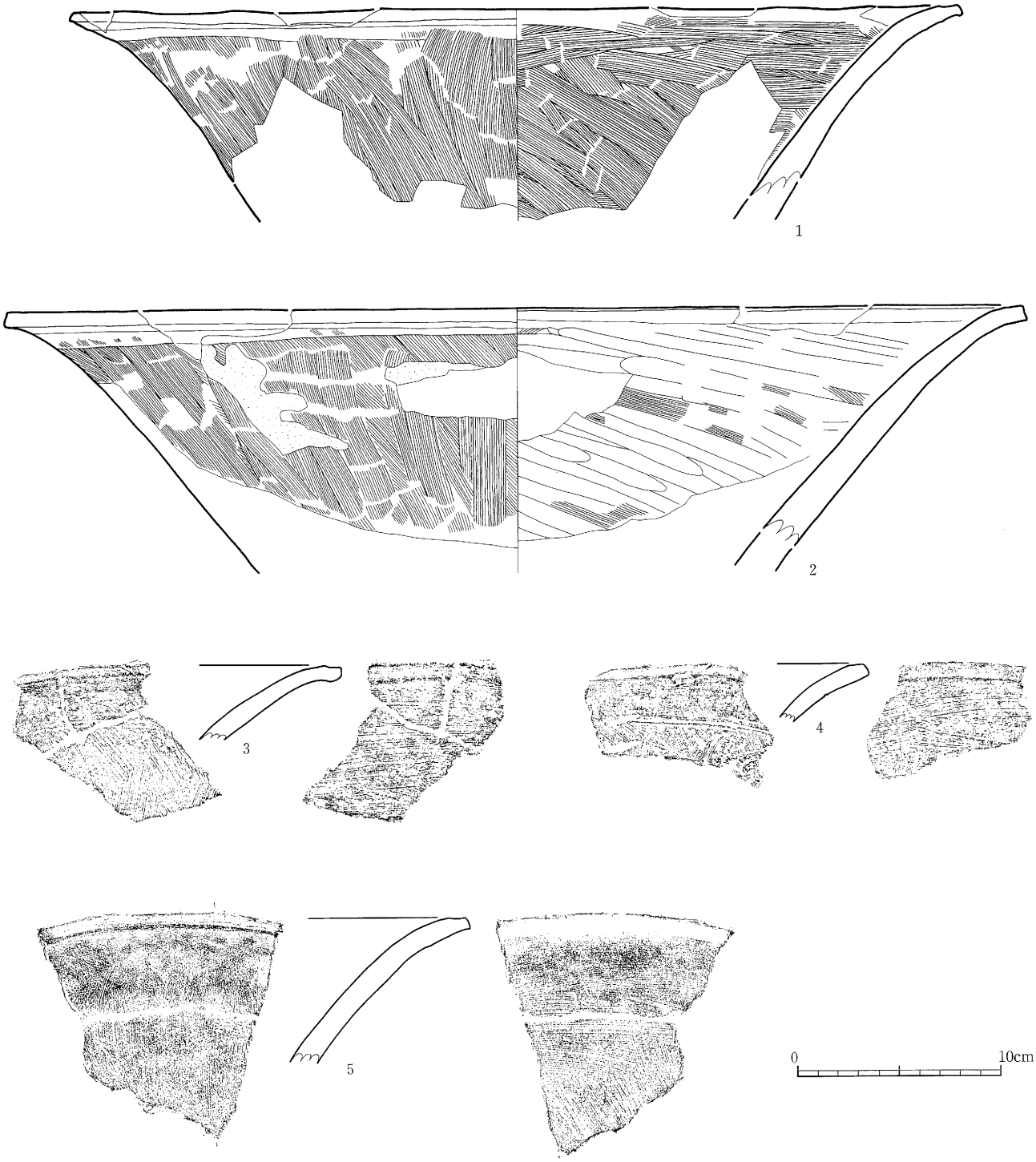


2



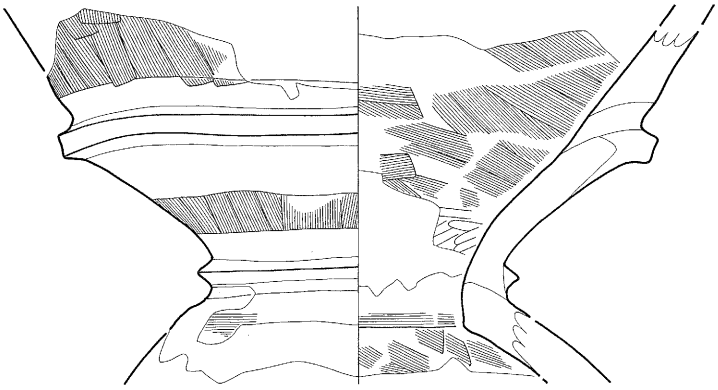
No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）		外面色調	胎　土	焼成	調　　整	写真図版No.
				最大長（器高）	最大幅（口径）	内面色調				
1	S－21	動物埴輪 馬の脚部	13号墳周溝 c区3層	(22.5)	10.0	7.5YR7/6　橙 5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：縦方向ハケメ→ナデ 内：縦方向ハケメ→斜方向ナデ	90-6
2	S－64	動物埴輪 馬の脚部	13号墳周溝	(14.5)	(12.7)	10YR8/4　浅黄橙 10YR8/4　浅黄橙	砂粒やや多い 白針あり	不良	外：縦方向ハケメ・ナデ 内：縦方向ハケメ→斜方向ナデ	90-8

第17図　13号墳出土遺物（4）

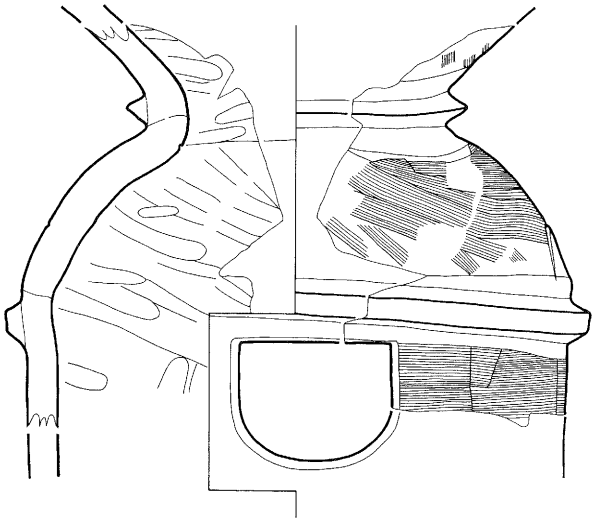


No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－5	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区2・3層No.6	(44.0)	－	(10.5)	－	－	－	－		5YR7/6　橙 5YR7/6　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：横、斜方向ハケメ、口縁部ヨコナデ	91-1
2	S－28	朝顔形埴輪	13号墳周溝 C区1・2層、D区1・2層、SK62埋土	(50.0)	－	(11.8)	－	－	－	－		5YR7/6　橙 7.5YR8/6　浅黄橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：横、斜方向ハケメ→ナデ、口縁部ヨコナデ、摩滅著しい	91-2
3	S－77	朝顔形埴輪	13号墳周溝 C区1・2層 SK62埋土	－	－	－	－	－	－	－		7.5YR7/4　にぶい橙 7.5YR7/4　にぶい橙	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：横方向ハケメ、口縁部ヨコナデ	92-2
4	S－79	朝顔形埴輪	13号墳周溝 SK62埋土	－	－	－	－	－	－	－		7.5YR7/4　にぶい橙 7.5YR7/4　にぶい橙	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：横・斜方向ハケメ、口縁部ヨコナデ	92-3
5	S－69	朝顔形埴輪	13号墳周溝 AK2層	－	－	－	－	－	－	－		7.5YR7/4　にぶい橙 5YR6/6　橙	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：斜・横方向ハケメ、口縁部ヨコナデ	92-1

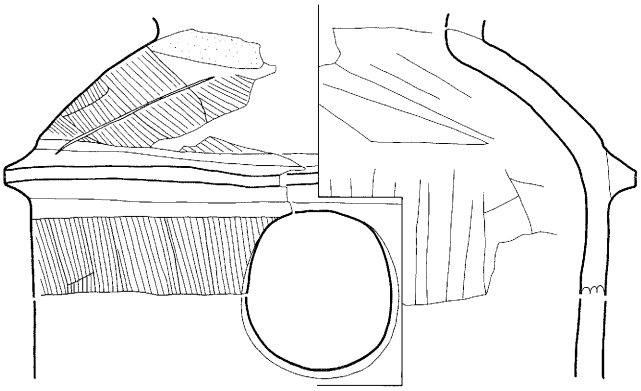
第18図　13号墳出土遺物（5）



1



2

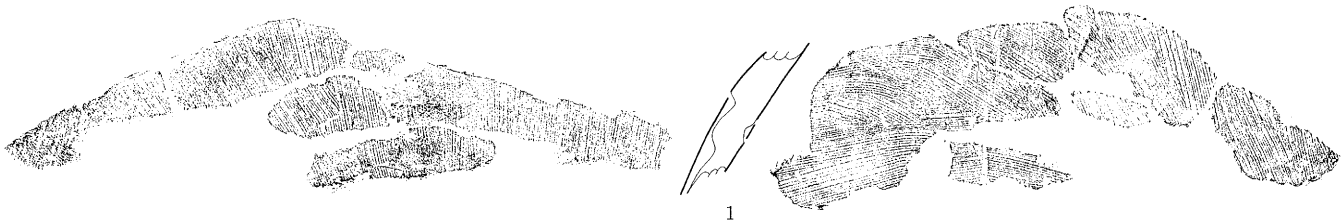


0　　10cm

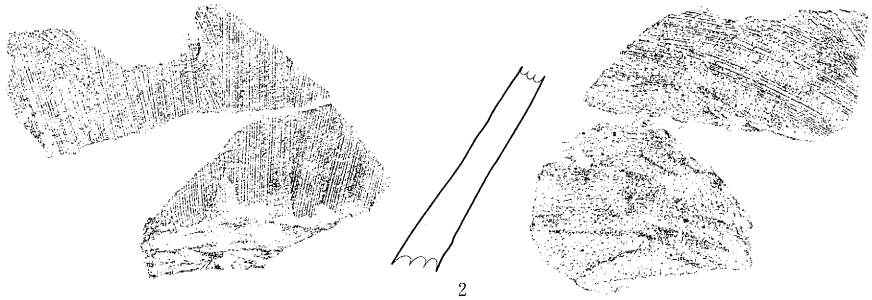
3

No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－68	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区2層、No.6 a区3層	－	－	(15.0)	－	屈曲部0.8	屈曲部1.6 頸部 1.4	屈曲部1.1 頸部 0.7		5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：屈曲部・頸部タテハケ、凸帯ヨコナデ、肩部ヨコハケ 内：横・斜方向ハケメ、ナデ	92-6・8
2	S－16	朝顔形埴輪	13号墳周溝 c・d区1層	－	－	(15.5)	－	② 0.8	頸部 1.4 ② 1.9	頸部 0.8 ② 0.8	半円形 (5.3) × (6.7)	7.5YR7/6 橙 7.5YR7/6 橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：肩部ヨコハケ、円筒部B種ヨコハケ、ヘラ状工具による八状の沈線 内：横・斜方向ナデ	92-9
3	S－18	朝顔形埴輪	13号墳周溝 b区3層、No.16	－	－	(11.0)	－	② 0.6	② 2.2	② 1.2	円形 (6.7) × (6.1)	7.5YR8/4 浅黄 7.5YR7/6 橙	砂粒多量 白針あり	やや軟質	外：肩部ヨコハケ、円筒部タテハケ、ヘラ状工具による3条の沈線 内：縦・斜方向ナデ	92-10

第19図　13号墳出土遺物（6）

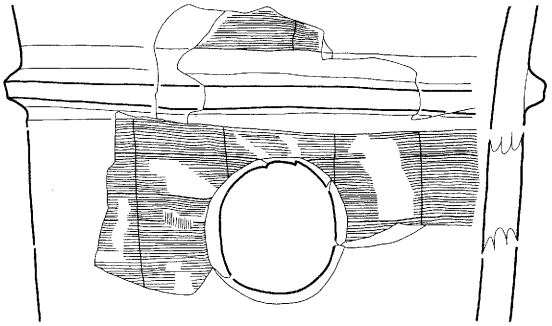


1

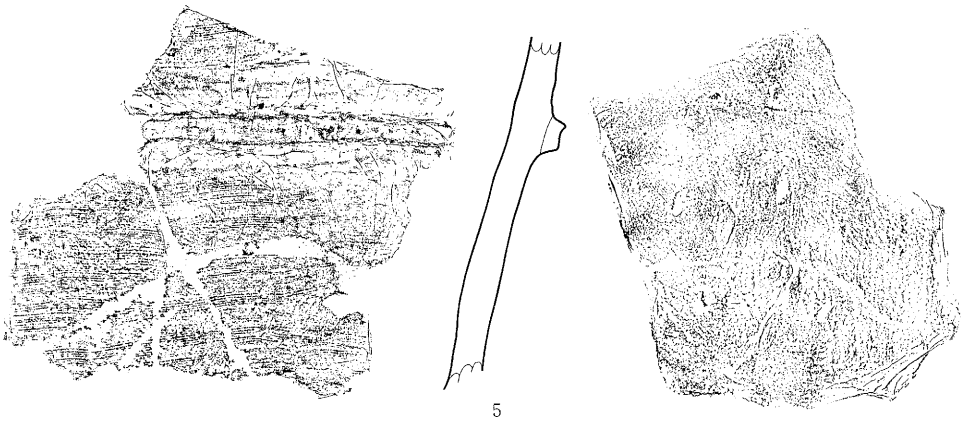


2

3



4

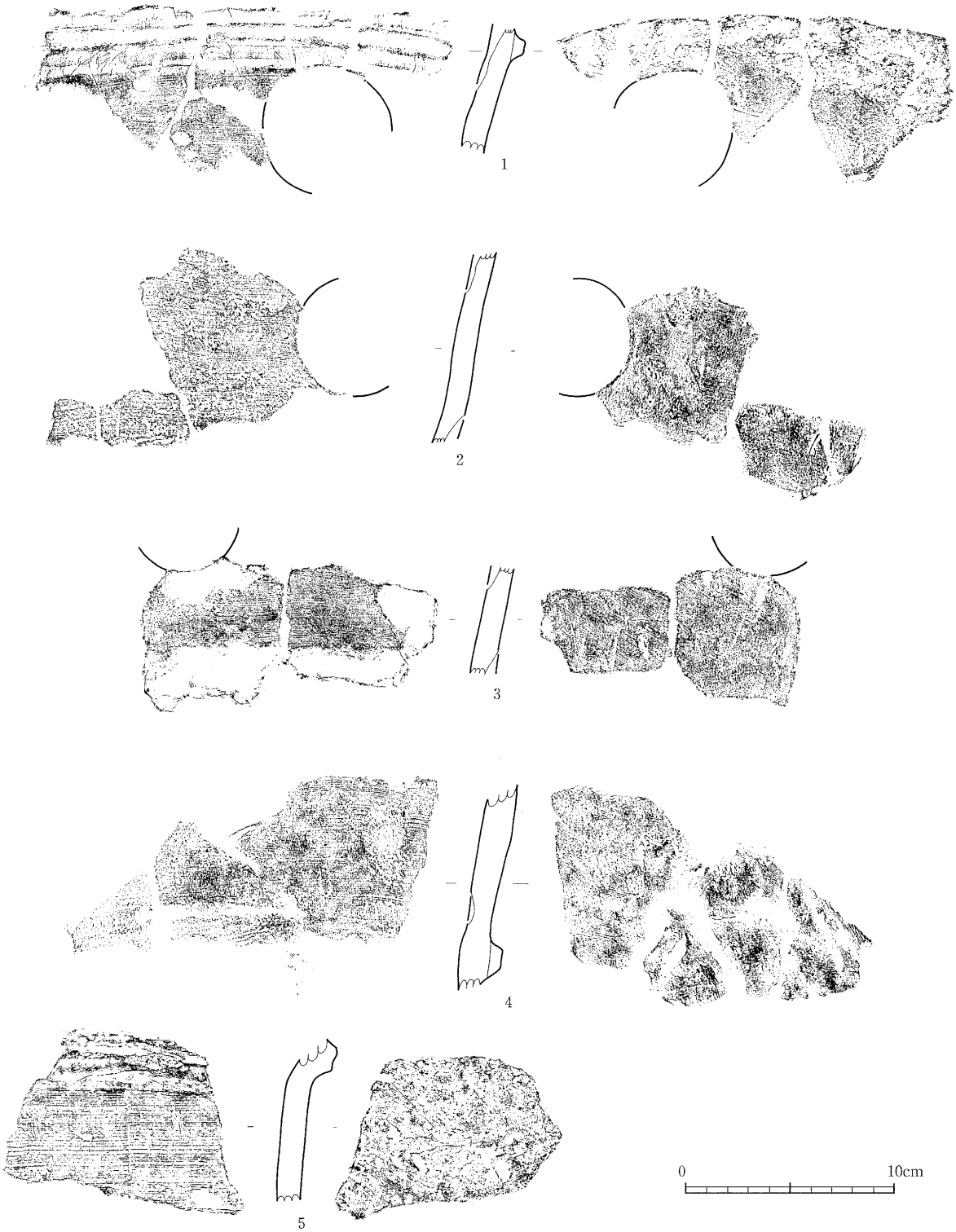


5

0　10cm

No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－74	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区3層	－	－	－	－	－	－	－	－	5YR7/6　橙 5YR6/6　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ 内：横・斜方向ハケメ	92-4
2	S－78	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区埋土、SK62埋土	－	－	－	－	－	－	－	－	7.5YR8/6　浅黄 7.5YR8/6　浅黄	砂粒多量 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ハケメ→斜方向ナデ	92-5
3	S－32	朝顔形埴輪	13号墳周溝 1層	－	－	－	－	頸部　0.6	－	頸部　1.1	－	5YR6/6　橙 5YR6/6　橙	砂粒多量 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：横・斜方向ハケメ	92-7
4	S－70	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区1層 a区2層、No.21	－	－	－	－	②　0.9	②　1.6	②　0.8	円形 (5.8)×5.7	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：B種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 内：横・斜方向ハケメ、縦方向ナデ	93-1
5	S－17	朝顔形埴輪	13号墳周溝 c区1層、SK62埋土	－	－	－	－	②　1.1	②　1.6	②　0.6	－	7.5YR8/6　浅黄 7.5YR8/6　浅黄	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：B種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ハケメ→横方向ナデ	93-2

第20図　13号墳出土遺物（7）



No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－72	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区2層、No.6・8	－	－	－	－	② 0.7	② 1.7	② 0.6	円形	5YR7/6 橙 5YR6/6 橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：B種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜め方向のハケメ	93-3
2	S－71	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区2層、No.12・13	－	－	－	－	－	－	－	円形	5YR6/6 橙 5YR6/8 橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：B種ヨコハケ 内：横方向ハケメ	93-5
3	S－73	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区2層、No.8	－	－	－	－	－	－	－	円形？	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	砂粒少量 白針あり	良	外：B種ヨコハケ 内：斜方向ハケメ	93-4
4	S－80	朝顔形埴輪	13号墳周溝 SK62埋土	－	－	－	－	① 1.0	① 1.9	① 0.6	－	7.5YR7/6 橙 7.5YR8/6 浅黄	砂粒少量 白針あり	良	外：B種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 内：横・斜方向ハケメ	93-7
5	S－37	朝顔形埴輪	13号墳周溝 a区2層、No.10	－	－	－	－	② 1.1	② 1.8	② 0.5	半円形？	5YR6/6 橙 7.5YR7/6 橙	砂粒少量 白針あり	良	外：B種ヨコハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ハケメ、ナデ	93-6

第21図　13号墳出土遺物（8）

ハケメ後横・斜方向のナデが施され、肩部が斜方向のナデ、円筒部が斜方向のハケメ後縦・斜方向のナデが施されている。

S－70（第20図４）は円筒部の破片で、第２段から第３段にかけてものと考えられる。凸帯は第２凸帯と思われ、断面形は台形で上・下・側面はヨコナデされる。スカシ孔は凸帯よりやや離れた位置に円形のものが穿孔されている。外面調整は１次調整タテハケ後に2次調整Ｂ種ヨコハケであり、内面調整は斜方向のハケメ後に縦方向のナデである。色調・焼成・胎土ともS－５・68と類似し、出土地点も近接していることから、同一個体の可能性があるものである。

この他拓本資料として口縁部資料が３点、円筒部資料が５点ある。S－66・77・78は口縁部の破片で、66・77はS－５と調整や色調・胎土も類似し、S－78はS－28と類似することからそれぞれ同一個体と考えられる。S－17・37・71・72・73・80は円筒部の破片で、外面調整は１次調整タテハケ後、２次調整Ｂ種ヨコハケである。S－71・72・73は凸帯の直下に円形のスカシ孔が穿孔されているもので、このスカシ孔は肩部と円筒部の境の第３段にあるものか第２段にあるものかは明らかではない。

S－17は色調・割れ口断面の色調・胎土などよりS－16と同一個体と考えられるもので、朝顔形埴輪の円筒部である。円筒部の第１段から第２段のものと考えられ、底部は欠損しているため不明である。凸帯は第１凸帯で上・下・側面がヨコナデされ、外面調整は２次調整Ｂ種ヨコハケである。内面調整はS－16同様斜方向のハケメ後に縦方向のナデで、最後に凸帯内面に横方向のナデが施されている。

S－37は円筒部の破片で、第３段凸帯の下にスカシ孔が穿孔されており、S－71・72・73の円形のスカシ孔に比べて直線的であり、半円形のスカシ孔の可能性が高い。外面調整は１次調整タテハケ後に２次調整Ｂ種ヨコハケであり、部分的に１次調整が残っている。内面調整は斜方向のハケメ調整後斜・横方向のナデである。

S－18は肩部から円筒部にかけての破片で、これまでの朝顔形埴輪の特徴とやや異にするものである。頸部凸帯が剥離しているため不明であり、肩部は２次調整の横・斜方向のハケメ調整が施されているが、S－16・68のハケメと比べ粗いハケメ調整である。ヘラ状工具による３条の沈線が斜方向に描かれたヘラ記号が施されている。円筒部は１次調整タテハケのみで、第３凸帯は高く、上・下・側面がヨコナデされ、断面が台形を呈する。凸帯直下に円形のスカシ孔が穿孔されている。内面調整は肩部が斜方向のナデ、円筒部が縦方向のナデである。

円筒埴輪（第22～30図）

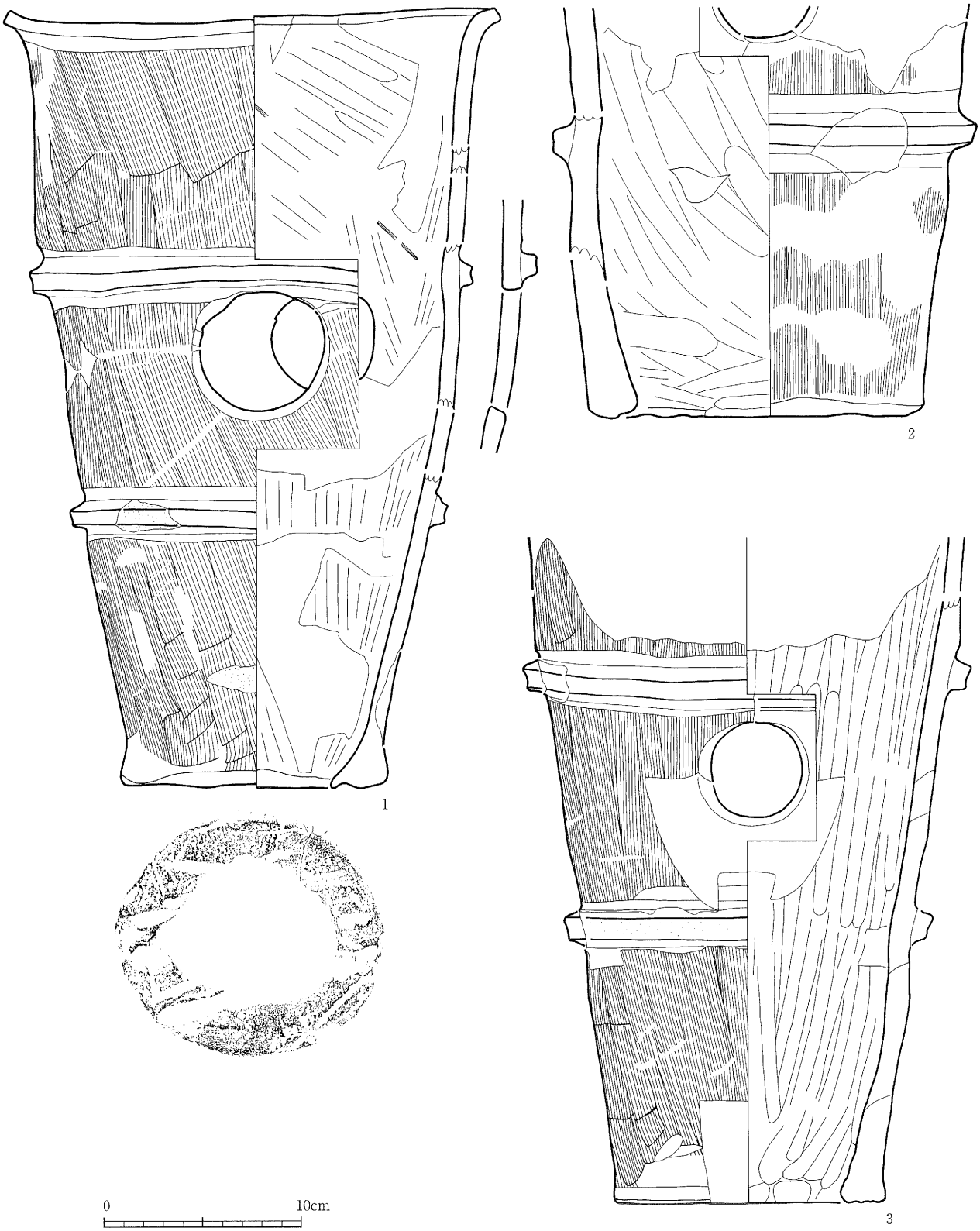
埴輪の中で最も多く出土しているもので、原遺跡第１～３次調査でも同様の埴輪が出土している。これまで大別７類（細別12類）に分類されており、ここでもその分類にしたがって述べることとする。

全体の形が判るものが少ないが、スカシ孔が半円形の３類のものとスカシ孔が円形で全体形・調整技法により４類・５類・７類のものとがある。なお第１～３次調査で出土した円筒埴輪とはやや異なる分類のものも見られることから５類を５a・５b類に細分している。

３類

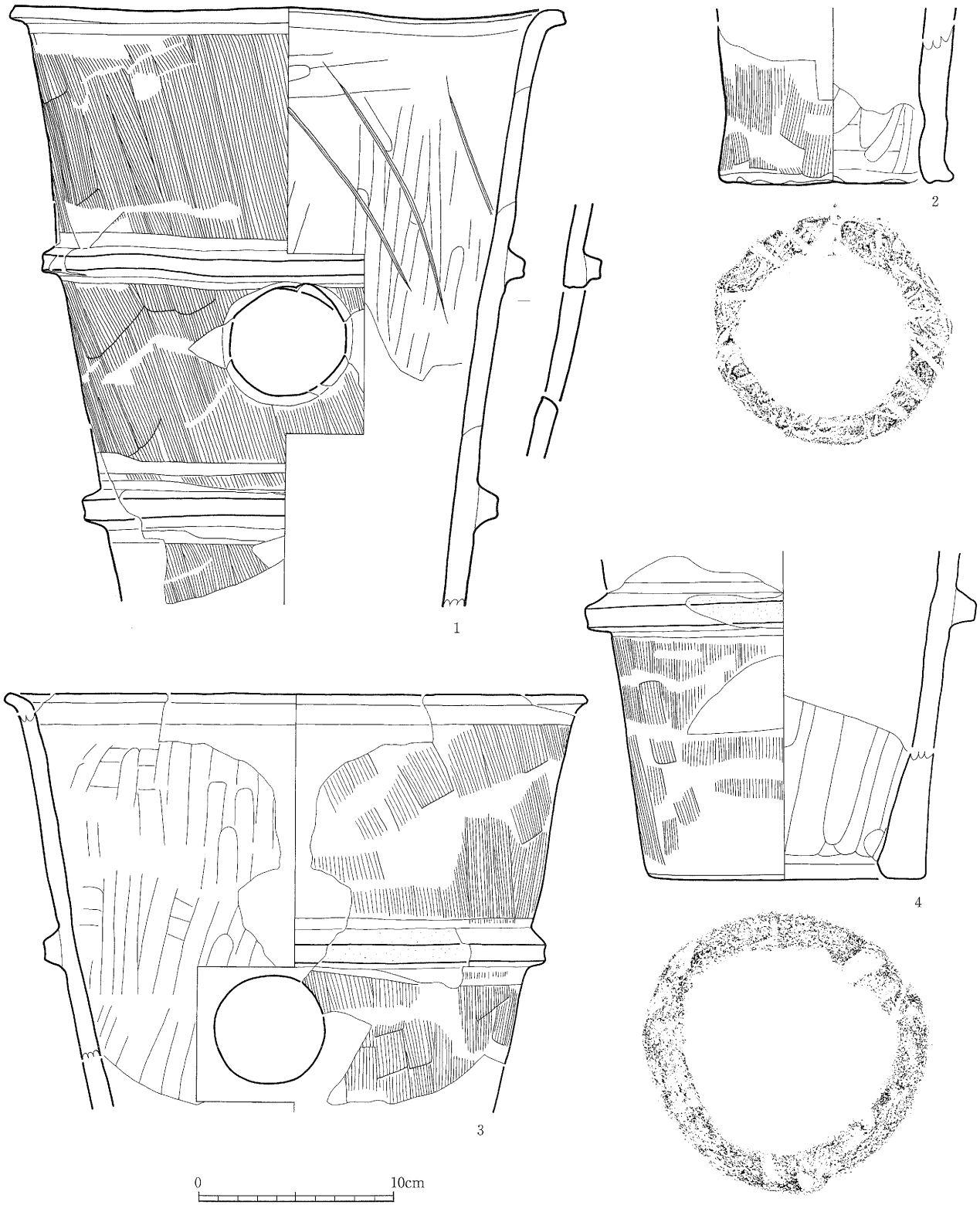
五反田古墳系列の円筒埴輪であり、全体の形は不明であるが４点が図示されている。３類は１次調整タテハケのみで２次調整のものはない。３類は３a・３b・３c類に分類されているが、今回出土したものはどちらかといえば３a類に近いものと考えられる。

S－７（第24図１）はb区で出土した口縁部から第２段上部までの円筒埴輪で、全体の形態は不明であるが直線的に外傾して口縁部が「く」の字状に短く外反し、口縁部内面には明瞭な段が形成される。口縁部は外側につまみ出すことにより鋭く段を形成しており、端部は水平もしくはやや窪んでいる。スカシ孔は第２凸帯直下に半円形のものが穿孔されている。整った半円形のものかは不明であるが、半円の上部が直線的に水平で、直角に下方に切りこまれていることから整った半円形のスカシ孔と考えられる。内面調整は斜方向及び縦方向のハケメが施されてい



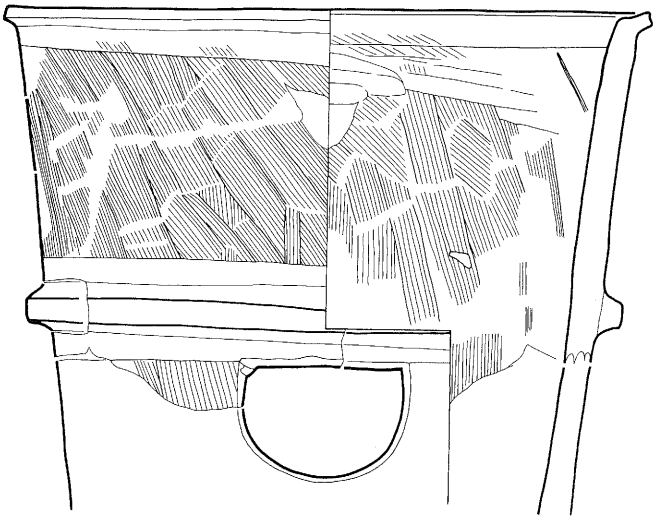
No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ（cm）	内面色調				
1	S－1	円筒埴輪	13号墳周溝 c・d区2層、 No.3・18	25.2	13.4	39.8	③ 14.0 ② 12.1 ① 13.7	② 0.9 ① 0.9	② 1.5 ① 1.9	② 0.7 ① 0.7	円形 6.1×7.0	7.5YR6/8　橙 7.5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、斜・縦方向ナデ、ヘラ状工具による3条の沈線	94-1
2	S－8	円筒埴輪	13号墳周溝 c区2層、No.2	－	17.1	(20.2)	① 14.2	① 1.0	① 2.6	① 1.1	円形？	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒多量 白針あり	やや軟質	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ナデ、輪積み痕部分的にあり	97-3
3	S－4	円筒埴輪	13号墳周溝 c・d区2層	－	(13.8)	(34.0)	② 12.8 ① 14.0	② 1.2	② 2.1	② 0.9	円形 (5.4) × (5.7)	5YR6/6　橙 5YR6/7　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ、基部ヨコナデ 内：縦方向ナデ、基部横方向ナデ	96-2

第22図　13号墳出土遺物（9）

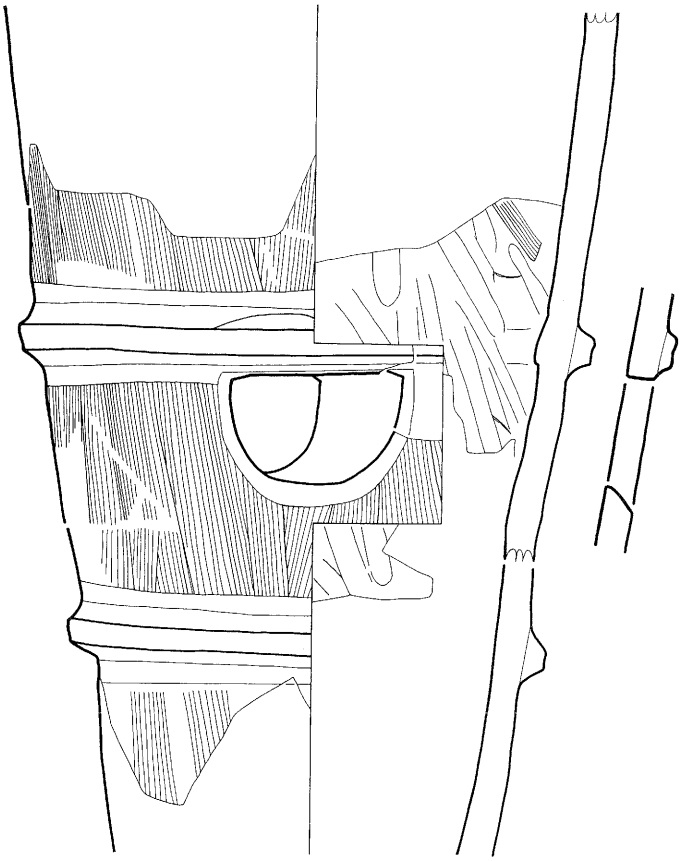


No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	ﾀﾃ×ﾖｺ(cm)	内面色調				
1	S－2	円筒埴輪	13号墳周溝 d区2層	28.2	－	(30.8)	③ 13.3 ② 12.7	②　0.9 ①　0.9	②　2.3 ①　1.9	②　0.9 ①　1.0	円形 6.4×（6.7）	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、横・斜方向ナデ、ヘラ状工具による５条の沈線	94-2
2	S－14	円筒埴輪	13号墳周溝 検出面	－	11.9	(8.3)	－	－	－	－	－	7.5YR6/6　橙 7.5YR6/6　橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ 内：横方向ナデ→縦方向ナデ	98-3
3	S－9	円筒埴輪	13号墳周溝 c区2層、 d区1層、SK62埋土	29.6	－	(21.0)	③ 13.3	②　1.0	②　2.2	②　0.9	円形 推定5.6	7.5YR6/6　橙 7.5YR6/6　橙	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、横方向斜ナデ→縦方向ナデ	97-4
4	S－19	円筒埴輪	13号墳周溝 c区3層、No.19	－	14.1	(16.7)	① 13.5	①　1.0	①　2.0	①　1.1	－	7.5YR6/6　橙 7.5YR6/6　橙	砂粒多量 白針あり	やや軟質	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ、基部ヨコナデ 内：縦方向ナデ、基部横方向ナデ	98-1

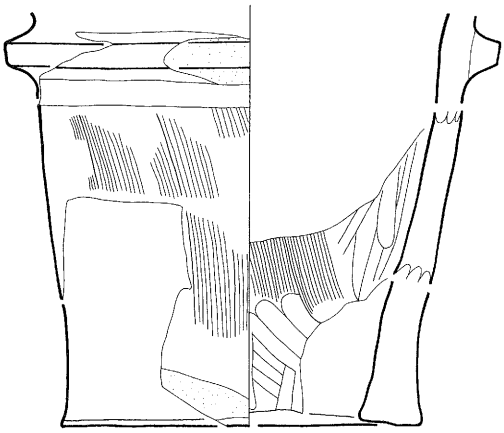
第23図　13号墳出土遺物（10）



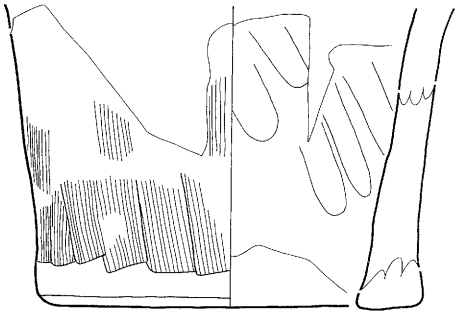
1



2



3



4

0　　10cm

No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－7	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層、c区2層	(25.4)	－	(15.9)	③ 12.0	② 0.9	② 1.8	② 0.9	半円形 (4.5) × (6.7)	5YR5/6　明赤褐 5YR5/8　明赤褐	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、縦方向ハケメ→ナデ、ヘラ状工具による2条の沈線	96-2
2	S－12	円筒埴輪	13号墳	－		(3.3)	② 11.5	② 1.1 ① 0.8	② 2.1 ① 2.2	② 0.7 ① 0.8	半円形 5.3×6.7	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ハケメ→斜方向ナデ、輪積み、凸帯内面に横方向ナデ	96-1
3	S－10	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層	－	14.2	(15.8)	① 14.8	① 0.9	① 2.0	① 1.0	－	5YR6/6　橙 5YR6/6　橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ハケメ、縦・斜方向ナデ	97-6
4	S－11	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層	－	15.0	(12.0)	－	－	－	－	－	5YR5/6　明赤褐 5YR5/8　明赤褐	砂粒多量 白針あり	不良	外：タテハケ 内：縦・斜方向ナデ	97-5

第24図　13号墳出土遺物（11）

るが部分的に成形段階の輪積みの痕跡が残る。口縁部はかるくヨコナデされているがハケメ調整の痕跡が残る。第３段内面にはヘラ状工具による２条の沈線が斜方向に施されている。

Ｓ－12（第24図２）はc区で出土した口縁部と底部を欠くがほぼ全体の形態の判るもので、直線的に外傾する２条凸帯の円筒埴輪である。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は口縁部から第２段まで斜方向のハケメが施されているが、Ｓ－７同様部分的に輪積み痕跡が残る。第１段～第２段の内面調整は、縦・斜方向の指によるナデが認められる。凸帯は上・下・側面ともヨコナデされ、やや幅の広く、断面形は台形かM字形に近いものである。スカシ孔は第２凸帯直下に位置する半円形のもので、整った半円形のスカシ孔が穿孔されている。

Ｓ－25（第25図２）も同様の特徴があるもので、口縁部から第２段上部の破片である。口縁部の形状はS－７と同様に強く短く外反し、内面に明瞭な段が形成され、口縁端部は水平である。外面調整はS－７・12とほぼ同様のもので、内面調整が斜方向のハケメ、凸帯付近の内面は横方向のナデがあるが、凸帯内面ナデかどうかは不明である。スカシ孔は一部のみ残存しているが、凸帯直下に穿孔された半円形のスカシ孔と考えられる。

４類

富沢窯跡系列の２条凸帯の円筒埴輪であり、外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。内面調整は縦・斜方向のナデが全体に行なわれている。スカシ孔は第２段の上部に位置し、第２凸帯直下に円形のスカシ孔が穿孔されている。全体の形態は内弯しながら外側に開き、口縁部が外反するもので、口縁部・底径・スカシ孔・凸帯・段の幅の相違によってこれまで４a・４b・４c類に細分されている。４a類は裏町古墳Ｂ群３類とされたタイプの円筒埴輪に類似するものである。

この類に分類されるものはS－１・４の２点が図示されている。Ｓ－１（第22図１）は４a類に類似するもので、周溝ｃ・ｄ区より出土している。今回出土した円筒埴輪の中では唯一完形のもので、口径25.2cm、器高39.8cm、底径13.4cmを測る。全体の形態は底部より内弯しながら外に開き、第２凸帯付近でほぼ直立ぎみ立ち上がるもので、口縁部は短く外反し、口縁部内面にかるい段が形成される。段の幅は第１段と第３段がほぼ同じ幅の13.7～14.0cmで、第２段がやや狭く12.1cmを測る。スカシ孔は第２凸帯直下に位置し、ほぼ凸帯に接するように大きさ6.1～7.0cmの整った円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯は上･側・下面とも強くヨコナデされ、断面形はM字形を呈し、上幅0.9cm、下幅1.5～1.9cm、高さ0.7cmと幅広で高いものである。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は第３段が斜方向のナデ後一部縦方向のナデ、第１段と第２段は縦方向のナデである。調整終了後に第３段内面にはヘラ状工具による３条の沈線が斜方向に施されている。

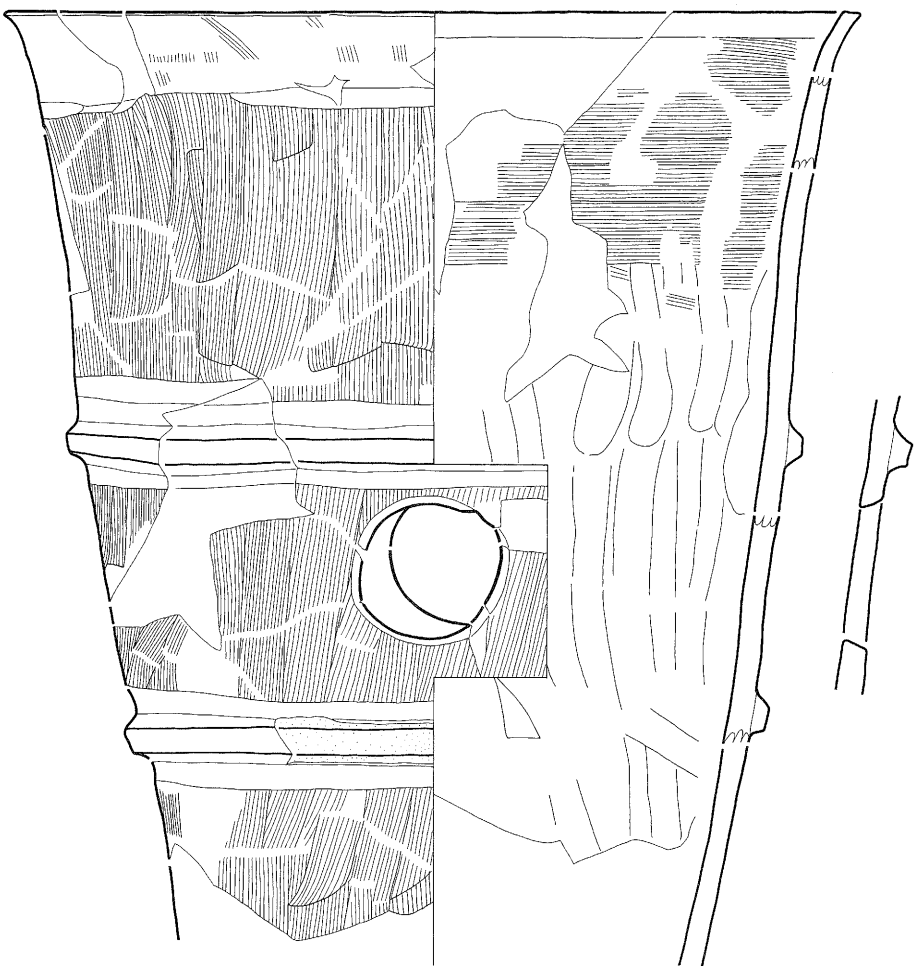
Ｓ－４（第22図３）も同様のものと考えられるが、底部から第３段中間までのもので口縁部が欠損している。調整はS－１と同様で、外面調整は１次調整タテハケ、内面調整は縦方向のナデである。スカシ孔は第２段上部に位置しており、第２凸帯よりやや離れて円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯は上･側・下面とも強くヨコナデされ、断面形はM字形を呈し、上幅1.2cm、下幅2.1cm、高さ0.9cmと幅広で高いものである。

５類

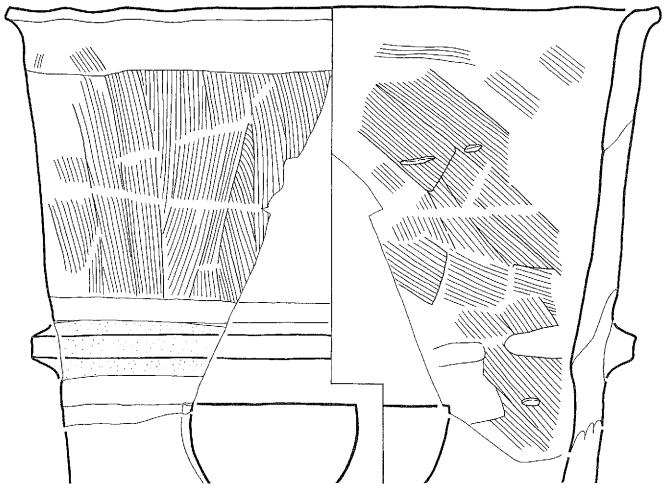
５a類

富沢窯跡系列の２条凸帯の円筒埴輪であり、外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。内面調整は縦方向・横方向のナデが全体的に行なわれている。スカシ孔は第２段の上部に位置し、第２凸帯直下に円形のスカシ孔が穿孔されている。これまでの第１～３次調査では５類として分類されているもので、基本的に4類と同じ特徴を示すが、全体の形態が直線的に外傾するものを５a類とした。この類と考えられるものはS－２・９の２点が図示されているが、完形のものはない。

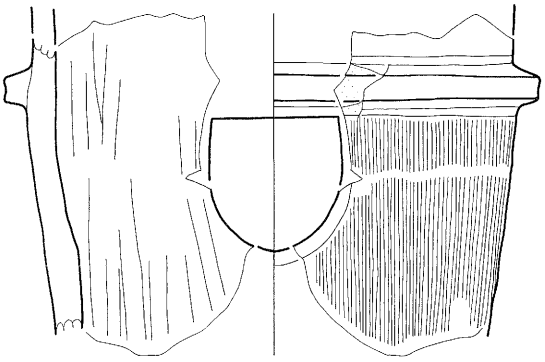
Ｓ－２（第23図１）は全体の形態は直線的に外傾することを除けば、口縁部の形状などS－１に非常に良く類似するものである。周溝ｄ区より出土しており、第１段上部から口縁部にかけてのもので口径28.2cm、残存高30.8cm



1



2



3

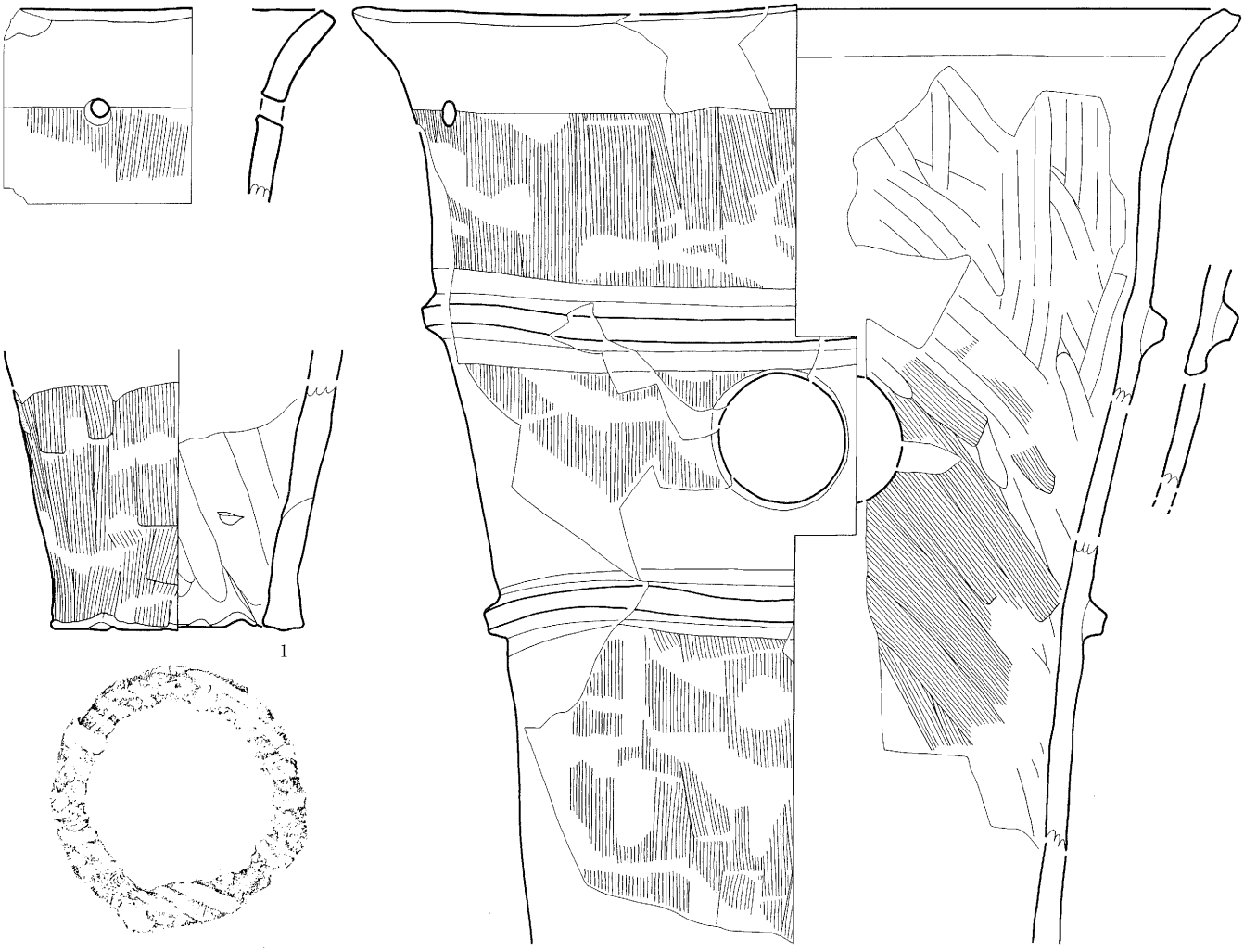
0　　10cm

No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－3	円筒埴輪	13号墳周溝 c区2層、SK62	33.8	－	(37.0)	③ 17.1 ② 11.8	② 0.7 ① 1.0	② 1.9 ① 1.9	② 0.7 ① 0.6	円形 6.0×6.2	5YR5/8　明赤褐 5YR5/8　明赤褐	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ、口縁部、凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、横方向ハケメ→縦方向ナデ	94-3
2	S－25	円筒埴輪	13号墳周溝 a区2層	25.8	－	(18.1)	③ 13.5	② 0.8	② 2.3	② 1.1	半円形	5YR6/8　橙 7.5YR7/6　橙	砂粒多量 白針あり	不良	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、斜方向のハケメ、凸帯内面に横方向ナデ	98-4
3	S－29	円筒埴輪	SK62埋土	－	－	(13.5)	－	② 0.9	② 1.9	② 1.0	半円形	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒多量 白針あり	やや軟質	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：縦方向ナデ	99-5

第25図　13号墳出土遺物（12）

No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－33	円筒埴輪	13号墳周溝 d区2層	(37.0)	－	(49.8)	④ 15.8 ③ 13.9 ② 12.5	③ 0.8 ② 0.8 ① 0.9	③ 1.8 ② 1.8 ① 2.0	③ 0.7 ② 0.6 ① 0.6	円形 6.5×(6.0)	7.5YR7/6　橙 5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	不良	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、横方向ハケメ→縦方向ナデ、凸帯内面に横方向ナデ	95-1
2	S－59	円筒埴輪	13号墳周溝 b区2層、No.14 b区2・3層	(19.9)	－	(9.2)	③ 7.9	② 0.8	② 2.1	② 0.9	－	7.5YR8/6　浅黄 7.5YR8/6　浅黄	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、斜方向ハケメ→縦方向ナデ	97-1
3	S－23	円筒埴輪	13号墳周溝 SK62埋土	(24.8)	－	(7.5)	－	－	－	－	－	5YR6/8　橙 5YR6/8　橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、縦・斜方向ナデ	98-5

第26図　13号墳出土遺物（13）



No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　　整	写真
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				図版No.
1	S－13	円筒埴輪	13号墳墳丘裾 c区、No.24	－	10.8	(10.6)	－	－	－	－	－	7.5YR7/6　橙 7.5YR7/6　橙	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ 内：斜方向ナデ	95-2
2	S－6	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層、No.14	(37.6)	－	(40.0)	③ 13.3 ② 13.0	② 0.7 ① 0.8	② 2.2 ① 1.9	② 0.9 ① 0.9	円形 (6.0) × (5.8)	5YR6/8　明赤褐 5YR6/8　明赤褐	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部・凸帯ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、縦・斜方向ナデ→斜方向ハケメ	98-2
3	S－22	円筒埴輪	13号墳周溝 c区2層	(25.1)	－	(9.5)	－	－	－	－	－	7.5YR6/6　橙 7.5YR6/6　橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、縦方向ナデ	98-6
4	S－31	円筒埴輪	13号墳周溝 SK62埋土	－	－	(13.0)	－	② 0.9	② 2.2	② 1.0	－	7.5YR7/6　橙 7.5YR7/6　橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：タテ方向ナデ、ヘラ状工具による3条の沈線	96-4

第27図　13号墳出土遺物（14）

を測り底部を欠損する。凸帯は２条であるが、第１凸帯はすべて剥離している。凸帯は上・側・下面が強くヨコナデされ、断面形はM字形を呈し、上幅0.9cm、下幅1.9～2.3cm、高さ0.9～1.0cmと幅広で高いものである。スカシ孔は第２凸帯直下に位置し、凸帯に接するように大きさ6.4～6.7cmの整った円形のスカシ孔が穿孔されている。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は口縁部ヨコナデ、第１段から第３段にかけて縦方向のナデである。調整終了後第３段内面にはヘラ状工具による５条の沈線が斜方向に施されている。

Ｓ－９（第23図３）は周溝c区・ｄ区・SK62から出土している。全体の形態はＳ－１・２と近似しており、直線的に外傾する形態のもので、口縁部から第２段中央部まで残存している。口縁部の形状も短く外反し、内面に段を形成するもので、口縁端部は丸く納められている。外面調整は１次調整ハケメのみで、内面調整は第３段が横方向のナデ後に縦方向のナデ、第２段から下は縦方向のナデである。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯に接して円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯は上・側・下面ともヨコナデされ、断面形はM字形呈し、上幅1.0cm、下幅2.2cm、高さ0.9cmと幅広で高いものである。

５ｂ類

富沢窯跡系列の２条凸帯の円筒埴輪であり、外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られないもので、全体の形態は４a類と類似する特徴を示すが、口径が30cmを超え、高さが45cm前後と大形の埴輪である。これまでこのように大きな埴輪は５類として分類されているが、ここでは５b類とすることとした。この類のものは２点が図示されている。

Ｓ－３（第25図１）は周溝ｃ区出土の２条凸帯の円筒埴輪である。全体の形態は欠損しているため不明であるが、口縁部から第１段中央部にかけて残存しており、口径33.8cm、残存高37cmを測る。形態は４a類と同様に内弯気味に開き、第３段中ごろから外反しながら立ち上がり、口縁部はさらに外反してそのまま鋭く平坦な口縁端部に至る。口縁部の調整は内外面ともヨコナデされ、４a類で明瞭に形成された内面の段は見られない。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整Ｂ種ヨコハケなどは見られない。内面調整は口縁部が横方向のハケメ後ヨコナデ、第３段上部は縦方向のナデ後横方向のハケメ、第１段から第３段にかけては縦・斜方向のナデで第１・２凸帯内面には調整の最終段階の凸帯内面ナデが横方向に認められるが、部分的で全周していない。

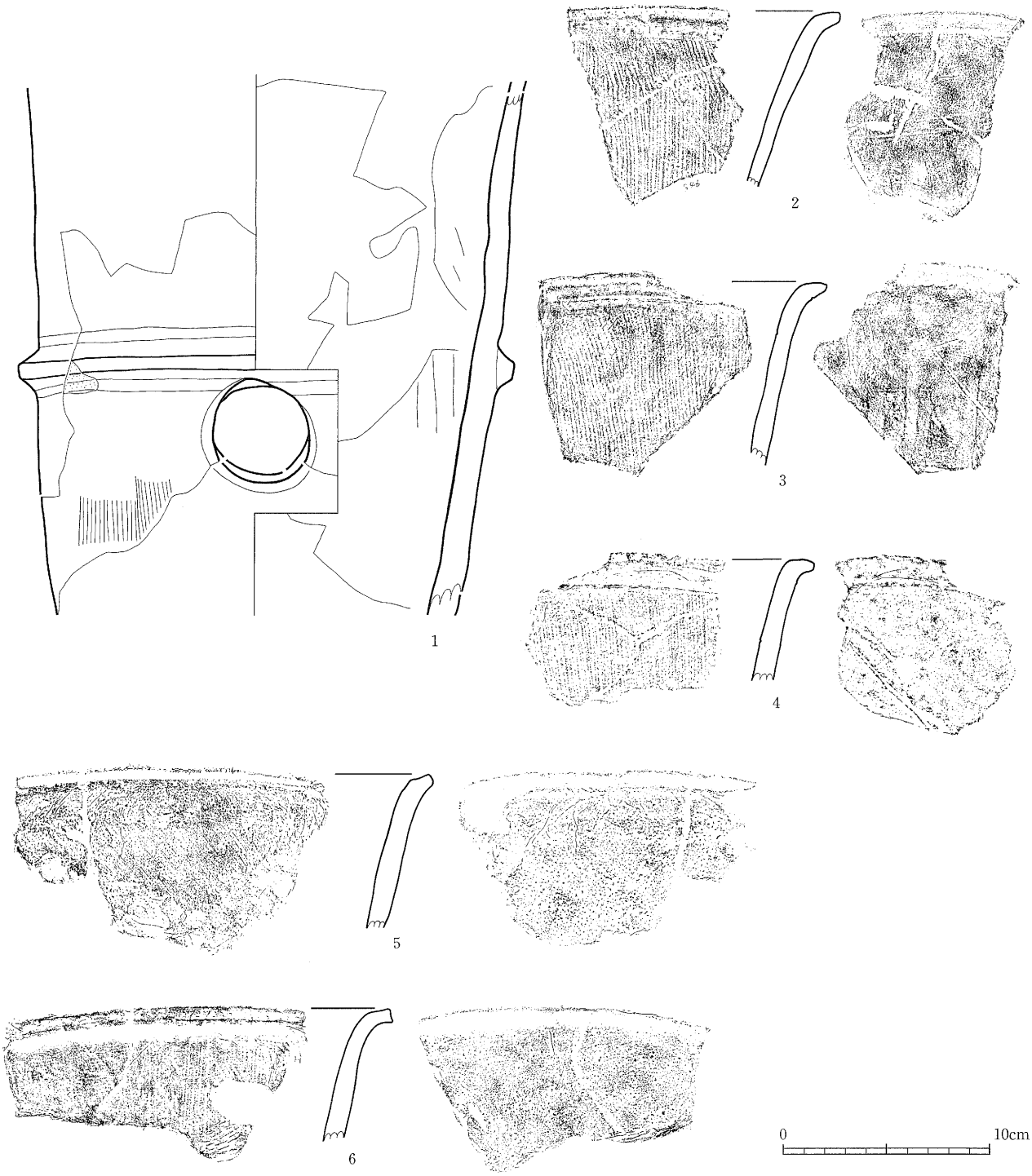
段の幅は最上段の第３段が17.1cmと広く、第２段は11.8cmと第３段よりも幅は狭い。第１段については欠損しているため不明である。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２段凸帯よりもやや離れて円形のスカシ孔が穿孔されている。スカシ孔の大きさは6.0～6.2cmと整った円形のものが穿孔されている。凸帯は上・側・下面ともヨコナデされ、第１・２段凸帯とも断面形は台形かわずかに側面が窪むM字形で、凸帯の上幅0.8～1.0cm、下幅1.9cm、高さはＳ－１とほぼ同じ0.6～0.7cmで鋭さは見られない。

Ｓ－６（第27図２）は周溝ｂ区出土の２条凸帯の円筒埴輪である。口径37.6cm、残存高40cmで、これまで出土した原遺跡の円筒埴輪のなかでは全体の高さに対して口径の広い埴輪である。Ｓ－３に比べ外反しながら立ち上がり、第３段凸帯付近で内弯し、口縁部は大きく外反しながら口縁部に至るものである。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は第１段～第３段まで斜方向のハケメ後縦方向のナデが施されている。

スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯にほぼ接した所に円形のスカシ孔が穿孔されている。スカシ孔の大きさは６cm前後の整った円形のスカシ孔と考えられる。凸帯は上・側・下面ともヨコナデされ、断面形はM字形で上幅0.7～0.8cm、下幅1.9～2.2cm、高さ0.9cmである。段の幅は第１段が13.5cm以上、第２段が13.0cm、第３段が13.3cmと第１段よりも第２・３段の幅が短い。スカシ孔とほぼ90°交差する第３段上部の位置に直径１cmの円形の小孔１個が焼成以前に穿孔されている。

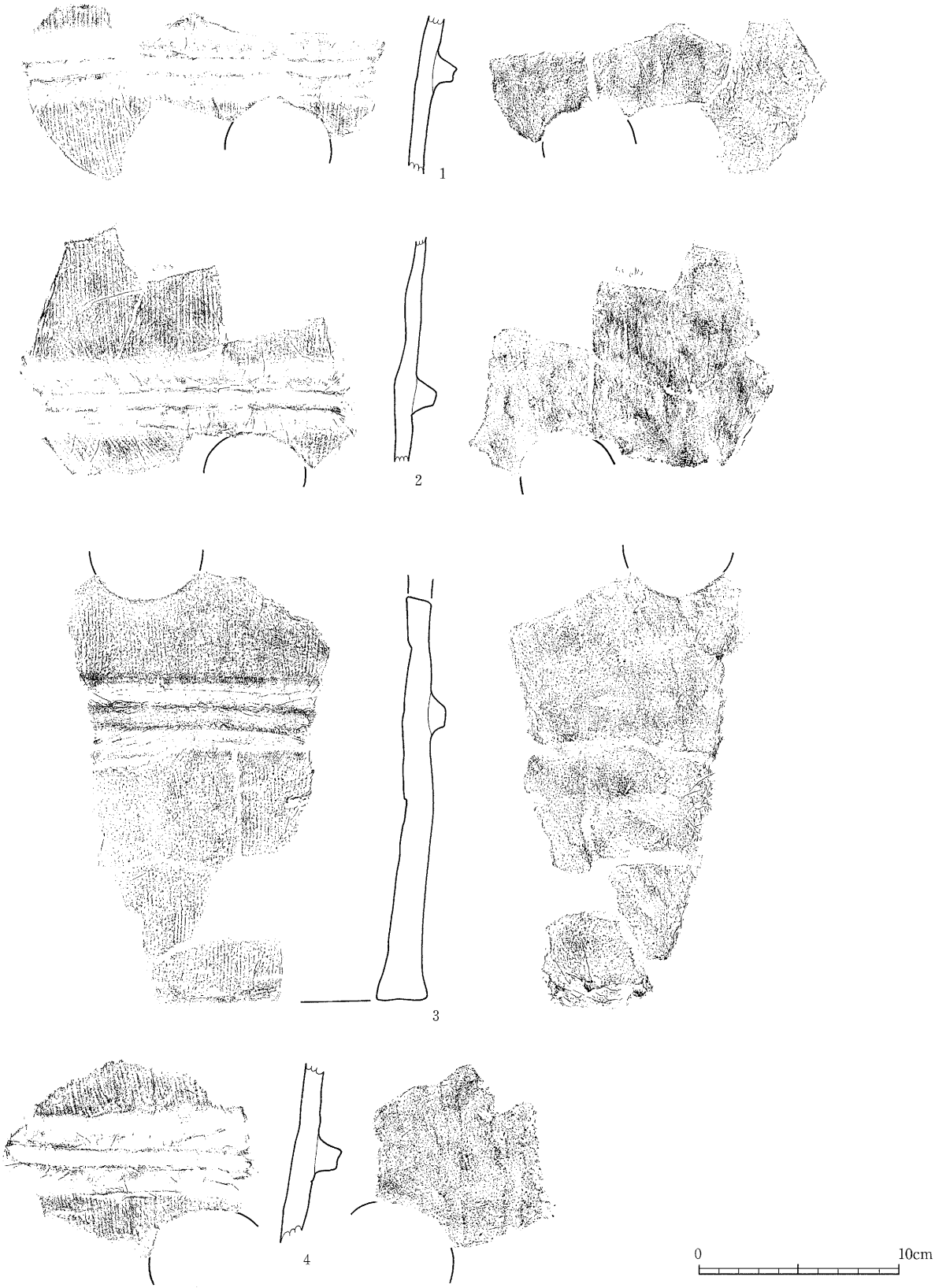
７類

これまでの２条凸帯の円筒埴輪とは異なり、３条凸帯の円筒埴輪である。第１次調査で埴輪棺墓に使用された円



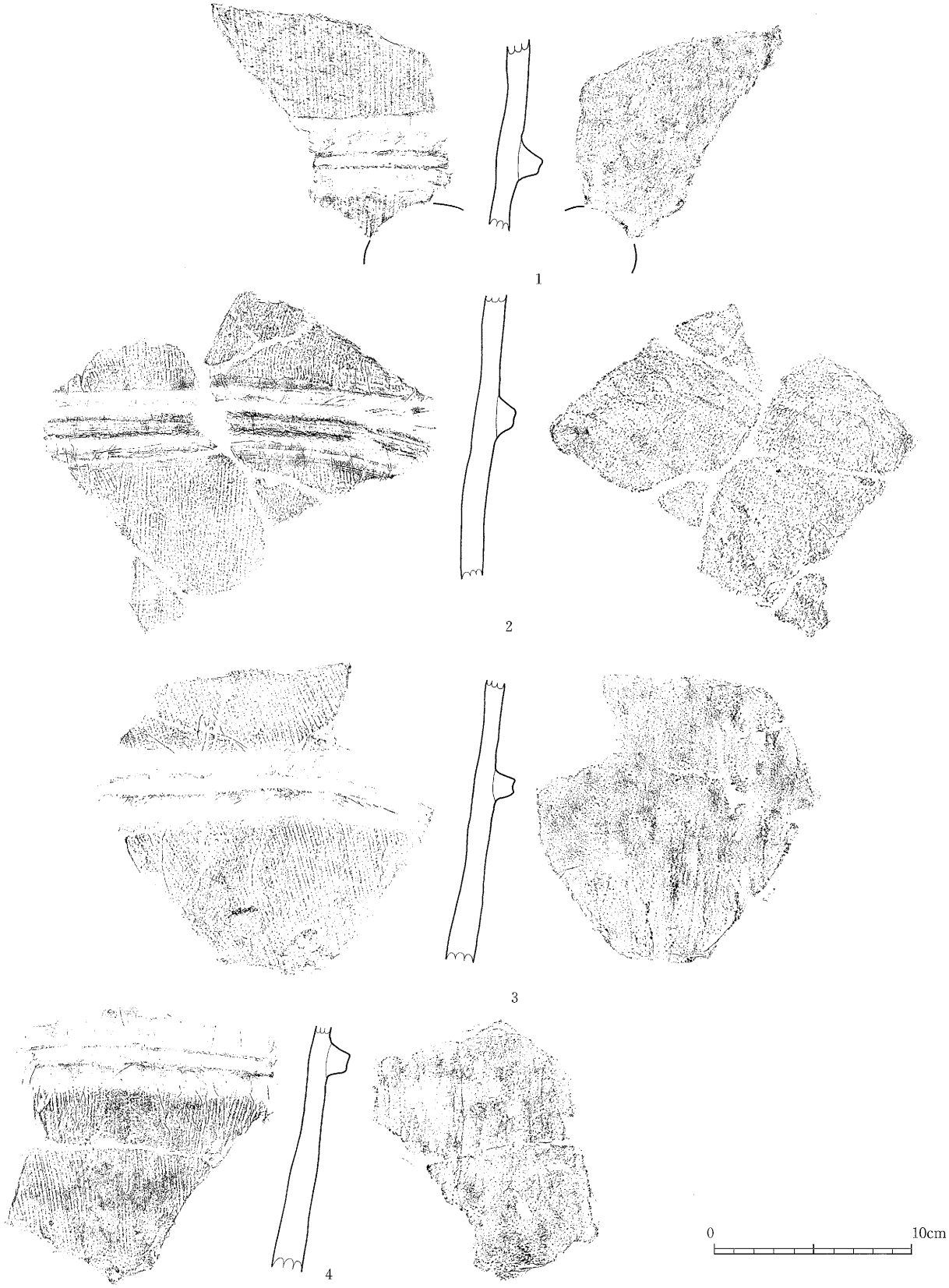
No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	ﾀﾃ×ﾖｺ(cm)	内面色調				
1	S－15	円筒埴輪	13号墳周溝 b区2・3層、No.16	－	－	(26.2)	－	② 0.8	② 2.1	② 0.9	円形 (5.5) ×5.6	7.5YR8/8 黄橙 7.5YR8/8 黄橙	砂粒やや多い 白針あり	やや軟質	外：タテハケ、凸帯ヨコハケ、摩滅著しい 内：縦方向ナデ	97-2
2	S－46	円筒埴輪	13号墳周溝 b区2層	－	－	－	－	－	－	－	－	5YR7/6 橙 5YR7/6 橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、斜方向ナデ	99-4
3	S－48	円筒埴輪	13号墳周溝 c区2層	－	－	－	－	－	－	－	－	5YR7/8 橙 5YR7/8 橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、ヘラ状工具による1条の沈線	99-2
4	S－49	円筒埴輪	13号墳周溝 SK62埋土	－	－	－	－	－	－	－	－	5YR6/6 橙 5YR6/6 橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、ヘラ状工具による1条の沈線	99-3
5	S－60	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層	－	－	－	－	－	－	－	－	7.5YR8/4 浅黄 7.5YR8/4 浅黄	砂粒やや多い 白針あり	不良	外：斜めハケ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、摩耗著しい	99-7
6	S－44	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層、No.17	－	－	－	－	－	－	－	－	7.5YR6/8 橙 7.5YR6/8 橙	砂粒多量 白針あり	良	外：タテハケ、口縁部ヨコナデ 内：口縁部ヨコナデ、ナデ摩耗著しい	99-1

第28図　13号墳出土遺物（15）



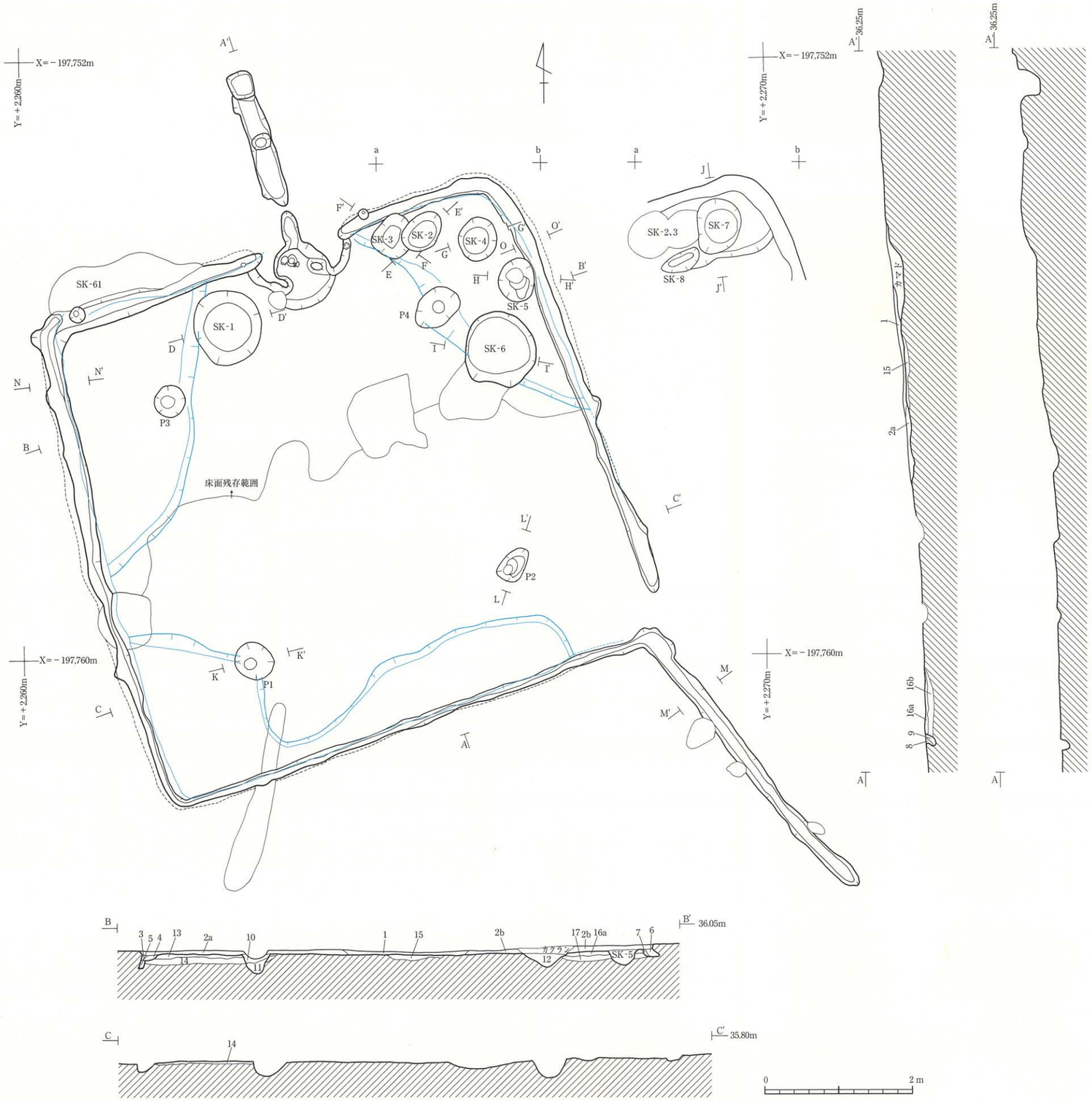
No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ(cm)	内面色調				
1	S－39	円筒埴輪	13号墳周溝 b区2層	－	－	－	－	② 0.7	② 2.1	② 1.1	円形	5YR7/6　橙 5YR7/6　橙	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ナデ、ヘラ状工具による１条の沈線	99-6
2	S－40	円筒埴輪	13号墳周溝 b区2層	－	－	－	－	② 0.7	② 1.9	② 1.1	円形	5YR7/6　橙 5YR7/6　橙	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ナデ	99-7
3	S－36	円筒埴輪	13号墳周溝 a区2層、No.6・8・13	－	－	－	① 13.3	① 0.7	① 2.1	① 0.9	円形？	7.5YR6/6　橙 7.5YR6/6　橙	砂粒多量 白針あり	不良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ、底面棒状圧痕 内：縦方向ナデ、輪積痕あり	99-11
4	S－45	円筒埴輪	13号墳周溝 a区1層	－	－	－	－	② 1.0	② 2.3	② 1.2	円形	5YR6/6　橙 5YR6/6　橙	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：縦方向のナデ	99-8

第29図　13号墳出土遺物（16）

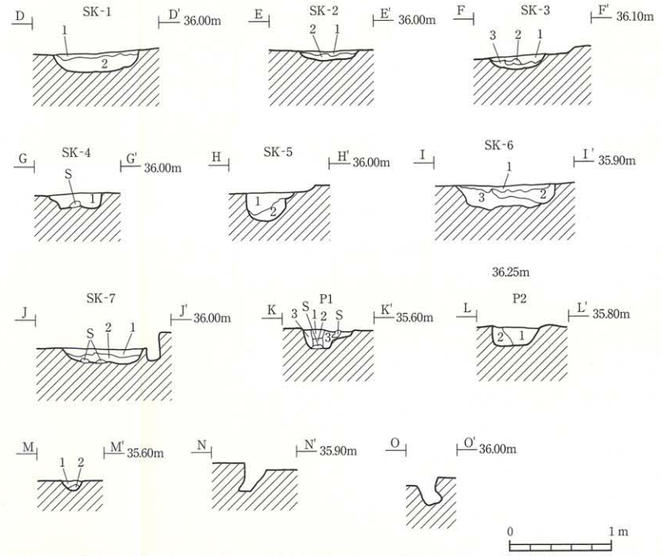


No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）				凸　帯（cm）			スカシ孔	外面色調	胎土	焼成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	段幅	上幅	下幅	高さ	タテ×ヨコ（cm）	内面色調				
1	S－47	円筒埴輪	13号墳墳丘裾 b区1層	－	－	－	－	② 0.8	② 2.2	② 1.1	円形	5YR5/8明赤褐 5YR5/8明赤褐	砂粒やや多い 白針あり	良好	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：縦方向ナデ	99-9
2	S－34	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層	－	－	－	－	① 1.0	① 2.1	① 0.9	－	5YR5/8明赤褐 5YR5/8明赤褐	砂粒少量 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ナデ	99-13
3	S－35	円筒埴輪	13号墳周溝 b区3層	－	－	－	－	① 0.7	① 1.6	① 1.0	－	5YR5/8明赤褐 5YR5/8明赤褐	砂粒やや多い 白針あり	良	外：タテハケ、凸帯ヨコナデ 内：斜方向ナデ	99-12
4	S－38	円筒埴輪	13号墳周溝 b区1層	－	－	－	－	① 0.9	① 1.3	① 1.0	－	5YR6/6橙 5YR6/6橙	砂粒少量 白針あり	良好	外：タテハケ、凸ヨコナデ 内：縦方向ナデ	99-10

第30図　13号墳出土遺物（17）



第31図　SI－11住居跡実測図



遺構名①	遺構名②	層位	土　色	土　質	そ　の　他
SI－11	住居堆積土	1	7.5YR4/3　褐色	シルト	10YR4/5・6/6・2/2シルトブロック混じる。
	住居堆積土	2a	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト	硬くしまっている。10YR4/3・2/2シルトブロック状に混じる。
	住居堆積土	2b	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色。
	西側周溝	3	10YR6/6　明黄褐色	シルト	10YR5/3にぶい黄褐色シルト小ブロック少量。マンガン粒混じる。
	西側周溝	4	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色シルト小ブロック少量。炭化物粒少量。
	西側周溝	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	２層よりやや粘土質。10YR6/6小ブロック少量。
	東側周溝	6	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	砂粒を含む。焼土粒少量。
	東側周溝	7	10YR4/4　褐色	シルト	10YR5/6黄褐色シルト小ブロック少量。
	南側周溝	8	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR5/6にぶい黄褐色シルト小ブロック少量。
	南側周溝	9	10YR5/6　黄褐色	粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト質粘土小ブロック少量。
	P3	10	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色シルトブロック多量。
	P3	11	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色シルト小ブロック少量。
	P4	12	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR2/2黒褐色・10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック混じる。
	掘り方	13	10YR6/6　明黄褐色	シルト	掘り方。10YR4/3にぶい黄褐色シルト小ブロック少量。硬くしまっている。
	掘り方	14	10YR5/4 にぶい黄褐色	粘土	掘り方。10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック多量。10YR8/4浅黄橙色粘土小ブロック多量。
	掘り方	15	10YR6/8　明黄褐色	砂質シルト	掘り方。10YR4/3シルトブロック、炭化物粒混じる。
	掘り方	16a	10YR5/6　黄褐色	シルト	掘り方。10YR3/3暗褐色シルトブロック混じる。硬くしまっている。
	掘り方	16b	10YR5/6　黄褐色	粘土質シルト	掘り方。10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック少量。
	掘り方	17	10YR6/8　明黄褐色	シルト	掘り方。10YR5/6黄褐色・10YR3/3黒褐色シルトブロック状に混じる。
	SK－1	1	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	硬くしまっている。10YR6/4にぶい黄褐色シルト質粘土ブロック状に混ざり合う。焼土粒、炭化物粒少量。
		2	7.5YR4/4　褐色	シルト	10YR5/8黄褐色シルトブロック状に混ざる。焼土粒（5mm～2cm大）多量。炭化物粒少量。カマド焼土を埋めたものか？
	SK－2	1	7.5YR4/3　褐色	シルト	10YR7/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。炭化物粒、焼土粒少量。
		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色シルトブロック状に混ざり合う。炭化物粒・焼土粒少量。
	SK－3	1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト質粘土	上部に10YR4/3にぶい黄褐色シルト多量。1cm大焼土・炭化物粒多量。
		2	2.5Y7/3　浅黄色	粘土	
		3	10YR4/6　褐色	粘土質シルト	砂粒を含む。層丈夫に10YR3/3暗褐色粘土質シルトが混じる。底面礫層。
	SK－4	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR7/6明黄褐色シルト小ブロック少量。炭化物粒・焼土粒少量。
	SK－5	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色シルト小ブロック多量。
		2	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	10YR6/6明黄褐色シルト小ブロック多量。底面付近に焼土粒少量。
	SK－6	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトブロック状に少量。10YR7/6明黄褐色シルトブロック少量。炭化物粒少量。
		2	10YR7/6　明黄褐色	シルト質粘土	10YR5/3にぶい黄褐色シルト小ブロック少量。焼土粒多量。
		3	10YR7/6　明黄褐色	シルト質粘土	10YR4/3にぶい黄褐色シルト小ブロック少量。底面礫層。
	SK－7	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロック、焼土粒、炭化物粒少量。床の貼変えか？
		2	7.5YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトブロック状に混じりあう。10YR6/8明黄褐色シルトブロック少量。1cm大焼土粒・炭化物粒多量。
	SK－8	1	7.5YR3/3　暗褐色	粘土質シルト	7.5YR2/2黒褐色粘土質シルトブロック状に混じりあう。10YR6/8明黄褐色シルトブロック少量。2cm大焼土粒・炭化物粒多量。
	P1	1	10YR3/2　黒褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色・4/4褐色シルト小ブロック少量。
		2	10YR4/4　褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト少量。
		3	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR6/6明黄褐色・4/4褐色シルトブロック状に混じる。
	P2	1	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	
		2	10YR6/6　明黄褐色	粘土質シルト	10YR6/4にぶい黄褐色
	SD－1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR7/6明黄褐色シルト小ブロックと混じりあう。
		2	10YR3/4　暗褐色	シルト	5mm大の小礫多量。
SI－11 カマド	内部堆積土	1	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	5mm～1cm大焼土粒多量。
		2	7.5YR3/3　暗褐色	シルト	焼土粒少量。微細な炭化物粒多量。
		3a	7.5YR4/4　褐色	シルト	焼土粒、炭化物粒少量。上部は、10YR4/4褐色に近い色彩（赤みが薄れる）
		3b	5YR4/3　にぶい赤褐色	シルト	1～2cm大焼土粒（2.5YR3/6暗赤褐色）多量。
		4	7.5YR4/4　褐色	シルト	しまり良。焼土粒少量。
		5	7.5YR4/3　褐色	シルト	しまり良。焼土粒少量。10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。
		6	10YR3/3　暗褐色	シルト	
		7	7.5YR4/6　褐色	シルト	
		8	5YR3/2　暗赤褐色	シルト	一部、2.5YR3/4暗赤褐色シルト混じる。1～2cm大焼土粒多量。たき口内部。
		9	7.5YR4/6　褐色	シルト	焼土粒少量。たき口内部。
		10	5YR3/2　暗赤褐色	シルト	しまり良。10YR7/4にぶい黄橙色小ブロック少量。1cm大焼土粒多量。
		11	7.5YR3/4　暗褐色	シルト	7.5YR2/2黒褐色シルトブロック少量。焼土粒、炭化物粒少量。しまりなし。
		12	10YR4/4　褐色	粘土質シルト	10YR6/6明黄褐色斑状に混じる。
		13	10YR5/6　黄褐色	シルト	7.5YR3/2黒褐色シルト小ブロック混じる。炭化物粒・焼土粒少量。
	ソデ	14	5YR4/4　にぶい赤褐色	シルト	非常に硬くしまっている。ベースの土は3層と同じ。
		15	5YR4/6　赤褐色	シルト	非常に硬くしまっている。焼土粒少量。ベースの土は3層と同じ。
		16	10YR5/6　黄褐色	シルト	非常に硬くしまっている。地山の削り出し。

筒埴輪が出土しているが、原遺跡周辺ではあまり類例はなく本遺跡では２例目の出土である。

Ｓ－33（第26図１）は第１次調査の埴輪棺墓の円筒埴輪と比べると、やや外傾して立ち上がり、口縁部がゆるやかに外反するもので、そのまま口縁端部に至り口縁端部上面は水平となる。口径37.0cm、器高50.5cm以上を測り、第１段から口縁部まで残存しているが底部を欠いている。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は第４段の口縁部が横方向のハケメ後縦方向のナデ、それ以下の第１段から第３段は縦方向のナデが施されている。第１～第３凸帯が付けられた内面の部分には幅約２cmのナデ調整が横に一重巡っている。

段の幅は、第２段が12.5cm、第３段が13.9cmであるが、第４段の幅は15.8cmと幅広となっている。スカシ孔は第３凸帯直下に位置し、ほぼ凸帯に接するように大きさ６cm前後の整った円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯は上・側・下面がヨコナデされ、凸帯の断面形は台形を呈し、上幅0.7cm、下幅1.6～2.2cm、高さ0.6～0.7cmで鋭さはあまり見られない。

第２節　竪穴住居跡

11号住居跡（SI－11）（第31～33図　写真57～63、101－４～８）

(1) 遺　構

C区中央部西側に位置し、北から南に傾斜する面で検出されている。SK－61土坑と重複し切られている。畑の耕作による攪乱が著しく、さらに傾斜面で検出されたことから、住居南半分の床面は削平され掘り方が検出された状態で、遺存状況は不良であった。

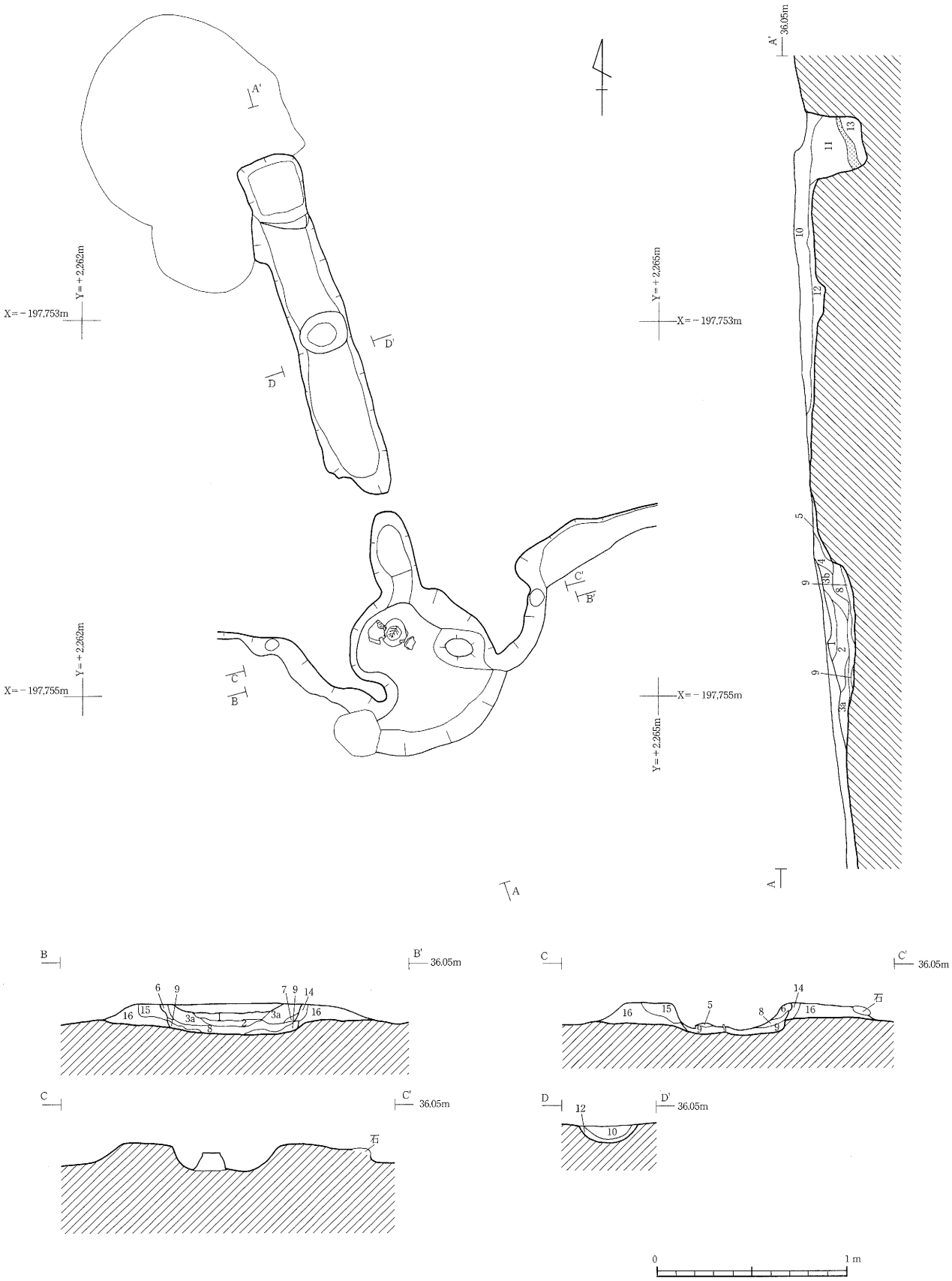
平面形は方形を呈しており、その規模は東西約6.9m、南北約6.7mを測り、住居北辺が南辺に比べてやや短い。主軸方向はカマドを基準としてN－21°－Wである。

堆積土は、自然堆積と推定され、２層に分層される。床面付近では炭化物粒・焼土粒が多く見られる。床面は、住居の南半部ですでに削平され、北半部分のみ残存している。壁沿いに約1.5mの幅で掘り方が掘られており、これを暗褐色シルトで４cm～10cm程埋め戻している。中央部は地山を床面として利用している。北から南へ緩やかに傾斜しており、床面残存範囲の中での高低差は20cmである。

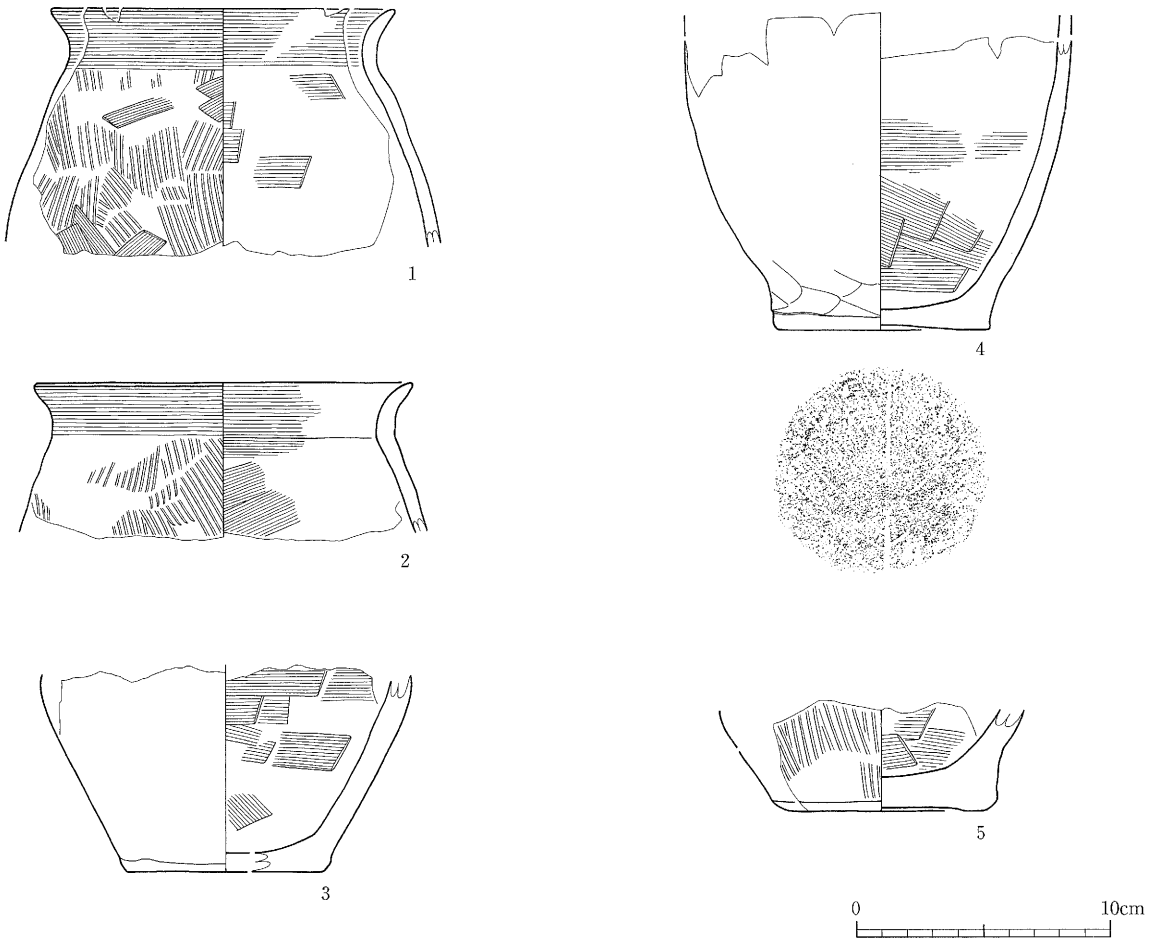
カマドは、北辺の中央部に構築されており、燃焼部と煙道部からなる。燃焼部の規模は、幅1.5m、長さ85cmを測る。袖部は地山削り出しによるもので、部分的に石で補強されている。燃焼部は火熱のため赤変している。煙道部は奥壁から幅33cm、長さ2.42mで北側に延びている。燃焼部内部の規模は、奥行き80cm、幅40cmで、焚口に５cm程の浅い窪みが見られる。燃焼部最奥には、支脚と見られる土師器甕が底部を上にして据えられ、転落したと見られる土師器甕片２点が付近から出土している。煙道部は一部途切れているが、深さ８～11cmを測り、ほぼ水平に延びる。煙道北端部は煙出しとなり、平面形は方形でその規模は長軸40cm、短軸30cm、深さ37cmのピット状となる。煙道部壁面は、炭化物が多量に付着しているほか、熱のために赤変している。さらに、煙道部の中央付近でも浅いピット状となり、煙道部が延長した痕跡と考えられる。

床面上で柱穴と考えられるピットは、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４の４基であり、その位置関係から主柱穴と考えられる。柱の間隔は3.6m～3.7mである。その中でもＰ１では、柱痕跡が検出され、底面には石が置かれていた。

カマド周辺の床面上から貯蔵穴状の土坑８基が検出されている。SK－１はカマド左側に位置し、それ以外のものはすべてカマド右側の北東コーナー付近に集中している。SK－１は、ほぼ円形のもので、その規模は100cm×90cm、深さは18cmを測る。堆積土は２層で、下層には焼土、炭化物を多量に含む層で、上層は掘り方埋め土と同様の土で人為的に埋め戻している。カマド右側の土坑群は２時期に分けられる。古い時期のものはSK－７・８で一度埋め戻しされている。SK－７は長軸75cm、短軸60cmの楕円形のもの深さ15cmを測る。新しい時期のものは



第32図　SI−11住居跡カマド実測図



No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）			外面色調	胎　土	焼成	調　　整	写真図版No.
				口径	底径	器高	内面色調				
1	C－3	土師器・甕	SI-11周溝P1	(13.6)	－	(9.8)	10YR7/4　にぶい黄橙色 10YR7/3　にぶい黄橙色	砂粒少量	良	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	101-5
2	C－4	土師器・甕	SI-11周溝P2	(15.0)	－	(6.2)	10YR6/4　にぶい黄橙色 10YR6/4　にぶい黄橙色	砂粒少量	良	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ 内：口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ	101-4
3	C－5	土師器・甕	SI-11周溝P2	－	(8.0)	(7.8)	7.5YR5/6　明褐色 7.5YR4/4　褐色	砂粒多い	やや軟質	底部木葉痕 内：体部ヘラナデ	101-6
4	C－2	土師器・甕	SI-11周溝P2	－	8.4	(12.6)	5YR5/6　明赤褐色 5YR6/6　橙色	砂粒多い	やや軟質	外：体部ナデ、底部木葉痕 内：体部ヘラナデ	101-8
5	C－8	土師器・甕	SI-11SK2 P1	－	8.4	(4.3)	5YR6/8　橙色 5YR6/8　橙色	砂粒多い	やや軟質	外：底部ハケメ 内：体部ヘラナデ	101-7

第33図　SI－11住居跡出土遺物

SK－２・３・４・５・６である。これらの土坑群は、大きさ55～100cmの円形又は楕円形のもので、深さが10～30cmを測る。SK－６、７、８は堆積土中に焼土、炭化物粒を多量に含む層が堆積している。

周溝は、南東コーナーで一部途切れるもののほぼ全周で検出している。また、南東コーナーからは住居外に延びる溝跡が取り付き、住居外へ排水溝である。周溝の幅は、約15cm～25cm、深さは床面から20cm程である。断面形は長靴型をしており、すべての辺で住居の外側に向けて底面がえぐれる様に造られている。堆積土は２～３層であり、壁際に板状のものが施されていた可能性がある。

(2) 出土遺物

カマド及びその周辺を中心に土師器が出土しており、いずれもロクロ不使用のものである。図示できたものは５点がある。図示されたものは甕の破片で完形のものはない。C－３・４は口縁部から体部上半のもので、最大形は体部に中央にあり、丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反する。調整は、口縁部内外面がヨコナデされ、体部外

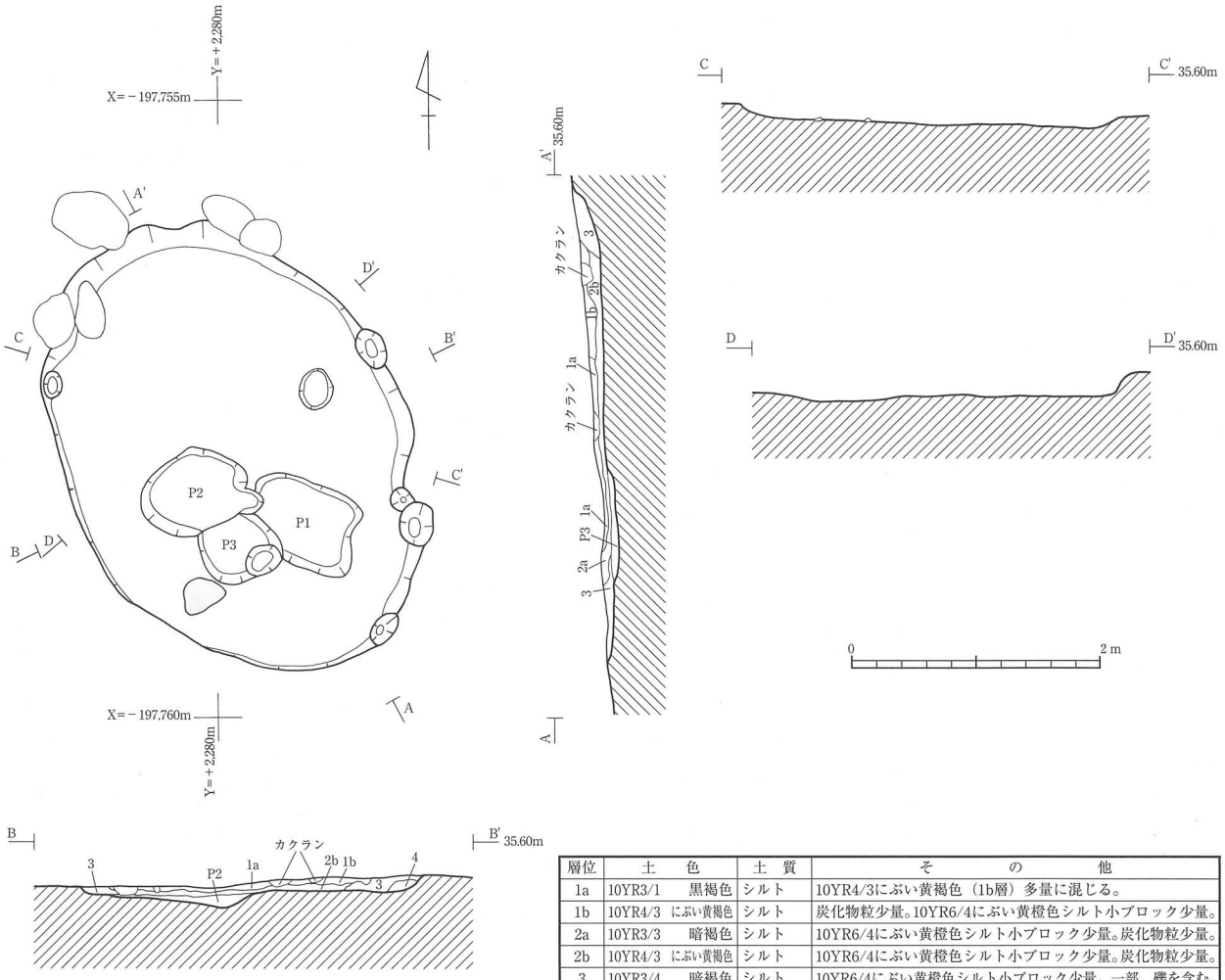
面が斜め方向又は縦方向のハケメが施されている。内面はナデ・ヘラナデ調整されている。C－２・５は体部下半から底部のもので、体部はやや内弯気味に立ち上がる。外面の調整は器面があれているため不明であるが、C－２は底部がナデ調整されている。内面は横方向のナデ、ヘラナデ調整されており、底部には木葉痕がある。

12号住居跡（SI－12）（第34・35図　写真55・56、102－１～６・13）

(1) 遺　構

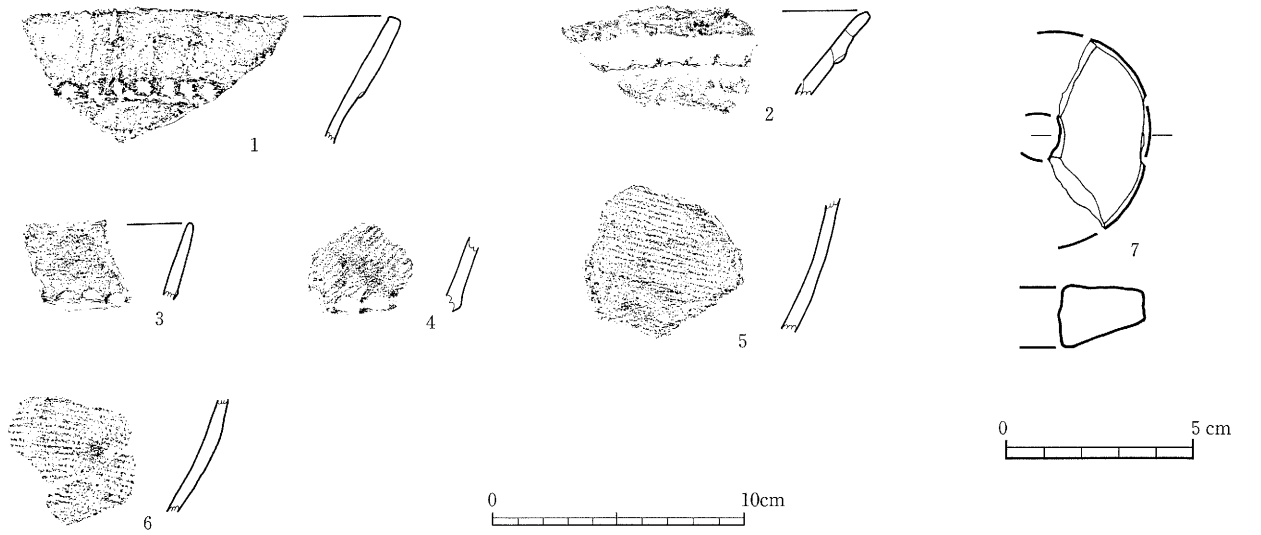
C区中央部東側、８号墳の南西で検出された。遺構との重複関係はないが畑の耕作等による撹乱が著しい。平面形は北西から南東に長い楕円形で、規模は長軸3.88m、短軸2.8mを測り、長軸方向での主軸方向はN－28°－Wである。基本層Ⅳ層を床面とし、南半ではⅣ層礫層が露出している。床面はほぼ平坦であるが、緩やかに南に傾斜している。検出された位置は段丘の傾斜面であり、北側から南側へと傾斜しており、比高差は約20cmである。壁は床面よりやや傾斜をもって立ち上がり、残存する高さは北側で最大約17cm、南側ではほとんど壁が立たなかった。堆積土は自然堆積で４層に分けられる。床面の南西側の位置で東西35cm、南北25cmの不整円形の範囲で焼けた痕跡が認められ、焼土のブロックなども検出されていることから地床炉と考えられる。

床面中央付近には土坑状のピットが３基検出されている。P１～P３は重複しており、いずれも不整楕円形を呈している。重複関係よりP１→P２→P３の順に新しい土坑状のもので、深さも５cmと浅い。ピットは壁沿いに５基検出されたが、柱穴かどうかは不明である。



層位	土　色	土　質	そ　の　他
1a	10YR3/1　黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色（1b層）多量に混じる。
1b	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	炭化物粒少量。10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。
2a	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。炭化物粒少量。
2b	10YR4/3　にぶい黄褐色	シルト	10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。炭化物粒少量。
3	10YR3/4　暗褐色	シルト	10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。一部、礫を含む。
4	10YR3/3　暗褐色	シルト	10YR6/4にぶい黄橙色シルト小ブロック少量。

第34図　SI－12住居跡実測図



No.	登録No.	種　別	出土層位	法　量（cm）			外面色調	胎　土	焼　成	調　　整	写真
				口径	底径	器高	内面色調				図版No.
1	B－1	弥生土器・甕	SI-12、2b層	－	－	－	10YR6/4　にぶい橙色 10YR6/4　にぶい橙色	砂粒少量	良	外面：口縁部押圧圧痕	102-1
2	B－2	弥生土器・甕	SI-12、2b層	－	－	－	7.5YR6/6　橙色 7.5YR6/6　橙色	砂粒やや多い	やや軟質	外面：口縁部押圧圧痕	102-2
3	B－3	弥生土器・甕or広口壺	SI-12 d区1b層	－	－	－	7.5YR5/6　褐色 7.5YR5/4　にぶい褐色	砂粒やや多い	やや軟質	外面：口縁部LR？縄文、押圧圧痕	102-3
4	B－4	弥生土器・甕or広口壺	SI-12 P2、1層	－	－	－	7.5YR5/4　にぶい褐色 7.5YR5/4　にぶい褐色	砂粒やや多い	良	外面：口縁部LR縄文、押圧圧痕	102-4
5	B－5	弥生土器	SI-12、2層	－	－	－	7.5YR2/2　黒褐色 7.5YR5/4　にぶい褐色	砂粒やや多い	良	外面：LR縄文	102-5
6	B－6	弥生土器	SI-12、2層	－	－	－	10YR2/1　黒色 7.5YR5/4　にぶい褐色	砂粒やや多い	良	外面：LR縄文	102-6
7	P－1	土製紡錘車	SI-12 c区1層	－	－	－	5YR5/6　明赤褐色	砂粒多い	やや軟質		102-13

第35図　SI－12住居跡出土遺物

(2) 出土遺物

堆積土及び床面から弥生土器片６点、土製品１点が図示されている。B－１～４はいずれも肥厚する口縁部の破片で、その下端に連続する押圧圧痕が施された破片である。B－５・６は体部片で地文が施されている。これらの弥生土器は弥生時代後期の天王山式に相当するものと考えられる。P－１は土製の紡錘車で、径推定5.8cm、厚さ1.7cmを測る。

第３節　土　　坑

土坑は34基検出されている。その多くは時期、性格ともに不明のものが多い。これまで本遺跡では、平安期の土壙墓若しくは木棺墓と考えられる遺構が５基検出されている。これらに共通する特徴としては、①　平面形が長方形を基調し、長さは約２ｍ前後、幅は、80cm前後である。②　堆積土は人為堆積で、一時に埋め戻されている。③底面はほぼ平坦で、箱型の断面形を基調とするという３点が挙げられる。また、堆積土中より、副葬品と見られる刀子や木棺に使用されたと見られる釘などが出土しているものもある。今回の調査では、SK－38・44・53・72・74土坑は前述した共通する特徴が見られることから、ここでは土壙墓として扱い、これらの遺構を中心として述べることとした。その他の土坑については代表的なもののみとし、多くは第２表にまとめてある。

1．土壙墓

SK－38土坑（第36図　写真64・65）

C区中央部、8号墳の西側に位置する。他の遺構との重複関係はない。平面形は長方形を呈し、規模は197cm×64～70cm、深さは40cmである。主軸方向はN－7°－Wである。底面は、ほぼ平坦であるが緩やかに南に傾斜している。また、南北両端に地山削りだしによる段がつく。段の内側の長さは50～60mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり箱型の断面形を呈する。堆積土は4層確認できたが、いずれも人為堆積によるものである。出土遺物はなかった。

SK－44土坑（第36図　写真66）

C区に位置する。他の遺構との重複関係はない。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は2.45m×1.3m、深さは約40cmである。主軸方向はE－4°－Sである。底面は一部凹凸があるがほぼ平坦である。壁は緩やかに開きながら立ち上がり断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層確認できたがいずれも人為堆積によるものである。出土遺物はなかった。

SK－53土坑（第36図　写真67）

C区に位置する。他の遺構との重複関係はない。平面形は隅丸長方形を呈するが両端の辺はやや丸みを帯びる。規模は、1.55m×55～60cmである。すでに上面を削平されているが、深さは最大で約30cmを測る。主軸方向はN－4°－Wである。底面はほぼ平坦であるが、やや南に傾斜している。壁はやや開きながら直線的に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層確認できたがいずれも人為堆積によるものである。出土遺物はなかった。

SK－72土坑（第36図　写真68・69）

D区に位置する。他の遺構との重複関係はない。平面形は長方形を呈し、規模は2.23m×75cmである。すでに上部は削平されていると考えられ、深さは約10cm～20cmである。主軸方向はN－20°－Wである。底面はほぼ平坦であるが南にやや傾斜している。壁は、やや開きながら直線的に立ち上がり、断面形は逆台形方である。堆積土は単層で人為堆積である。出土遺物はなかった。

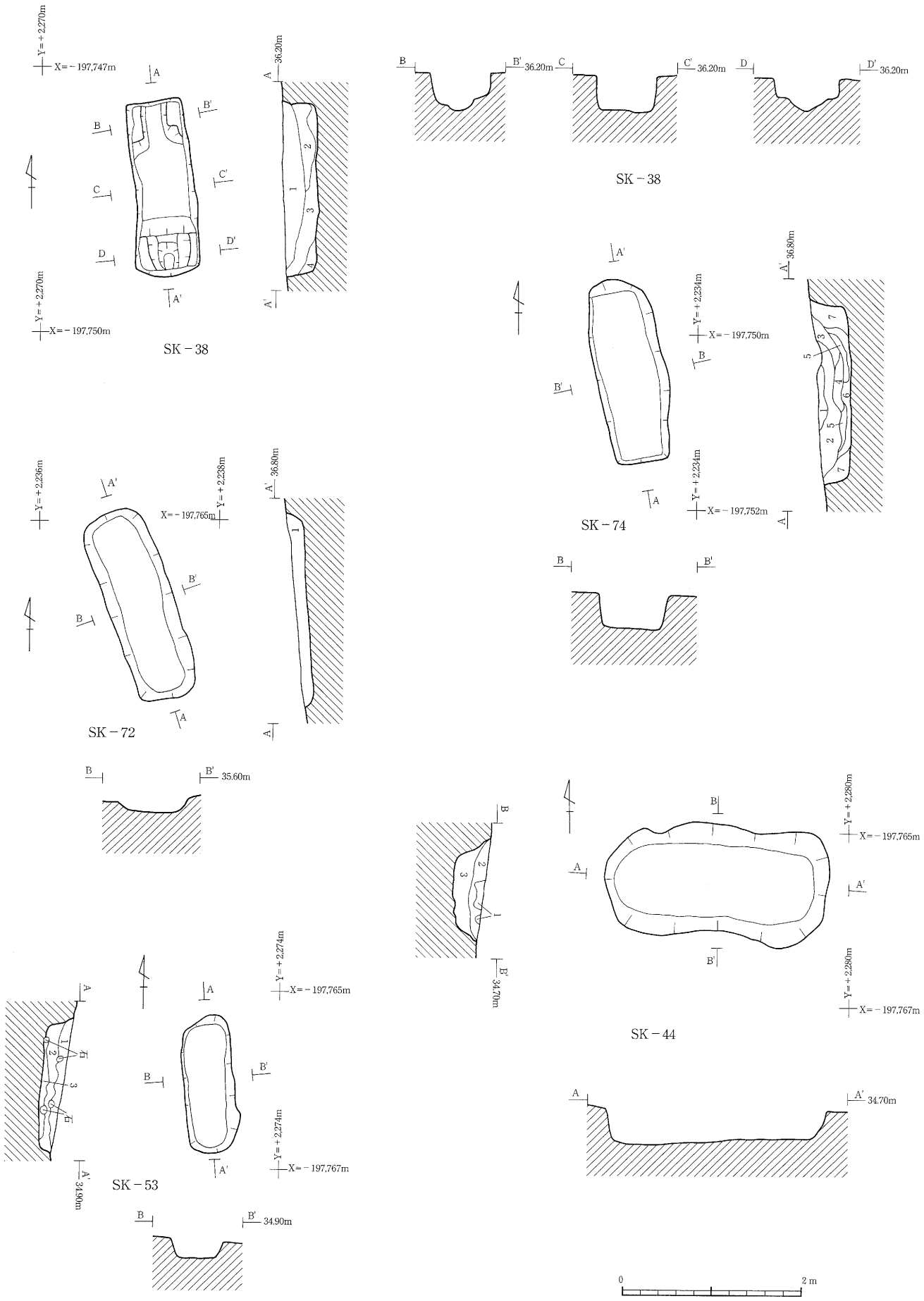
SK－74土坑（第36図　写真70～72）

D区に位置する。他の遺構との重複関係はない。平面形は長方形を呈し、規模は2.1m×80cm、深さは約30～46cmである。主軸方向は、N－11°－Wである。底面はほぼ平坦でありわずかながら南に傾斜している。壁はやや開きながら直線的に立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。堆積土は7層確認できた。上部3層と下部4層では堆積の状況が若干異なる。下部の層はⅣ層土と黒褐色シルトが大きなブロックで混じり合い、炭化した木材が比較的まとまった状況で出土する人為堆積層である。上部の層は、褐色系シルトに黄褐色シルトの小ブロックが混じるもので、混入する炭化物も粒状となり、量も少なく自然堆積層と考えられる。ことから、SK－74は、木棺を据えていた可能性も考えられる。しかし、出土遺物が見られないことから断定はできない。

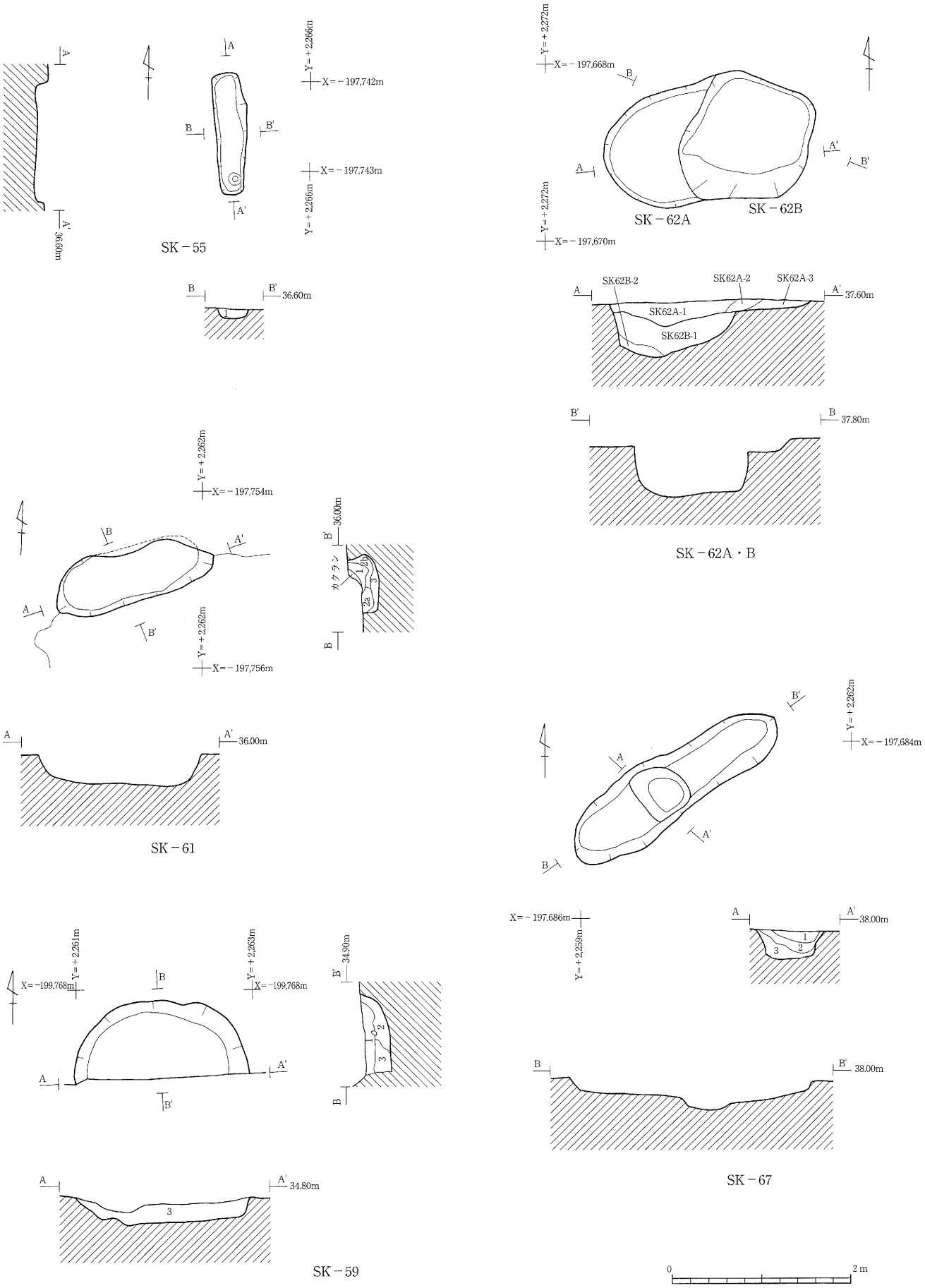
2．その他の土坑

SK－55土坑（第37図　写真75・76）

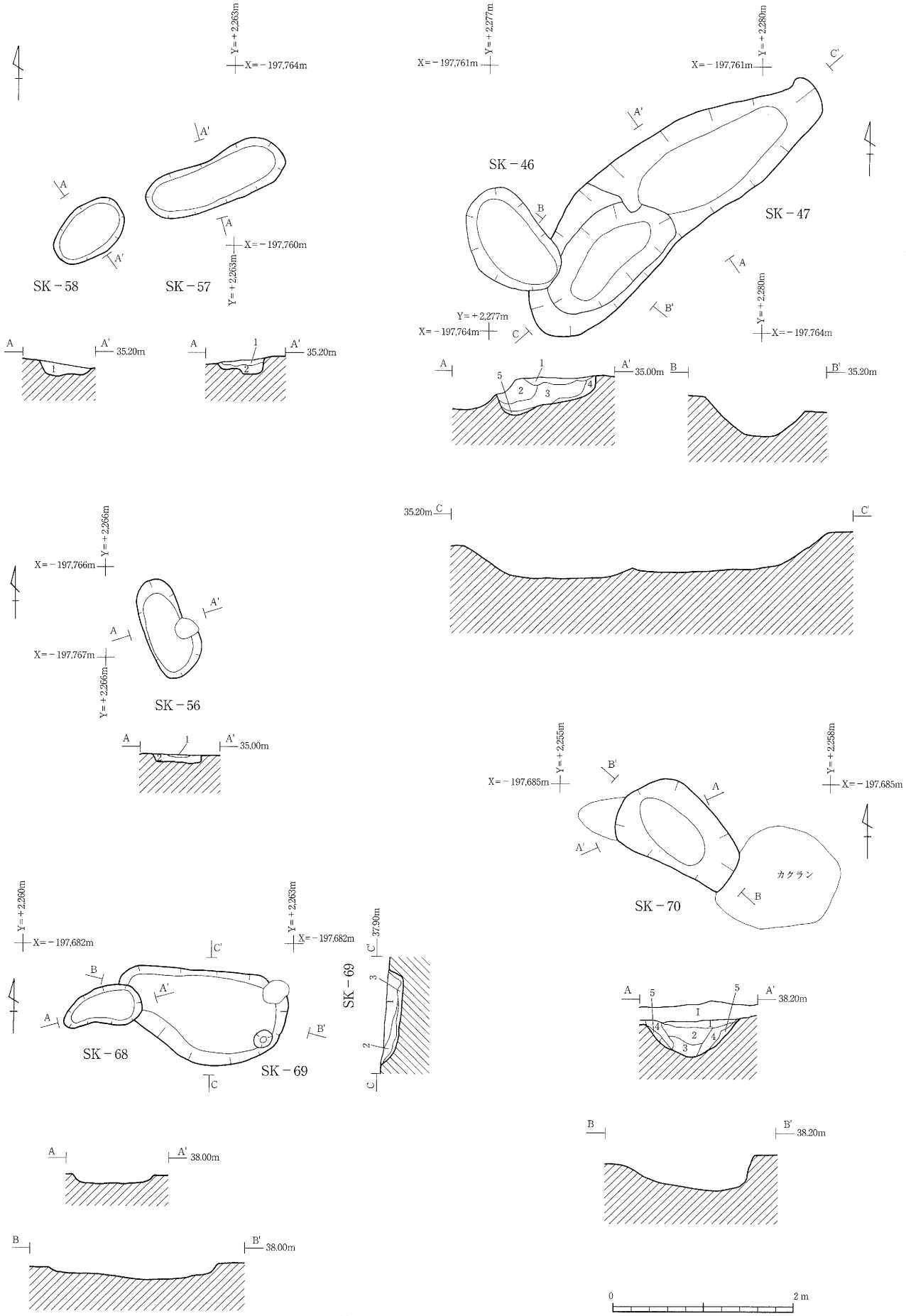
C区に位置し、他の遺構との重複関係はない。平面形は長方形を呈し、規模は1.35m×30～35cm、深さは約12cmである。主軸方向はN－5°－Wである。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は単層で自然堆積によるものか人為堆積によるものかは判断できない。出土遺物は、底面南端から土師器高台付坏1点が底部を上にした状態で出土している。この遺物はロクロを使用し、内面黒色処理が施されている。高台部は、打ち欠きによって削られている。このことから、規模は他のものよりも小さいが、土壙墓の可能性も考えられる。


SK－38
SK－38
SK－74
SK－72
SK－53
SK－44
Y＝＋2,270m
X＝－197,747m
Y＝＋2,270m
X＝－197,750m
36.20m
36.20m
36.20m
36.20m
Y＝＋2,234m
X＝－197,750m
Y＝＋2,234m
X＝－197,752m
36.80m
Y＝＋2,236m
Y＝＋2,238m
X＝－197,765m
36.80m
35.60m
Y＝＋2,274m
X＝－197,765m
Y＝＋2,274m
X＝－197,767m
34.90m
34.90m
Y＝＋2,280m
X＝－197,765m
Y＝＋2,280m
X＝－197,767m
34.70m
34.70m
0
2 m

第36図　土壙墓実測図


SK－55
SK－62A
SK－62B
SK62B-2
SK62A-2
SK62A-3
SK62A-1
SK62B-1
SK－62A・B
カクラン
SK－61
SK－67
SK－59
Y=+2,266m
X=－197,742m
X=－197,743m
Y=+2,266m
36.60m
Y=+2,272m
X=－197,668m
Y=+2,272m
X=－197,670m
37.60m
37.80m
Y=+2,262m
X=－197,754m
Y=+2,262m
X=－197,756m
36.00m
36.00m
Y=+2,262m
X=－197,684m
X=－197,686m
Y=+2,259m
38.00m
38.00m
Y=+2,261m
X=－199,768m
Y=+2,263m
X=－199,768m
34.90m
34.80m
0
2 m

第37図　土坑実測図（1）


SK－58
SK－57
SK－46
SK－47
SK－56
SK－70
SK－68
SK－69
カクラン
Y＝＋2,263m
X＝－197,764m
X＝－197,760m
Y＝＋2,277m
X＝－197,761m
Y＝＋2,280m
X＝－197,764m
Y＝＋2,266m
X＝－197,766m
X＝－197,767m
Y＝＋2,266m
Y＝＋2,255m
X＝－197,685m
Y＝＋2,258m
X＝－197,685m
Y＝＋2,260m
X＝－197,682m
Y＝＋2,263m
X＝－197,682m
35.20m
35.00m
35.20m
35.20m
35.00m
35.20m
37.90m
38.20m
38.20m
38.00m
38.00m
0
2 m

第38図　土坑実測図（2）

SK－59土坑（第37図、写真78）

C区最南端の西端部に位置し、半分は調査区外にある。平面形は円形を呈し、径1.95m、深さ約30cmを測る。

底面はほぼ平坦で、壁は底面よりやや傾斜をもって立ち上がる。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は3層に分けられ、自然堆積である。

SK－62A・62B土坑（第37図、写真81）

A区に位置し13号墳を切っており、土坑も重複している。SK－62A土坑は平面形が楕円形を呈すると考えられるが、東側はSK－62Bと切り合っており、調査段階で一緒に掘り下げた関係で、長軸は断面形でしか把握されていない。土坑の規模は長軸2.4m、短軸1.3m、深さ25cmを測る。堆積土は3層に分けられる。

SK－62B土坑は長軸1.5m、短軸1.4mの隅丸方形を呈するもので、深さ60cmを測る。断面形は長方形状で、底面よりほぼ垂直に立ち上がる。底面は水平ではなく、一定ではない。堆積土は2層に分けられる。出土遺物は埴輪が多く出土しているが、13号墳の周溝を切っていることから本来は古墳出土の埴輪である。

第2表　土坑一覧表

No.	地区	平面図	断面図	規模（長軸×短軸）	深さ	主軸方向	堆積土	備考
38	C区	長方形	長方形	197×64～70	40	N－7°－W	4層	土壙墓
39	欠番							
40	C区	楕円形	浅いU字形	80×63	8	N－26°－W	2層	
41	C区	楕円形	U字形	60×40	10	N－45°－E	2層	
42	C区	円形	U字形	75×65	48		3層	
43	C区	円形	U字形	55×50	42		1層	
44	C区	隅丸長方形	逆台形	245×130	40	E－4°－S	3層	土壙墓
45	C区	隅丸方形	U字形	155×45	18	E－4°－S	1層	
46	C区	楕円形	U字形	130×83	30	N－42°－W	2層	
47A	C区	長楕円形	U字形	230以上×110	40	E－33°－N	5層	
47B	C区	長楕円形	U字形	190以上×120	40	N－31°－E		
48	C区	隅丸長方形	U字形	145×78	35	N－27°－E	3層	
49	C区	長楕円形	浅いU字形	314×132	15	E－13°－S	4層	
50	C区	隅丸方形	浅いU字形	78×68以上	10	N－28°－E	1層	
51	C区	楕円形	U字形	124×74	30	N－40°－E	3層	
52	欠番							
53	C区	長楕円形	逆台形	155×55～60	30	N－4°－W	3層	土壙墓
54	C区	楕円形	U字形	97×65	15	E－15°－S	1層	
55	C区	長方形	U字形	135×30～35	12	N－5°－W	1層	土壙墓？
56	C区	楕円形	U字形	112×55	10	N－21°－W	2層	
57	C区	長楕円形	U字形	160×50～58	25	E－22°－N	2層	
58	C区	楕円形	U字形	88×57	25	E－41°－N	1層	
59	C区	円形	U字形	195×87	30		3層	
60	C区	不整方形	逆台形？	(85)×60以上	23		1層	
61	C区	長楕円形	長方形	182×66	36	E－17°－N	4層	
62A	A区	楕円形	U字形	140以上×130	10～20	E－13°－N	3層	
62B	A区	隅丸方形	長方形	150×137	50	N－23°－E	2層	
63	A区	長楕円形	U字形	187×67	17	N－29°－W	4層	
64	欠番							
65	A区	楕円形	皿形	95×52	10	N－5°－W	1層	
66	A区	楕円形	皿形	88×47	5	E－25°－S	2層	堆積土中に焼土
67	A区	長楕円形	U字形	270×60～75	30	E－34°－N	3層	
68	A区	不整楕円形	皿形	90×45	9	E－15°－N	1層	
69	A区	不整楕円形	船底形	188×110	18	E－10°－S	3層	
70	A区	楕円形	U字形	145×93	40	E－42°－S	5層	
71	欠番							
72	D区	長方形	逆台形	233×75	10～20	N－20°－W	1層	土壙墓
73	欠番							
74	D区	長方形	逆台形	210×80	30～46	N－11°－W	7層	土壙墓。炭化材を含む

第３章　原遺跡第４次発掘調査における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

第１節　原遺跡第４次発掘調査のテフラ

１．はじめに

仙台市域とその周辺には、十和田など東北地方に分布する火山のほか、中国地方や九州地方に分布する火山などから噴出したテフラ（tephra，火山砕屑物，いわゆる火山灰）が多く分布している。テフラの中には、すでに噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、それらとの関係を求めることにより、地層の堆積年代や土壌の形成年代のみならず、遺構や遺物の年代などについても知ることができるようになっている。そこで、発掘調査の際にテフラが認められたとされる仙台市原遺跡においても、屈折率測定を行って示標テフラとの同定を試みることになった。

２．屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

屈折率測定の対象となった試料は、発掘調査担当者により採取された12号墳および13号墳の周溝内で採取された２試料である。測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第３表に示す。12号墳の試料には、無色透明の軽石型火山ガラス（最大径0.6mm）がごく少量含まれている。火山ガラス（n）の屈折率は、1.501-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や角閃石さらに黒雲母がごく少量含まれている。斜方輝石（γ）と角閃石（n2）の屈折率は、1.700-1.705と1.671-1.677である。

一方、13号墳の試料には、無色透明の軽石型火山ガラス（最大径0.4mm）が多く含まれている。火山ガラス（n）の屈折率は、1.502-1.507である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。

３．考察ー示標テフラとの同定

分析の対象となった試料のうち、13号墳の試料に含まれるテフラは、火山ガラスの色調や形態、重鉱物の組み合わせ、火山ガラスの屈折率などから総合的に判断すると、915年に十和田火山から噴出したと考えられている十和田ａ火山灰（To-a，町田ほか，1981）に由来する可能性がもっとも高いと考えられる。なお、これらの試料に含まれる火山ガラスの屈折率は、テフラ・カタログ（町田・新井，1992）に記載されている値より若干高い。このような値の若干の違いは、岩手県南部以南のTo-aによく認められる（古環境研究所，未公表）。この違いは、カタログに記載された試料の採取地点が給源火山に近く標準試料に含まれる火山ガラスが分厚く、またTo-aの噴出年代が新しいために、十分水和が進んでいないことに起因すると考えられる（新井房夫群馬大学名誉教授談話）。

一方、12号墳の試料に含まれるテフラ粒子のうち、火山ガラスや角閃石については、形態や屈折率などから、約5,000年前＊１に沼沢火山から噴出した沼沢１テフラ（Nm-1，只見川第四紀研究グループ，1966a，1966b）や、６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に由来する可能性が考えられる。いずれにしても、含まれるテフラの量が少なく、詳細な検討は困難である。なお、斜方輝石については比較的粗粒（２mm程度）で、地元のテフラに由来するものと思われる。

なおテフラを過去の時空指標として利用する火山灰編年学は、テフラの一次堆積層を利用するのが基本である。

今回は実際に現地において、土層断面を観察する機会に恵まれなかった。テフラの一次堆積層の認定には土層断面での観察が不可欠であることから、今後現地での土層観察機会の設定が望まれる。

４．小結

仙台市原遺跡で採取された２点の試料について屈折率測定を行った。その結果、13号墳の試料から十和田ａ火山灰（To-a，915年）に由来する可能性が非常に高いテフラ粒子が多く検出された。

*1　放射性炭素（14C）年代.

文　　献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石によるテフラの同定－テフロクロノロジーの基礎的研究．第四紀研究，　11，p.254-269.

新井房夫（1993）温度一定型屈折率測定法．日本第四紀学会編「第四紀試料分析法２－研究対象別分析法」，p.138-149.

町田　洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス．東京大学出版会，276p.

町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）日本海を渡ってきたテフラ．科学，51，p.562-569.

坂口　一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器．群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井　神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.

早田　勉（1989）６世紀における榛名火山の２回の噴火とその災害．第四紀研究，27，p.297-312.

只見川第四紀研究グループ（1966a）福島県野沢盆地の浮石室砂層の基底部より産出した木材の14C年代－日本の第四紀研究層の14C年代ＸＸⅥ－．地球科学，82，p.8-9.

只見川第四紀研究グループ（1966b）只見川・阿賀野川流域の第四系の編年－とくに沼沢浮石層の層位学的諸　問題について．第四紀，８，p.76-79.

第３表　原遺跡における屈折率測定結果

地点	火山ガラス					重鉱物		
	量	色調	形態	最大径	屈折率(n)	組　成	斜方輝石(γ)	角閃石(n2)
12号墳	+	無色	pm	0.6	1.501-1.505	(opx,ho,bi)	1.700-1.705	1.671-1.677
13号墳	+++	無色	pm	0.4	1.502-1.507	(opx,cpx)	-	-

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，-：認められない．pm：軽石型．最大径の単位: mm．屈折率の測定は，温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による．opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，bi：黒雲母．（　）は量が少ないことを示す．

第２節　原遺跡第４次発掘調査における蛍光Ｘ線分析

１．試料

試料は、12号墳主体部の北側および南側から採取された赤色顔料が付着した土壌（２点）である。ここでは赤色顔料の構成元素から顔料の種類を同定する目的で蛍光Ｘ線分析を行った。分析は、各試料ごとに赤色顔料の付着が明瞭な部分と不明瞭な褐色部分（比較試料）について行った（計４箇所）。

２．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

１）試料を絶乾（105℃・24時間）

２）赤色を帯びた物質を削り取りメノウ製乳鉢を用いて粉砕。

３）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/㎠でプレスして錠剤試料を作成

４）測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、Ｘ線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、Ｘ線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

３．分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を、第４表および第39～43図に示す。

４．考察

赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS)、ベンガラ（酸化鉄：Fe２O３など)、鉛丹（酸化鉛：Pb３O４）が知られている（市毛,1998，本田，1995)。

分析の結果、各試料の赤色顔料の付着が明瞭な部分では、Fe（鉄）の明瞭なピークが認められ、Hg（水銀）やPb（鉛）は検出されなかった。Fe２O３の含量は、主体部北側では26.2%、主体部南側では38.1%と高い値を示しており、前者では比較部分の2.3倍、後者では3.0倍に達している。

以上の結果から、12号墳主体部の北側および南側から採取された赤色顔料は、いずれもベンガラと考えられる。

文　献

本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31･32，p.63-79.

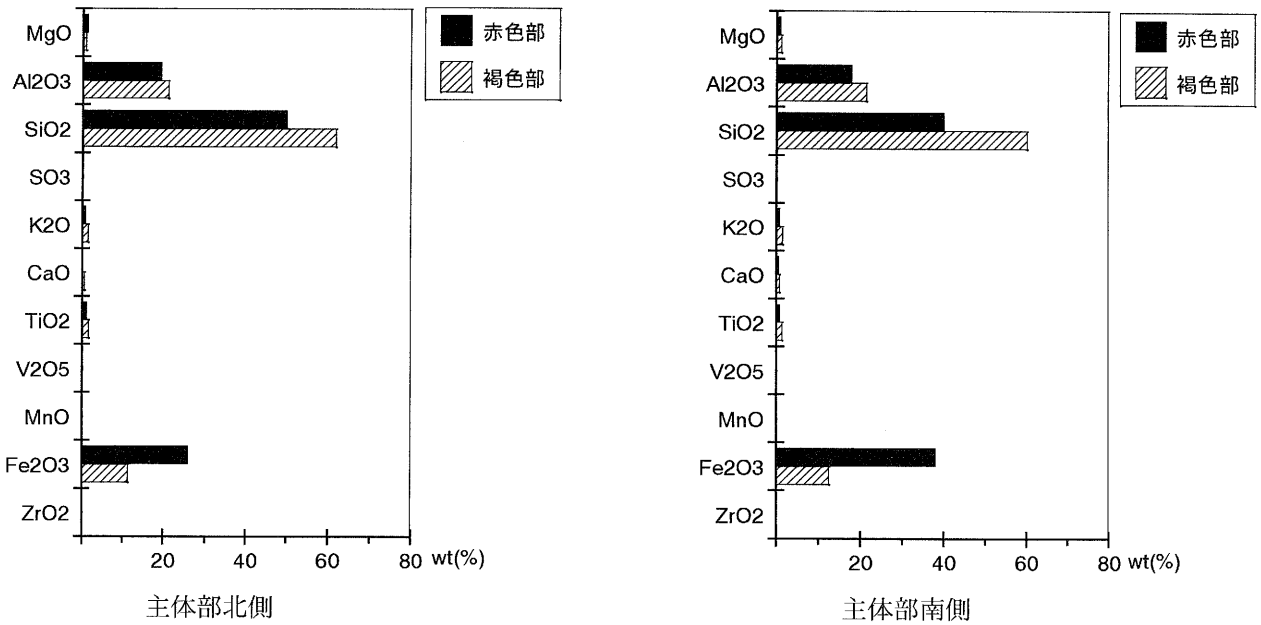
市毛　勲（1998）新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版，p.42-48.

山崎一雄（1987）古文化財の科学．思文閣出版，352p.

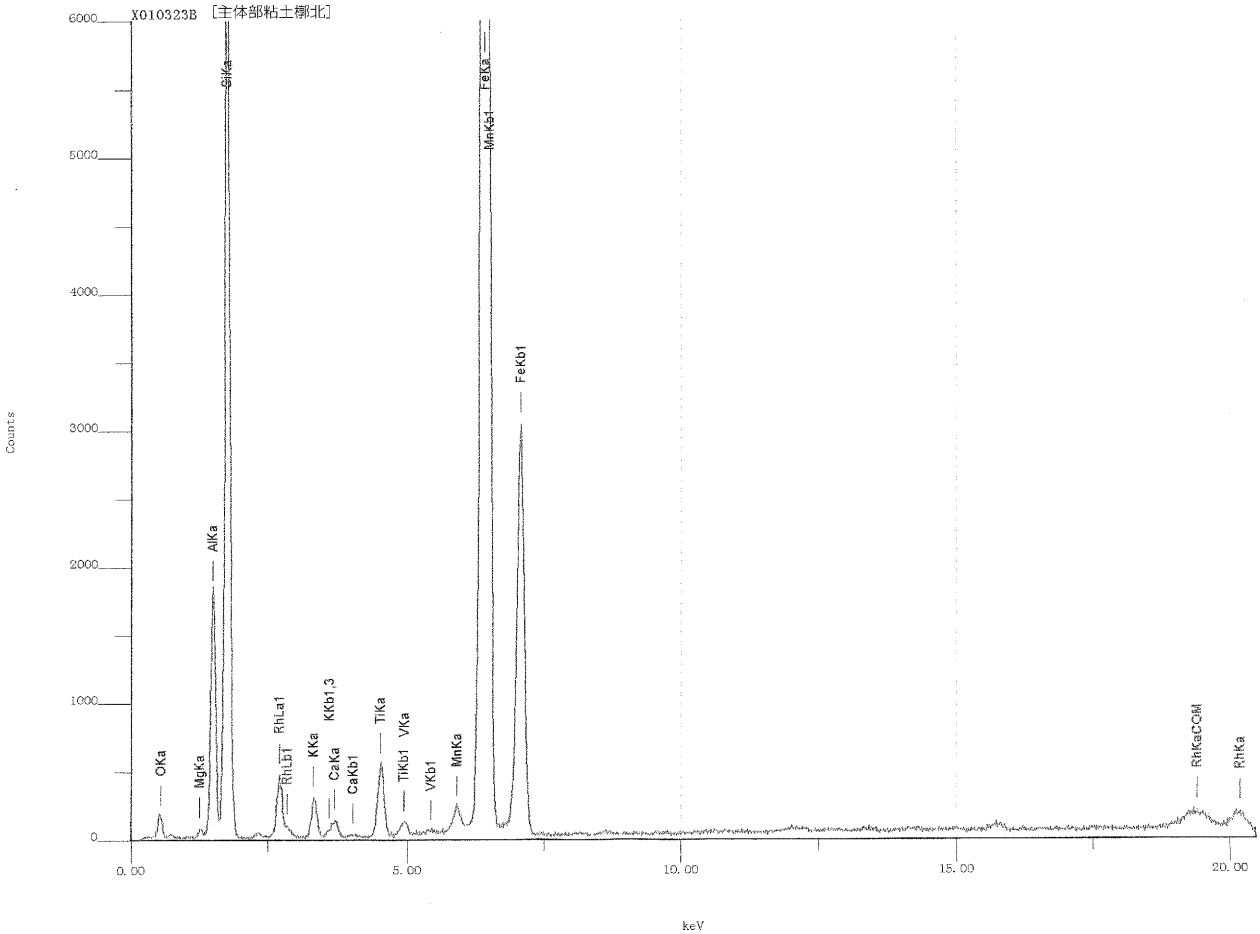
第４表　仙台市、原遺跡第４次調査12号墳における蛍光X線分析結果

単位：wt（%）

原子No.	地点・試料 化学式	主体部北側 赤色部	主体部北側 褐色部	主体部南側 赤色部	主体部南側 褐色部
12	MgO	1.32	0.96	0.96	1.22
13	Al_2O_3	19.46	21.18	17.94	21.53
14	SiO_2	50.21	62.04	40.20	60.25
16	SO_3		0.16		0.03
19	K_2O	0.97	1.51	0.91	1.58
20	CaO	0.32	0.66	0.63	0.91
22	TiO_2	1.14	1.71	0.87	1.54
23	V_2O_5	0.06	0.06	0.06	0.04
25	MnO	0.34	0.14	0.31	0.19
26	Fe_2O_3	26.17	11.51	38.10	12.63
40	ZrO_2		0.07		0.07



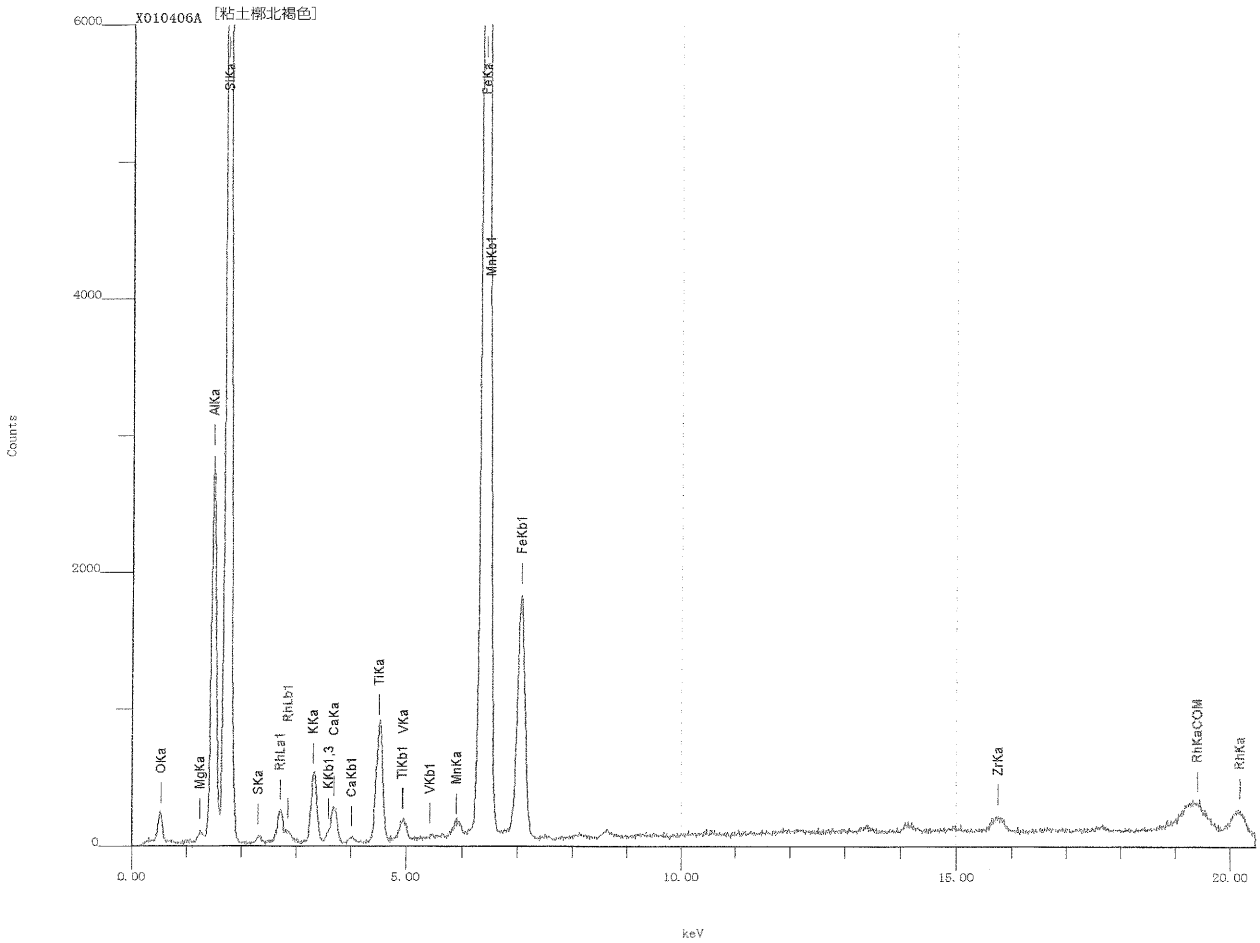
第39図　12号墳における蛍光Ｘ線分析結果



ファイル名：C:¥JSX3200¥DATA¥X010323B.SPC　　測定日時：2001年３月23日16時20分40秒
試　料　名：主体部粘土槨北
メ　　モ：仙台市　原遺跡
測 定 条 件：電圧：30.0kV　　電流：0.36mA　　ライブタイム：300.00sec　　パス：Vac
定量条件定量法：標準
分 析 元 素：O, Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, V, Mn, Fe, Rh

Num		元素/化学式	wt（%）	at/mole（%）	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	12	MgO	1.3244	2.6101	0.0035523	547	0.6155
2	13	Al2O3	19.4566	15.1602	0.0278396	18131	0.2824
3	14	SiO2	50.2144	66.3956	0.1038601	71084	0.1961
4	19	K2O	0.9709	0.8188	0.0060096	3578	0.0898
5	20	CaO	0.3185	0.4513	0.0018265	1548	0.0758
6	22	TiO2	1.1435	1.1370	0.0051772	7643	0.0607
7	23	V2O5	0.0587	0.0257	0.0002613	461	0.0544
8	25	MnO	0.3394	0.3801	0.0022886	4601	0.0348
9	26	Fe2O3	26.1736	13.0213	0.1550628	340792	0.0379

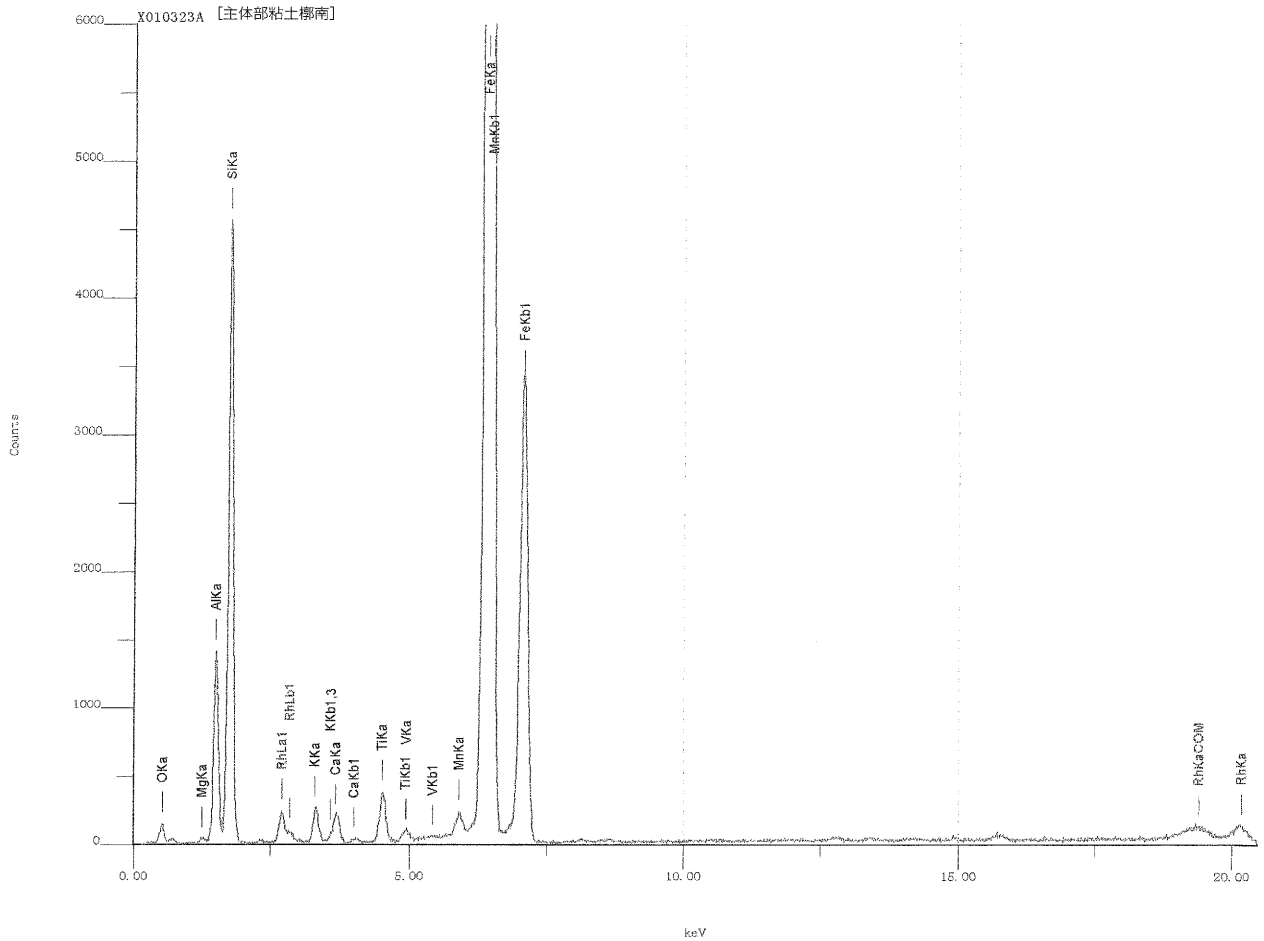
第40図　12号墳における蛍光Ｘ線分析結果グラフ（1）



ファイル名：C:¥JSX3200¥DATA¥X010406A.SPC　　測定日時：2001年４月６日18時20分30秒
試　料　名：粘土槨北褐色
メ　　モ：仙台市　原遺跡
測 定 条 件：電圧：30.0kV　　電流：1.14mA　　ライブタイム：300.00sec　　パス：Vac
定量条件定量法：標準
分 析 元 素：O, Mg, Al, Si, S, K, Ca, Ti, V, Mn, Fe, Ze, Rh

Num		元素/化学式	wt（%）	at/mole（%）	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	12	MgO	0.9628	1.7180	0.0011415	556	0.1560
2	13	Al2O3	21.1839	14.9445	0.0132503	27327	0.0724
3	14	SiO2	62.0412	74.2731	0.0531651	115226	0.0532
4	16	SO3	0.1575	0.1415	0.0000926	484	0.0371
5	19	K2O	1.5117	1.1543	0.0034530	6509	0.0273
6	20	CaO	0.6551	0.8402	0.0013675	3670	0.0233
7	22	TiO2	1.7094	1.5389	0.0027935	13059	0.0189
8	23	V2O5	0.0637	0.0252	0.0001027	574	0.0168
9	25	MnO	0.1395	0.1415	0.0003770	2400	0.0097
10	26	Fe2O3	11.5077	5.1834	0.0288893	201057	0.0100
＊11	40	ZrO2	0.0675	0.0394	0.0005610	2722	0.0107

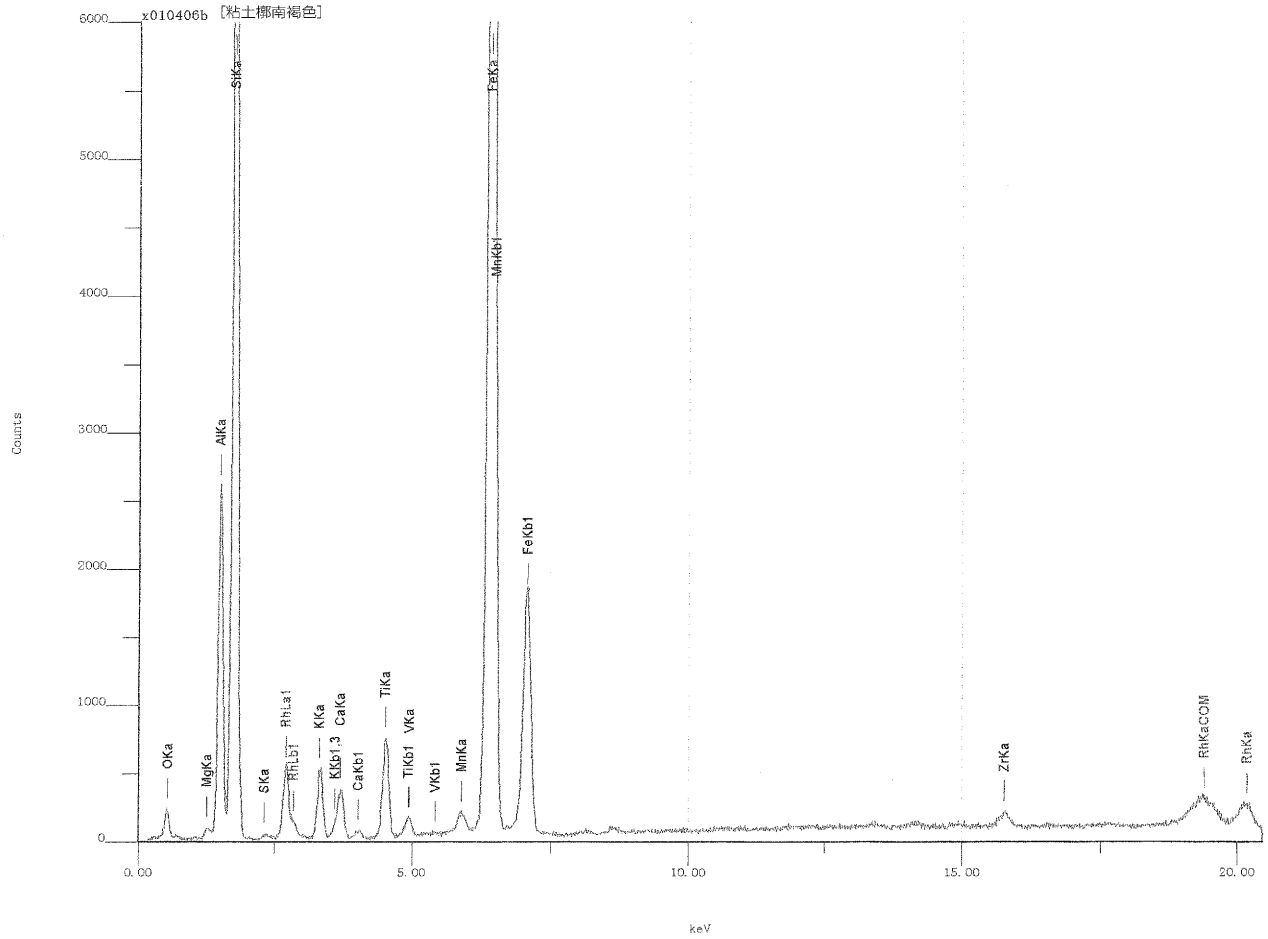
第41図　12号墳における蛍光Ｘ線分析結果グラフ（2）



ファイル名：C:¥JSX3200¥DATA¥X010323A.SPC　　測定日時：2001年３月23日16時１分５秒
試　料　名：主体部粘土槨南
メ　　モ：仙台市　原遺跡
測 定 条 件：電圧：30.0kV　　電流：0.30mA　　ライブタイム：300.00sec　　パス：Vac
定量条件定量法：標準
分 析 元 素：O, Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, V, Mn, Fe, Rh

Num		元素/化学式	wt（%）	at/mole（%）	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	12	MgO	0.9605	2.0825	0.0024737	317	0.4423
2	13	Al2O3	17.9435	15.3813	0.0250015	13569	0.2001
3	14	SiO2	40.2048	58.4841	0.0840508	47938	0.1339
4	19	K2O	0.9148	0.8488	0.0062174	3084	0.0564
5	20	CaO	0.6302	0.9822	0.0039654	2800	0.0477
6	22	TiO2	0.8689	0.9505	0.0042816	5267	0.0385
7	23	V2O5	0.0583	0.0280	0.0002811	413	0.0346
8	25	MnO	0.3144	0.3874	0.0031485	3600	0.0237
9	26	Fe2O3	38.1046	20.8553	0.2196218	402231	0.0269

第42図　12号墳における蛍光Ｘ線分析結果グラフ（3）



ファイル名：c:¥jsx3200¥data¥x010406b.spc　　測定日時：2001年４月６日18時55分45秒
試　料　名：粘土槨南褐色
メ　　モ：仙台市　原遺跡
測 定 条 件：電圧：30.0kV　　電流：0.38mA　　ライブタイム：300.00sec　　パス：Vac
定量条件定量法：標準
分 析 元 素：O, Mg, Al, Si, S, K, Ca, Ti, V, Mn, Fe, Ze, Rh

Num		元素/化学式	wt（%）	at/mole（%）	測定強度比	積分強度	標準偏差
1	12	MgO	1.2204	2.1946	0.0040300	655	0.2100
2	13	Al2O3	21.5284	15.3054	0.0374218	25726	0.0976
3	14	SiO2	60.2549	72.6943	0.1437528	103853	0.0716
* 4	16	SO3	0.0343	0.0311	0.0000571	99	0.0492
5	19	K2O	1.5759	1.2126	0.0101818	6398	0.0361
6	20	CaO	0.9145	1.1821	0.0053869	4819	0.0310
7	22	TiO2	1.5397	1.3969	0.0070665	11011	0.0252
8	23	V2O5	0.0409	0.0163	0.0001851	345	0.0225
9	25	MnO	0.1851	0.1892	0.0013970	2965	0.0130
10	26	Fe2O3	12.6315	5.7338	0.0882039	204621	0.0135
11	40	ZrO2	0.0744	0.0437	0.0016701	2701	0.0148

第43図　12号墳における蛍光Ｘ線分析結果グラフ（4）

第４章　調査成果とまとめ

第４次調査で検出された遺構は、第１・２次調査で一部調査されたものも含め古墳４基、竪穴住居跡２軒、土坑34基、溝跡８条であり、これまで原遺跡の調査で発見された遺構を総合すると、古墳は方墳２基、円墳11基の合計13基、竪穴住居跡11軒、竪穴遺構１軒、埴輪棺墓１基、方形周溝墓の可能性のある溝跡１条、土坑70基、溝跡12条がある。出土遺物は、その殆どが円墳の周溝から出土した埴輪であり、その他土師器、須恵器、土製品、金属製品がある。

第１節　古　　墳

１．方墳

調査により２基の方墳が検出された。12号墳は墳丘が残存している方墳で、墳丘の規模は東西約15m、南北約14.2m、高さ70cmを測る。周溝を含めた古墳の規模は、東西20m以上、南北24m以上である。埋葬施設は割竹形木棺を粘土で覆った粘土槨であり、その規模は長さ5.45m、幅80cmである。木棺内部の構造は中央部の区画に被葬者を埋葬し、その小口の両側に砂礫が詰められ、３つの区画から構成されている。副葬品は見られず、僅かに土師器甕口縁部小破片が出土したのみである。周溝内より塩釜式期の土師器鉢・甕などが出土している。８号墳は墳丘が削平され周溝のみが発見され、平面形の形状から方墳と考えられたもので、墳丘の規模は東西9.2m、南北9.3mである。墳丘及び埋葬施設は見られない。

これまで仙台市内において発見された方墳は、沼向遺跡で２基が確認されている。その他近隣の市町村においては名取市内で天神塚古墳があり、宇賀崎古墳群・飯野坂古墳群・箕輪Ａ地区古墳群中に方墳が発見されており、それらの古墳群は、円墳あるいは前方後円墳・前方後方墳などと共に古墳群を構成している。

沼向遺跡では方墳２基、円墳３基、方形周溝墓４基が調査されている。２基の方墳はすでに墳丘が削平され、僅かに埋葬施設の下部と周溝が検出されただけである。墳丘の規模は東西10～14.7m、南北10.2～13.3mで、周溝も含めた規模は東西約22～24m、南北約20～24mを測る。２基の方墳の埋葬施設は削平が著しく、僅かに下部が残存する状況で、木質部は残っておらず割竹形木棺であったのか箱式木棺であったのかは不明である。５号墳の木棺内から副葬されたガラス製小玉４点が出土している。その他の出土遺物としては周溝内より塩釜式期の土師器甕・坏・底部穿孔の壺などが出土しており、２基の方墳の時期は古墳時代前期に位置づけられている。

名取市愛島にある宇賀崎古墳群では、方墳２基、方墳と推定されるもの２基、不明なもの２基の６基が確認され、方墳の大きさは推定のものも含めて4.5～16m、高さ１～２mである。宇賀崎１号墳は昭和47年に緊急調査が行われている。方墳の規模は一辺20m余、高さ２m余の方墳で、主要内部主体は１～３基の粘土床（粘土槨）を伴う割竹形木棺と推定されており、そのうち調査された１基の木棺の規模は、長さ6.5m、幅85cm程度のもので、小口の両端には小石を詰めている。古墳の築造年代は割竹形木棺や出土した塩釜式の土師器高坏・壺などから、古墳時代前期末の４世紀末頃の年代と考えられている。

また、仙台市内において発見された粘土槨は、遠見塚古墳で２基の粘土槨が発見されているだけである。遠見塚古墳は市内では最大規模を誇る主軸長110mの前方後円墳で、県内でも名取市の雷神山古墳に次ぐ第２位の規模である。後円部の約２／３はすでに土取りにより削平を受け、その際に２基の粘土槨が発見されている。環境整備に伴う調査が実施され、墓壙内に埋葬施設（内部主体）である東西２基の粘土槨が発見されている。粘土槨の残存長は東槨が約４m、西槨が約3.5m検出されているが、本来の粘土槨の規模は６～７mと推定されている。副葬品として東槨から碧玉製管玉１点、ガラス製小玉４点、竹製黒漆塗りの竪櫛20点が出土したのみである。前方後円墳で粘土槨（割竹形木棺）の埋葬施設があるものは畿内型の前期大型古墳に多く、遠見塚古墳の築造年代は古墳時代前

期末の4世紀末の年代と考えられており、この古墳の被葬者は仙台平野を代表する首長墓と言える。同じ時期の前方後円墳である古川市の青塚古墳からは、後円部墳頂の削平の際に粘土槨が確認されている。

1995年には宮崎町の大塚森古墳の調査が実施され、直径46.7m、高さ7.8m、墳頂平坦面18mを測る大型の円墳で、墳丘は3段築成で葺石も検出されている。墳頂部から長辺12.4m、端辺8.5mの墓壙が発見され、その中から東西に並ぶ2基の粘土槨が発見されている。粘土槨の大きさは、東粘土槨が長さ約7.9m、幅約1.0mの長大な木棺を粘土で覆ったもので、被覆粘土上層でガラス製小玉2点、朱の微細な粒数点が出土した。西粘土槨は東粘土槨よりも一回り小さく、長さ7.7m、幅0.8mの木棺を粘土で覆ったもので、底面より管玉1点、ガラス製小玉50点で構成される一連の装飾品（手玉）、靫の残片とみられる漆製品、被覆粘土上層から比較的多い点数の朱の微細粒子と、鏃身を折り取った矢柄の先端部分が十数点出土している。木棺は割竹形木棺か否か今後の検討課題であるとのことである。古墳の築造年代については古墳時代前期後半と考えられている。

このように粘土槨をもつ古墳は古墳時代前期の大型の前方後円墳や円墳に一般に見られる埋葬形態であり、粘土槨の長さも7～8mのものが一般的のようである。原遺跡12号墳の粘土槨は、県内の大型の前方後円墳・円墳で発見された粘土槨よりは規模も小さく、粘土槨の規模では宇賀崎1号墳の粘土槨の規模に近いものである。また、方墳の規模がやや小ぶりであることや、木棺内部に小石を詰めている状況なども宇賀崎1号墳と類似している。

12号墳の築造年代については、県内で発見されている方墳が前期古墳に多いこと、埋葬施設が割竹形木棺を粘土で覆った粘土槨であること、木棺内部及び周辺からの副葬品はないものの周溝内より塩釜式期の土師器が出土していることなどから、古墳時代前期末の4世紀末ころに位置づけられる。8号墳については埋葬施設・出土遺物もなく、所属時期については不明であるが、12号墳同様古墳時代前期末と推定しておきたい。

2．円墳

今回の調査で発見された円墳は13号墳だけで9号墳は第2次調査の残りの調査である。これまでの原遺跡第1次から第4次調査により円墳11基が検出されている。その殆どはすでに墳丘が削平されており、11号墳が唯一墳丘を残存しているものである。11号墳は、これらの円墳群の中では最大規模を誇り、墳丘の規模は直径約17.7～18.2m、高さ0.65～1m、周溝を含めた外径は25.5～26.5mを測る。残念ながら、墳丘中央部に後世の大規模な撹乱と考えられる径5～6m、深さ1mのドーナツ状の撹乱穴が認められ、内部主体である埋葬施設は発見されなかった。11号墳以外の円墳は、すでに墳丘が削り取られ、周溝が検出される状況であり、僅かに1号墳と5号墳の2基が埋葬施設の下部を残存しており、いずれも小規模な竪穴式石室の棺床施設か礫床と考えられている。

(1) 原遺跡出土の埴輪

本遺跡では円墳11基の周溝から埴輪が出土しており、比較的まとまって出土している6号墳、11号墳、13号墳について埴輪の特徴について検討し、原遺跡の埴輪の編年的位置を考えてみることとする。埴輪の分類については、原遺跡第1・2次調査で大きく7類に大別（細別12類）され、朝顔形埴輪は分類されていないが細分の可能性が指摘されている。また第3次調査での資料の追加や第4次調査で一部細分しているが、これまでの分類基準に即して部分的に追加している。

原11号墳出土埴輪（第44図）

円筒埴輪

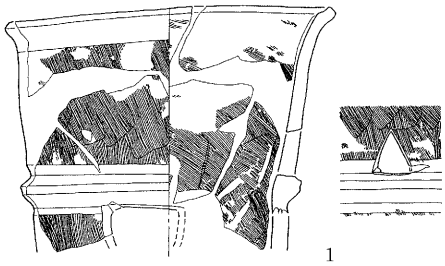
円筒埴輪は五反田古墳系列と富沢窯跡系列の2つの系列の埴輪が共存してまとまって出土している。

五反田古墳系列の円筒埴輪は、スカシ孔が三角形と半円形の組み合わせの2類と、スカシ孔が半円形のみの3a・3b類とがある。

2類は全体の特徴のわかるものはなく、第2段上部から口縁部までのもの（第44図1）と破片のものがあり、外

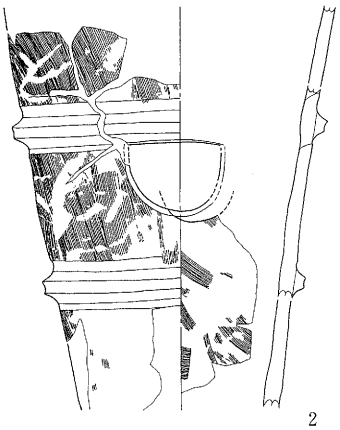
五反田古墳系列

２類



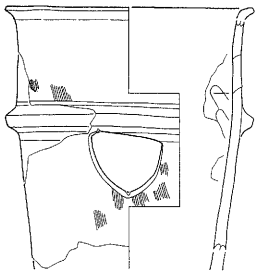
1

3a類



2

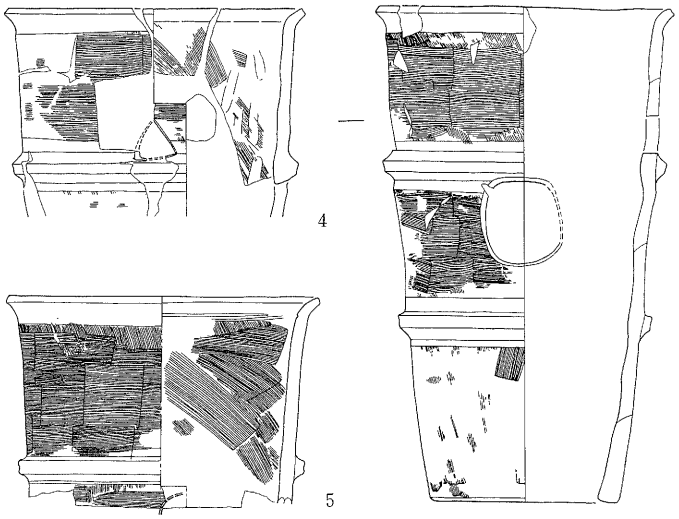
3b類



3

富沢窯跡系列

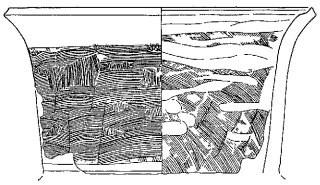
1a類



4

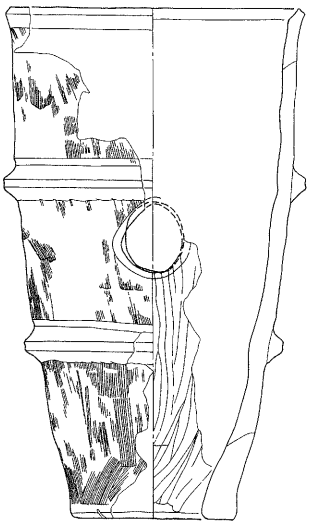
5

1b類



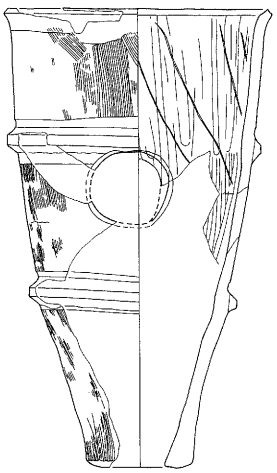
6

4b類



7

4c類



8

第44図　原11号墳出土埴輪

面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は斜方向のハケメである。形態はやや開くもので、口縁部は外反し1b類ほどではないが強くヨコナデされて端部が上方につまみ出され、内面に段がつく。スカシ孔は第２凸帯上部に接して三角形スカシ孔、第２凸帯下部に接して半円形スカシ孔が90°ずらして穿孔されている。

3a・3b類は外面調整が１次調整タテハケのみで、２類と異なり三角形のスカシ孔が省略され、半円形のスカシ孔のみのもので全体の特徴のわかるものはない。3a類は口縁部と底部を欠くが、直線的に開く形態のもの（第44図２）である。スカシ孔は整った半円形で第２凸帯下部に接した位置に穿孔されている。内面調整は斜方向のハケメである。3b類はやや小型のもの（第44図３）で、スカシ孔はやや歪んだ半円形で第２凸帯下部に接した位置に穿孔されている。口縁部は強く外反し、端部は丸く収められている。段の幅は第３段が9.5cmと第２段より幅が狭くなる。内面調整は縦方向のナデである。

富沢窯跡系列の円筒埴輪は、スカシ孔が三角形とやや角張った円形の組み合わせの１類と、スカシ孔が円形のみの4b・4c類とがある。

１類は２条凸帯の円筒埴輪で、形態は僅かに内弯しながら開き、口縁部は外反して端部は平坦で僅かに窪む。1a類は口縁部内面に段が付かないもの（第44図４・５）で、口径23.6～24.2cm、器高39.2cm、底径15.6cmを測る。外面調整は１次調整タテハケ後２次調整Ｂ種ヨコハケされ、内面調整は斜方向のハケメである。スカシ孔は第2凸帯下部に接して三角形スカシ孔、第2凸帯下部に接してやや角張った円形のスカシ孔が90°ずらして穿孔されている。円形のスカシ孔の大きさは6.4～7.0cmである。凸帯は上・側・下面がヨコナデされ、断面形は台形又はM字形である。1b類は破片資料でスカシ孔は確認できないが、外面調整は１次調整タテハケ後２次調整Ｂ種ヨコハケされ、内面調整は斜方向のハケメ（第44図６）である。調整技法は1a類と同様の特徴を有するものであるが、口縁部が強くヨコナデされ端部が上方につまみ出されて内面に段がつくもので、口径24.8cm、第３段の幅が13.0cmを測る。

4b・4c類は２条凸帯の円筒埴輪で、形態がやや内弯しながら開き、口縁部は僅かに外反する。口縁部内面は強くヨコナデされることで内面に段が付き、端部はわずかに窪む。4b類は口径23.6～27.0cm、器高40.6cm、底径13.0cmを測り、外面調整は１次調整タテハケのみで２次調整は見られない（第44図７）。段の幅は第１段が13.5cm、第２段が13.0cm、第３段が13.0～14.0cmを測り、各段ともほぼ同じ幅である。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯下面に接してやや歪んだ円形のスカシ孔が穿孔されている。スカシ孔の大きさは６～6.5cmである。凸帯は上・側・下面がヨコナデされ、断面形は端部がやや窪む台形又はM字形を呈している。第3段の内面には斜方向に２・３～５本のヘラ状工具による沈線が施されているものが多い。

4c類は口径21.4cm、器高36.5cm、底径9.4cmを測り、底径の小さいもの（第44図８）である。4b類より小ぶりの埴輪で、外面調整は１次調整タテハケで２次調整は見られない。段の幅は第１段が13.5cm、第２段が12.0cm、第３段が10.5cmと上へ行くにしたがって幅が狭くなっている。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯の下面に接してほぼ円形のスカシ孔が穿孔されている。スカシ孔の大きさは約６～７cmである。凸帯は上・側・下面がヨコナデされ、断面形は端部が台形を呈している。第3段の内面には斜方向に６本のヘラ状工具による沈線が施されている。

朝顔形埴輪

朝顔形埴輪は五反田古墳系列の頸部凸帯が三角形、スカシ孔が半円形のものと、富沢窯跡系列の頸部凸帯が台形又はM字形で、スカシ孔が円形のものとがあり、ここでは前者を１類、後者を２類としている。

いずれも全体の形態がわかるものはなく、頸部・肩部・口縁部から口頸部にかけての破片が出土している。１類は、頸部凸帯が断面三角形を呈するものである。摩滅のため調整は不明である。２類は肩部の破片で、肩部凸帯は上・側・下面はヨコナデされ、断面がM字形を呈し、その凸帯の下面に接して円形のスカシ孔が穿孔されている。肩部の調整は斜方向のハケメで、３本のヘラ状工具による沈線が施されているものもある。

原13号墳出土埴輪（第45～48図）

円筒埴輪

円筒埴輪は五反田古墳系列と富沢窯跡系列の２つの系列の埴輪が共存してまとまって出土している。

五反田古墳系列のものは半円形スカシ孔の有する２条凸帯の円筒埴輪3a類に近いものである。全体の形態の判るものはないが、第45図１・２はその中でも特徴を有するものである。形態は直線的に外に開くもので、口縁部は短く、鋭く折り曲げられて外反し、端部は平坦か僅かに窪む。口縁部内面には明瞭な段が形成される。口縁部は外側につまみ出すことにより鋭く段を形成しており、端部は水平もしくはやや窪んでいる。外面調整は１次調整タテハケで、２次調整は見られない。内面調整は口縁部から第２段上半にかけて斜方向のハケメが施され、部分的に斜方向のナデが施される。それ以下は斜方向のナデである。口径25.4cmと25.8cmを測り、段の幅は第３段が12.0cmと13.5cm、第２段が11.5cmと第３段より第２段が幅の狭いものである。スカシ孔は第２段上部の第２凸帯下部に接する位置にほぼ整った半円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯は比較的高く、断面形は台形又はM字形を呈する。

富沢窯跡系列のものは、円形スカシ孔を有する２条凸帯の円筒埴輪４・５類と３条凸帯の円筒埴輪７類がある。

４類は全体の形態が内弯しながら開き、口縁部が外反するもので、円筒埴輪4a類がある。第46図１は唯一完形のもので、口径25.2cm、器高39.8cm、底径13.4cmを測る。全体の形態は底部より内弯しながら外に開き、第２凸帯付近でほぼ直立ぎみに立ち上がるもので、口縁部は短く外反し、口縁端部内面にかるい段が形成される。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は口縁部から底部まで縦・斜方向のナデである。段の幅は第３段が14.0cm、第２段が12.1cm、第１段が13.7cmで、第１段と第３段の幅がほぼ同じで第２段がやや狭くなっている。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯下部に接して整った円形スカシ孔が穿孔されている。凸帯の断面形はM字形を呈し、凸帯の幅は広く、高さも高いものである。

５類は底部が欠損しているため、全体の形態は明らかではないが、直線的に外に開き口縁部が外反するものである。これまで５類は細分されていなかったが、今回の調査で大型のものが出土しており、ほぼ直線的に外に開き口縁部が外反するものを5b類と細分している。

5a類は直線的に外に開き、口縁部は短く外反し、端部は平坦か僅かに窪む。口縁部内面にかるい段が形成される（第46図２～４）。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。内面調整は縦方向・横方向のナデが全体的に行なわれている。口径28.2～29.6cmを測り、段の幅は第３段が13.3cm、第２段が12.7cmで、第１・３段より第２段の幅が狭い。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯下部に接して整った円形スカシ孔が穿孔されている。凸帯の断面形はM字形を呈し、凸帯の幅は広く、高さも高いものである。

5b類は全体の形は4a類と類似する特徴を示すものと直線的に外に開くものがあり、口径は33.8cmと37.6cmを測り、高さが45cm前後と大形の円筒埴輪である（第46図５・６）。5a類と比較して口縁部は外反しそのまま端部に至る。口縁端部は水平か僅かに窪む。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。口縁部の調整は幅広くヨコナデされる。内面調整は口縁部が横方向のハケメとヨコナデ、それ以下が縦・斜方向のナデのものと、第１段から第３段まで縦方向のナデ、斜方向のハケメのものがある。段の幅は最上段の第３段が13.3cmと17.1cmと広く、第２段が11.8cmと13.0cmと第３段よりも幅は狭い。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯に接して、又はやや離れて整った円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯の断面形は台形か僅かに側面が窪むM字形で、高さもあまり高くなく、鋭さは見られない。６はスカシ孔とほぼ90°ずれた第３段上部の位置に直径１cmの円形の小孔１個が焼成以前に穿孔されている。

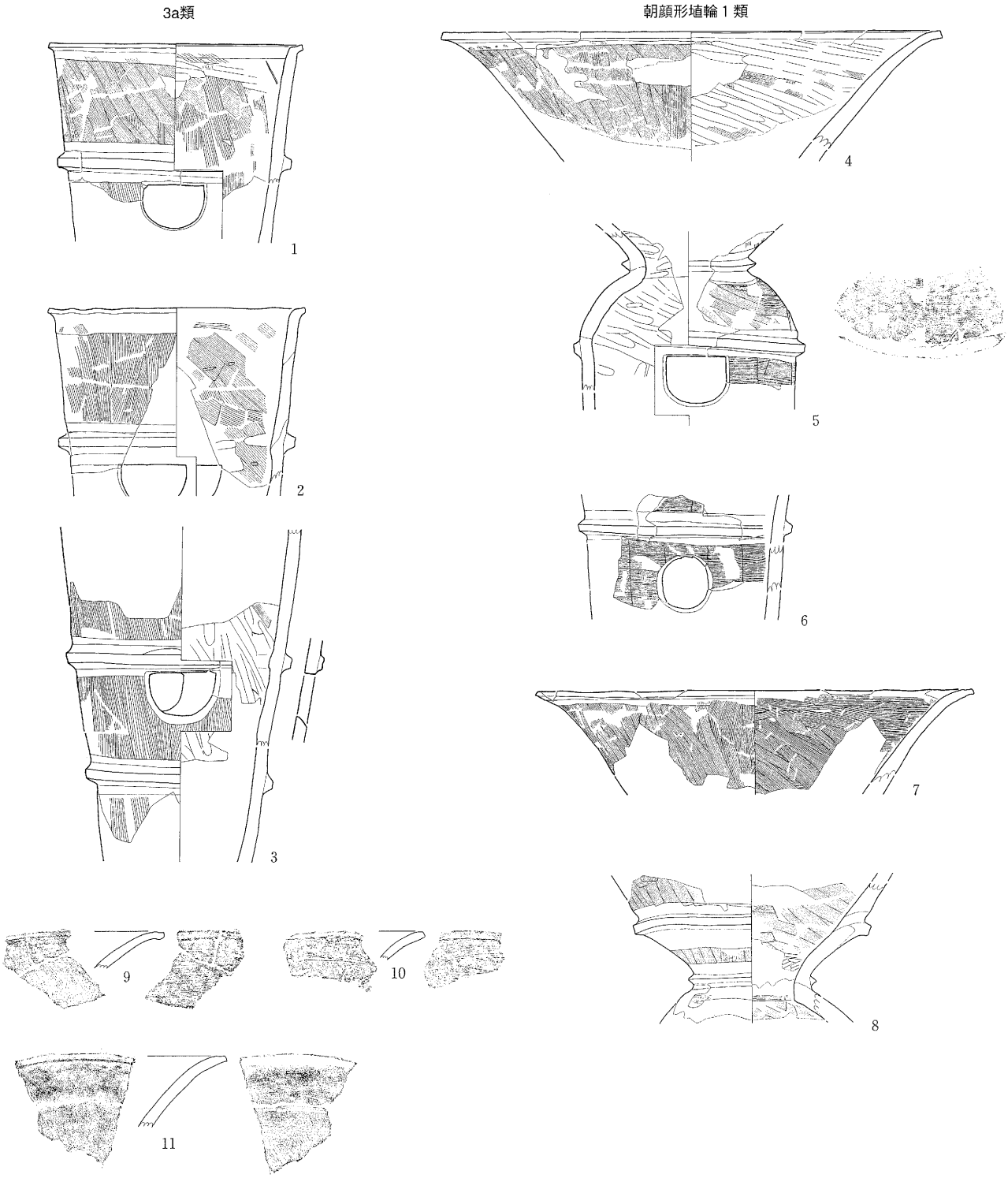
７類は３条凸帯の円筒埴輪である（第46図７）。底部を欠くが、ほぼ全体の形態の判るもので、口径37.0cm、器高50.5cm以上を測る。形態はやや外に開き、口縁部がゆるやかに外反するもので、そのまま口縁端部に至り、端面は水平となる。外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は口縁部が横方向のハケメ後縦方向のナデ、それ以

下の第1段から第3段は縦方向のナデが施されている。第1～第3凸帯が付けられた内面の部分には幅約2cmの凸帯内面ナデが横に一重巡っている。段の幅は、第2段と第3段が12.5cmと13.9cmとほぼ同じくらいの幅であるが、第4段の幅は15.8cmと広くなっている。スカシ孔は第3凸帯直下に位置し、ほぼ凸帯に接するように整った円形のスカシ孔が穿孔されている。凸帯の断面形は台形を呈し、高さもあまり高くなく、鋭さは見られない。

五反田古墳系列

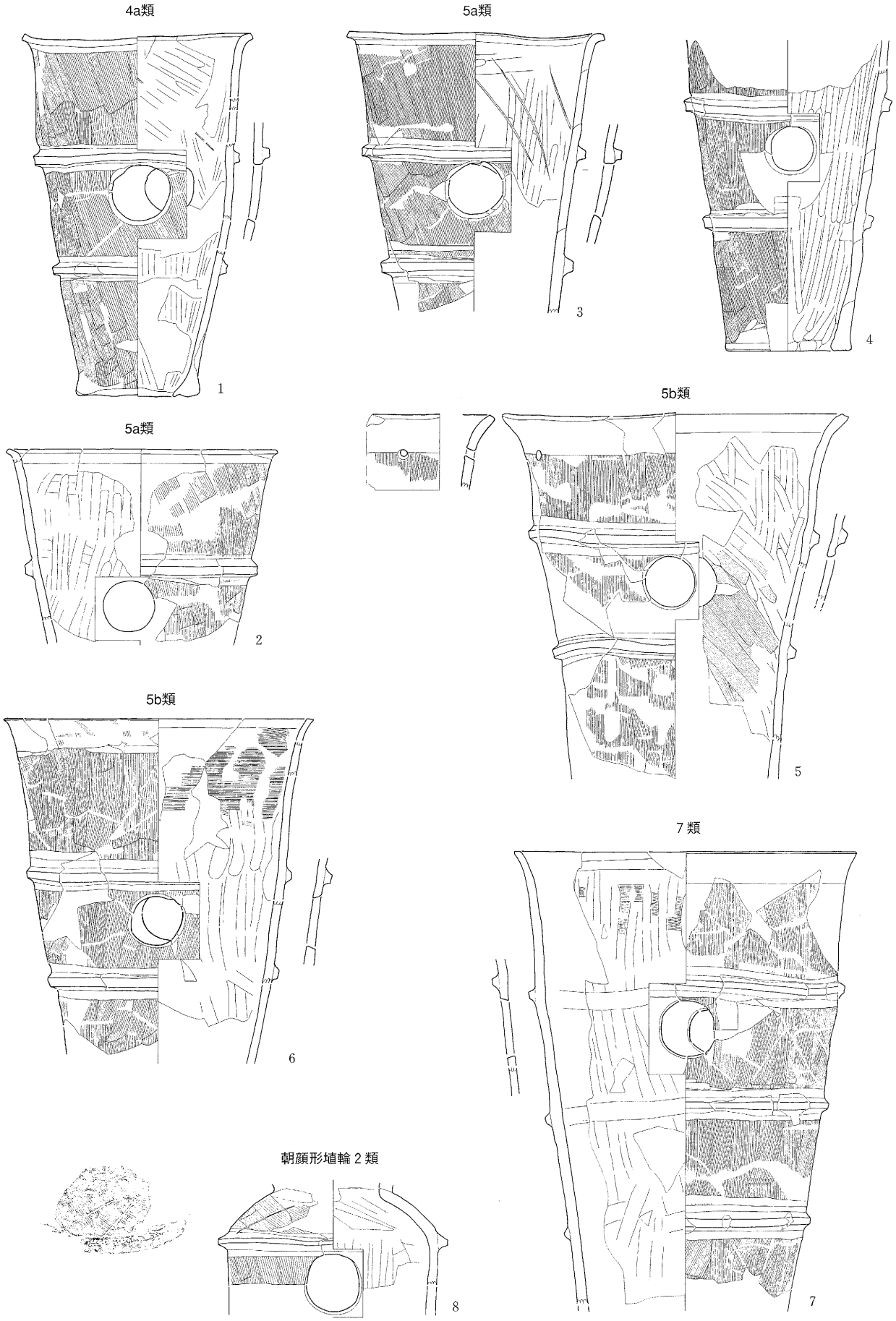
3a類

朝顔形埴輪1類



第45図　原13号墳出土埴輪（1）

富沢窯跡系列



第46図　原13号墳出土埴輪（2）

朝顔形埴輪

朝顔形埴輪１類は、五反田古墳系列で頸部凸帯の断面形が三角形を呈し、スカシ孔は円筒埴輪と同様に半円形のスカシ孔が穿孔されているものである。出土した破片の点数も多く、ある程度その特徴が明らかとなってきているが、全体の形態はまだ不明である。口縁部は大きく朝顔形に開き、口径44.0cmのものと口径50.0cmのものがある。

第45図４と５は接合されなかったが口縁部から円筒部上半にかけてのもので、同一個体の可能性が考えられる。口縁部はさらに大きく朝顔形に開き、口縁端部近くの内面に段を有し、端部はやや窪む。７と異なる部分は口縁部の内面調整が斜方向のハケメ後斜方向のナデ調整が主体を占めることである。頸部の凸帯は断面形が鋭い三角形を呈している。肩部は外面が横・斜方向のハケメ調整、円筒部と肩部の境にある凸帯は断面形が台形あるいは台形に近いM字形で、その直下に半円形のスカシ孔を穿孔している。肩部外面に「八」状のヘラ状工具による沈線が施されている。円筒部の調整は、外面調整が２次調整Ｂ種ヨコハケで、内面は頸部から円筒部にかけて横・斜方向のナデ調整されている。

第45図６は朝顔形埴輪の円筒部と考えられ、外面調整は２次調整Ｂ種ヨコハケで、円筒部の凸帯したに円形スカシ孔が穿孔されている。この埴輪は円筒埴輪かもしれないが、２次調整Ｂ種ヨコハケが施されているもので、第45図５の円筒部と同じ調整を施していることからここでは朝顔形埴輪１類としておく。

第45図７と８も接合されなかったが口縁部から肩部上半にかけてのもので、同一個体の可能性が考えられる。口縁部の端部近くの内面に段を有し、端部はやや丸く収められているか平坦となる。口縁端部は内外面とも強くヨコナデされ、外面に軽い段を形成する。口縁部から頸部にかけての外面は１次調整タテハケ、内面は口縁部から屈曲部にかけて横・斜方向のハケメ調整がほぼ全面に施され、屈曲部から頸部にかけて横・斜方向のハケメ後ナデ調整される。肩部の外面は摩滅されているが、横・斜方向のハケメ、内面が斜方向のハケメもしくはナデである。肩部上半以下は欠損しているため不明であるが、半円形のスカシ孔がつくものと推察される。凸帯は屈曲部の凸帯は台形で、頸部の凸帯は断面形が鋭い三角形を呈している。

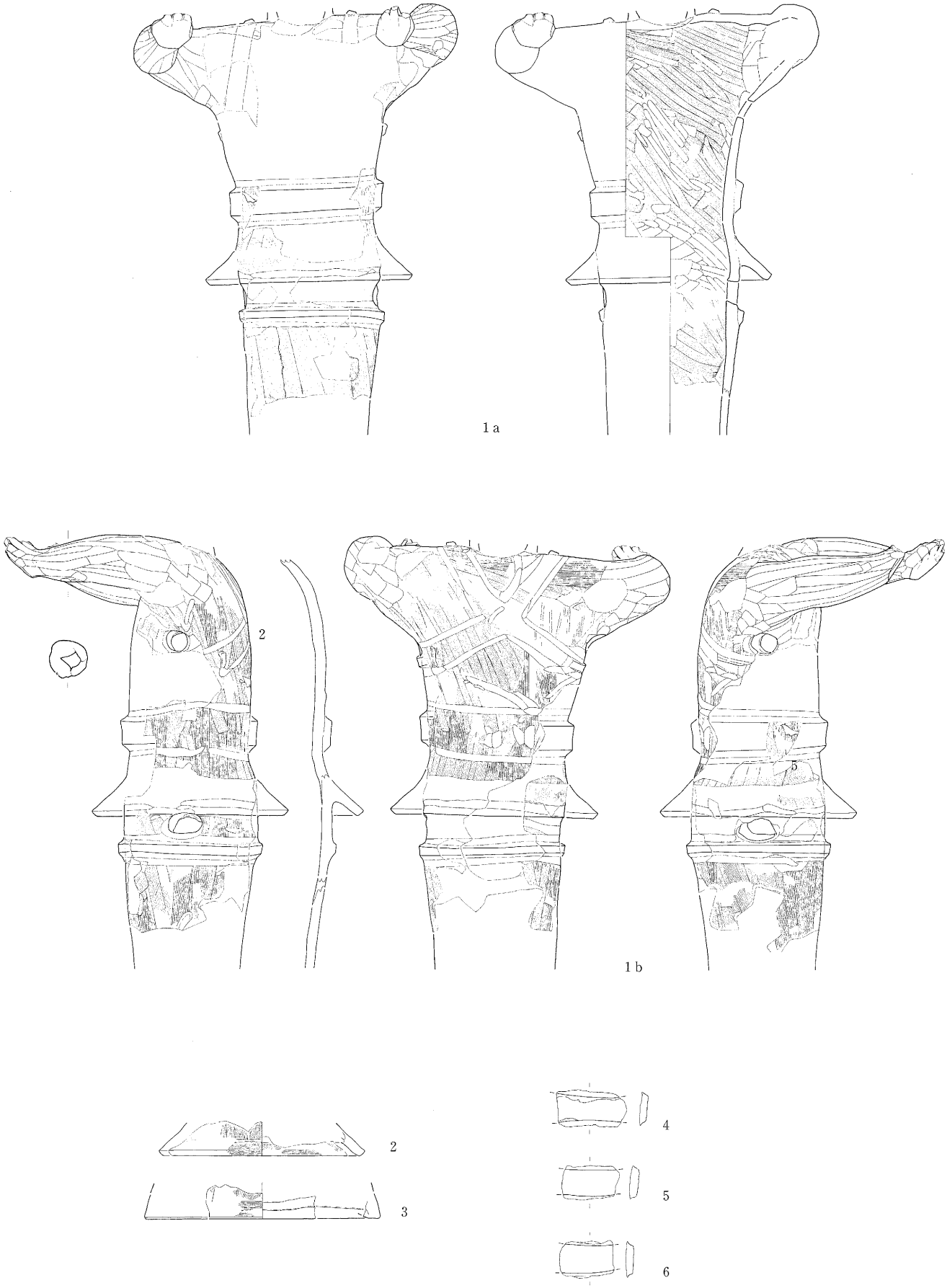
朝顔形埴輪２類は、富沢窯跡系列で、頸部凸帯は台形と推定され、円形のスカシ孔が穿孔されるものである。全体の形態は不明であるが、肩部から円筒部にかけてのものがある。肩部の外面調整は斜方向のハケメ、内面調整は斜方向のナデである。円筒部との境にある凸帯は高く、その直下に円形のスカシ孔が穿孔されている。円筒部の外面調整は１次調整タテハケのみで、内面調整は縦方向のナデである。肩部外面に３条のヘラ状工具による沈線が施されている。

人物・動物埴輪

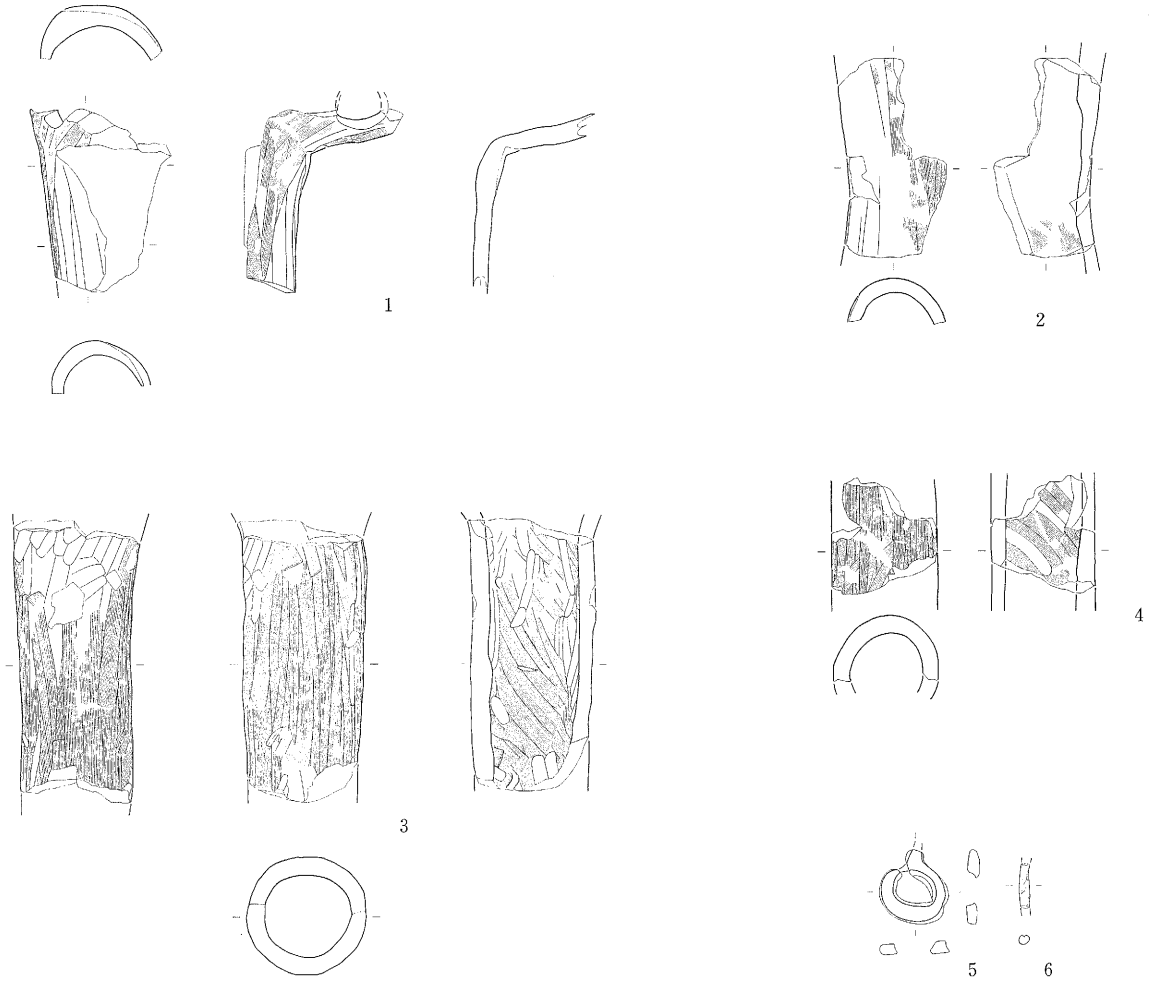
人物埴輪は13号墳周溝の南側b・c区の境付近、堆積土３層から１点が円筒埴輪や動物埴輪の脚部とともに出土しており、頭部を欠損するがほぼ全体の形の判るものである（第47図１）。

人物埴輪は肩部から円筒部まで残存しており、ほぼ全体の形が明らかなもので残存する大きさは43.8cmを測る。両肘を曲げながら両腕を前方に突き出した形をしており、手のひらを下にし、手首をやや斜め前方に上げ指はまっすぐ伸ばすポーズの上半身像の人物埴輪である。腰部には幅の広いベルト状の凸帯が巡っている。さらに凸帯によって両肩から脇をとおり背中で×状に襷掛けをした女性像の巫女である。この襷部分やベルト状の凸帯は殆ど欠落しており、貼り付ける前の１次調整タテハケが見られ、凸帯の両側を調整した横方向のナデの範囲が二重に観察される。腰部分の凸帯より下方にはハの字状に開くスカート状のものもすべて欠落している。スカート状に開く部分の下にある凸帯を境に円筒部と人物部に分かれ、円筒部は１段でやや外傾している。凸帯の幅は約２cm、高さ６mmで、凸帯の断面形は凸帯上部が突き出たM字形をしている。

スカシ孔は両腕の脇のすぐ下に楕円形スカシ孔が１対、スカート状部分と円筒部凸帯の間の側面に楕円形スカシ孔１対が穿孔されている。脇下の楕円形スカシ孔の大きさは、左側で2.4×3.0cm、右側で2.5×3.2cmを測り、円筒



第47図　原13号墳出土埴輪（3）



第48図　原13号墳出土埴輪（4）

部の側面の楕円形のスカシ孔は左側で2.9×4.7 cm、右側で2.8×4.8 cmを測る。

両腕の製作は、肘から肩の部分は中空となっており、肘から手にかけては四角い棒状のものに粘土を巻きつけて製作されており、手首から指にかけては中実のものとなる。指については先端が欠けているため不明となっている。

埴輪は正面の胸から腹、両脇の部分にかけては欠損しているため不明なところが多いが、背中の部分はほぼ残存している。

人物埴輪の調整については、両腕とそれが接続されている肩部までの外面調整はヘラケズリが行われ、それ以外は縦方向のハケメが施されている。背面調整は首の付け根から背中上部にかけては横方向又は斜方向のハケメであり、それより下部の調整は斜め方向又は縦方向のハケメが施され、全体的に細かなハケメ調整であり丁寧な仕上がりとなっている。内面調整は斜方向のハケメ、ナデが右下から左上の方向に施され、腕との接続部分は幅の広いナデが施されている。

動物埴輪は周溝南側b・c区の境付近から人物埴輪と共に、動物の脚部の破片と考えられるもの４点が出土している（第48図１～４）。これらの埴輪は主に周溝の狭い範囲から出土しており、いずれも破片での出土でのため全体の形状は不明である。これらの動物埴輪は馬形埴輪１点の同一の破片と考えられる。

第48図３は比較的大きな脚部の破片で、残存長22.5cm、残存する最大幅10cm、厚さ1.1～1.8cmを測る。脚部の

製作過程は半円形の筒状に造り、２つに合わせて製作したもので、接合面より剥がれている。外面調整は縦方向のナデ後細かい縦方向のハケメ、内面調整も細かい斜方向のハケメ、縦方向のナデが行なわれている。脚部は筒状を呈しているが、一方の幅が大きく外側にやや広がっていることから腹部あるいは胸部の付け根部分に近いものと考えられる。

第48図１も同様のものであるが、さらに下腹部・胸部の一部と考えられる胴部と脚部の破片である。全体に遺存状態は悪く調整は不明な部分も見られるが、外面及び内面の調整はＳ－21と同様である。胴部には楕円形のスカシ孔が穿孔されており、推定の大きさ約４cmと小さなものである。また馬形埴輪の鐙部分が剥離したもの（第48図５）もある。

原６号墳出土埴輪（第49図）

円筒埴輪

円筒埴輪は五反田古墳系列と富沢窯跡系列の２つの系列の埴輪が共存してまとまって出土している。

五反田古墳系列の円筒埴輪は、半円形スカシ孔の有する2条凸帯の円筒埴輪3a・3c類がある。

３a類は３点あり、１は唯一全体の形態の判るもので、口径22.4cm、底径15.3cm、器高39.3cmを測る。底部より直線的に外に開くもので、口縁部が短く外反し端部は丸く収められている。口縁部内面には段が形成される。外面調整は１次調整タテハケで、２次調整は見られない。内面調整は第３段が横・斜方向のハケメ後縦方向のナデ、第１段と第２段は縦・斜方向のナデである。スカシ孔は第２段上部に位置し、第２凸帯下部に接して整った半円形スカシ孔が穿孔されている。段の幅は第３段が13.1cm、第２段が12.2cm、第１段が13.9cmを測り、第2段の幅がやや狭くなる。

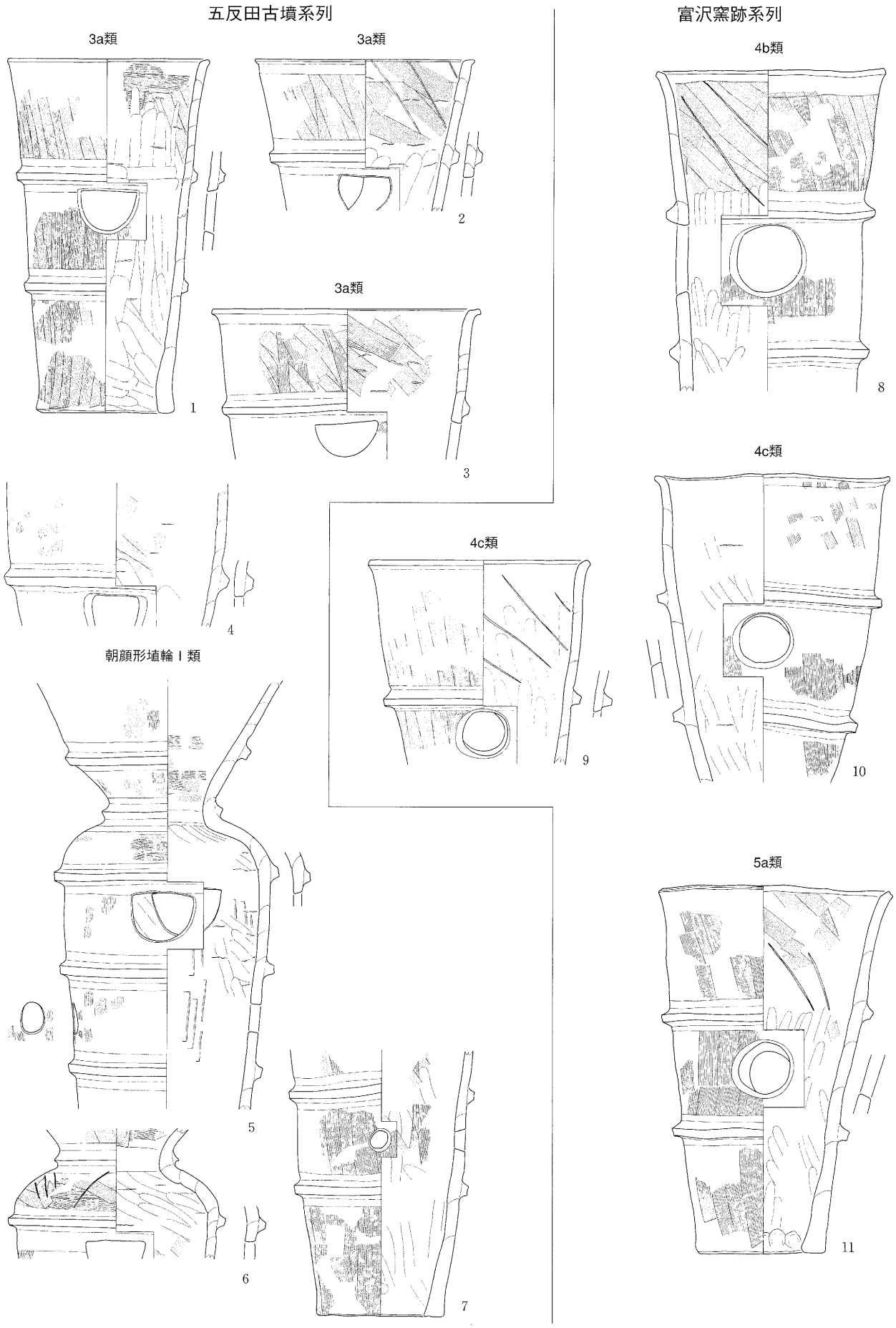
２と３も形態は同じであり、口縁部は１よりも強く外反し、内面の段も明瞭である。復元の口径は２が24.2cm、３が29.6cmである。外面調整は１と同じであるが、内面調整は２が第３段が斜方向のハケメ、それ以下は縦方向のナデ、３が斜方向のハケメである。段の幅は２・３も11.0cmと11.4cmと１よりも狭くなっている。スカシ孔は欠損している部分が多いため整った半円形かどうかは不明である。４は3c類と考えられ、第２段上半から第３段にかけての破片で口縁部を欠損している。

富沢窯跡系列の円筒埴輪は、円形スカシ孔の有する２条凸帯の円筒埴輪4b・4c類・5a類がある（第49図８～11）。

4b類は全体の判るものはないが、やや内弯気味に開き、口縁部が僅かに外反するもの（第49図８）である。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。内面調整は第３段が斜方向のハケメ、第１段から第２段が縦方向のナデである。段の幅は第３段が16.4cm、第２段が15.3cmで、やや第２段の幅が狭くなる。スカシ孔は整った円形のもので、大きさは8.2～8.6cmと大きなもので、第２凸帯下部に接して穿孔されている。第３段の内面に斜方向に２条のヘラ状工具による沈線が施されている。

4c類も全体の判るものはないが、やや内弯気味に開き、口縁部が僅かに短く外反するもの（第49図９・10）である。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。内面調整は第３段が斜方向のハケメ、第１段から第２段が縦方向のナデである。段の幅は第３段が13.9cmと15.7cm、第２段が13.1cmで、やや第２段の幅が狭くなる。スカシ孔は6.3～6.8cmとやや小型のものとなり、穿孔される位置も第２凸帯下部に接する位置から段の中央に近い位置となる。第３段の内面に斜め方向に４条のヘラ状工具による沈線が施されるものもある。

5a類は全体の形態が判るもの（第49図11）で、直線的に外に開き、口縁部が僅かに外反し内面にかるい段が形成される。口径25.8cm、底形13.9cm、器高40.9cmを測る。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整はみられない。内面調整は第３段が斜方向のハケメ、第１段から第２段が縦方向のナデである。段の幅は第３段が14.8cm、第２段が12.6cm、第１段が13.4cmと第３段の幅がやや広くなる。円形スカシ孔は6.8～7.0cmとやや小型のものとなり、穿孔される場所も第２段の中央に近い位置となる。第３段の内面に斜方向に２条のヘラ状工具による沈線が施



第49図　原6号墳出土埴輪

されている。

朝顔形埴輪

朝顔形埴輪は、五反田古墳系列で頸部凸帯の断面形が三角形を呈し、スカシ孔は円筒埴輪と同様に半円形のスカシ孔が穿孔されている１類が２点出土している（第49図５～７）。

５は口縁部と底部を欠くが、ほぼ全体の形態が判るもので、口縁部下半から第１段の上半部のものである。円筒部は３段で、肩部は張り、頸部は括れて断面三角形の凸帯が付き、口縁部は朝顔形に開いている。外面調整は、口縁部下半から頸部にかけて１次調整タテハケ、肩部は横・斜方向のハケメ、円筒部は１次調整タテハケで、２次調整は見られない。内面調整は、口縁部から頸部にかれて横・斜方向のハケメ、肩部から円筒部にかけて斜方向のナデ・横方向のヘラナデである。屈曲部凸帯は台形を呈し、円筒部凸帯も台形又はM字形を呈する。第３段上部に半円形のスカシ孔が第３凸帯に接するように穿孔されており、第２段中央に90°ずらした位置に円形スカシ孔が穿孔されている。

６・７は頸部から底部のもので、接合されていないが同一個体と考えられている。５と同様の形態であり、円筒部は３段で、肩部は張り、頸部は括れて断面三角形の凸帯が付いている。頸部凸帯は上方が強くヨコナデされてやや下方に屈曲する。外面調整は５と同じ調整であるが、内面調整で斜・縦方向のハケメの違いがある。半円形のスカシ孔の位置は５と同じであり、第２段に穿孔された円形のスカシ孔の大きさは小さいものである。

(2) 出土埴輪の編年的位置

原遺跡において、比較的埴輪が多く出土している円墳は上記のとおりである。それ以外の円墳からも円筒埴輪・朝顔形埴輪は出土しているが、断片的でありまとまりとなっていない。ここでは３つの円墳から出土した埴輪の特徴について、藤澤氏の埴輪の編年と比較をしながら、原遺跡出土の埴輪の編年的な位置づけについて考えてみたい。

埴輪の編年については、仙台市太白区大野田に所在する大野田古墳群の春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書の中で、大野田古墳群とその周辺においてこれまで発掘調査により蓄積された埴輪の資料を基に、裏町古墳・大野田１号墳・大野田２号墳・富沢窯跡出土の埴輪や共伴する須恵器・土師器の検討を行い、１段階→2a段階→2b段階へ変遷する郡山低地の埴輪編年案が示されている。

１段階の埴輪は、主軸約50mの前方後円墳である裏町古墳から出土した円筒埴輪や朝顔形埴輪で、大きく裏町古墳Ａ群と裏町古墳Ｂ群から構成されている。

裏町古墳Ａ群は半円形スカシ孔の五反田古墳系列の円筒埴輪１類・２類、朝顔形埴輪１類からなる。円筒埴輪１類と２類の相違は、外面調整は１類が２次調整Ｂ種ヨコハケを有するのに対し、２類は１次調整タテハケのみで、他の特徴は一致する。形態は全体の特徴を知りうるものはないが、僅かに開く形の２条凸帯のもので、底径11～13cm、口径24cm前後、器高約40cmと考えられる。口縁部は外反し、強くヨコナデすることにより口縁部内面に段を作り出す。凸帯は上・側・下面とも強くナデ調整され、側面が僅かに窪む台形を呈している。凸帯内面ナデは内面調整後に横方向に行われている。スカシ孔は半円形で、幅6.3～6.7cmで第２凸帯の直下に上辺を切り込んでいる。

朝顔形埴輪１類は全体の特徴を知りうるものは出土していないが、口縁部の形状、肩部の内面調整において円筒埴輪１類と共通する特徴が有する。口縁部の端部近くの内面に段を有し、屈曲部から口縁部にかけての外面は１次調整タテハケ、内面調整は上半が横方向のハケメ、下半が横及び斜方向のナデである。屈曲部の凸帯は上・側・下面とも強くナデ調整されているが、上面は中程で屈曲する。頸部凸帯は三角形を呈し、内面調整はヨコナデである。肩部は外面調整がタテハケ、内面調整は斜方向のハケメ、ナデ調整が観察される。

裏町古墳Ｂ群は円形スカシ孔の富沢窯跡系列の円筒埴輪３類と朝顔形埴輪２類からなる。円筒埴輪３類は形態、口縁部形状、内面調整、スカシ孔の形状、ヘラ記号において円筒埴輪１・２類と異なり、明確に区分するとされている。2条凸帯で僅かに開く形態をなすが、1・２類より開き方は小さい。底径17～20cm、口径26.5～29cm、器高

44～47cmを測る。各段の幅は第３段が13cm前後、第２段が14～16cm、第１段が16～18cmと上に行くに従って小さくなる。口縁部形状は僅かに外反し、そのまま端部に至り、端部は僅かに窪む。外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。内面調整は縦方向のナデが行われるが、第３段が斜方向のハケメ後にナデで、ナデ調整の粗密により部分的にハケメの残り方に差があり、ナデ調整しか見られないものもある。凸帯は上・側・下面とも強くナデ調整され、側面がM字形あるいは僅かに窪む台形のものである。１・２類と異なり凸帯内面ナデは見られない。スカシ孔は円形で、第２凸帯のヨコナデの境付近から穿孔され、段の上方にある。大きさは幅・高さとも７～８cmを測る。

朝顔形埴輪２類は全体の特徴を知りうるものは出土していないが、口縁部の形状、肩部の内面調整において円筒埴輪３類と共通する特徴を有する。口径44cm前後、頸部径16cm前後を測る。頸部より上の外面調整はタテハケで、肩部はタテハケ後横方向のハケメを施している。内面調整は屈曲部から口縁部が横方向のハケメが主体を占めるものと横方向のハケメと屈曲部から口縁部がナデ調整主体のものがある。凸帯は頸部・屈曲部ともに上・側・下面とも強くナデ調整されるM字形で、頸部凸帯は台形に近い形状を呈する。

裏町古墳の埴輪は、Ａ群とＢ群の異なる系統の埴輪が同時に樹立されていたものと考えられており、須恵器の器台、樽形瓶・台付壺の一群が伴っていることから須恵器編年のTK208型式の段階ものと考えられ、裏町古墳の埴輪の時期は５世紀後半の年代が考えられている。

２段階は大野田１号墳・２号墳から出土した円形スカシ孔の富沢窯跡系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪からなる。大野田１号墳と２号墳出土の埴輪の相違については、円筒埴輪では凸帯の形状が２号墳より１号墳のものが下方へ垂れ下がりが大きくなること、最上段の幅が２号墳より１号墳のものがより幅広くなることがあげられる。また朝顔形埴輪では、肩部の外面調整が２号墳のものが２次調整のヨコハケされているのに対して、１号墳のものが１次調整タテハケで、肩部が長胴化していくことなどがあげられ、大野田２号墳出土の埴輪を2a段階、大野田１号墳出土の埴輪を2b段階とし、2a段階→2b段階へと変遷することが考えられている。さらに大野田古墳群については、土地区画整理事業や都市計画道路の開発に伴い、円墳や帆立貝式前方後円墳などが多く調査され、新しい資料が蓄積されてきており、大野田５号墳・10号墳・11号墳、鳥居塚古墳などを2a段階、大野田８号墳を2b段階に位置づけられている。２段階の年代については、2b段階の大野田１号墳出土の埴輪の年代について、共伴とする資料からは明確な時期を決定できないとされているが、2b段階の埴輪が円筒埴輪の製作技法や６世紀中葉で関東地方の円筒埴輪で６世紀代の埴輪に見られる底径の矮小化、第１段の長大化、凸帯の低平化という特徴が見られないとのことから６世紀中葉までは降らない可能性が高く６世紀中葉以前におさまると考えられており、編年された埴輪の時期については、１段階を５世紀後半、2a段階を５世紀末から６世紀初め、2b段階を６世紀前半の年代と考えられている。

原11号墳出土の埴輪：半円形スカシ孔の五反田古墳系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪と円形スカシ孔の富沢窯跡系列の円筒埴輪との両者が共存している。

五反田古墳系列の円筒埴輪は、スカシ孔が三角形と半円形の組み合わせの２類と、スカシ孔が半円形のみの3a・3b類とがある。

円筒埴輪２類と３a・３b類は、１次調整のタテハケのみで、２次調整のＢ種ヨコハケは見られない。全体の形態が判るものはないが、僅かに開く２類・3a類とやや小型でやや湾曲ぎみに開く3b類とがある。口縁部の形状は、外反しながら端部に至り、強くヨコナデ調整されることにより内面に段がつくり出される２類と、強く短く外反し端部に至る3b類とがある。２・3a類のスカシ孔は整った半円形ものであり、3b類のスカシ孔はやや歪んだものである。凸帯は上・側・下面とも強くヨコナデされ、断面形はM字形を呈する。

円筒埴輪２類と3a類は、僅かに開く形態と口縁部の形状が裏町古墳出土の円筒埴輪１類と２類に類似している。相違点としては、原11号墳の円筒埴輪が１次調整タテハケのみであるのに対し、裏町古墳Ａ群の円筒埴輪は１次調

整タテハケ後２次調整Ｂ種ヨコハケされる１類と１次調整タテハケのみの２類の両者がある。さらに11号墳の円筒埴輪２類には三角形スカシ孔が第３段下部に穿孔されており、裏町古墳の円筒埴輪には見られないものである。このほか11号墳のものには形態がやや小型でやや湾曲ぎみに開き、口縁部が短く外反して端部に至り、やや歪んだ半円形スカシ孔の3b類も裏町古墳には見られない形態のものである。

朝顔形埴輪は全体の形態は不明で、頸部外面の凸帯が断面三角形を呈する１類が少量出土している。

富沢窯跡系列の円筒埴輪は、２次調整Ｂ種ヨコハケの1a・1b類と１次調整タテハケのみで２次調整と三角形スカシ孔が見られない4b・4c類とがある。1a類は第３段下部に三角形のスカシ孔を有するものであり、1b類も破片のためスカシ孔が明らかでないがこの類と考えられている。

三角形のスカシ孔を有する円筒埴輪は、円形スカシ孔の1a類と半円形スカシ孔の２類の両者に組み合わせをもつものであり、この組み合わせのある円筒埴輪は裏町古墳Ｂ群の円筒埴輪３類には見られないもので、川西編年のⅣ期の古い要素を有するものである。

２次調整Ｂ種ヨコハケを有するものは、11号墳では富沢窯跡系列の円筒埴輪1a類と1b類に見られる技法で、裏町古墳においては富沢窯跡系列の裏町古墳Ｂ群の円筒埴輪には見られず、五反田古墳系列の裏町古墳Ａ群の円筒埴輪１類に見られる点が異なっている。

裏町古墳Ｂ群の円筒埴輪３類は最上段の幅が小さくなり、スカシ孔が整った円形で大きさも７～８cmと大きなものである。11号墳の1a・4b・4c類は器高が36.5～40.6cm、4c類は裏町古墳Ｂ群の円筒埴輪３類の段の幅と同じように最上段に行くに従い小さくなる点は共通する部分もあるが、1a・4b類では最上段の段の幅が大きいものもあり、スカシ孔もやや方形に近い円形や歪んだ円形のものなど異なる要素がある。

これらのことから、11号墳出土の円筒埴輪は多様であり、三角形スカシ孔など古い要素を持つもの（1a・1b・２類）、裏町古墳Ａ群２類とほぼ同じ要素を持つもの（3a類）、新旧の要素や別系統の要素を併せ持つもの（3b・4b・4c類）があり、古い要素とほぼ同じ要素を持つ両者の要素から、11号墳出土の埴輪は裏町古墳出土の埴輪とほぼ同時期かそれよりも先行すると考えられ、１段階でも古い段階に位置づけられている。

原６号墳出土の埴輪：半円形スカシ孔の五反田古墳系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪と円形スカシ孔の富沢窯跡系列の円筒埴輪の両者が共存している。

五反田古墳系統の円筒埴輪は直線的に開く形態で、口縁部が短く外反し、13号墳の口縁部に比べさらに短く僅かに外反する3a・3c類があり、口縁部の形状は13号墳よりも退化していく傾向にあるものと考えられる。段の幅は第３段が11.0～13.1cm、第２段が10.2cm、第１段が13.9cmを測り、第２段の幅がやや狭くなる。

五反田古墳系列の朝顔形埴輪は1類があり、ほぼ全体の形態の判るものである。頸部凸帯は三角形を呈し、肩部は13号墳の朝顔形埴輪と比べやや扁平なものとなる。肩部の外面調整は横方向のハケメであり、円筒部の外面調整は１次調整タテハケのみで、２次調整は見られない。13号墳の朝顔形埴輪は肩部が丸み帯びており、外面調整は横方向ハケメであり、円筒部の外面調整は2次調整Ｂ種ハケメである。

富沢窯跡系列の円筒埴輪は、やや内弯気味に開く形態で、口縁部が僅かに短く外反している4b・4c類と、直線的に外に開き口縁部が外反する5a類がある。口径24.1～25.8cm、段の幅は第３段が13.9～16.4cm、第２段が12.6～15.3cmで、第２段の幅が第３段より狭くなる。口縁部の形状も僅かに短く外反するもので、13号墳の口縁部形状と比べより短く外反するもので退化していく傾向にあるものと考えられる。円形のスカシ孔も整ったものであるが、大きさが6.3～7.0cmとやや小型のものが多くなり、穿孔される位置も第２凸帯下部に接する位置から段の中央に近い位置となる。凸帯については上幅が狭いものが多く見られ、やや下方に垂れ下がってくる傾向にある。

このように６号墳出土の埴輪は13号墳出土の円筒埴輪・朝顔形埴輪とほぼ同じような特徴をもつものであるが、13号墳に見られる２次調整Ｂ種ヨコハケは見られず、円筒埴輪の口縁部形状や凸帯・円形スカシ孔の形状や大きさ、

穿孔される位置などに相違が認められ、されに退化していく傾向にあることから、13号墳よりは後出であると考えられ、2a段階の大野田2号墳段階に位置づけられている。

原13号墳出土の埴輪：半円形スカシ孔の五反田古墳系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪と円形スカシ孔の富沢窯跡系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪の両者が共存しているほか、人物埴輪や動物埴輪が出土している。

五反田古墳系列の円筒埴輪は3類のものがあり、全体の形態は直線的に開き、口縁部が短く、鋭く折り曲げられて外反している。全体の形態は11号墳円筒埴輪2・3a・3b類や裏町古墳A群円筒埴輪1・2類が類似しているが、11号墳出土の円筒埴輪2類は、口縁部の形状や第3段下部に三角形スカシ孔を有する点で大きく異なっており、裏町古墳の円筒埴輪1類は1次調整タテハケ後2次調整B種ヨコナデされ、13号墳には見られない特徴である。口縁部の形状については、11号墳や裏町古墳の口縁部は外反し、内面が強くヨコナデされて口縁端部が上方につまみ出されて内面に段を形成するのに対し、13号墳の円筒埴輪3a類の口縁部は短く鋭く折り曲げられたように外反する特徴がある。

朝顔形埴輪1類は、全体の形態は不明であるが、屈曲部から口縁部にかけて大きく開く朝顔形で、口縁端部内面に段がつく。頸部凸帯は断面形が鋭い三角形を呈し、肩部は丸みをもち円筒部は円柱形である。外面調整は口縁部から頸部までは1次調整タテハケであり、肩部は2次調整のヨコハケ、円筒部は2次調整B種ヨコハケされている。また、第45図6のように円筒部に2次調整B種ヨコハケされ、円筒部第2段のやや中央に寄った位置に円形スカシ孔が穿孔されているものもある。これは朝顔形埴輪の円筒部第2段にやや小さな円形スカシ孔と第3段に半円形スカシ孔が組み合って穿孔された6号墳出土の朝顔形埴輪と同じものと推定される。

富沢窯跡系列の円筒埴輪は4a・5a・5b類がある。

4a類はやや内弯気味に開く形態で、口縁部は短く外反し、口縁部内面にかるい段が形成される。外面調整は1次調整タテハケのみである。5a類は直線的に開く形態で、口縁部の形状やその他の特徴は4a類と同じである。5b類は形態的には5a類と同じ特徴をもつものであるが、口径も大きく、大型の2条凸帯の円筒埴輪であると考えられる。これまでこのタイプの円筒埴輪は、原遺跡では類例がないが長胴化しているものとはやや形態が異なっている。

4a類・5a類の第3段の幅は13.3～14.0cmと裏町古墳B群の円筒埴輪3類よりも大きく、段の幅は11号墳の4b類と類似している。口縁部の形状は裏町古墳や11号墳の口縁部形状とは異なっており、短く外反して口縁端部内面にかるい段を形成する特徴を有し、五反田古墳系列の円筒埴輪とも共通する要素である。

スカシ孔は整った円形であり、大きさは5.7～7.0cmで裏町古墳B群の円筒埴輪より小さくなり、凸帯の幅や高さも11号墳・裏町古墳の凸帯と比べ小さく、低くなる傾向となる。

朝顔形埴輪2類は、全体の形態は不明で僅かに肩部の破片がある。肩部の調整は1次調整タテハケ後2次調整のヨコハケであり、円形スカシ孔が穿孔されている。

これらのことから、13号墳出土の五反田古墳系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪及び富沢窯跡系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪は、11号墳出土の円筒埴輪や裏町古墳出土の円筒埴輪・朝顔形埴輪と比べ、三角形スカシ孔が見られないことや口縁部の形状が短く外反するもので、2a段階である大野田2号墳段階と考えられている6号墳出土の円筒埴輪の口縁部形状と類似している。しかし6号墳出土の円筒埴輪・朝顔形埴輪には、2次調整B種ヨコハケは見られず、13号墳や11号墳・裏町古墳出土の埴輪には、系列を異にする円筒埴輪や朝顔形埴輪の違いはあるものの2次調整B種ヨコハケが認められる。また、円筒埴輪の口縁部の形状については、13号墳のものと比べ6号墳のものがより短く外反するものへと変化していくと考えられる。スカシ孔についても11号墳・裏町古墳出土の半円形スカシ孔の高さが大きく整っているものから、やや小さくなる傾向にあり、6号墳ではよりそれが顕著となってくる

以上のことから13号墳は6号墳よりも先行する時期のものであると考えられ、13号墳出土の埴輪の時期については、1段階の裏町古墳段階と同じ時期かそれよりはやや新しい時期と考えられることから、ここでは1段階の新し

い段階に位置づけておきたい。

人物埴輪についは女性像の巫女の半身のもが１体出土している。これまで県内では丸森町の台町103号墳からヨコハケが部分的に認められる円筒埴輪と共に壺を捧げる巫女の半身像の人物埴輪が出土しており、５世紀後半から５世紀末と考えられているものが有名である。

13号墳出土の人物埴輪は２次調整Ｂ種ヨコハケの朝顔形埴輪と共に出土しており、台町103号墳出土の人物埴輪とほぼ同じ時期と考えられる。仙台市内では初めての人物埴輪が出土した例であり、頭部から首部が欠損しているため顔や頭部については不明であるが、ほぼ全体の形が判るもので大変貴重な発見となった。

(3) 原遺跡の円墳の時期

これまでに検出された円墳は11基があり、殆ど円筒埴輪・朝顔形埴輪を伴っている。ただし埴輪の出土量には大きな差があり、確認できた埴輪がその円墳の埴輪の全てを表しているとは断定でないが、それぞれがもつ埴輪の系列の組み合わせにより以下の３つのグループに分類されている。

①五反田古墳系列の埴輪と富沢窯跡系列の両者の埴輪を持つグループ・・・６号墳・11号墳・13号墳

②五反田古墳系列の埴輪を持つグループ・・・５号墳・９号墳

③富沢窯跡系列の埴輪を持つグループ・・・１号墳・２号墳・４号墳・７号墳・10号墳

原遺跡で発見された円墳の時期については、出土した埴輪の比較検討により原11号墳段階→裏町古墳段階→大野田２号墳段階→大野田１号墳段階へと変遷することが想定され、それぞれの古墳の時期については以下のとおりに位置づけることが可能である。

	原11号墳段階	１段階 裏町古墳段階	2a段階 大野田２号墳段階	2b段階 大野田１号墳段階
五反田古墳系列 ＋ 富沢窯跡系列	11号墳	13号墳	６号墳	
富沢窯跡系列		１号墳	10号墳	４号墳 ７号墳 ２号墳
五反田古墳系列		５号墳 ９号墳		

本遺跡を含む西多賀から大年寺山にかけての丘陵地帯には、三神峯古墳群で円墳が２基確認されているだけで、それ以外は裏町古墳・砂押古墳・兜塚古墳・一塚古墳・二塚古墳など単独の前方後円墳や円墳が点在して発見されているだけである。

これまでの調査において、原遺跡のほぼ全体を調査しており、方墳２基と円墳11基が密集して発見されている。遺跡の東側に隣接した開発において、古墳が存在するかどうかの試掘調査を実施したが、古墳やそのほかの遺構は

第5表　古墳一覧表

No.	形状	規模		高さ	内部主体				古墳の時期	備考
		墳丘部	周溝部		種別	規模（長軸×短軸）	平面形	主軸方向		
1号墳	円墳	11.8～12.0m	15.3～15.5m	—	竪穴式石室の棺床施設又は礫床	3.0×1.3m	長方形	N－71°－E	裏町古墳段階	円筒埴輪、土師器
2号墳	円墳	10.2～10.8m	12.5～14.1m	—	—	—	—	—	大野田1号墳段階	円筒埴輪
3号墳	円墳	10.4m	13.5～14.5m	—	—	—	—	—	裏町古墳段階～大野田2号墳段階	
4号墳	円墳	13.7～14.0m	18.0～20.0m	—	—	—	—	—	大野田1号墳段階	朝顔形埴輪、円筒埴輪
5号墳	円墳	11.7～12.4m	15.5～16.8m	—	竪穴式石室の棺床施設又は礫床	2.8×1.1～1.4m	長方形	N－14°－E	裏町古墳段階	円筒埴輪
6号墳	円墳	15.3m	19.0～20.3m	—	—	—	—	—	大野田2号墳段階	朝顔形埴輪、円筒埴輪
7号墳	円墳	(9.2m)	(12.4m)	—	—	—	—	—	大野田1号墳段階	円筒埴輪
8号墳	方墳	東西9.2m 南北9.3m	東西13.6m 南北12.8m	—	—	—	—	—	古墳時代前期末?	
9号墳	円墳	12.2～12.5m	16.0～17.5m	—	—	—	—	—	裏町古墳段階	朝顔形埴輪、円筒埴輪
10号墳	円墳	10.9m	14.0m	—	—	—	—	—	大野田2号墳段階	円筒埴輪
11号墳	円墳	17.7～18.2m	25.5～26.5m	0.7m	—	—	—	—	原11号墳段階	朝顔形埴輪、円筒埴輪、須恵器
12号墳	方墳	東西14.0m 南北15.0m	東西（14.5m） 南北（24.0m）	0.7m	粘土槨（割竹形木棺）	5.45×0.8m	長方形	N－45°－E	古墳時代前期末	墓壙の掘り方は長軸約7.5m、短軸3.2mの楕円形
13号墳	円墳	15.0m	20.0m	—	—	—	—	—	裏町古墳段階	南側半分の検出、人物埴輪、動物埴輪、朝顔形埴輪、円筒埴輪

発見されておらず、東側には延びていないことが判明した。

地形的に見れば、原遺跡の西側及び北側は連続的にほぼ平坦となる地形であり、古墳が途切れることなく続くことから、さらに西側と北側に古墳が延びていく可能性が高いと考えられる。また、近世の絵図にみられるように、原遺跡の南側においても古墳の存在しているようであることら、さらに多くの古墳が発見される可能性が考えられる。

原遺跡の円墳は殆ど埴輪を伴っており、多かれ少なかれ五反田古墳系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪と富沢窯跡系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪が共存して構成されるものが多く、富沢窯跡系列の円筒埴輪・朝顔形埴輪のみで構成される大野田古墳群とは出土する埴輪に相違が認められ、両地域の埴輪について今後新しい調査例を基にしながら検討を進めていく必要があるものと考えられる。

さらに埴輪を生産した窯跡は富沢窯跡1基が調査されているだけであり、供給先だけでなく生産地の調査も進展していくことが今後の埴輪を研究していくためにも大きな課題であるといえよう。

第２節　竪穴住居跡

これまで４次にわたる発掘調査において、原遺跡で検出された竪穴住居跡・竪穴遺構は、合計12軒があり、弥生時代後期の天王山式期の住居跡３軒、古墳時代前期の塩釜式期の住居跡６軒、奈良時代の住居跡及び竪穴遺構３件がある。

弥生時代の住居跡

弥生時代の住居跡は、出土遺物より後期の天王山式期に位置づけられ、平面形は楕円形のもの２軒、隅丸長方形のもの１軒の計３軒がある。楕円形を呈する住居跡の規模は、長軸3.6～3.88m、短軸2.8～2.9mを測る。隅丸長方形の住居跡は長軸4.25m、短軸3.3mとやや規模が大きいものである。

原遺跡周辺における弥生時代の住居跡は、土手内遺跡SI－12住居跡と八木山緑町遺跡SI－２・３住居跡の３軒があり、いずれも後期の天王山式期の住居跡である。３軒の住居跡の平面形は、いずれも楕円形を呈し、その規模は長軸で3.6～3.98m、短軸2.8～3.24mを測り、原遺跡の住居跡とほぼ同じ規模である。原遺跡12号住居跡からは壁に近い床面が焼けており、僅かに窪んだ部分に焼土が堆積している地床炉が発見されている。土手内遺跡や八木山緑町遺跡の住居跡でも同様の地床炉が検出されている。

古墳時代の住居跡

古墳時代の住居跡は、前期末の塩釜式期に位置づけられる６軒の住居跡があり、調査地区の西部から南東側にかけての標高35～38mの所で検出されている。円墳と重複している住居跡が３軒あり、すべて切られている。

平面形は方形を呈するもの４軒、隅丸方形を呈するもの２軒がある。住居跡の規模は長軸3.21m～5.85m、短軸3.14～5.25mを測る。住居跡の規模は４m前後のものが多く、６号住居跡が最も大きく長軸5.85m、短軸5.25mと原遺跡の住居跡では最大のものである。検出された住居の炉は、中央付近の床面が焼けており、僅かに窪んだ部分に焼土が堆積している地床炉である。炉の平面形は楕円形を呈し、部分的に焼けて硬化している。

周辺遺跡における塩釜式期の住居跡は、土手内遺跡で２軒が発見されているがあまり調査例はなく、少し離れた低地の下ノ内遺跡や伊古田遺跡で３軒が調査されている程度である。

第６表　竪穴住居跡・竪穴遺構一覧表

住居跡・竪穴遺構	平面形	住居跡の規模		柱　穴	周　溝	カマド・炉	主軸方向	所属時期
		長　軸	短　軸					
SI-１住居跡	方形	4.7m	(3.9m)	４本柱	無	地床炉	N－３°－W	古墳時代前期（塩釜式期）
SI-２住居跡	隅丸方形	4.4m	4.3m	４本柱	無	地床炉	N－32°－W	古墳時代前期（塩釜式期）
SI-３住居跡	隅丸方形	4.45m	4.3m	４本柱	無	地床炉	N－32°－W	古墳時代前期（塩釜式期）
SI-４住居跡	楕円形	3.6m	2.9m	－	無	－	N－53°－E	弥生時代後期（天王山式期）
SI-５住居跡	隅丸方形	4.25m	3.3m	－	無	－	N－47°－E	弥生時代後期（天王山式期）
SI-６住居跡	方形	5.85m	5.25m	４本柱	無	地床炉	N－３°－W	古墳時代前期（塩釜式期）
SI-７竪穴遺構	方形	2.95m	(2.4m)	－	無	－	N－３°－E	奈良時代（国分寺下層式期）
SI-８住居跡	方形	3.21m	3.14m	－	無	地床炉	N－30°－W	古墳時代前期（塩釜式期）
SI-９住居跡	方形	6.05m	5.92m	４本柱	有	カマド北壁やや東寄り	N－６°－W	奈良時代（国分寺下層式期）
SI-10住居跡	方形	一辺4m前後		４本柱	有	－	W－30°－N	古墳時代前期（塩釜式期）
SI-11住居跡	方形	6.9m	6.7m	４本柱	有	カマド北壁中央	N－21°－W	奈良時代（国分寺下層式期）
SI-12住居跡	楕円形	3.88m	2.8m	－	無	地床炉	N－28°－W	弥生時代後期（天王山式期）

奈良時代の住居跡

この時期の住居跡は出土した土師器などから国分寺下層式期の住居跡２軒、竪穴遺構１軒がある。２軒の住居跡の規模は６ｍ前後の方形を呈するもので、原遺跡の中で発見された住居跡の中では大型の住居跡である。９・11号住居跡は北壁にカマドが構築され、柱穴は住居跡の対角線上にある４本柱で、主柱穴である。９号住居跡からは北・東・西壁の２ヶ所と南壁の１ヶ所で壁柱穴が検出されている。

第３節　まとめ

１．原遺跡は太白区西多賀三丁目に所在し、青葉山丘陵の南斜面から裾部にかけて、緩やかな傾斜を持つ標高32～39ｍの段丘上に立地している。

２．今回の調査で発見された遺構は、古墳時代前期末の方墳２基、古墳時代中期の円墳２基、弥生時代後期の竪穴住居跡１軒、古代の竪穴住居跡１軒、平安時代の土壙墓５基、土坑29基、溝跡８条などがある。

３．今回の調査で出土した遺物は、弥生土器、朝顔形埴輪、円筒埴輪、人物埴輪、動物埴輪、土師器などがある。

４．古墳時代前期末の方墳である12号墳の主体部（埋葬施設）は、割竹形木棺を白色粘土で覆った粘土槨で、木棺の規模は、長さ5.45ｍ，幅80cmである。木棺内部の構造は、中央部の区画に被葬者を埋葬し、小口の両側に砂礫を詰めた３つの区画から構成されている。木棺内部の砂礫の下からはベンガラで赤く彩色がなされていることが判明した。

５．古墳時代中期後半の円墳である13号墳は、周溝まで含めた規模が推定約20ｍで、すでに墳丘は削平され、埋葬施設はなく周溝のみが発見された。出土遺物としては、周溝の中から円筒埴輪・朝顔形埴輪と共に人物埴輪・動物埴輪が出土し、５世紀後半～５世紀末の埴輪編年の１段階、裏町古墳段階でも新しい段階に位置づけられた。人物埴輪は頭部を欠損しているが、ほぼ全体の形が明らかな半身像で、襷掛けをし、両肘を曲げながら手首をやや斜め前方に伸ばしたポーズをした女性像の人物埴輪・巫女である。人物埴輪については、宮城県内でも丸森町台町103号墳出土の壺を捧げる埴輪が有名であるがほとんど類例がなく、仙台市内ではほぼ全体の形が判る人物埴輪が初めての出土であり、大変貴重な発見となった。

６．竪穴住居跡は、弥生時代後期に位置づけられる天王山式期の住居跡１軒と奈良時代の国分寺下層式期の住居跡１軒の住居跡が発見された。

７．これまで３回の発掘調査で発見された遺構としては、古墳時代前期末の方墳２基、古墳時代中期後半の円墳11基・埴輪棺１基、弥生時代後期の竪穴住居跡３軒、古墳時代前期の竪穴住居跡６軒、奈良時代の竪穴住居跡２軒、平安時代土壙墓11基、その他の土坑60基、溝跡14条である。

引用・参考文献

伊東信雄・伊藤玄三・岩淵康治　1974：『裏町古墳発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第７集　仙台市教育委員会

氏家和典　1957：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家和典　1984：「宮城の研究」『宮城の研究　第１巻　考古篇』清水堂出版

太田昭夫・氏家和典　1980：「宇賀崎１号墳」『金剛寺貝塚、宇賀崎貝塚、宇賀崎１号墳他』宮城県文化財調査報告書第67集　宮城県教育委員会

小川淳一・高橋綾子　2000：「王ノ壇遺跡－都市計画道路『川内・柳生線』関連遺跡－発掘調査報告書Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第249集　仙台市教育委員会

川西宏幸　1978：「円筒埴輪総論」『考古学雑誌　第64巻第２号』日本考古學會

川西宏幸　1979：「円筒埴輪総論　地籍文献総覧」『考古学雑誌　第64巻第４号』日本考古學會

佐藤甲二・結城慎一　2000：『沼向遺跡第１～３次調査－宮城県仙台港背後地土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第241集　仙台市教育委員会

主浜光朗　1999：『原遺跡第３次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第240集　仙台市教育委員会

主浜光朗・小川淳一　1992：『土手内－土手内遺跡・土手内窯跡・土手内横穴Ｂ地点発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第165集　仙台市教育委員会

鈴木啓・辻秀人他　1982：『原山１号墳発掘調査概報』福島県立博物館調査報告書第１集

仙台市史編さん委員会　1995：『仙台市史　特別編２　考古資料』仙台市

塚田良道　1996：「人物埴輪の形式分類」『考古学雑誌　第81巻第３号』日本考古學會

辻　秀人　1986：「福島県における埴輪生産の動向」『福島の研究　第１巻　地質考古篇』清水堂出版

辻　秀人　1989：「東北古墳時代の画期について（その１）」『福島県立博物館紀要第３号』

辻　秀人　1995：「東北南部における古墳出現期の土器編年　その２」『東北学院大学論集　歴史學・地理学』第27号

辻　秀人　1999：「大塚森（夷森）古墳の発掘調査成果」『東北学院大学論集　歴史學・地理学』第32号

平間亮輔　1998：「原遺跡第１・２次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第229集　仙台市教育委員会

藤沢　敦　1990：「東北　宮城・岩手」『古墳時代の研究11　地域の古墳Ⅱ　東日本』雄山閣

藤沢　敦　1992：「埴輪の種類と編年－円筒埴輪　東北」『古墳時代の研究９　古墳Ⅲ　埴輪』雄山閣

結城慎一・藤沢敦　1987：「大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第108集　仙台市教育委員会

若松良一　1992：「埴輪の種類と編年－人物埴輪・動物埴輪」『古墳時代の研究９　古墳Ⅲ　埴輪』雄山閣

渡邊誠・竹田幸司　2000：「大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡－富沢駅周辺土地区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第243集　仙台市教育委員会

写　真　図　版

写真１　調査区全景（A区）（西より）

写真２　調査区全景（B区）
（調査風景、東より）

写真３　調査区全景（C区）（西より）

写真４　８号墳検出状況（南より）

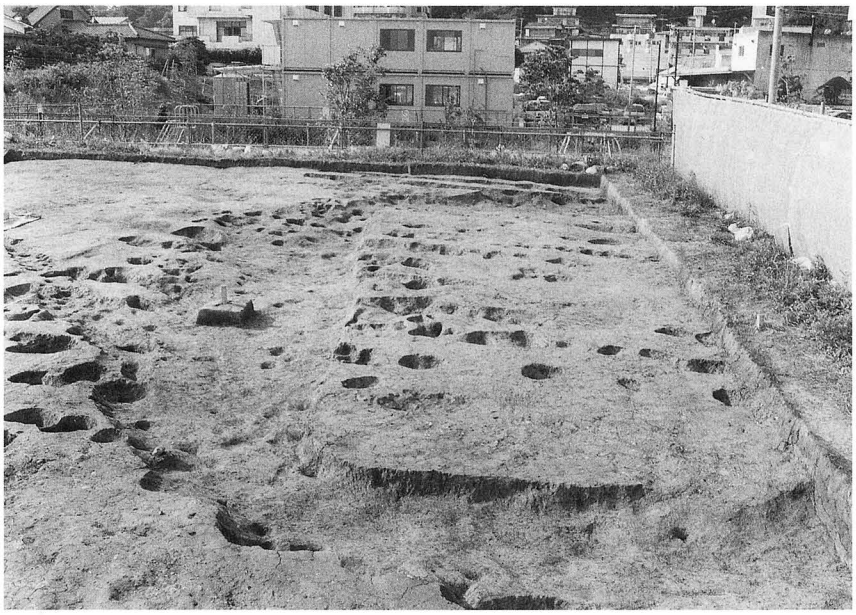


写真５　８号墳全景（南より）

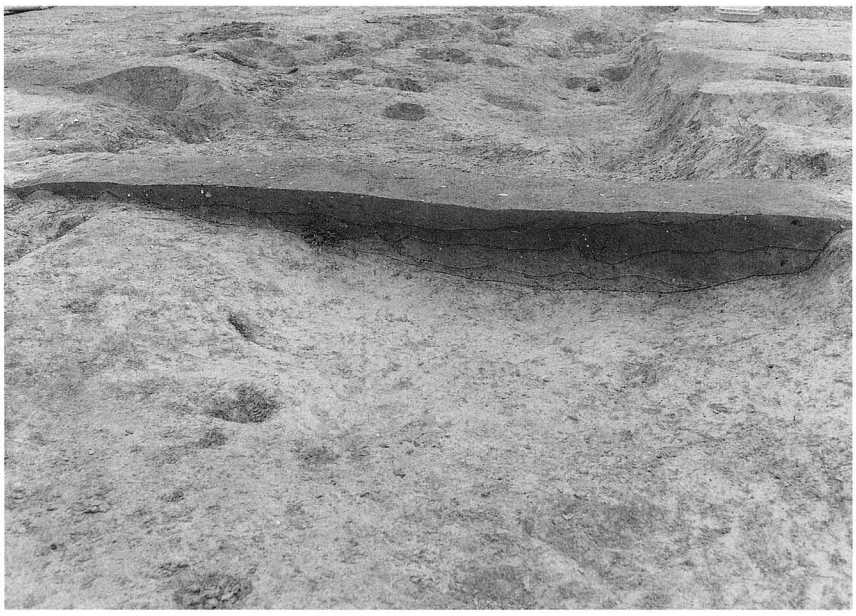


写真６　８号墳断面（南より）

写真７　８号墳断面（西より）

写真８　８号墳断面（西より）

写真９　A区東半検出状況（西より）

写真10　9・13号墳全景

写真11　9号墳全景（南西より）

写真12　9号墳全景（北より）

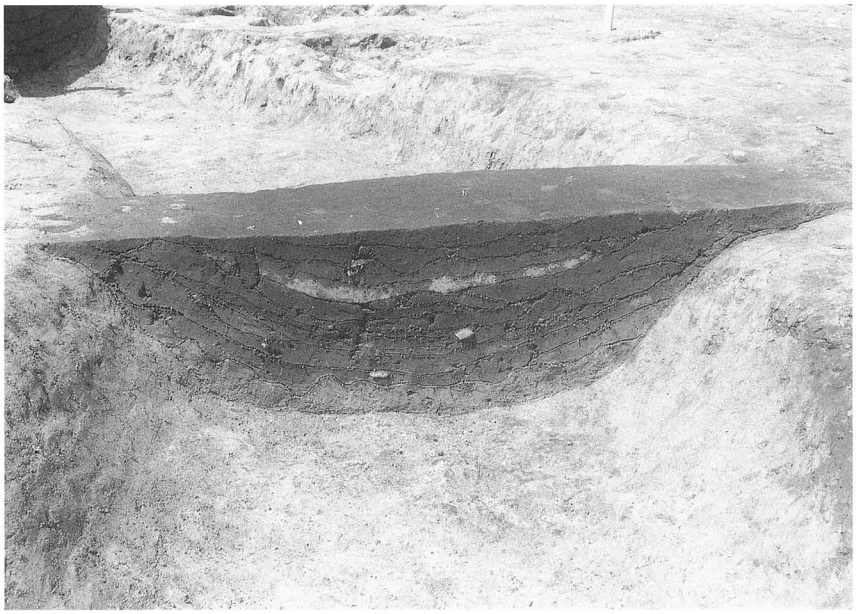


写真13　９号墳周溝断面（東より）

写真14　９号墳周溝断面（西より）

写真15　９号墳周溝断面（北より）

写真16　12号墳調査前全景（北より）

写真17　12号墳検出状況（南東より）

写真18　12号墳全景（東より）

写真19　12号墳全景（北より）

写真20　12号墳周溝断面（東より）

写真21　12号墳周溝断面、
南北ベルト北側（東より）

写真22　12号墳周溝断面、
南北ベルト北側（東より）

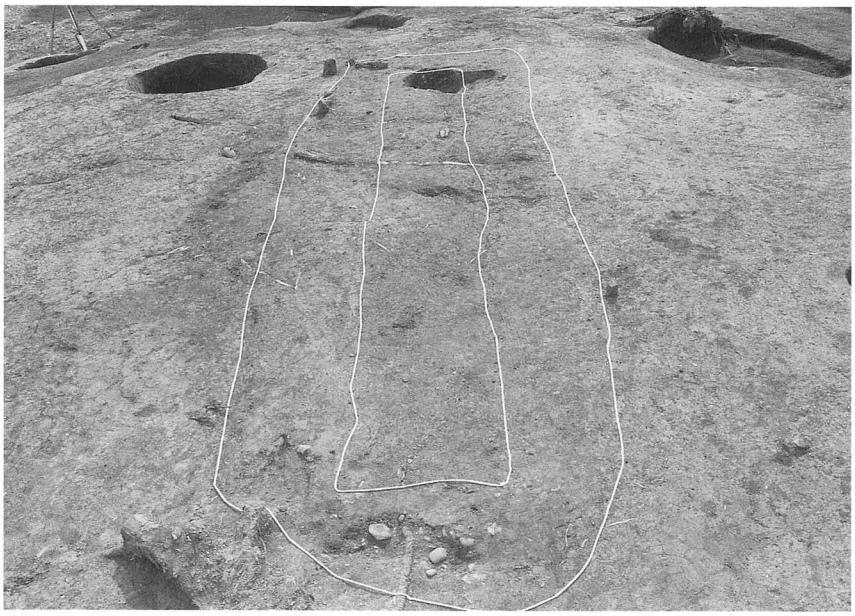


写真23　12号墳主体部検出状況
（西より）

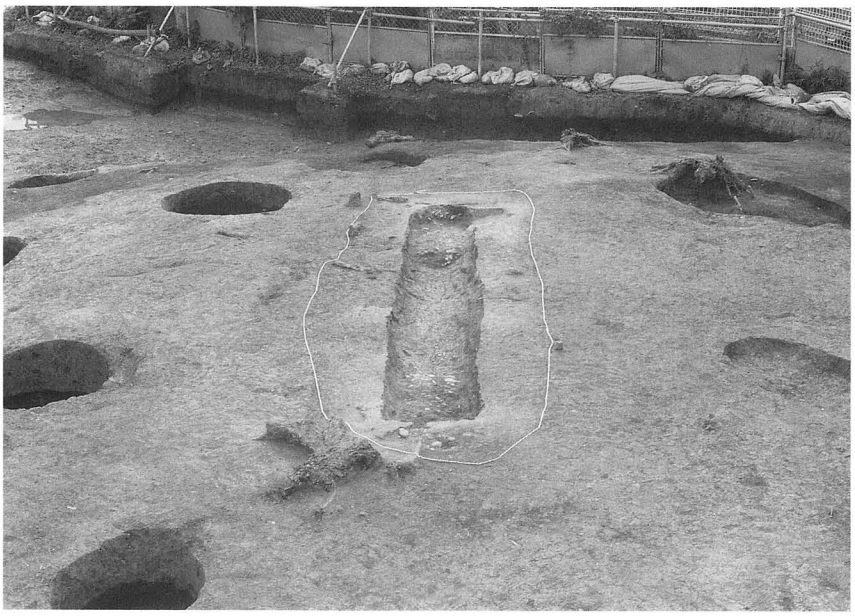


写真24　12号墳主体部検出（北より）

写真25　12号墳主体部全景（南より）

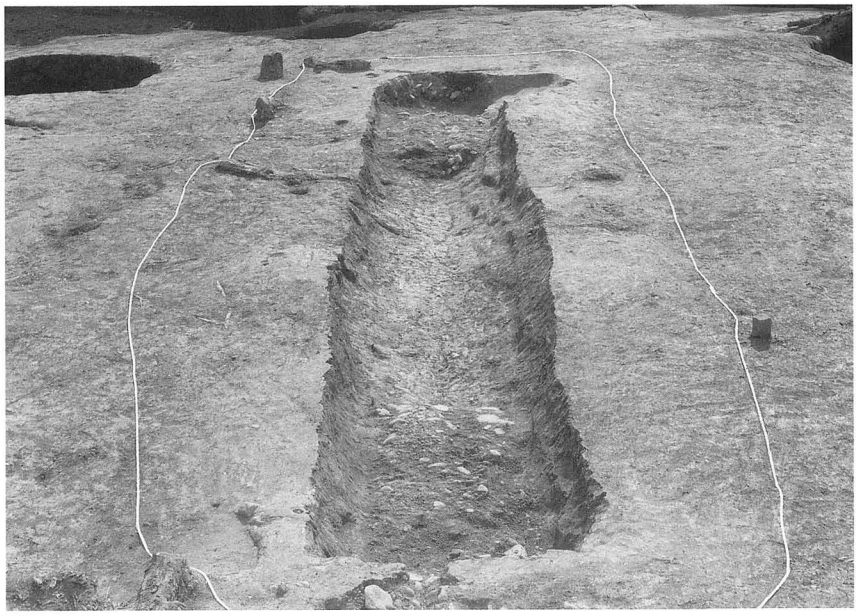


写真26　12号墳主体部全景（北より）

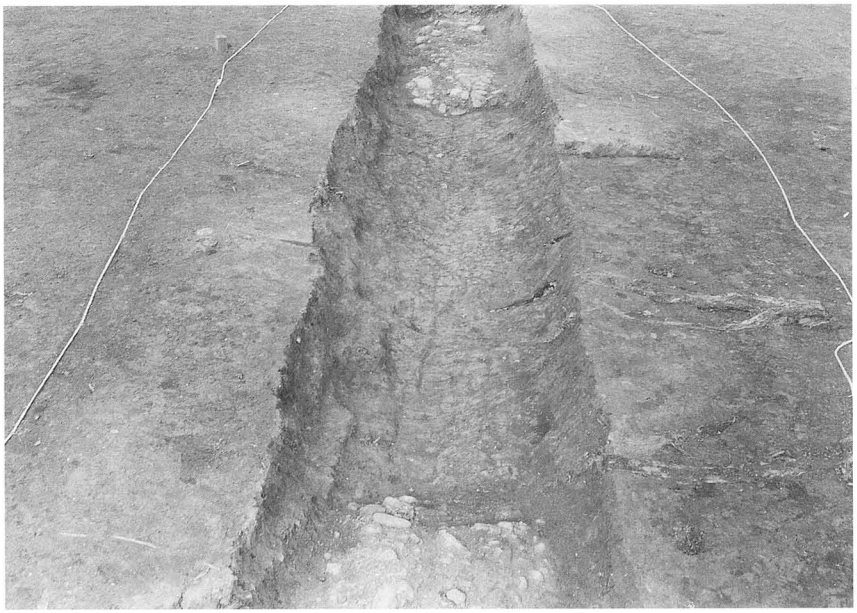


写真27　12号墳主体部（南より）

写真28　12号墳主体部棺内北側礫（西より）

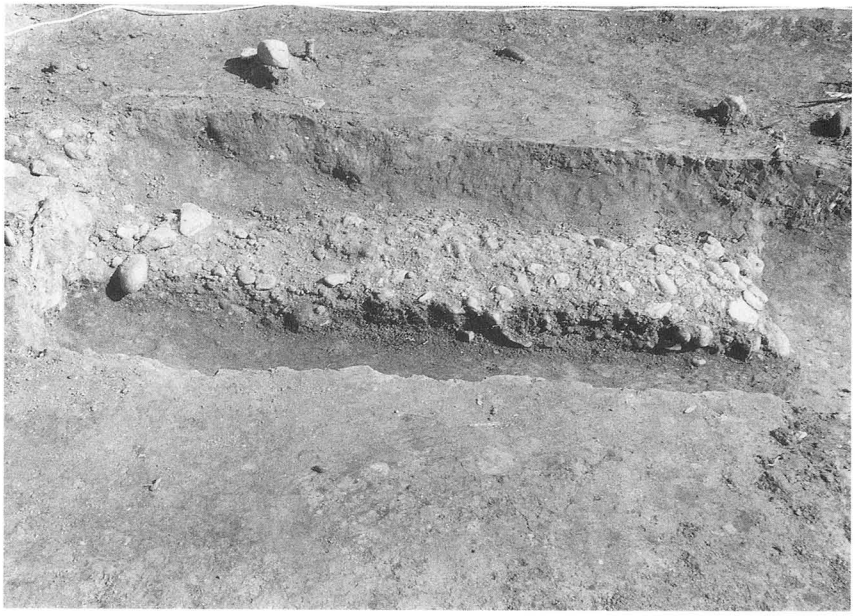


写真29　12号墳主体部棺内北側礫断面（西より）

写真30　12号墳主体部棺内南側礫（西より）

写真31　12号墳主体部棺内南側
礫断面（西より）

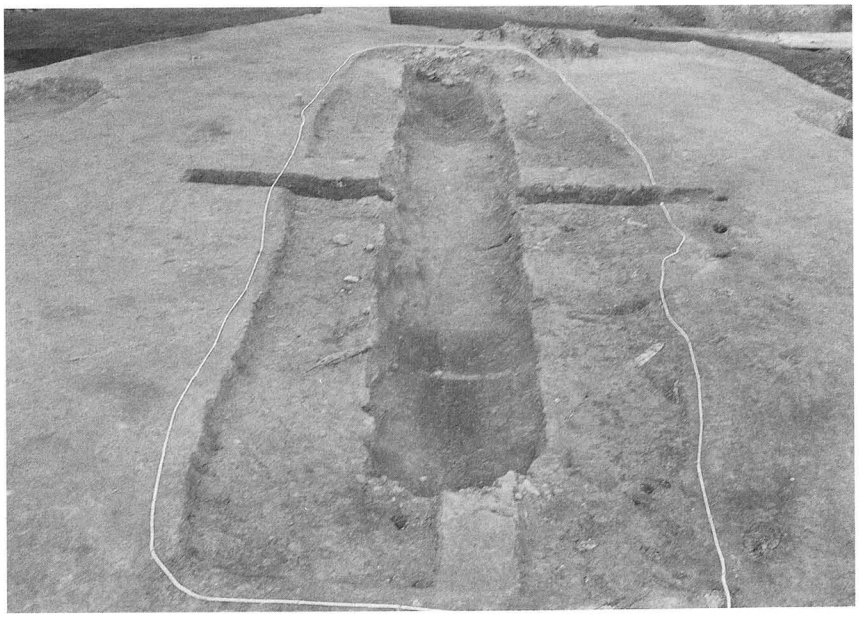


写真32　12号墳主体部全景（北より）

写真33　12号墳主体部全景（北より）

写真34　12号墳主体部（北より）

写真35　12号墳主体部断割り
北ベルト（南より）

写真36　12号墳主体部断割り
中央ベルト（南より）

写真37　12号墳主体部断割り
南ベルト（南より）

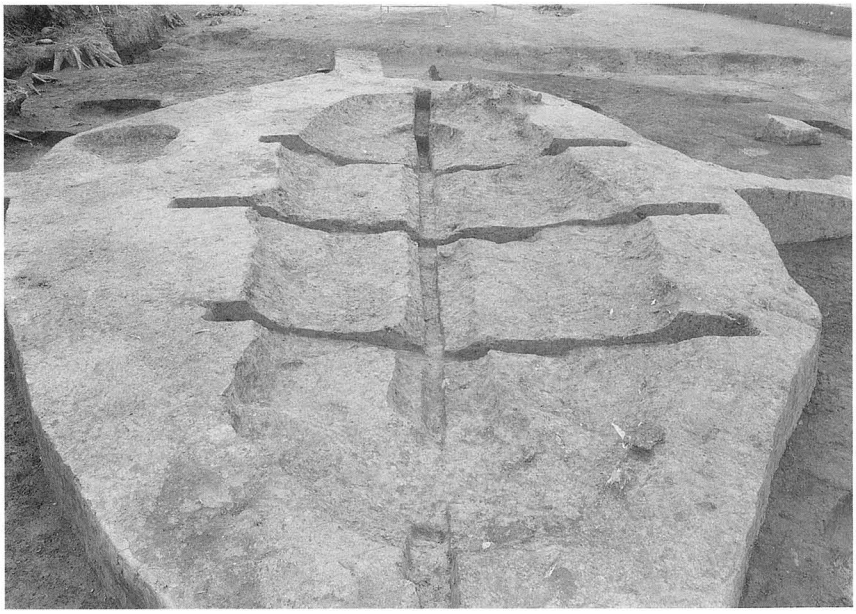


写真38　12号墳主体部墓壙全景
（南より）

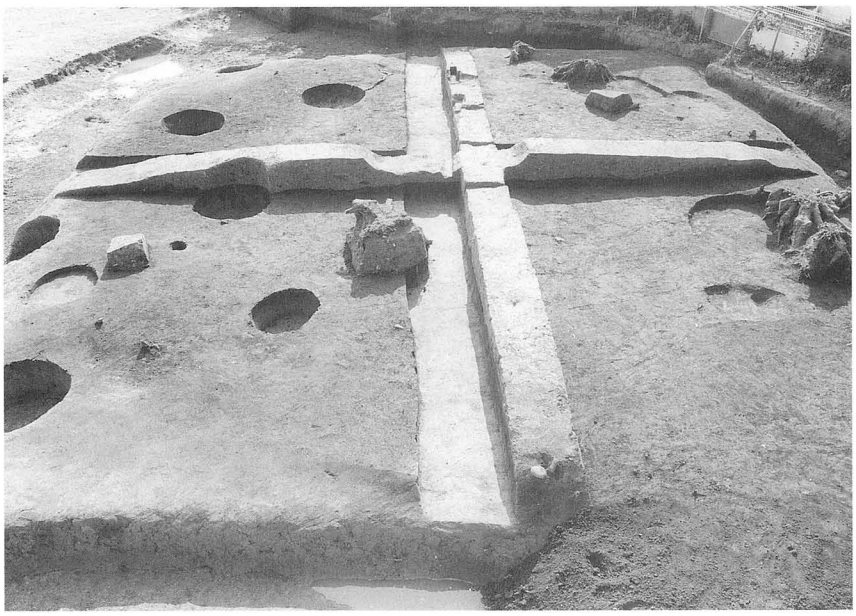


写真39　12号墳下旧表土全景
（北より）

写真40　12号墳墳丘断面南北ベルト
南側（東より）

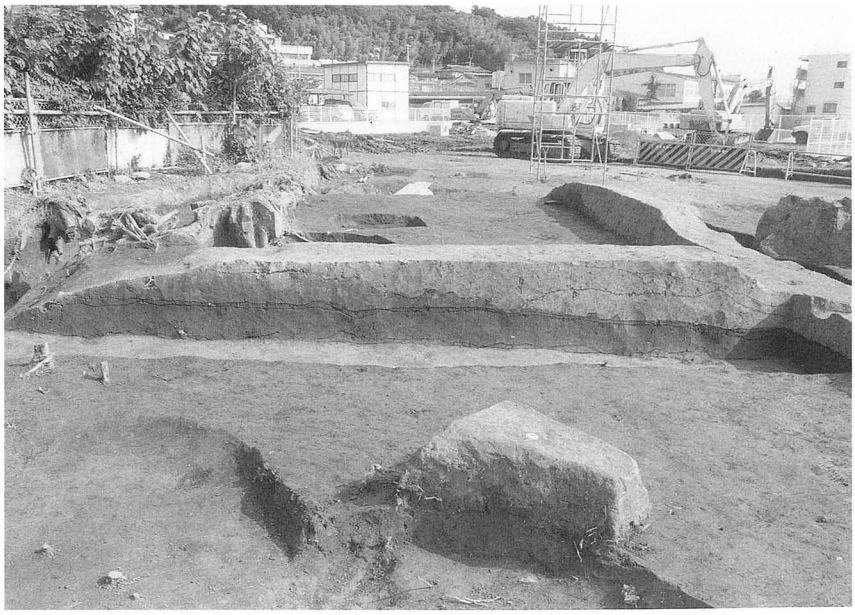


写真41　12号墳墳丘断面東西ベルト
西側（南より）

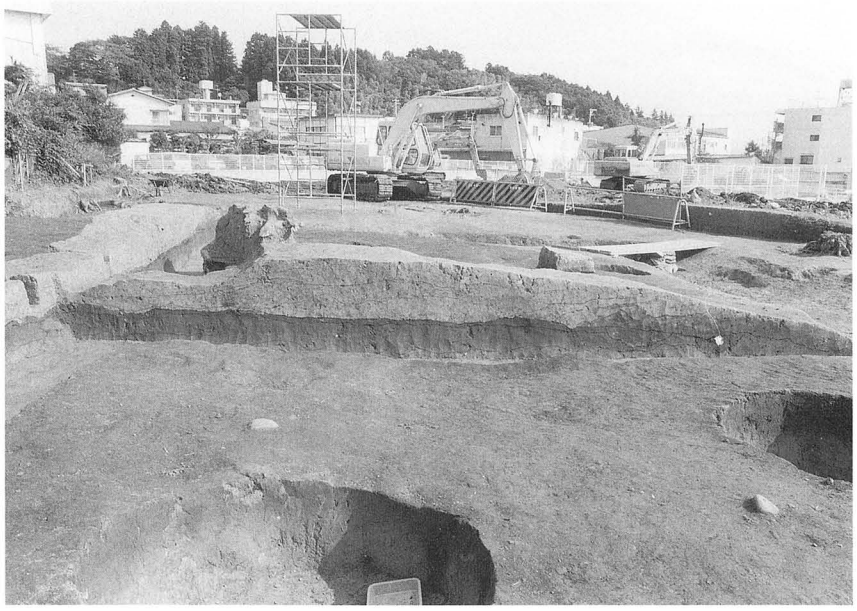


写真42　12号墳墳丘断面東西ベルト
東側（南より）

写真43　12号墳墳丘断面南北ベルト北側（東より）

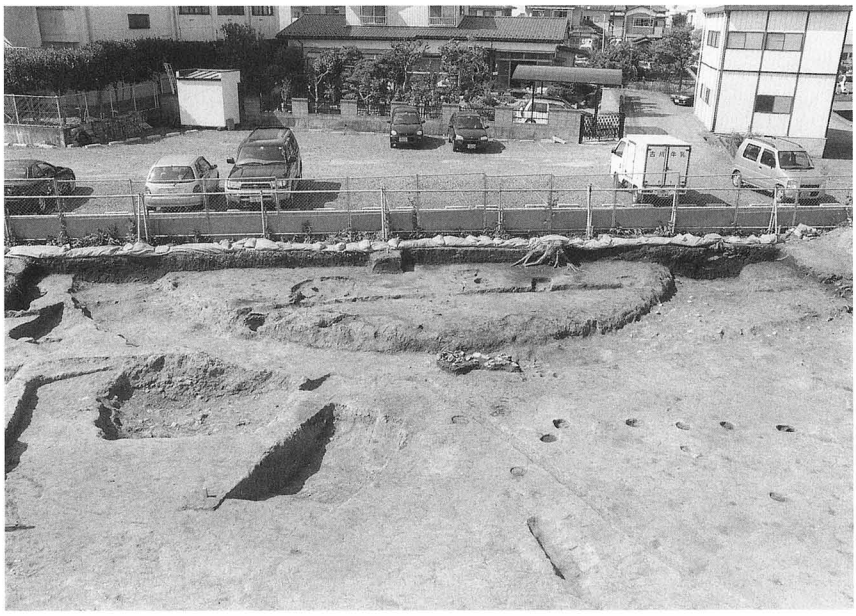


写真44　13号墳全景（南より）

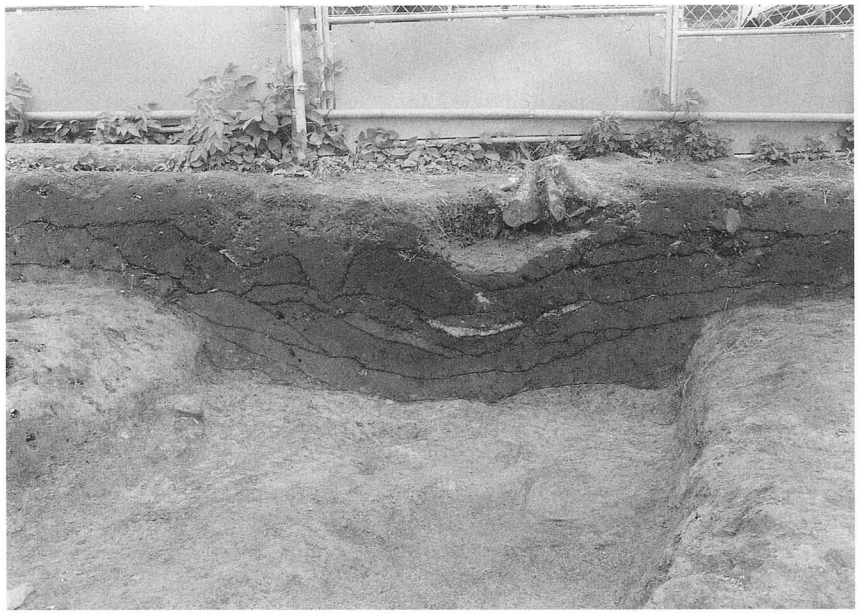


写真45　13号墳周溝断面北壁東側（南より）

写真46　13号墳周溝断面北壁西側
（南より）

写真47　13号墳周溝断面（西より）

写真48　13号墳周溝断面（西より）

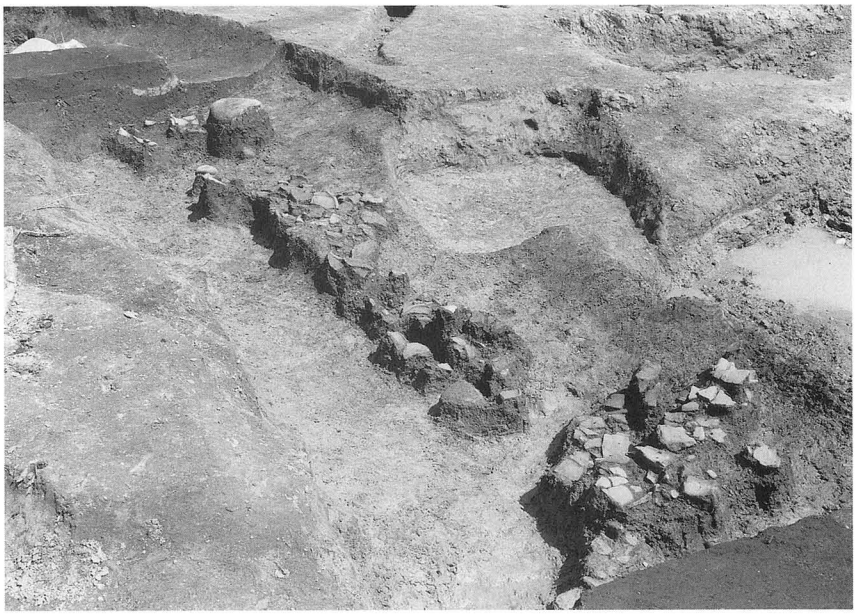


写真49　13号墳周溝a区遺物
出土状況（北より）

写真50　13号墳周溝a区遺物
出土状況（東より）

写真51　13号墳周溝人物埴輪
出土状況（北より）

写真52　13号墳周溝人物埴輪
出土状況（北より）

写真53　13号墳周溝人物埴輪
出土状況（北より）

写真54　13号墳周溝埴輪出土状況
（南より）

写真55　SI－12住居跡全景（西より）

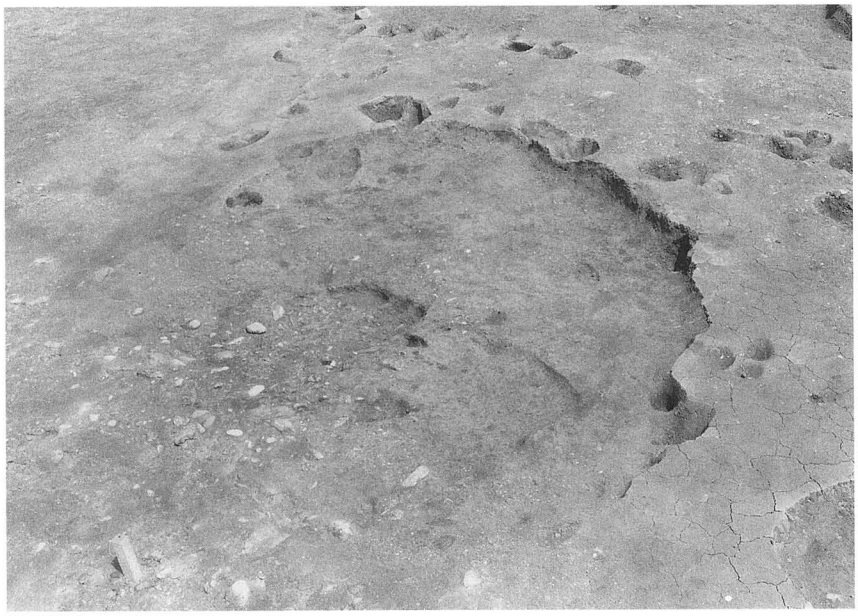


写真56　SI－12住居跡全景（南より）

写真57　SI－11住居跡床面検出状況（西より）

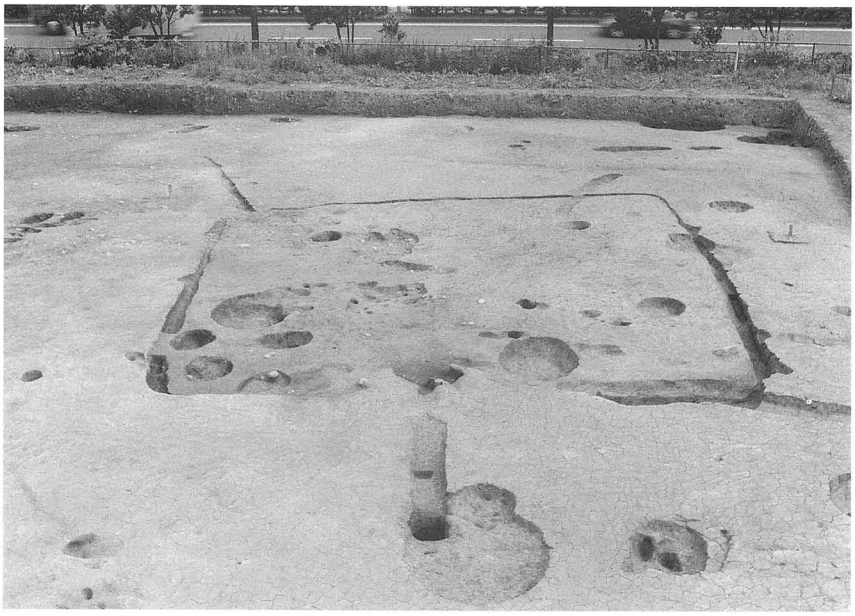


写真58　SI－11住居跡全景（北より）

写真59　SI－11住居跡全景（西より）

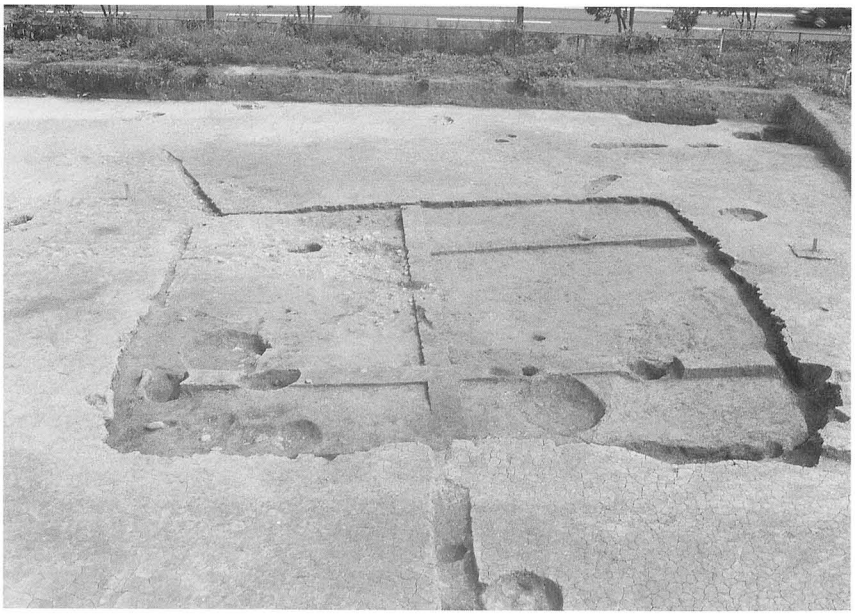


写真60　SI－11住居跡掘り方完掘状況（北より）

写真61　SI－11住居跡、
カマド東床面施設（南より）

写真62　SI－11住居跡、カマド全景
（南より）

写真63　SI－11住居跡、カマド遺物
出土状況（南より）

写真64　C区SK－38土坑検出状況
（南より）

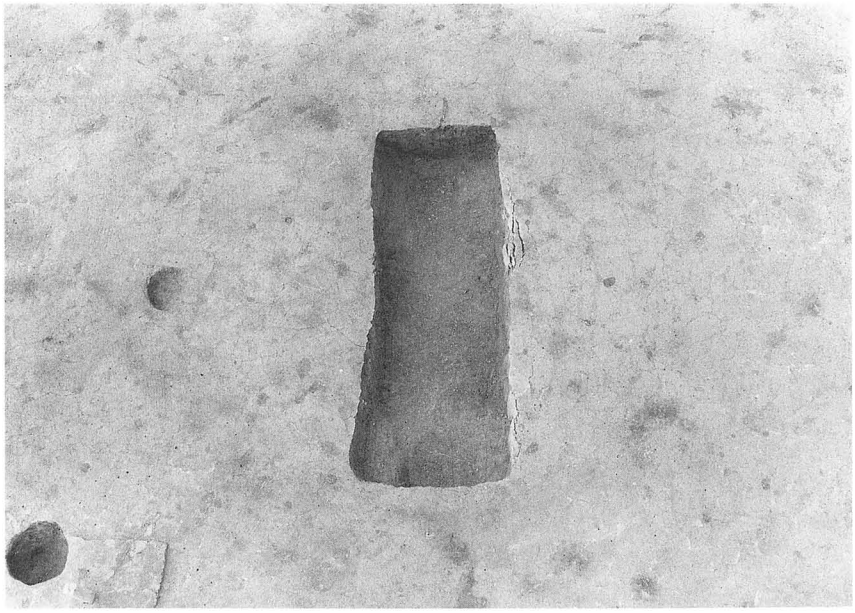


写真65　C区SK－38土坑全景
（北より）

写真66　C区SK－44土坑全景
（南より）

写真67　C区SK－53土坑全景
（南より）

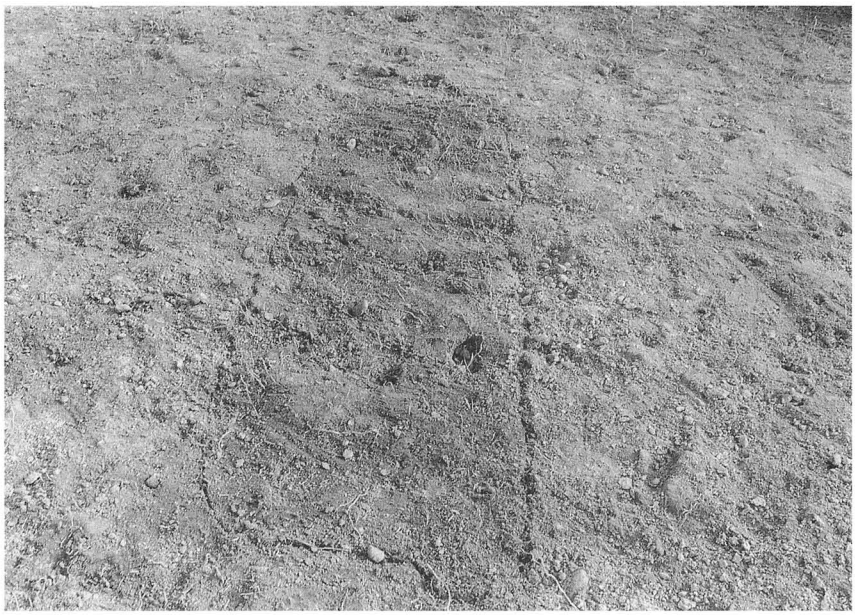


写真68　D区SK－72土坑検出状況
（北より）

写真69　D区SK－72土坑全景
（南より）

写真70　D区SK－74土坑検出状況
（南より）

写真71　D区SK－74土坑
炭化物アップ（東より）

写真72　D区SK－74土坑全景
（南より）

写真73　A区土坑群全景（東より）

写真74　C区土坑群全景（東より）

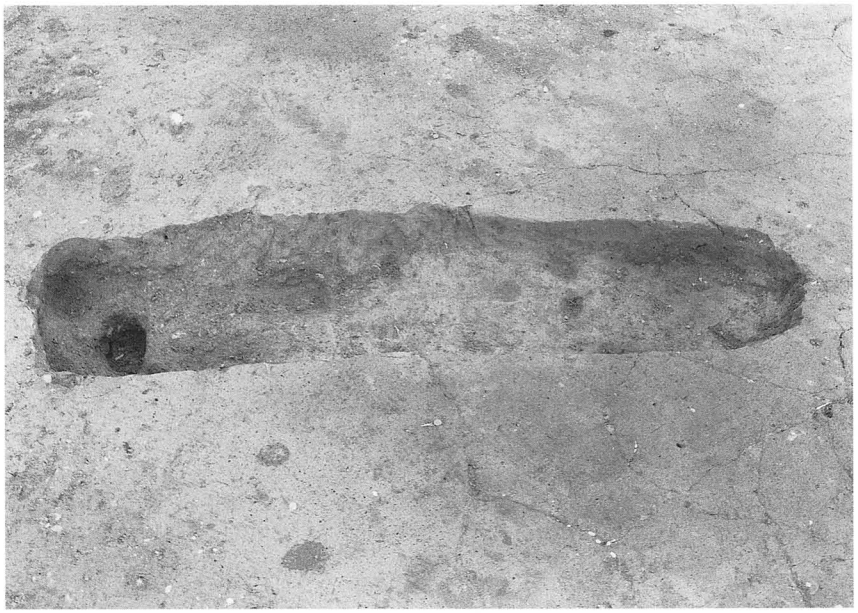


写真75　C区SK－55土坑全景
（西より）

写真76　C区SK－55土坑遺物
出土状況（南より）

写真77　C区SK－57・58土坑全景
（東より）

写真78　C区SK－59土坑全景
（西より）

写真79　C区SK－46土坑全景
（北より）

写真80　C区SK－61土坑全景
（東より）

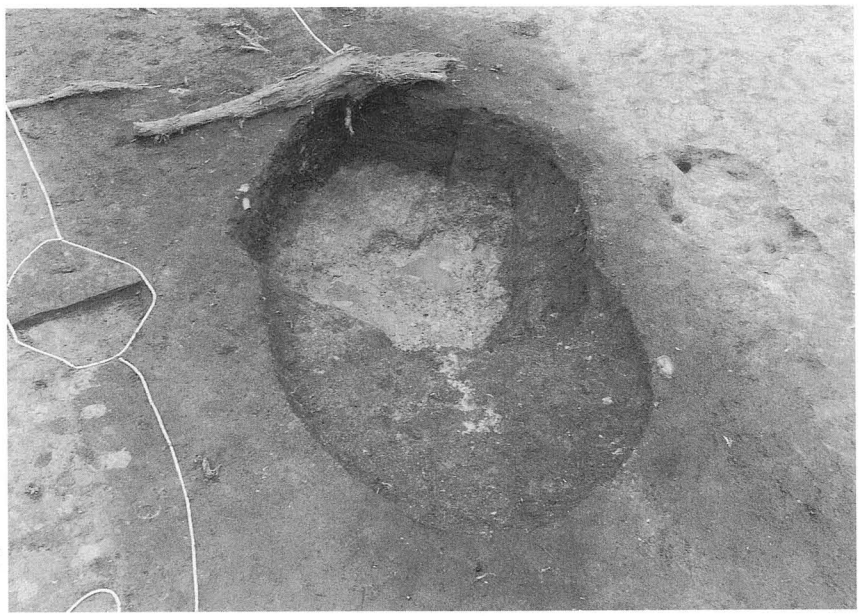


写真81　A区SK－62土坑全景
（東より）

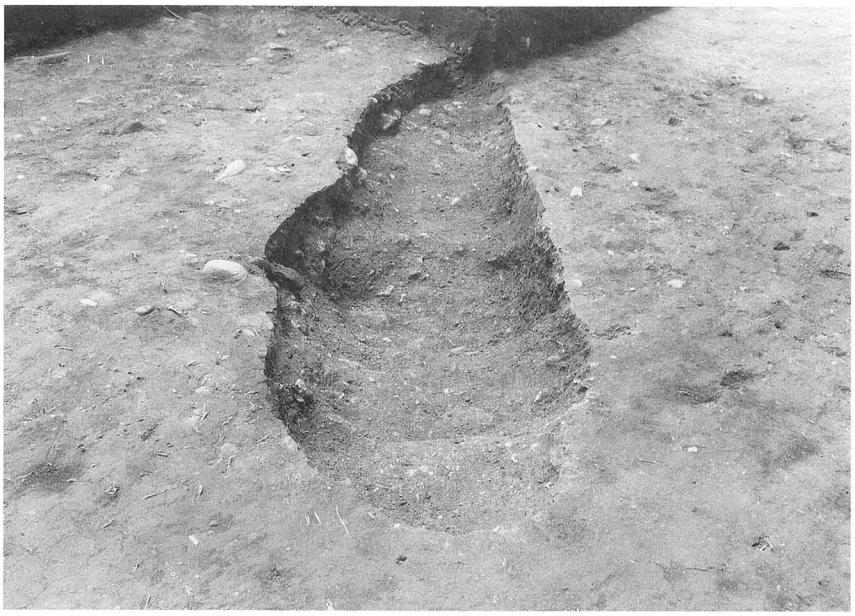


写真82　A区SK－67土坑全景
（東より）

写真83　A区SK－69土坑全景
（東より）

写真84　調査参加者

写真85　13号墳出土遺物(1)

写真86　13号墳出土遺物(2)

写真87　13号墳出土遺物(3)

写真88　13号墳出土遺物(4)

1　12号墳出土遺物アップ

2　13号墳出土遺物アップ

写真89　13号墳出土遺物(5)

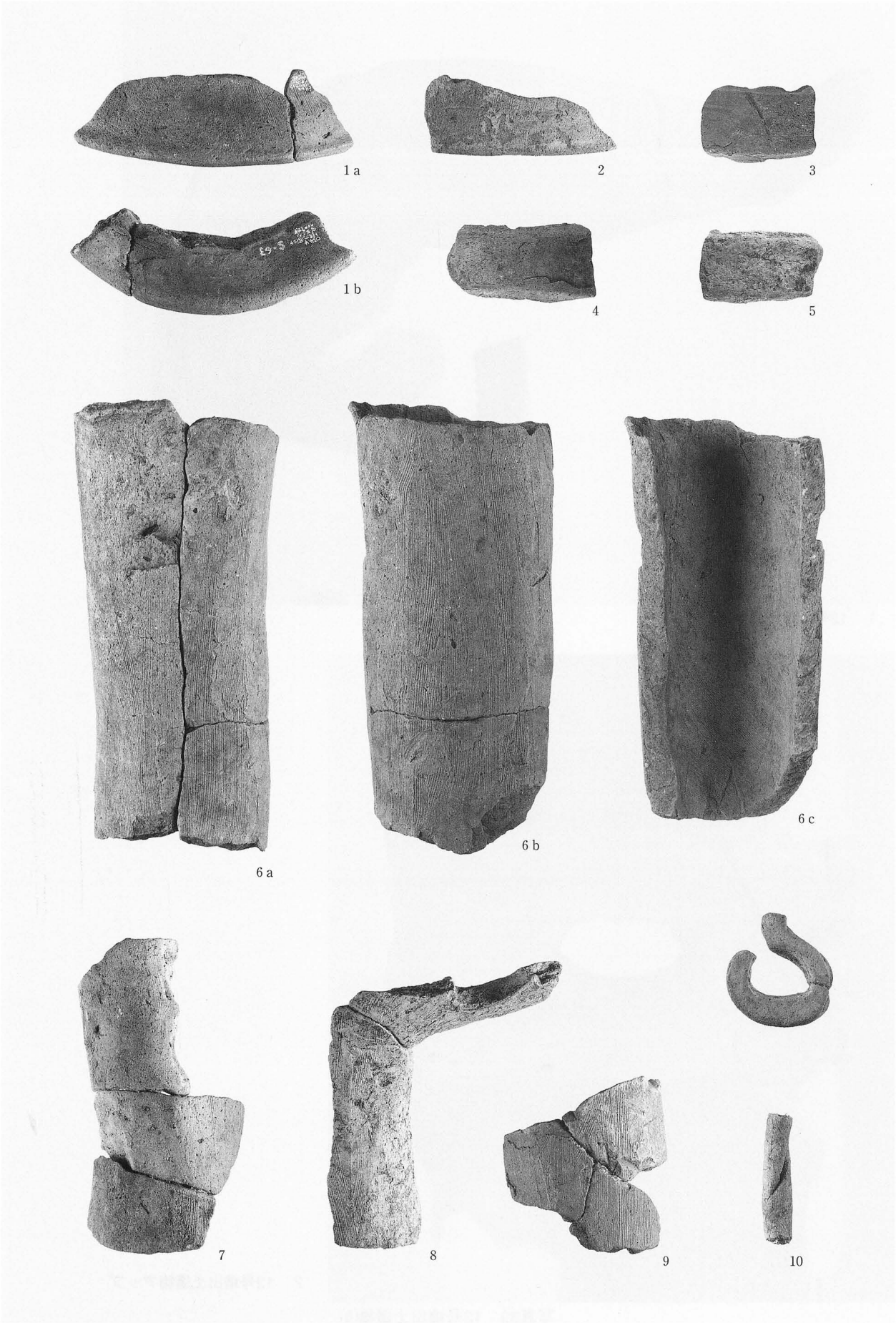
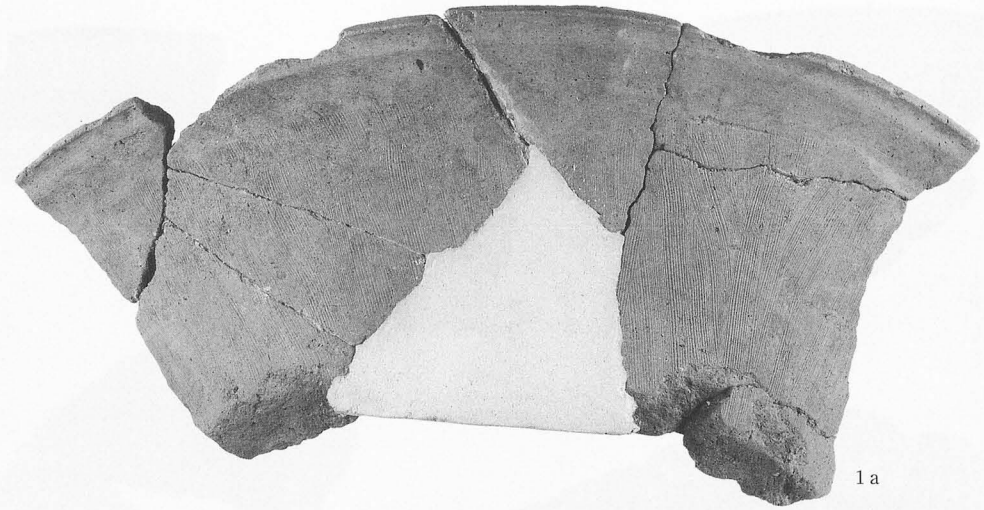


写真90　13号墳出土遺物(6)



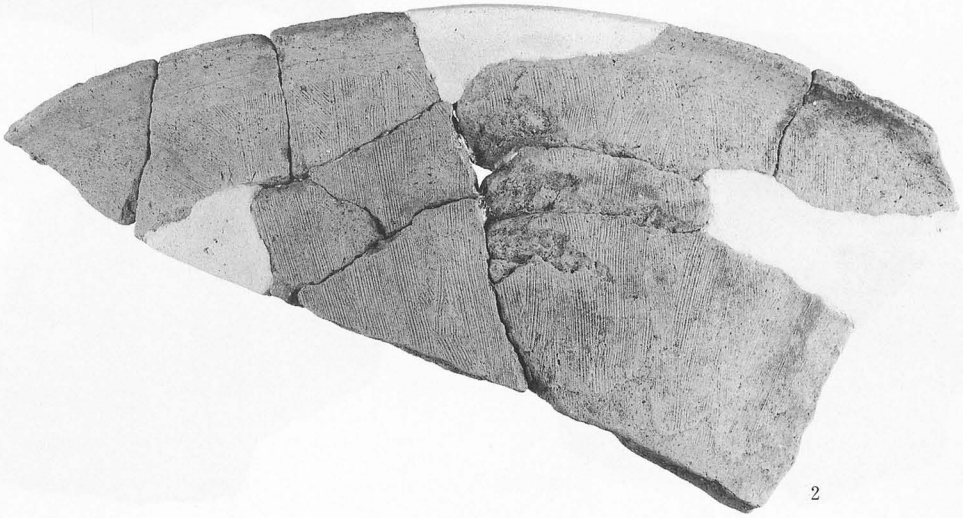


写真91　13号墳出土遺物(7)

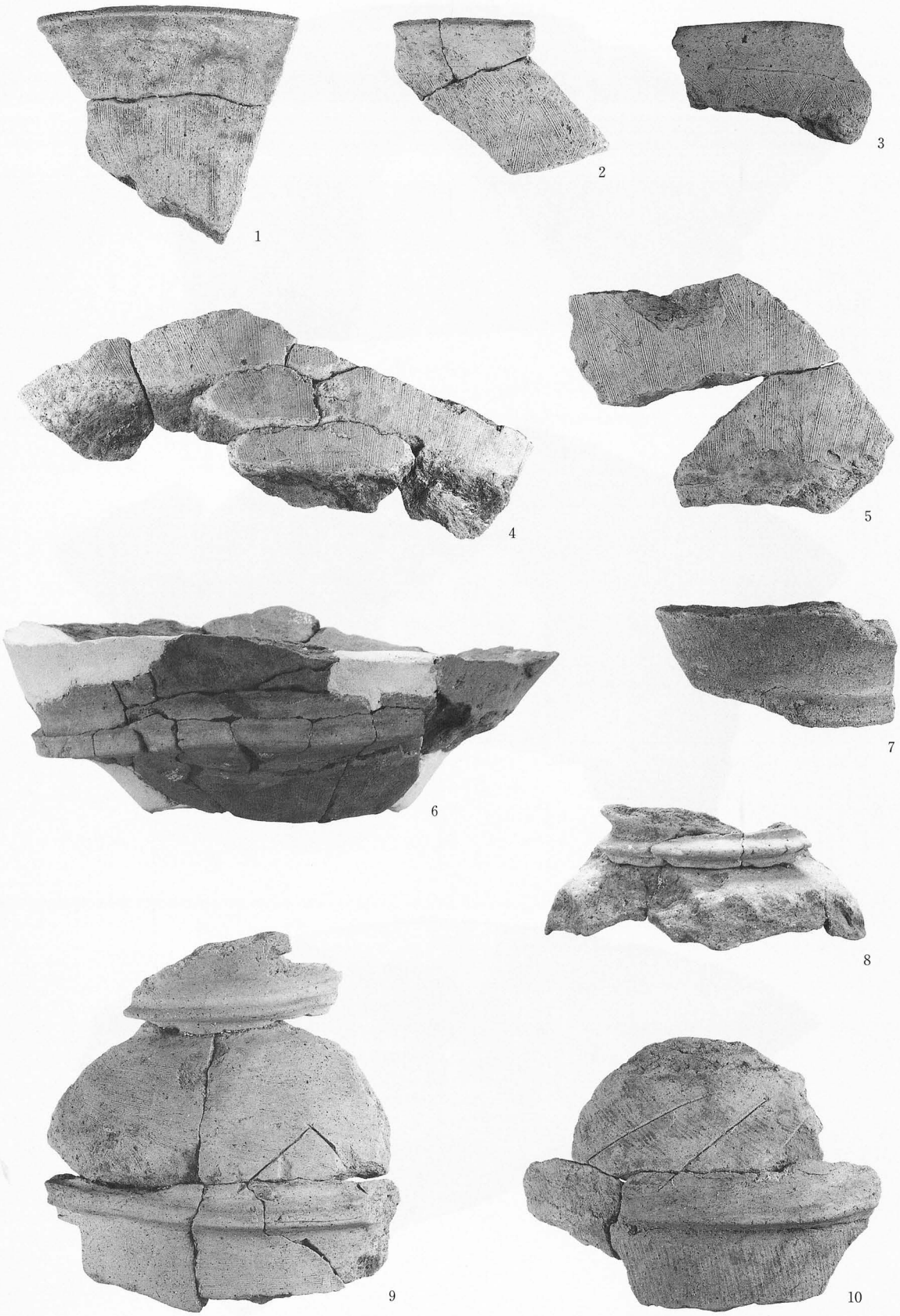
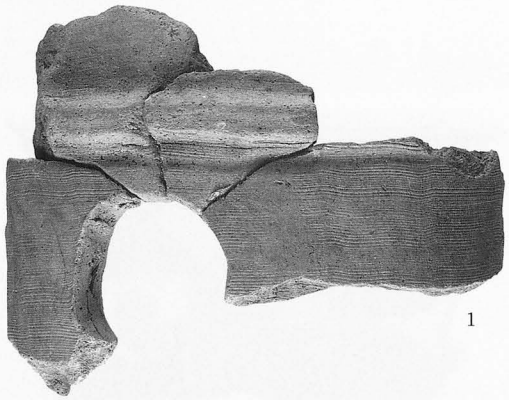
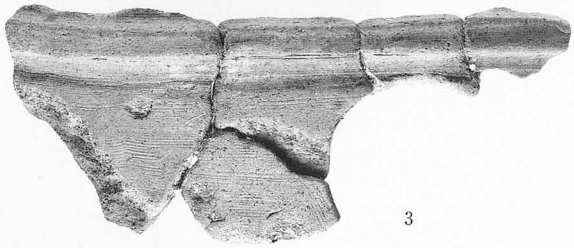
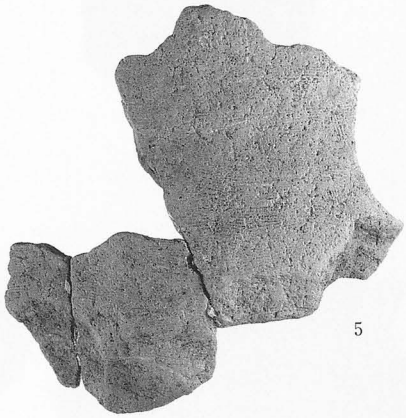


写真92　13号墳出土遺物(8)


1

2


3


5

4

6

7

写真93　13号墳出土遺物(9)

1

2

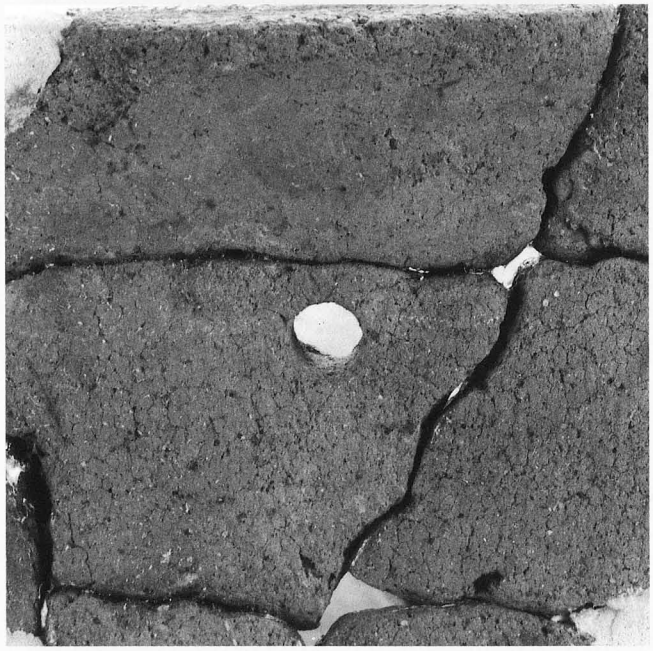
3

4

写真94　13号墳出土遺物(10)

1

2



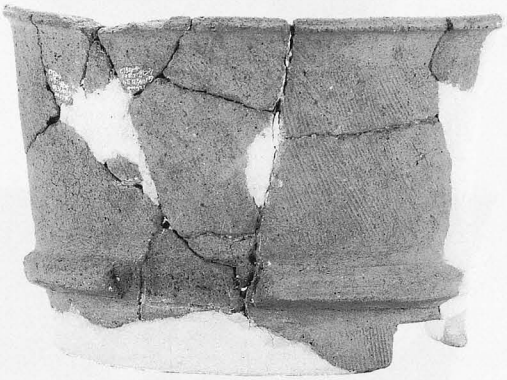
3 a

3 b

写真95　13号墳出土遺物(11)

1

2



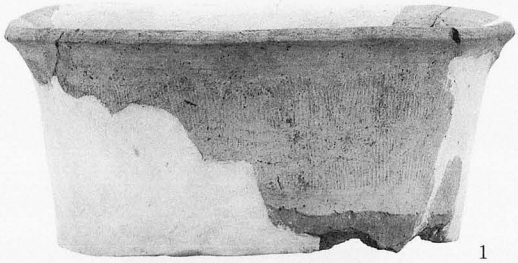
3 a

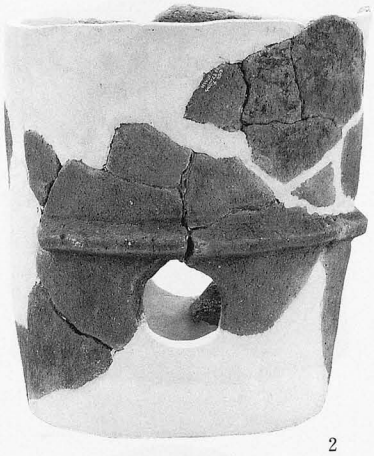
3 b

4 a

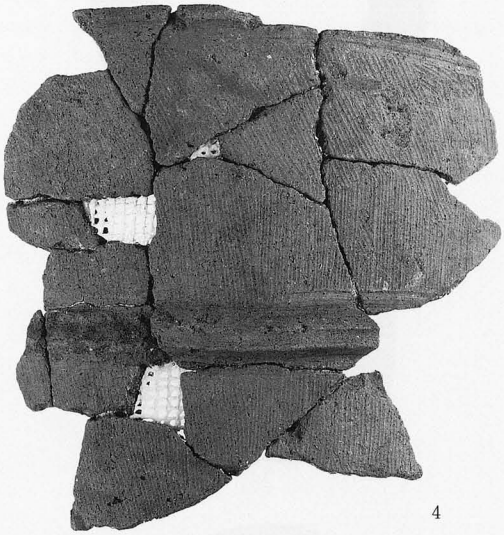
4 b

写真96　13号墳出土遺物(12)


1


2

3


4

5 a

5 b

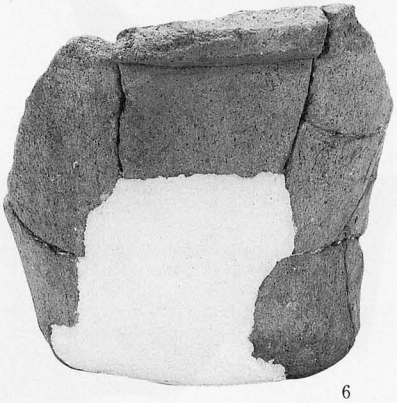
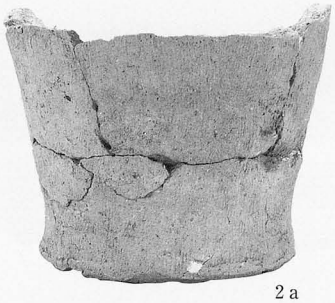
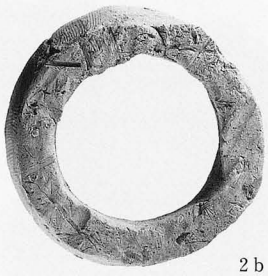

6

写真97　13号墳出土遺物(13)

1a


2a

1b

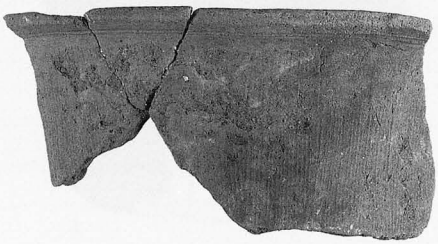

2b

4

3a

3b

5


6

7

写真98　13号墳出土遺物(14)

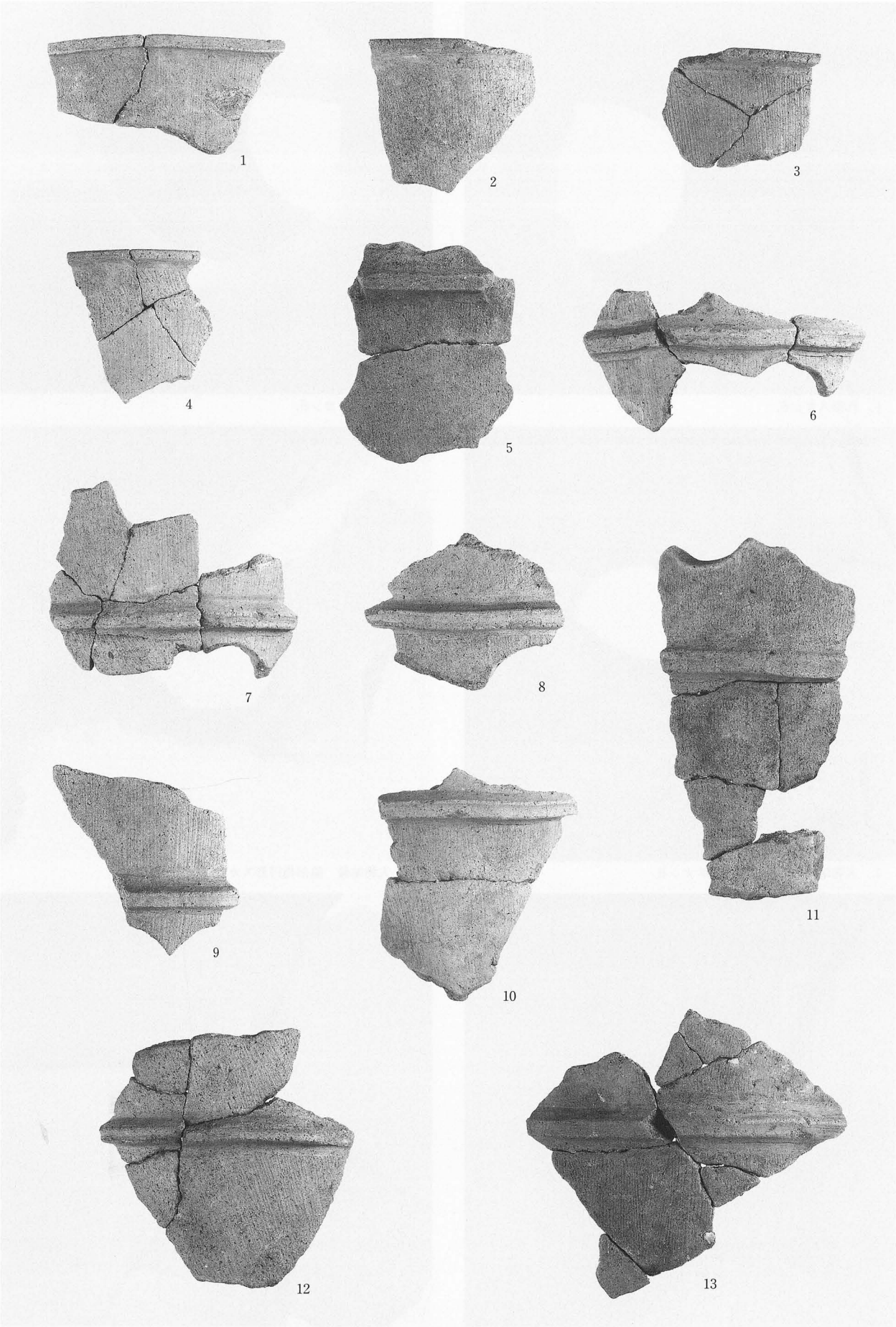
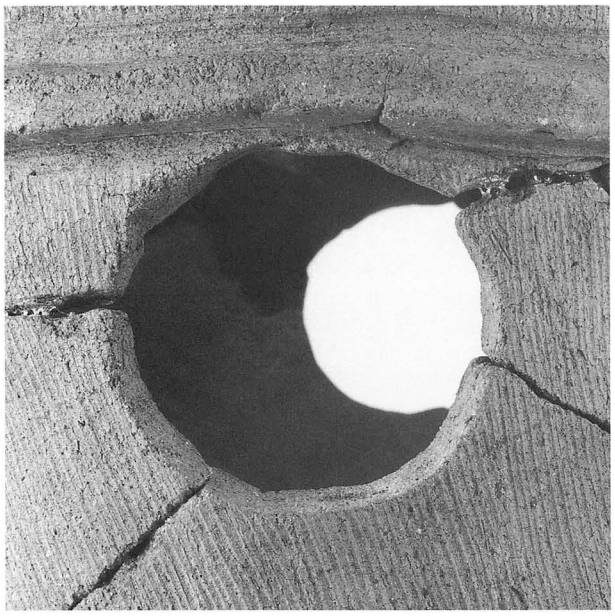


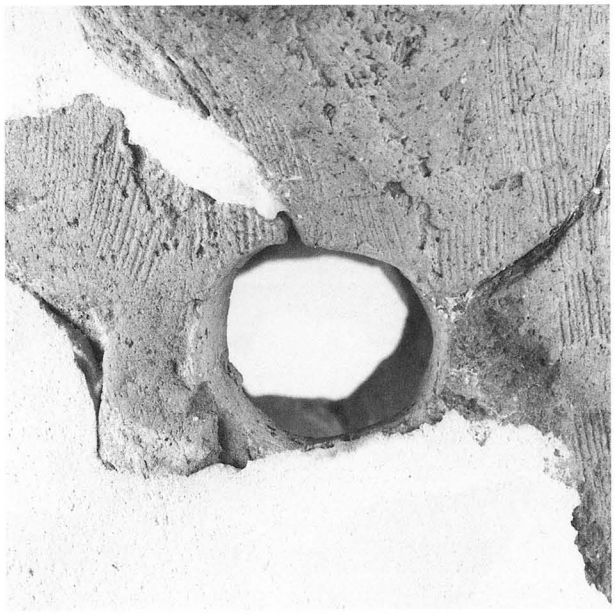
写真99　13号墳出土遺物(15)



1．円形スカシ孔

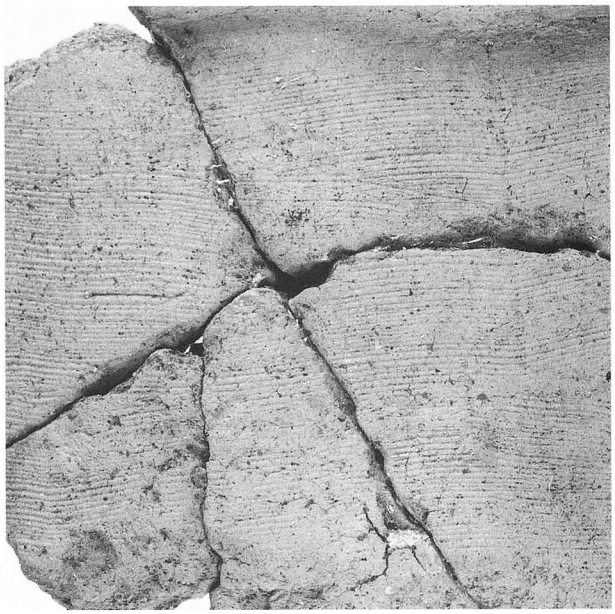
2．半円形スカシ孔

3．人物埴輪　円筒部楕円形スカシ孔



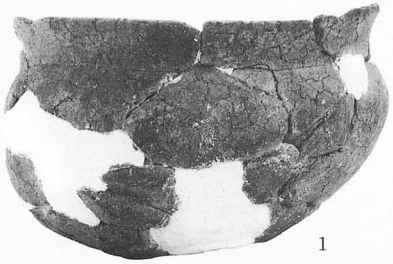
4．人物埴輪　脇部楕円形スカシ孔

5．１次調整タテハケ

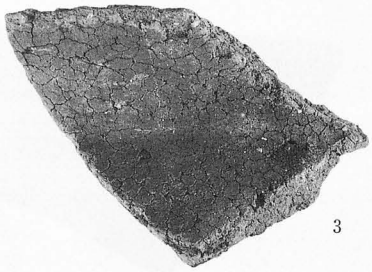


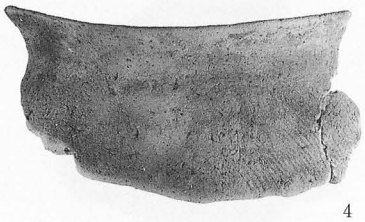
6．２次調整B種ヨコハケ

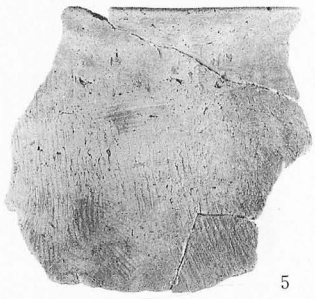
写真100　13号墳出土遺物の部位


1

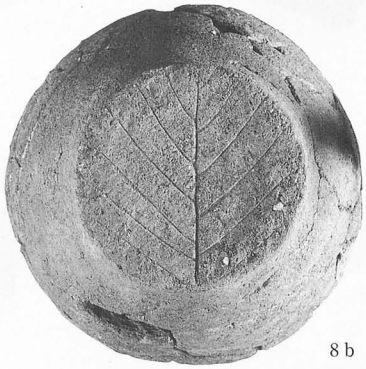
2


3


4


5

8 a


8 b

6

7

9

写真101　12号墳・SI－11住居跡・土坑出土遺物

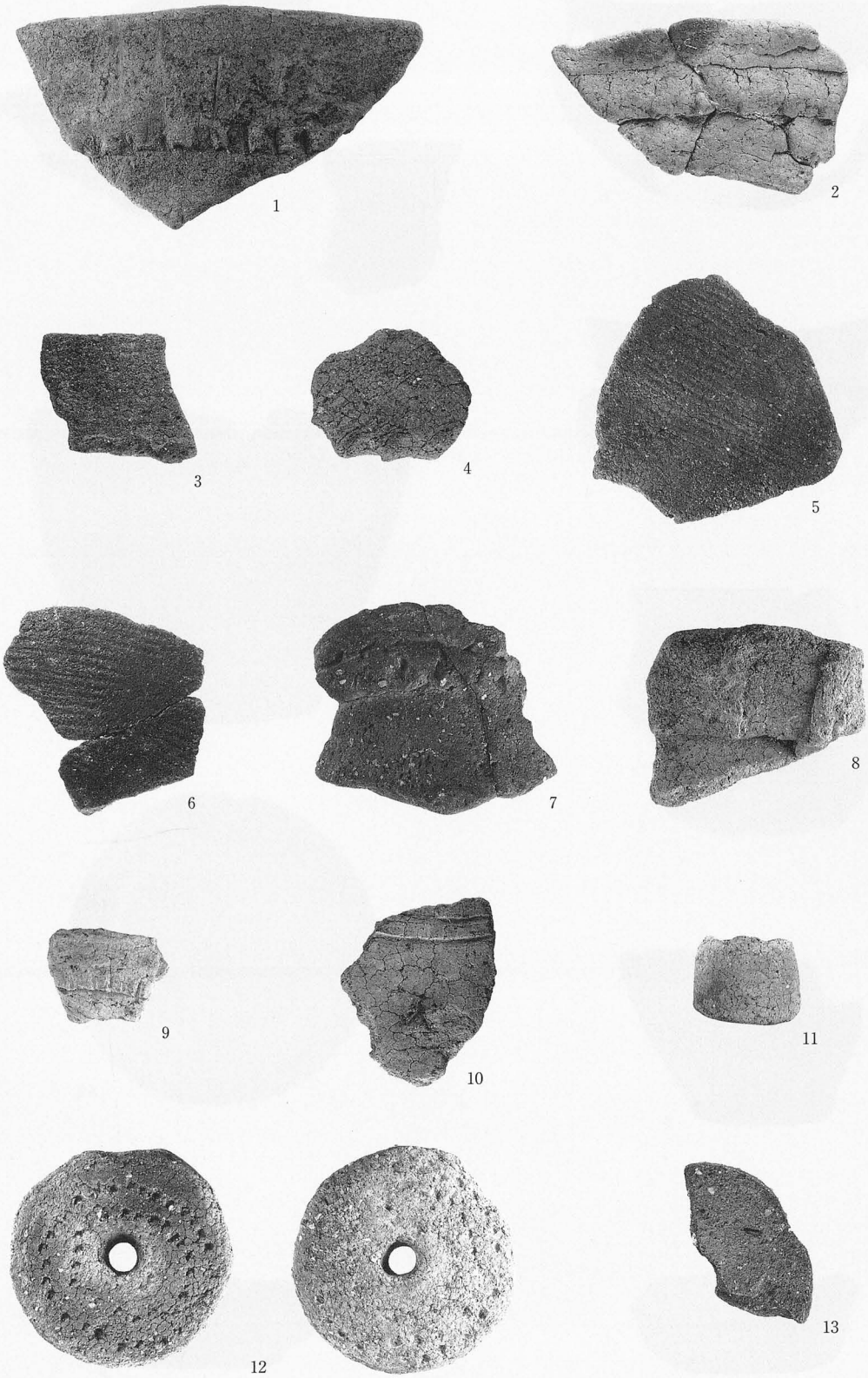


写真102　SI－12住居跡・12号墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はらいせき
書名	原遺跡
副書名	第４次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第257集
編著者名	篠原信彦　根本光一
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980－8671　宮城県仙台市青葉区国分町三丁目７番１号　　TEL 022-214-8893・8894
発行年月日	2002年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原遺跡（はらいせき） 第４次	宮城県（みやぎけん） 仙台市（せんだいし） 太白区（たいはくく） 西多賀（にしたが） 三丁目 １番地	04100	01083	38° 13′ 10″	140° 51′ 38″	20000523 ～ 20001019	4,500	保育所等公共用地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原遺跡 第４次	古墳群 集落跡	弥生 古墳 平安	方墳 円墳 竪穴住居跡 土壙墓 土坑 溝跡	弥生土器 土師器 須恵器 人物埴輪 動物埴輪 円筒埴輪 朝顔形埴輪 土製品	弥生時代の竪穴住居跡 古代の竪穴住居跡 古墳時代前期の方墳 古墳時代中期の円墳

仙台市文化財調査報告書第257集

原　　遺　　跡

第４次発掘調査報告書

2002年３月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目７－１

文化財課　022（214）8894

印刷　株式会社　東北プリント

仙台市青葉区立町24－24　TEL263-1166